

九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第8集

小川柳ノ内遺跡 II

福岡県みやま市瀬高町所在遺跡の調査

2008

福岡県教育委員会

九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第8集

小川柳ノ内遺跡 II

福岡県みやま市瀬高町所在遺跡の調査

序

福岡県教育委員会では、平成13年度から独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構（旧日本鉄道建設公団）九州新幹線建設局の委託を受けて、九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施しています。本報告書は平成16・17年度に発掘調査を実施した、みやま市瀬高町小川および坂田に所在する小川柳ノ内遺跡第1・2次調査の記録です。

本遺跡からは弥生時代から古墳時代にかけての集落を中心に様々な遺構が見つかり、地域の文化を知るうえで貴重な成果を得ることができました。

本書が文化財愛護思想の普及及び学術研究・生涯学習への一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査及び報告書の作成に当たりましては、関係諸機関や地元を始めとする多くの方々に御協力・御助言をいただきました。ここに深く感謝いたします。

平成20年3月31日

福岡県教育委員会教育長

森山 良一

例言

- 1 本書は平成16・17（2004・2005）年度に九州新幹線鹿児島ルート建設に伴い発掘調査を実施した、福岡県みやま市瀬高町小川（旧山門郡瀬高町大字小川字柳ノ内）等に所在する小川柳ノ内遺跡（第1・2次調査）の記録で、九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告の第8集となる。
- 2 当遺跡の発掘調査・整理報告は独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線建設局の委託を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。
- 3 当遺跡は九州新幹線船小屋－大牟田間の埋蔵文化財調査第2地点に当たる。
- 4 本書に掲載した遺構写真は進村真之・今井涼子が、遺物写真は文化財保護課整理指導員北岡伸一が撮影した。なお、空中写真は株式会社東亜航空技研及び九州航空株式会社に委託した。
- 5 本書に掲載した遺構図は進村真之・今井涼子・檜崎俊平が作成した。なお、掲載した遺構図の方位はすべて座標北（G.N）である。
- 6 出土遺物の整理作業は九州歴史資料館及び文化財保護課太宰府事務所において大庭の指導の下に実施した。出土土器の実測は調査担当者の他に平田春美・久富美智子・田中典子・若松三枝子・寺岡和子・橋之口雅子・林知恵が行った。石製品については城門義廣が行った。製図は豊福弥生・原カヨ子・江上佳子が行い、土山真弓美・安永啓子・山田智子・辻清子が補助した。
- 7 出土遺物・写真・図面はすべて九州歴史資料館及び文化財保護課太宰府事務所に保管している。
- 8 本書の執筆は進村・今井が行い、編集は進村が行った。

目 次

I	はじめに	1
1	調査の経緯	1
2	調査の組織	4
II	位置と環境	6
III	発掘調査の記録	9
1	遺跡の概要	9
2	基本層序	9
3	5区の調査の内容	10
(1)	竪穴住居跡	10
(2)	土坑	20
(3)	溝	51
(4)	波板状遺構	52
(5)	北端部おち・遺構面等出土土器	54
4	6区の調査の内容	54
(1)	竪穴住居跡	54
(2)	畑状遺構	64
(3)	土坑	64
(4)	溝	84
(5)	南端部おち出土土器	89
(6)	遺構面等出土土器	89
5	7区の調査の内容	89
(1)	竪穴住居跡	89
(2)	土坑	112
(3)	溝	154
6	8区の調査の内容	162
(1)	竪穴住居跡	163
(2)	甕棺墓	170
(3)	土坑	174
(4)	焼土坑	183
(5)	溝	186
(6)	波板状遺構	189
(7)	遺構面等出土土器	191
7	まとめ	194

図版目次

図版1	1 5区遠景 (南から)	2 5区調査区北部分 (空中写真)
図版2	1 5区1号竪穴住居跡 (東から)	2 5区1号竪穴住居跡磨石出土状況 (北から)
	3 5区2号竪穴住居跡 (北西から)	
図版3	1 5区3号竪穴住居跡 (南東から)	2 5区4号竪穴住居跡 (東から)
	3 5区5号竪穴住居跡 (東から)	
図版4	1 5区6号竪穴住居跡 (西から)	2 5区6号竪穴住居跡中央土坑 (南東から)
	3 5区6号竪穴住居跡ピット土器出土状況 (南東から)	
図版5	1 5区7号竪穴住居跡 (南西から)	2 5区1号土坑 (南から)
	3 5区2号土坑 (西から)	
図版6	1 5区3号土坑 (南東から)	2 5区4号土坑 (東から)
	3 5区6号土坑 (北西から)	
図版7	1 5区6号土坑細部 (北西から)	2 5区7号土坑 (南東から)
	3 5区8号土坑 (西から)	
図版8	1 5区9号土坑 (西から)	2 5区10号土坑 (北西から)
	3 5区11号土坑 (北から)	
図版9	1 5区12号土坑 (南から)	2 5区13号土坑 (西から)
	3 5区14号土坑 (北から)	
図版10	1 5区15~17号土坑 (南から)	2 5区18~20号土坑 (南から)
	3 5区21号土坑 (南から)	
図版11	1 5区22号土坑 (南東から)	2 5区23・24号土坑 (西から)
	3 5区25・26号土坑 (東から)	
図版12	1 5区27号土坑 (南から)	2 5区28~30号土坑 (西から)
	3 5区35号土坑 (北西から)	
図版13	1 5区40号土坑 (東から)	2 5区42号土坑 (東から)
	3 5区44号土坑 (南西から)	
図版14	1 5区45号土坑 (北東から)	2 5区2号溝土器出土状況 (南から)
	3 5区1号波板状遺構検出状況 (南から)	
図版15	1 5区1号波板状遺構 (南から)	2 5区1号波板状遺構 (東から)
	3 5区1号波板状遺構細部 (北から)	
図版16	1 6区第一遺構面全景 (空中写真)	2 6区第二遺構面全景 (空中写真)
図版17	1 6区1号竪穴住居跡 (北西から)	2 6区2号竪穴住居跡 (南西から)
	3 6区3号竪穴住居跡 (北東から)	
図版18	1 6区3号竪穴住居跡炉跡検出状況 (北から)	
	2 6区4号竪穴住居跡 (北から)	
	3 6区5号竪穴住居跡 (東から)	
図版19	1 6区6・7号竪穴住居跡 (東から)	2 6区8号竪穴住居跡 (西から)
	3 6区9号竪穴住居跡 (東から)	
図版20	1 6区10号竪穴住居跡 (北東から)	2 6区1号土坑 (南西から)
	3 6区3号土坑 (西から)	
図版21	1 6区5号土坑 (南から)	2 6区6号土坑 (東から)
	3 6区8号土坑 (西から)	
図版22	1 6区11号土坑 (南から)	2 6区16号土坑 (南から)
	3 6区18号土坑 (北西から)	

- | | | |
|------|---------------------------|---------------------------|
| 図版23 | 1 6区22号土坑 (北から) | 2 6区25号土坑 (東から) |
| | 3 6区32号土坑 (西から) | |
| 図版24 | 1 6区33号土坑 (東から) | 2 6区40号土坑 (東から) |
| | 3 6区畑状遺構 (北東から) | |
| 図版25 | 1 6区調査区北端部 (南西から) | 2 6区調査区南端部おち (北東から) |
| | 3 6区調査区南端部おち土器出土状況 (東から) | |
| 図版26 | 1 7区第一遺構面全景 (空中写真) | 2 7区調査区北端部 (空中写真) |
| 図版27 | 1 7区第一遺構面全景 (南から) | 2 7区調査区遠景 (北から) |
| 図版28 | 1 7区2次調査全景 (空中写真) | 2 7区第二遺構面全景 (空中写真) |
| 図版29 | 1 7区調査区北端部 (南東から) | 2 7区1号竪穴住居跡 (南西から) |
| | 3 7区1号竪穴住居跡土器出土状況 (北から) | |
| 図版30 | 1 7区2号竪穴住居跡 (南西から) | 2 7区3号竪穴住居跡 (南東から) |
| | 3 7区3号竪穴住居跡炉跡検出状況① (南西から) | |
| 図版31 | 1 7区3号竪穴住居跡炉跡検出状況② (南東から) | |
| | 2 7区4号竪穴住居跡 (南東から) | |
| | 3 7区4号竪穴住居跡炉跡検出状況 (南西から) | |
| 図版32 | 1 7区5号竪穴住居跡 (北西から) | 2 7区7号竪穴住居跡 (南東から) |
| | 3 7区8号竪穴住居跡 (南西から) | |
| 図版33 | 1 7区8号竪穴住居跡壁検出状況① (南西から) | |
| | 2 7区8号竪穴住居跡壁検出状況② (南西から) | |
| | 3 7区9号竪穴住居跡 (北東から) | |
| 図版34 | 1 7区10号竪穴住居跡 (南西から) | 2 7区10号竪穴住居跡炉跡検出状況 (南東から) |
| | 3 7区13号竪穴住居跡 (南東から) | |
| 図版35 | 1 7区14号竪穴住居跡 (南東から) | 2 7区15号竪穴住居跡 (北東から) |
| | 3 7区16号竪穴住居跡 (南東から) | |
| 図版36 | 1 7区17号竪穴住居跡 (南西から) | 2 7区17号竪穴住居跡炉跡検出状況 (北から) |
| | 3 7区5号土坑 (南から) | |
| 図版37 | 1 7区6号土坑 (北から) | 2 7区7号土坑 (北から) |
| | 3 7区8号土坑 (東から) | |
| 図版38 | 1 7区9号土坑 (北から) | 2 7区10号土坑 (南から) |
| | 3 7区11号土坑 (北から) | |
| 図版39 | 1 7区12号土坑 (西から) | 2 7区13号土坑 (南から) |
| | 3 7区14号土坑 (北西から) | |
| 図版40 | 1 7区15号土坑 (北から) | 2 7区16号土坑 (北から) |
| | 3 7区17号土坑 (北から) | |
| 図版41 | 1 7区18号土坑 (南東から) | 2 7区19号土坑 (北東から) |
| | 3 7区20号土坑 (北西から) | |
| 図版42 | 1 7区21号土坑 (西から) | 2 7区22～25号土坑 (北から) |
| | 3 7区24号土坑 (北東から) | |
| 図版43 | 1 7区26号土坑 (北から) | 2 7区27号土坑 (北西から) |
| | 3 7区28号土坑 (南西から) | |
| 図版44 | 1 7区28号土坑 (北東から) | 2 7区29号土坑 (北西から) |
| | 3 7区30号土坑 (西から) | |
| 図版45 | 1 7区31・32号土坑 (南西から) | 2 7区33号土坑 (北西から) |
| | 3 7区34号土坑 (南西から) | |

- | | | |
|------|-------------------------------|----------------------|
| 図版46 | 1 7区35号土坑 (南西から) | 2 7区36号土坑 (南東から) |
| | 3 7区37号土坑 (南東から) | |
| 図版47 | 1 7区38号土坑 (南東から) | 2 7区39号土坑 (東から) |
| | 3 7区40号土坑 (北西から) | |
| 図版48 | 1 7区41号土坑 (北から) | 2 7区42~45号土坑 (北東から) |
| | 3 7区46号土坑 (南東から) | |
| 図版49 | 1 7区47号土坑 (南東から) | 2 7区48号土坑 (南東から) |
| | 3 7区49・50号土坑 (北東から) | |
| 図版50 | 1 7区52号土坑 (東から) | 2 7区53号土坑 (南西から) |
| | 3 7区54号土坑 (南東から) | |
| 図版51 | 1 7区55号土坑 (南東から) | 2 7区56号土坑 (南西から) |
| | 3 7区59号土坑 (北東から) | |
| 図版52 | 1 7区61号土坑 (北西から) | 2 7区62号土坑 (北東から) |
| | 3 7区63号土坑 (北西から) | |
| 図版53 | 1 7区72号土坑 (北東から) | 2 7区75号土坑 (北東から) |
| | 3 7区79号土坑 (北から) | |
| 図版54 | 1 7区84号土坑 (南東から) | 2 7区85号土坑 (南東から) |
| | 3 7区86号土坑 (北西から) | |
| 図版55 | 1 7区87号土坑 (南東から) | 2 7区88号土坑 (北東から) |
| | 3 7区89号土坑 (北東から) | |
| 図版56 | 1 7区90号土坑 (北西から) | 2 7区92号土坑 (南西から) |
| | 3 7区93号土坑 (西から) | |
| 図版57 | 1 7区94号土坑 (東から) | 2 7区95号土坑 (南から) |
| | 3 7区96号土坑 (南から) | |
| 図版58 | 1 7区97号土坑 (南西から) | 2 7区98号土坑 (南東から) |
| | 3 7区3号溝 (北東から) | |
| 図版59 | 1 8区全景 (空中写真 合成) | |
| 図版60 | 1 8区1号竪穴住居跡、16号土坑 (北から) | |
| | 2 8区2・5号竪穴住居跡、13・14号土坑 (空中写真) | |
| | 3 8区3・4号竪穴住居跡 (空中写真) | |
| 図版61 | 1 8区1号甕棺墓 (西から) | 2 8区2号甕棺墓 (北から) |
| | 3 8区2号甕棺墓完掘状況 (北から) | |
| 図版62 | 1 8区3号甕棺墓 (北から) | 2 8区1号土坑 (北から) |
| | 3 8区2号土坑 (北から) | |
| 図版63 | 1 8区3・4・6号土坑 (南東から) | 2 8区5号土坑土器出土状況 (東から) |
| | 3 8区5号土坑完掘状況 (東から) | |
| 図版64 | 1 8区7号土坑 (南東から) | 2 8区8号土坑 (南から) |
| | 3 8区9号土坑 (東から) | |
| 図版65 | 1 8区11号土坑 (北西から) | 2 8区12号土坑 (東から) |
| | 3 8区15号土坑 (東から) | |
| 図版66 | 1 8区17号土坑 (北東から) | 2 8区1号焼土坑 (西から) |
| | 3 8区1号焼土坑土層 (北から) | |
| 図版67 | 1 8区2号焼土坑 (南から) | |
| | 2 8区1号波板状遺構 (北東から) | |

図版68	5区4・6・7号竪穴住居跡出土土器
図版69	5区5・6・7号土坑出土土器
図版70	5区25・26号土坑出土土器
図版71	5区26・35・39・42・45号土坑出土土器
図版72	5区44・45号土坑・遺構面出土土器
図版73	6区2・3号竪穴住居跡出土土器
図版74	6区3号竪穴住居跡、8・11号土坑出土土器
図版75	6区19・24・25・26・32号土坑出土土器
図版76	6区32・33号土坑、南端部おち、7区1号竪穴住居跡出土土器
図版77	7区1・3・4号竪穴住居跡出土土器
図版78	7区8・10・13号竪穴住居跡出土土器
図版79	7区13・17号竪穴住居跡出土土器
図版80	7区17号竪穴住居跡、2・5号土坑出土土器
図版81	7区20・23・24・27・28号土坑出土土器
図版82	7区28・31号土坑出土土器
図版83	7区52・54・56・61・66・68・78号土坑出土土器
図版84	7区68・81号土坑、4・8号溝出土土器
図版85	7区8号溝出土土器
図版86	5～7区出土石器実測図①
図版87	5～7区出土石器実測図②
図版88	5～7区出土石器③・土製品
図版89	8区1・2・5号竪穴住居跡出土土器、1～3号甕棺
図版90	8区1・5・8号土坑出土土器
図版91	8区11・15・17号土坑、1・2号焼土坑出土土器
図版92	8区2号焼土坑・1号溝・包含層出土土器、出土石製品・土製品
図版93	8区出土石製品

表目次

第1表	九州新幹線鹿児島ルート船小屋・新八代間福岡県内埋蔵文化財調査一覧……………2
第2表	5～7区出土石器・土製品一覧表……………161
第3表	8区出土石器・土製品一覧表……………191

挿図目次

第1図	九州新幹線船小屋・大牟田間埋蔵文化財調査地点 (1/100,000)	3
第2図	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	7
第3図	瀬高町内新幹線沿線図 (1/20,000) 調査区配置図 (1/2,000)	8
第4図	1～8区東壁基本層序模式図	9
第5図	5区遺構配置図 (1/300)	10
第6図	5区1～3号竪穴住居跡実測図 (1/60)	11
第7図	5区1・2号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	12
第8図	5区4・7号竪穴住居跡実測図 (1/60)	13
第9図	5区4・5号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	15
第10図	5区5・6号竪穴住居跡実測図 (1/60)	16
第11図	5区6号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	17
第12図	5区7号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	19
第13図	5区1・3～5号土坑実測図 (1/30)	21
第14図	5区1・2・4～6号土坑出土土器実測図 (1/4)	22
第15図	5区2・6～9号土坑実測図 (1/30)	23
第16図	5区7号土坑出土土器実測図① (1/4)	25
第17図	5区7号土坑出土土器実測図② (1/4)	26
第18図	5区7号土坑③・9・10号土坑出土土器実測図 (1/4)	27
第19図	5区10～13号土坑実測図 (1/30)	29
第20図	5区11～14・16号土坑出土土器実測図 (1/4)	30
第21図	5区14～19号土坑実測図 (1/30)	31
第22図	5区17・18・20・21号土坑出土土器実測図 (1/4)	33
第23図	5区20～24・26号土坑実測図 (20は1/60、他は1/30)	34
第24図	5区25・27～29号土坑実測図 (1/30)	35
第25図	5区25号土坑出土土器実測図 (1/4)	37
第26図	5区26～30号土坑出土土器実測図 (1/4)	39
第27図	5区30～35号土坑実測図 (31・35は1/60、他は1/30)	40
第28図	5区31～33・35～39・41号土坑出土土器実測図 (1/4)	41
第29図	5区36～41号土坑実測図 (41は1/60、他は1/30)	43
第30図	5区42～45号土坑実測図 (1/60)	44
第31図	5区42号土坑出土土器実測図① (1/4)	45
第32図	5区42号土坑出土土器実測図② (1/4)	46
第33図	5区43・45号土坑出土土器実測図 (1/4)	47
第34図	5区44号土坑出土土器実測図 (1/4)	49
第35図	5区1～7号溝出土土器実測図 (1/4)	50
第36図	5区1号波板状遺構出土土器実測図 (1/4)	52
第37図	5区波板状遺構実測図 (1/60)	53
第38図	5区北端部おち・遺構面出土土器実測図 (1/4)	54
第39図	6区遺構配置図 (1/300)	55
第40図	6区1～3・5～7号竪穴住居跡実測図 (1/60)	57
第41図	6区1・2号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	58
第42図	6区3号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	59
第43図	6区4・8・9号竪穴住居跡実測図 (1/60)	60
第44図	6区4・6号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	61
第45図	6区8～10号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	62
第46図	6区10号竪穴住居跡実測図 (1/60)	63
第47図	6区畑状遺構実測図 (1/60)	64

第48図	6区1～4・6号土坑実測図 (1/30)	65
第49図	6区5・7～10号土坑実測図 (1/30)	67
第50図	6区1～3・5・9～12・15号土坑出土土器実測図 (1/4)	68
第51図	6区8号土坑出土土器実測図 (1/4)	69
第52図	6区11～17号土坑実測図 (16は1/60、他は1/30)	71
第53図	6区16・18・19・23・24号土坑出土土器実測図 (1/4)	73
第54図	6区18～23号土坑実測図 (18・21は1/60、他は1/30)	74
第55図	6区24～28号土坑実測図 (25・28は1/60、他は1/30)	75
第56図	6区25号土坑出土土器実測図 (1/4)	77
第57図	6区26・29号土坑出土土器実測図 (1/4)	79
第58図	6区29～33号土坑実測図 (1/30)	80
第59図	6区32・33号土坑出土土器実測図 (1/4)	81
第60図	6区35～41号土坑実測図 (40・41は1/60、他は1/30)	83
第61図	6区35・38～41号土坑出土土器実測図 (1/4)	85
第62図	6区1・2・5号溝出土土器実測図 (1/4)	86
第63図	6区南端部おち出土土器実測図 (1/4)	87
第64図	6区遺構面出土土器実測図 (1/4)	88
第65図	7区遺構配置図 (1/300)	90
第66図	7区1・3号竪穴住居跡実測図 (1/60)	91
第67図	7区1号竪穴住居跡出土土器実測図① (4は1/8、20は1/6、他は1/4)	93
第68図	7区1号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/4)	94
第69図	7区3・4号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	95
第70図	7区2・4～7号竪穴住居跡実測図 (1/60)	96
第71図	7区7・9～11・14・16・18・23号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	97
第72図	7区8・10号竪穴住居跡実測図 (1/60)	99
第73図	7区8号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/4)	100
第74図	7区8号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/4)	101
第75図	7区9・11～13号竪穴住居跡実測図 (1/60)	103
第76図	7区13号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	104
第77図	7区14・15号竪穴住居跡実測図 (1/60)	105
第78図	7区16～18号竪穴住居跡実測図 (1/60)	107
第79図	7区17号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/4)	108
第80図	7区17号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/4)	109
第81図	7区17号竪穴住居跡出土土器実測図③ (1/4)	111
第82図	7区19～23号竪穴住居跡実測図 (1/60)	113
第83図	7区1～8号土坑実測図 (5は1/60、他は1/30)	115
第84図	7区1・3・12・13号土坑出土土器実測図 (1/4)	116
第85図	7区5号土坑出土土器実測図① (1/4)	117
第86図	7区5号土坑出土土器実測図② (1/4)	118
第87図	7区9～16号土坑実測図 (10・13は1/60、他は1/30)	119
第88図	7区17～22号土坑実測図 (20は1/60、他は1/30)	120
第89図	7区14・16・18・19・23・24・27号土坑出土土器実測図 (1/4)	121
第90図	7区20号土坑出土土器実測図 (1/4)	123
第91図	7区23～27・29号土坑実測図 (24は1/60、他は1/30)	125
第92図	7区28・30～35号土坑実測図 (28・33・34は1/60、他は1/30)	127
第93図	7区28号土坑出土土器実測図① (1/4)	128
第94図	7区28号土坑出土土器実測図② (1/4)	129
第95図	7区36～42号土坑実測図 (1/30)	131
第96図	7区43～49号土坑実測図 (47は1/60、他は1/30)	132
第97図	7区31・33・34・37・39・46・47号土坑出土土器実測図 (1/4)	133

第98図	7区50～56号土坑実測図 (52は1/60、他は1/30) ……………	135
第99図	7区52・54・56・57・61・63号土坑出土土器実測図 (1/4) ……………	137
第100図	7区57～62号土坑実測図 (61は1/60、他は1/30) ……………	139
第101図	7区63～69号土坑実測図 (68は1/60、他は1/30) ……………	141
第102図	7区66・67・72・78～80号土坑出土土器実測図 (1/4) ……………	142
第103図	7区68号土坑出土土器実測図 (1/4) ……………	143
第104図	7区70～76号土坑実測図 (1/30) ……………	145
第105図	7区77・79～83号土坑実測図 (1/30) ……………	146
第106図	7区84～90号土坑実測図 (84・85・87は1/60、他は1/30) ……………	147
第107図	7区81・85・90・91号土坑出土土器実測図 (1/4) ……………	149
第108図	7区91～96・98号土坑実測図 (94・98は1/60、他は1/30) ……………	151
第109図	7区97・99～102号土坑実測図 (1/30) ……………	152
第110図	7区92・94・95・97・98号土坑出土土器実測図 (1/4) ……………	153
第111図	7区1・3・4・6・9・10号溝出土土器実測図 (1/4) ……………	155
第112図	7区8号溝出土土器実測図① (1/4) ……………	157
第113図	7区8号溝出土土器実測図② (1/4) ……………	158
第114図	5～7区出土石器実測図① (1～23は2/3、他は1/2) ……………	159
第115図	5～7区出土石器②・土製品実測図(39～47は1/4、48は1/8、49・50は1/1、他は1/2) ……………	160
第116図	8区土層模式図 (1/40) ……………	162
第117図	8区遺構配置図 (1/300) ……………	162
第118図	8区1号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……………	163
第119図	8区1号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4) ……………	164
第120図	8区2号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……………	165
第121図	8区2号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/4) ……………	166
第122図	8区2号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/4) ……………	167
第123図	8区3号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……………	168
第124図	8区4号竪穴住居跡実測図 (1/40) ……………	169
第125図	8区5号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……………	170
第126図	8区3～5号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4) ……………	171
第127図	8区1～3号甕棺実測図 (1/40) ……………	172
第128図	8区1～3号甕棺実測図 (1/6、4は1/4) ……………	173
第129図	8区1～6号土坑実測図 (1/40) ……………	175
第130図	8区7～10・12号土坑実測図 (1/40) ……………	176
第131図	8区1・3・7・9～11号土坑出土土器実測図 (1/4) ……………	178
第132図	8区5号土坑出土土器実測図① (1/4) ……………	179
第133図	8区5号土坑出土土器実測図② (1/4) ……………	180
第134図	8区11・13～17号土坑実測図 (1/40) ……………	181
第135図	8区13～17号土坑出土土器実測図 (1/4) ……………	182
第136図	8区1・2号焼土坑実測図 (1/40) ……………	184
第137図	8区1・2号焼土坑出土土器実測図 (1/4) ……………	185
第138図	8区2号焼土坑出土土器実測図 (1/4) ……………	186
第139図	8区2・3・5号溝土層実測図 (1/40) ……………	187
第140図	8区1～3・5・6号溝、波板状遺構出土土器実測図 (1/4、25～33は1/3) ……………	188
第141図	8区1号波板状遺構実測図 (1/40) ……………	189
第142図	ピット・遺構面等出土土器実測図 (1/4) ……………	190
第143図	出土石製品・土製品実測図 (1/2) ……………	192
第144図	出土石製品実測図 (1/3、15・16は1/2) ……………	193
第145図	小川柳ノ内遺跡時期別変遷図 ……………	195

I はじめに

1 調査の経緯

今回、緊急調査を行う原因となった九州新幹線鹿児島ルートは平成22（2010）年度、博多・新八代間完成予定を目指し、目下、急ピッチで建設中である。新幹線の建設に至る経緯については平成18年度発行の『小川柳ノ内遺跡Ⅰ』を参照されたい。

小川柳ノ内遺跡の所在する新幹線工事側による瀬高中工区は、「九州新幹線建設工事に伴う山門郡瀬高町地内の埋蔵文化財の試掘調査について」（平成15年12月1日鉄運九建用一第72号福岡県教育長あて九州新幹線建設局長名通知）依頼文書が提出された。これは山門郡瀬高町本郷・坂田・小川及び山門にまたがる新幹線工事側の瀬高北工区・中工区部分に関する埋蔵文化財の試掘調査依頼である。

福岡県教育委員会では、この依頼を受け、平成15年12月10・12・15～18・24日の間で、用地の交渉が調い、試掘調査が可能な部分について試掘調査を行った。試掘調査はバケットサイズが0.25のバックホーを用い、路線に沿って、南北に試掘トレンチを掘削して行った。その結果、中工区に関しては、後の文化財調査区で1～4区及び8区で試掘調査を行っており、そのすべての調査地点からかなり高密度の遺構ないし遺物を検出した。このことにより、返済川の氾濫原を一部除き、路線全域について本調査が必要であることが判明した。

このため「埋蔵文化財の試掘結果の実施について」（平成16年1月5日15教文調第127号九州新幹線建設局長あて福岡県教育長名通知）文書で、小川柳ノ内遺跡に関しては遺構が高密度で存在し、本調査が必要な旨を回答した。なお、ここでは試掘を行うことができなかつた5～7区は地形の状況から連続して遺構が存する可能性が高いとしている。

平成16年5月24日（月）に小川柳ノ内遺跡の調査について、工事側と協議を行い、6月以降、工事を先行させる南端部から発掘調査に入ることにした。

平成16年6月2日（水）から、1区の表土剥ぎを行った。大量の湧水に苦しみながらも7月6日（火）、1区の埋め戻しを無事、終了する。

続いて7月5日（月）から4区の表土剥ぎを開始する。8月6日（金）、重機によって下層面までの掘削を開始する。10月21日（木）、4区の埋め戻しが終了する。

9月14日（火）、3区の表土剥ぎを開始する。

10月15日（金）、3区のラジコンヘリによる空中写真撮影を行う。下層の遺構面の調査を行った。

11月10日（水）、3区の埋め戻しを終了する。

10月29日（金）、2区の掘削を開始する。調査中、下層に遺構面がもう一面存することが判明し、下層の調査を行う。

12月6日（月）、2区の埋め戻しを終了する。この1～4区部分の調査内容については平成18年度発行の『小川柳ノ内遺跡Ⅰ』で既に報告した。

今年度報告する5区から8区に関しては平成16年11月8日（月）、7区の構造物が撤去されたので試掘を行う。結果、この区においても竪穴住居跡等が高密度に分布することが判明した。

11月16日（火）、7区の1次調査部分の重機による掘削を開始する。水路に挟まれた北端部の一角については、用地解決後に調査を行うことにした。

11月24日（水）、7区の人力による遺構検出を行う。結果、竪穴住居跡18棟、土坑、溝他を検出、作業員による遺構の掘削を開始する。

12月10日（金）、7区の1次調査部分、ラジコンヘリによる空中写真撮影を行う。
 12月22日（水）、第一遺構面の調査を終了する。
 12月24日（金）より、重機による第二遺構面への掘削を開始する。
 年が明けて平成17年1月19日（水）、平行して調査を行っていた6区の上層面と同時にラジコンヘリによる空中写真撮影を行う。
 3月11日（金）、7区1次調査部分の埋め戻しを終了する。
 6区に関しては平成16年12月6日（月）、7区の調査に平行して掘削を開始する。
 12月21日（火）、人力による遺構検出を開始する。
 平成17年1月19日、6区の第一遺構面及び7区の第二遺構面のラジコンヘリによる空中写真撮影を行う。
 その後、第二遺構面の調査を行う。
 2月22日（火）に6区第二遺構面のラジコンヘリによる空中写真撮影を行う。
 3月18日（金）、6区の埋め戻しを終了した。
 なお、8区については平成17年1月5日（水）より、重機による表土剥ぎを開始した。
 1月14日（金）より、作業員による遺構検出、掘削を開始する。
 2月17日（木）にラジコンヘリによる空中写真の撮影を行った。
 その後、用地内に残っていた電柱撤去を待ち、2月21日（月）より調査区を拡張した。
 3月14日（月）に再度空中写真を撮影した。3月22日（火）には作業員による作業を終了する。

地点	工事件名	遺跡名	所在地	対象面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	調査年度	報告年度	備考
1	瀬高北	郡領ノ一遺跡	みやま市瀬高町坂田	4480	1107	H16	H17	調査終了
2	瀬高中	小川柳ノ内遺跡	みやま市瀬高町小川・下坂田	5600	5300	H16・17	H18・19	調査終了
3	瀬高南	藤の尾垣添遺跡	みやま市瀬高町山門	3360	5500	H15・16	H19～21	調査終了
4-A	瀬高南	山門北池遺跡	みやま市瀬高町山門	6340	1700	H15	H18	調査終了
4-B	瀬高南	山門前田遺跡	みやま市瀬高町山門・松田		1175	H14・15	H17	調査終了
4-C	瀬高南	松田掛畑遺跡	みやま市瀬高町松田		360	H17	H19	調査終了
5	高田田尻	海津横馬場遺跡	みやま市高田町海津	4200	2050	H13～15	H16・17	調査終了
6	高田田尻	飯田遺跡	みやま市高田町田尻	0				遺跡なし
7	高田T		みやま市高田町上楠田	3300				遺跡なし
8	楠田T	上楠田松浦遺跡	みやま市高田町上楠田	3520	560	H16	H17	高田町調査
9	楠田T	上楠田垣田遺跡	みやま市高田町上楠田	6000	870	H16	H17	高田町調査
10	楠田T		みやま市高田町上楠田	3300				遺跡なし
11	楠田T		大牟田市大字宮崎	5200				遺跡なし
12	楠田T	釈迦堂古墳群	大牟田市大字岩本	4000				遺跡なし
13	楠田T	釈迦堂古墳群	大牟田市大字岩本	8400				遺跡なし
14	楠田T	コノシロ塚遺跡	大牟田市大字岩本	2576				遺跡なし
15	大牟田ST	白銀川条里	大牟田市大字岩本	3360				遺跡なし
16	岩本	岩本下内遺跡	大牟田市大字岩本	1344	1000	H18	H19	調査終了
17	岩本	岩本土定原遺跡・貝殻塚古墳	大牟田市大字岩本	2240				遺跡なし
18	岩本		大牟田市大字岩本	896				遺跡なし
19	岩本	出口古墳群	大牟田市大字宮部	5000				遺跡なし
20	岩本		大牟田市大字宮部	5400				遺跡なし
21	三池T		大牟田市大字教来木	896				遺跡なし

第1表 九州新幹線鹿児島ルート船小屋・新八代間福岡県内埋蔵文化財調査一覧



第1図 九州新幹線船小屋・大牟田間埋蔵文化財調査地点 (1/100,000)

3月31日（木）測量等の全ての作業を完了した。

用地交渉が長びき、最後まで調査が残っていた5区の発掘調査に関しては年度をまたぎ、平成17年4月25日（月）、重機による掘削を開始した。

5月9日（月）、人力による遺構検出を行う。円形竪穴住居跡、土坑、溝を検出する。

6月7日（火）、ラジコンヘリによる空撮を行う。

6月14日（火）、7区2次調査部分、埋め戻しを終了した。

また、国道208号線に南面する一部調査のできなかった7区2次調査部分は5月20日（金）から重機による掘削を開始した。

6月7日（火）、5区と同時に7区2次調査部分の空撮も行う。

6月24日（金）、5区埋め戻しを終了し、九州新幹線建設に係る小川柳ノ内遺跡の調査をすべて終了した。

2. 調査の組織

独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構 鉄道建設本部 九州新幹線建設局

	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度
局長	高山 博文 北川 隆	北川 隆	元木 洋	元木 洋
次長	伊神 英二	関根 茂	関根 茂	関根 茂
用地第一課長	田中 等	田中 等	高橋 秀幸	高橋 秀幸
用地第一課補佐	木佐一正和	木佐一正和		
用地第一課担当係長	入江 万久	入江 万久	入江 万久 房野 和清	入江 万久 房野 和清
工事第三課長	石徳 博行	北原 太一	北原 太一	北原 太一
工事第三課補佐	上野 登 弓削 伸二	上野 登	弓削 伸二	三輪龍四郎
工事第三課担当係長	馬淵 善男	馬淵 善男 林 孝治	林 孝治	林 孝治
大牟田鉄道建設所長	渡邊 修	長谷川正明	長谷川正明	長谷川正明
担当副所長	那須 芳人	石津 範彦	石津 範彦	
(瀬高中工区)				

福岡県教育庁総務部文化財保護課

	[平成16年度]	[平成17年度]	[平成18年度]	[平成19年度]
総括				
教育長	森山 良一	森山 良一	森山 良一	森山 良一
教育次長	清水 圭輔	清水 圭輔	清水 圭輔	檜崎洋二郎
総務部長	中原 一憲	中原 一憲	大島 和寛	大島 和寛
副理事兼文化財保護課長			磯村 幸男	磯村 幸男
文化財保護課長	井上 裕弘	久芳 昭文		
副課長		川述 昭人	佐々木隆彦	佐々木隆彦
参事兼課長技術補佐	川述 昭人	木下 修	池辺 元明	池辺 元明
	木下 修	池辺 元明	小池 史哲	小池 史哲
参事	新原 正典	佐々木隆彦	新原 正典	新原 正典
		新原 正典		伊崎 俊秋
参事兼課長補佐		安川 正郷	安川 正郷	中藺 宏
課長補佐	安川 正郷			
参事補佐兼調査第一係長	小池 史哲	小池 史哲	小田 和利	小田 和利
庶務				
参事補佐兼管理係長		稲尾 茂		
管理係長	稲尾 茂		井手 優二	井手 優二
事務主査	宮崎 志行	石橋 伸二	野中 顯	
主任主事	石橋 伸二	末竹 元	淵上 大輔	淵上 大輔
	末竹 元	淵上 大輔	柏村 正央	柏村 正央
			小宮 辰之	小宮 辰之
				野田 雅
調査・報告				
参事補佐兼調査第二係長	中間 研志	飛野 博文	飛野 博文	飛野 博文
参事補佐			濱田 信也	濱田 信也
主任技師	今井 涼子	今井 涼子	進村 真之	今井 涼子
	進村 真之	進村 真之	大庭 孝夫	進村 真之
	大庭 孝夫	大庭 孝夫		

発掘調査に当たっては地元の区長や住民をはじめとした多くの方々の御協力で円滑に進めることができました。多雨だった梅雨の時期、酷暑・厳寒の中、1年以上の長きにわたり熱心に作業に当たられた現場作業員の方々や発掘調査を進める上で、様々な御協力をいただいた旧瀬高町教育委員会及び鉄道建設・運輸施設整備支援機構の皆様に感謝申し上げます。

II 位置と環境

小川柳ノ内（OGAWAYANAGINOUCHI）遺跡（1）は福岡県みやま市瀬高町小川及び坂田に位置している。調査時点での住所は福岡県山門郡瀬高町大字小川字柳ノ内及び大字坂田字下坂田であった。旧瀬高町はその後、平成19年1月29日、近接する山門郡山川町、三池郡高田町と合併し、『みやま市』となっている。旧瀬高町は、『筑紫次郎』と呼ばれ九州最大級の河川である筑後川や矢部川などの堆積による沖積平野である筑後平野の南部に所在する。筑後平野は現在でも、肥沃な穀倉地帯として知られており、本遺跡が営まれていた当時も稲作が中心の生活が行われていたものと考えられる。本遺跡に近接する現在の堀池園・下坂田集落は、河川の氾濫などによって形成された自然堤防上の微高地に展開しており、本遺跡は東縁辺に位置することから、遺跡本体は現在の集落の地下に大規模に展開すると考えられる。

今年度は、古墳時代以降の主な遺跡の概要について記述する。

名木野古墳群はみやま市瀬高町小田に所在し、矢部川と筑後平野を望める丘陵上、標高40～60mに位置する。周囲の丘陵にはまだ多くの古墳群が所在している。当古墳群は同一丘陵上に5世紀前半から7世紀にかけての15基の墳墓が所在していたことが判明している。古墳の変遷を追うことができる貴重な事例である。遺物は珠文鏡2面、銅釧、貝輪等が出土している。

藤ノ尾車塚古墳（13）は小川柳ノ内遺跡から南東に位置する。周辺が大きく削られており、旧状は不明であるが、残存長南北55mの前方後円墳である。1767年に鏡が発見されているが、調査が行われていないため、内部主体は不明である。5世紀代に比定されている。

成合寺谷1号墳は平成13年9月砂防ダム建設工事中に発見され、緊急に調査が行われた装飾古墳である。みやま市瀬高町大字本吉字成合寺谷の標高約60mの丘陵端部に位置する。6世紀後半に築造された古墳で、墳丘は工事のために失われているが、石室は南に開口する複室構造の横穴式石室で、石屋形の部分を中心に赤・白・緑を用いた三角文等の幾何学文が施されていた。現在は現地にて保存されている。

権現塚古墳（6）は小川柳ノ内遺跡の東側、約500mの平地に立地する円墳である。トレンチ調査の結果、直径約45m、高さ5.7mの2段築成である。時期、内部主体については、未調査のため不明である。

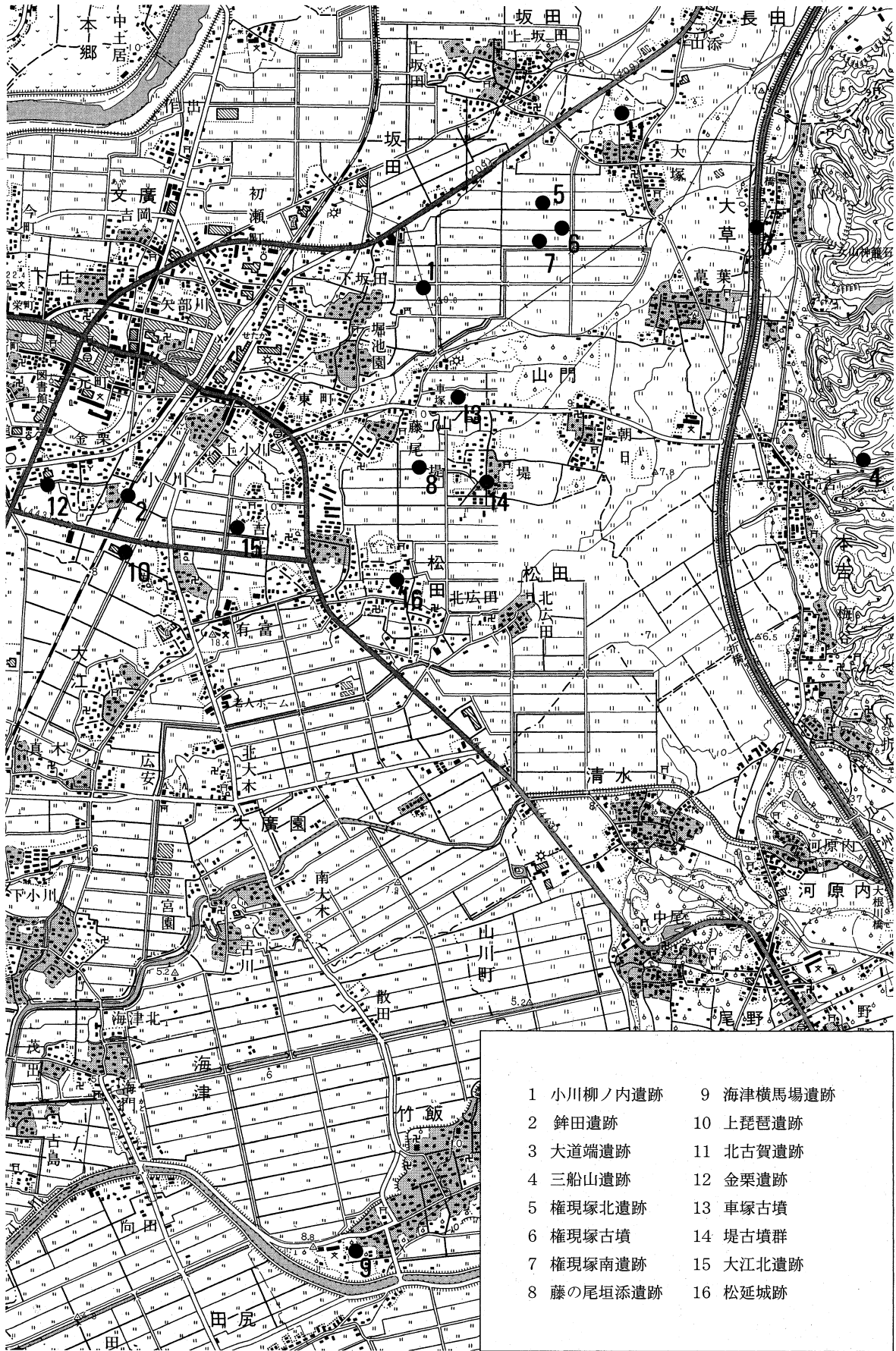
堤古墳群（14）は堤の集落の中に所在する。十数基からなる古墳時代後期の群集墳とされるが、現況では墳丘もほとんど失われている。

女山神籠石は旧瀬高町の東部に位置する。約2.9kmにおよぶ列石が推定されている。昭和40年代、土取りによる大規模な破壊を受けるものの、現在は国指定史跡に指定されている。

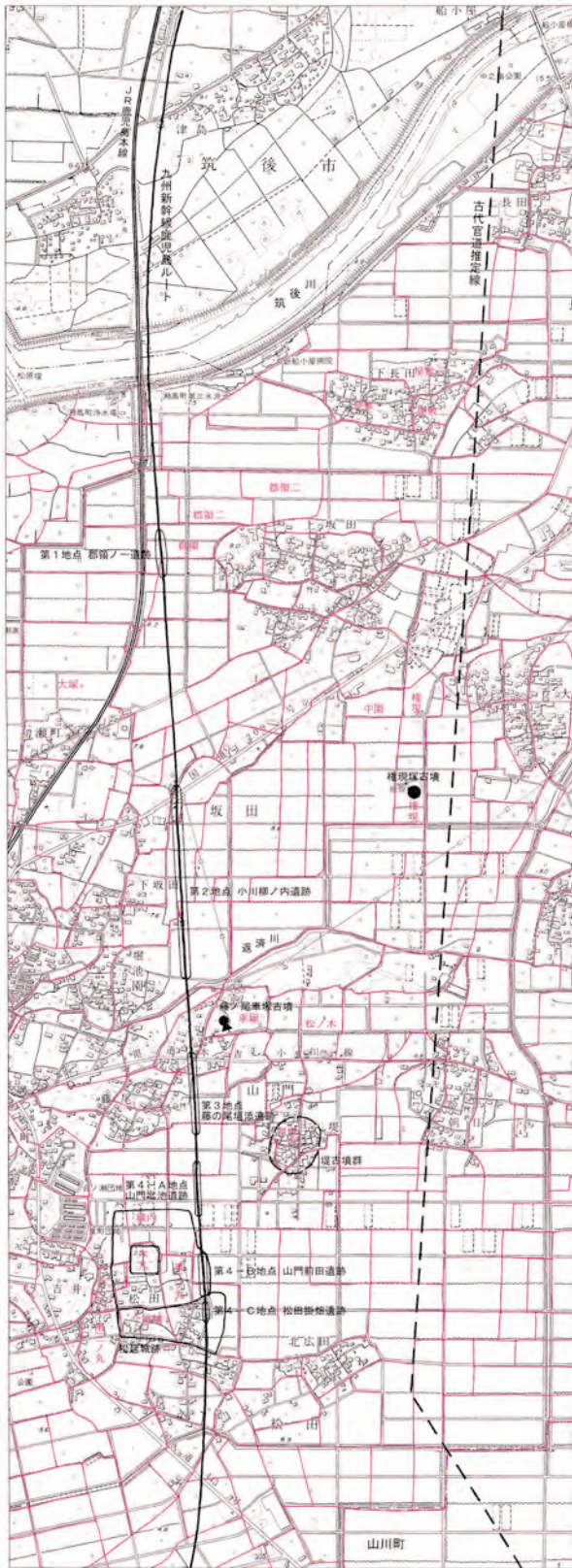
金栗遺跡は古くは昭和20年代の鏡山猛氏の調査・報告が知られている。昭和33年に福岡県指定史跡になっているが、昭和61年度に国道443号バイパス工事で、近接地が発掘調査されている。遺構は鎌倉時代を中心とした井戸、土坑、溝が検出されており、貿易陶磁の出土量も多く、重要な遺跡である。

金栗遺跡に近い時期の遺跡として、大江北遺跡（15）がある。昭和59年度、圃場整備事業に伴い、行われた発掘調査であるため、遺跡の全容は掴みにくいが、13世紀代を中心とした土坑墓、土坑、溝などを検出した他、陶磁器の出土も多く見られた。

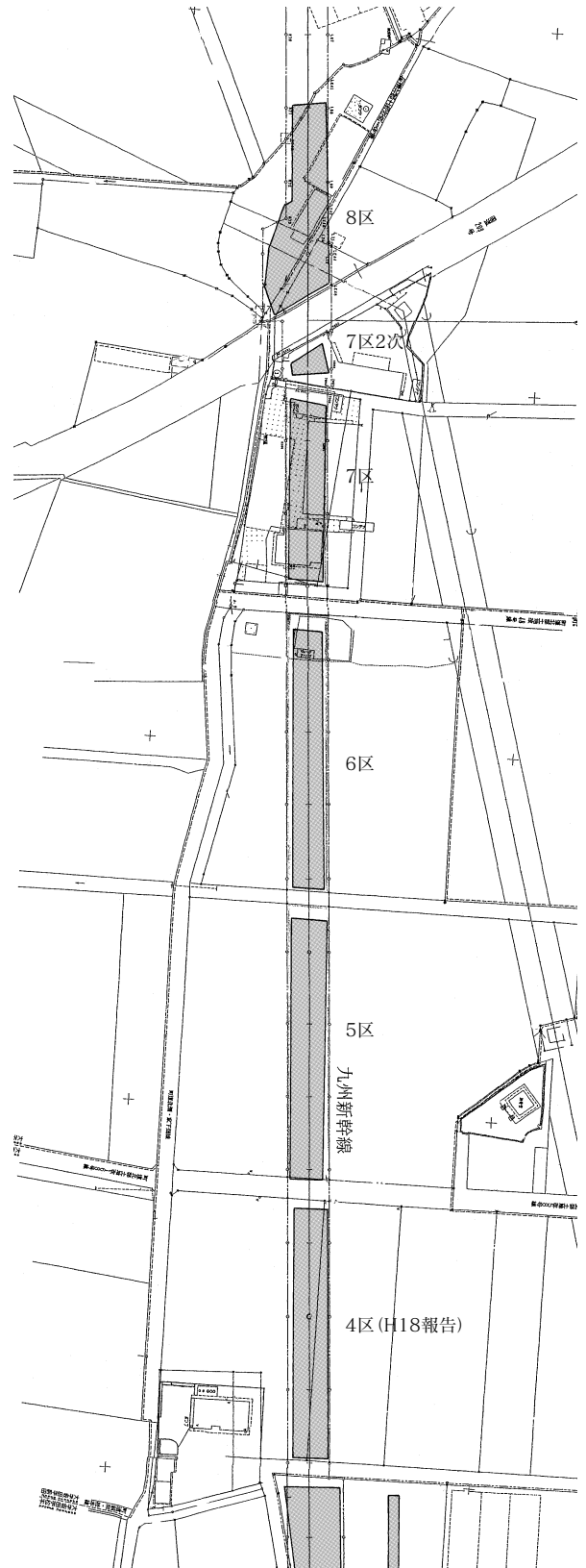
また、近年の調査では山門高校図書館の建設に先立って発掘調査が行われた上庄秀遺跡がある。矢部川の対岸に位置し、主な遺構としては土坑、溝が複雑に切り合った状態で検出されており、遺跡は矢部川の反対方向、北西へ続いていると考えられている。遺物には龍泉窯系や同安窯系の青磁の他、中国南部で焼成されたと見られる陶器類も見られる。



第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



第3図 瀬高町内新幹線沿線図 (1/20,000)



調査区配置図 (1/2,000)

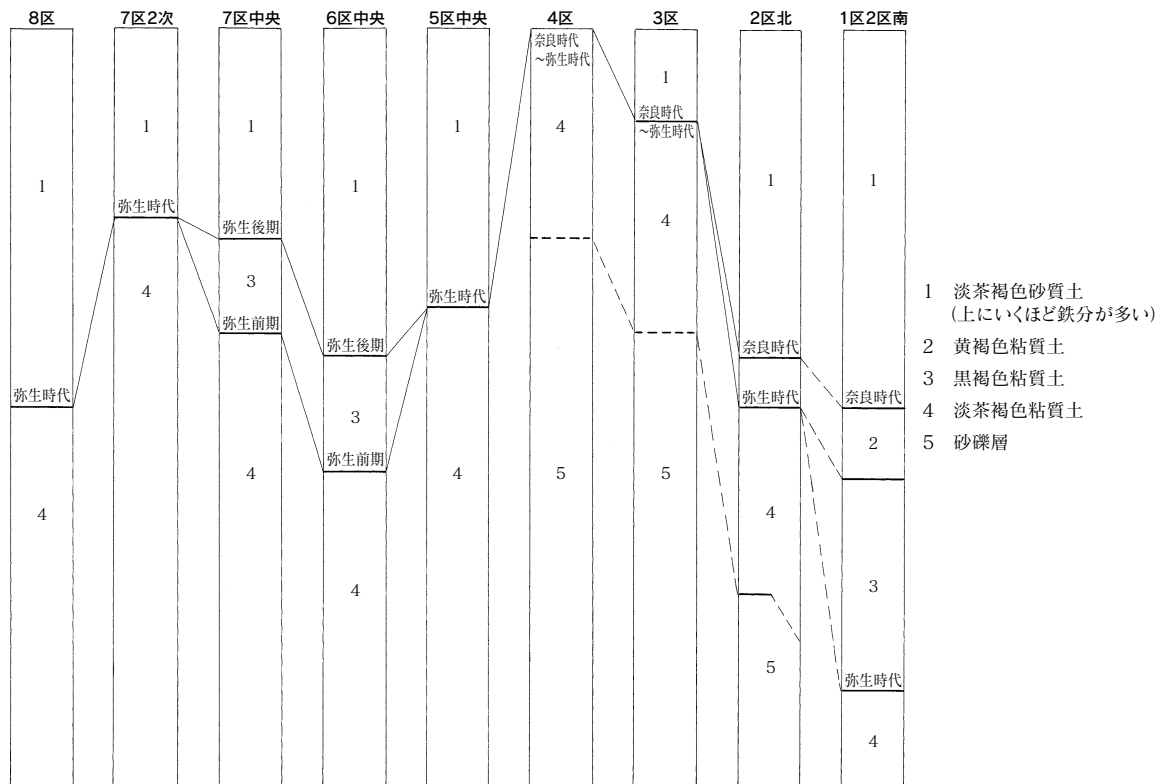
Ⅲ 発掘調査の記録

1 遺跡の概要（図版1、第3図）

小川柳ノ内（OGAWAYANAGINOUCHI）遺跡は福岡県みやま市瀬高町小川及び坂田に位置する。遺跡は矢部川の南岸に位置し、矢部川の形成した沖積平野の標高7m前後の微高地に存在する。この遺跡は昭和50年代後半に圃場整備に伴って発掘調査が行われた権現塚遺跡の範囲のやや西に外れた位置にある。このため、名称を権現塚遺跡にすることも検討したが、「権現塚」は西側約500m離れた位置に所在する古墳の名称であること、また、そうした場合、遺跡が広範囲に及んでしまうことから、最初に調査を行った地点である大字小字の名称をとり、小川柳ノ内遺跡とした。北側では大字が坂田の地点もあるが、遺跡が途切れることがなかったので同一の名称を使用した。調査範囲は返済川の北から国道209号線の北側部分までの約600mの区間である。この区間を調査の便宜上、道路および水路で分け、南から1～8区に分けて調査を行った。この区間は多少の高低差はあるが一連の遺跡である。遺物はパンケース180箱分出土した。

2 基本層序（第4図）

現況では水田であり、倉庫等として使用されていた7区も水田面の上に盛土がなされていた。調査区が1～8区までに分かれ、多少の高低差はあるが、基本的な層序は同じである。今回報告する5区以降では、耕土の直下に、遺物をほとんど含まない淡茶褐色砂質土が約50～80cmと厚く堆積している。上位にいくに従い、鉄分が沈着しているのは、現代までに至る水田耕作によるものであろう。1・2区で見られた黄褐色粘質土の安定した面は検出されず、下層からは黒褐色粘質土が表れる。6・7区においてはこ



第4図 1～8区東壁基本層序模式図

の面で弥生時代後期の遺構が検出される。その下層からは淡茶褐色粘質土が表れ、弥生時代前期の遺構を中心とした遺構面となり、2面に分けて調査している。黒褐色粘質土が存在しなかった5・8区では弥生時代後期と前期の遺構が同一面からの切り込みとなっており、1面のみの調査であった。

3 5区の調査の内容 (第5図)

5区は最後に重機による掘削を行った調査区であるが、近接する4区の調査状況から、高密度に遺構が存することが予想された。ただし、6区の南端部は地形的に落ちていることから、5区の北側部分でも落ちが広がる可能性が予想された。南端部より重機による表土剥ぎを行ったが、耕作土直下で遺構が検出された。遺構面は1面で遺構は竪穴住居跡7棟、土坑45基、溝7条、波板状遺構を検出している。

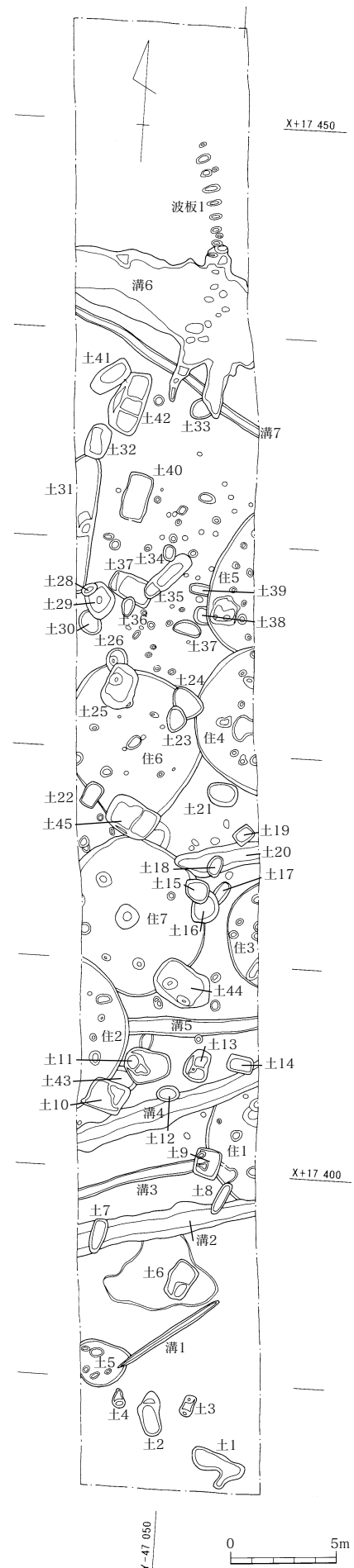
(1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡 (図版2、第6図)

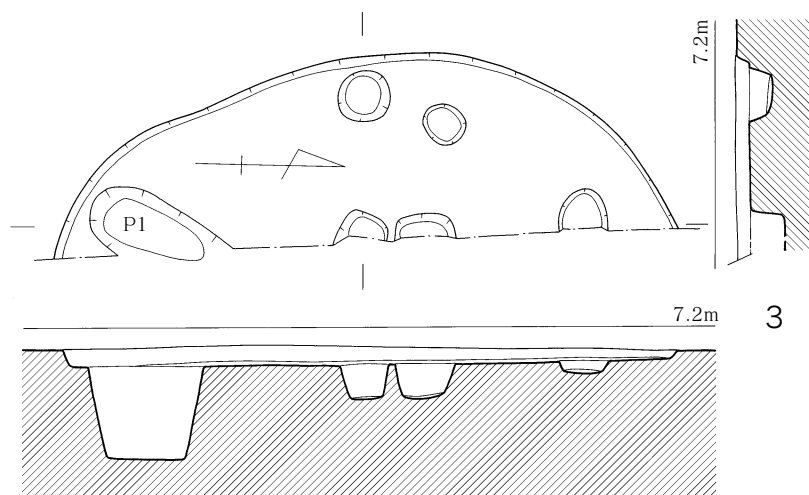
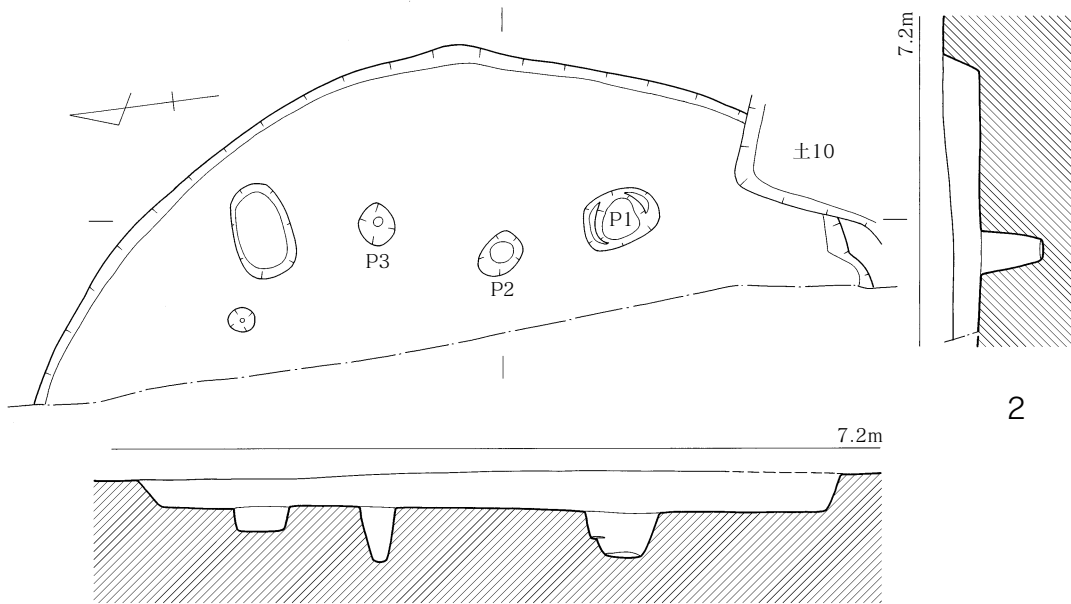
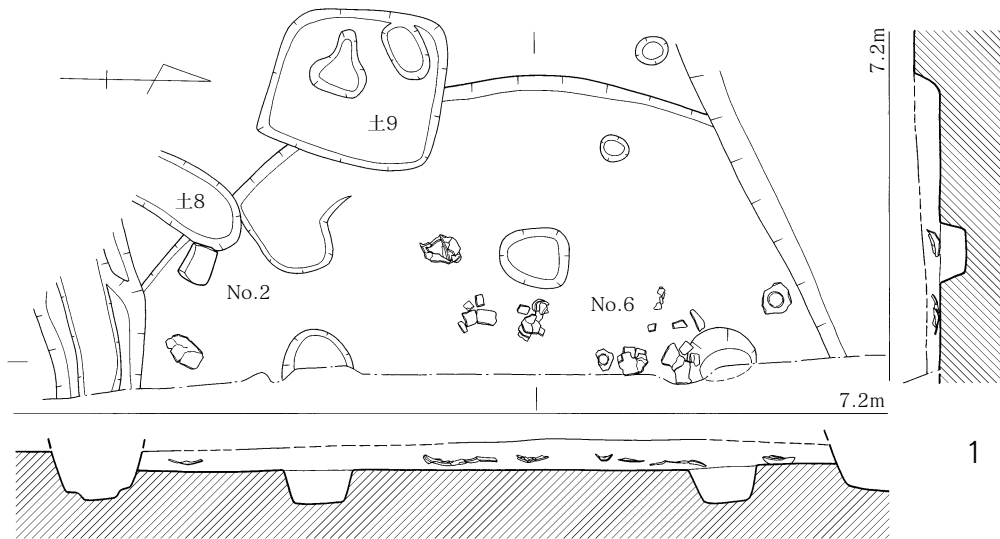
調査区の南寄りで検出した。3号溝を切り、8号土坑、9号土坑、2・4号溝に切られる。平面の約1/3を検出したが、残りは調査区外の東へ延びる。円形住居で、規模は検出部分から判断すると直径8m前後になると推定される。深さ約0.2mである。床面からピット3基を検出している。深さ0.3m程度と浅いが、支柱穴となる可能性もある。床面より浮いた状態で土器が出土している他、磨石が出土している。

出土土器 (第7図)

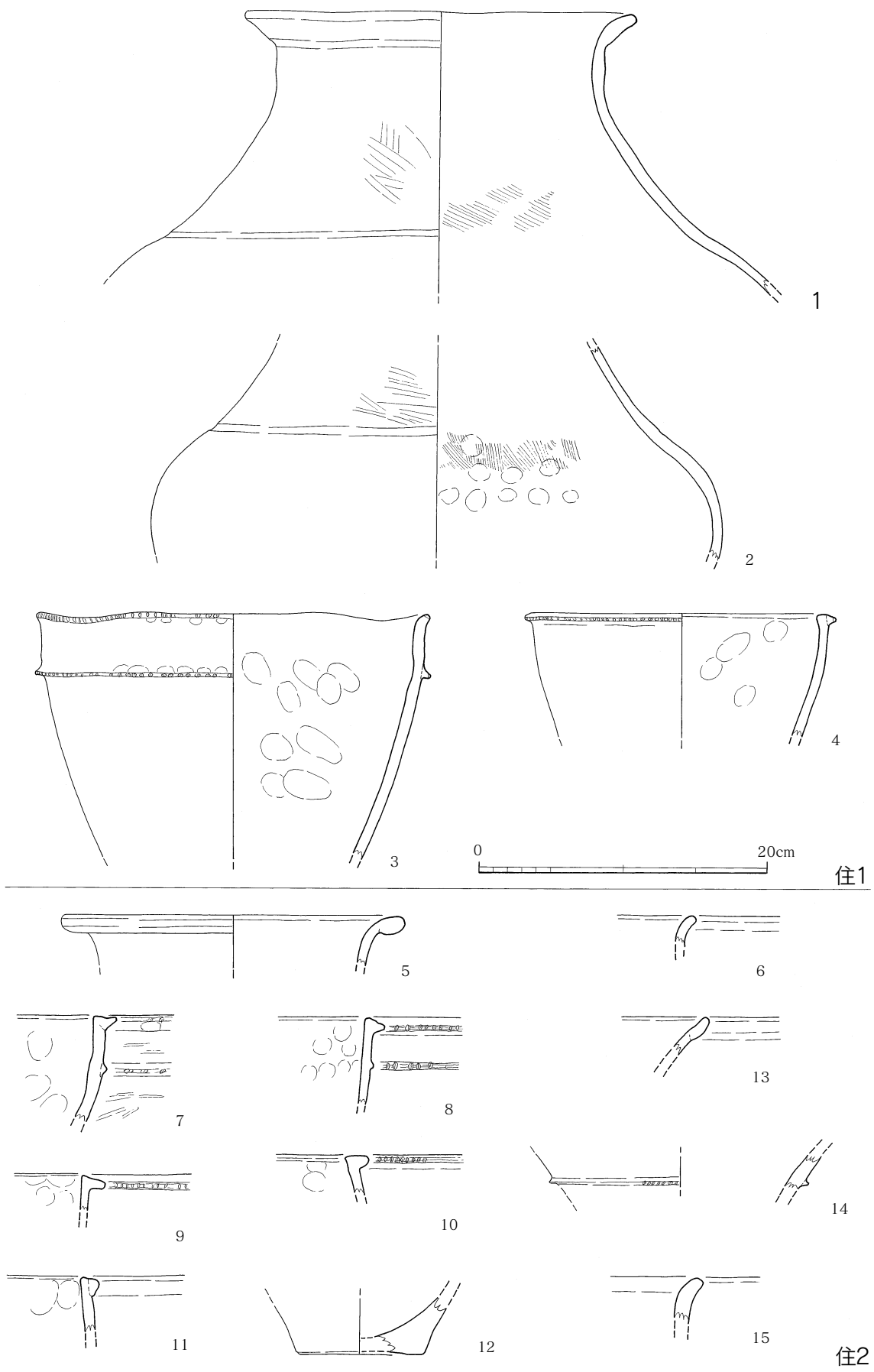
1・2は大型の壺である。1はNo.6の位置から出土している。口縁部はわずかに肥厚させており、頸部と肩部の境には太く浅い沈線を1条巡らす。外面はミガキ調整。内面は細かいハケメ。口径27.2cm。2もNo.6の位置から出土しており、1と同一個体とも考えたが、胴の張りが異なるため、別個体と判断した。頸部と肩部の境に太くて浅い沈線を1条巡らす。外面はミガキ調整。内面はハケメだが、沈線より下位に圧痕が残る。3・4は甕である。3は口縁端部を外反させるもので、胴部にさらに1条突帯を貼り付け、刻目を施す。口径27.2cm。4は口縁端部に三角突帯を貼り付け、刻みを施している。口径21.4cm。



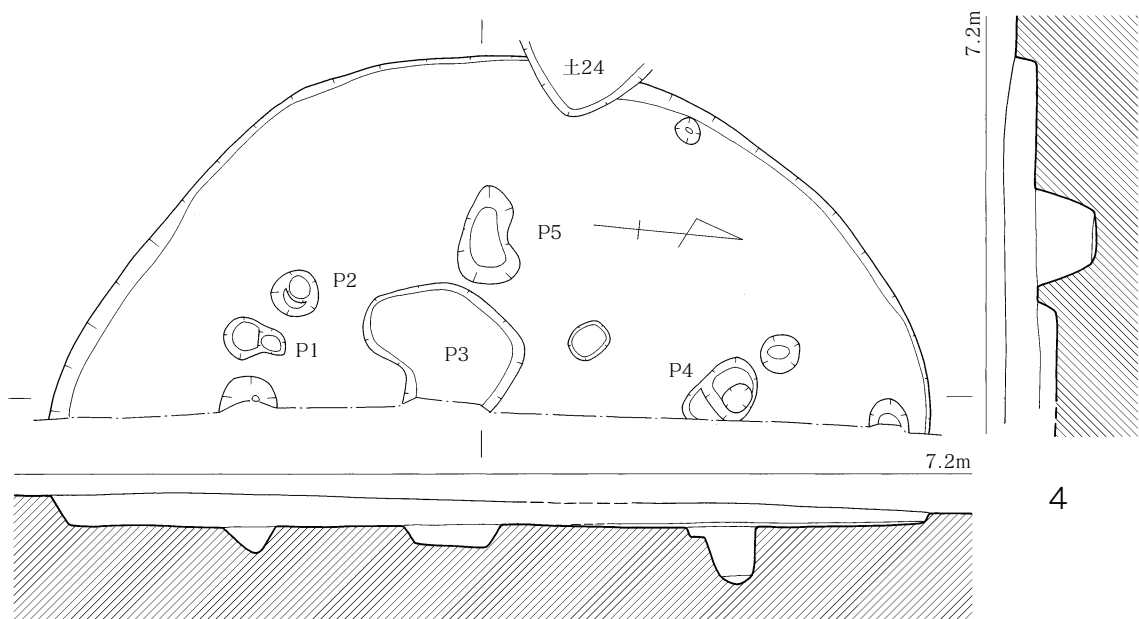
第5図 5区遺構配置図 (1/300)



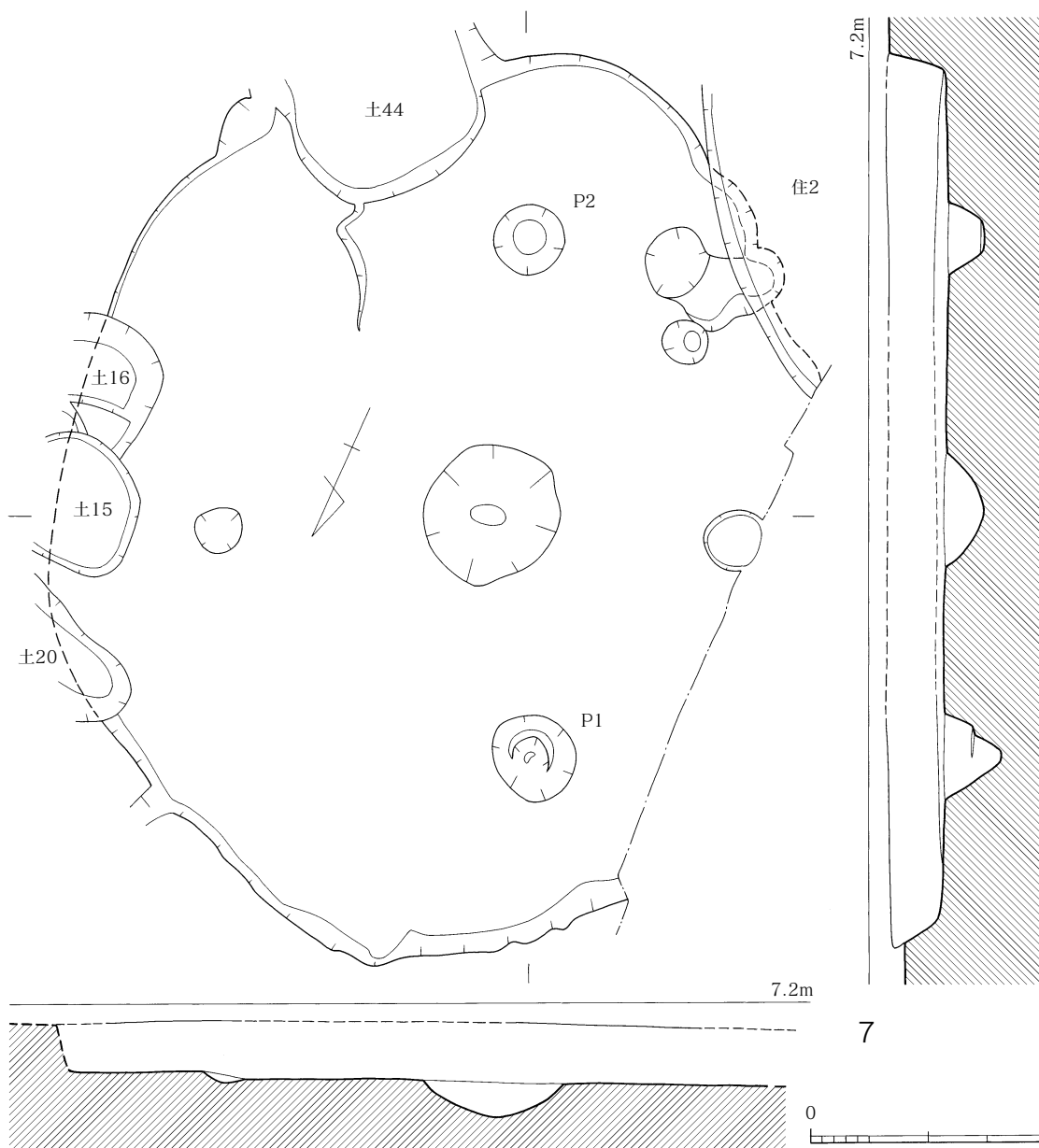
第6図 5区1~3号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第7图 5区1·2号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/4)



4



7

第8图 5区4·7号竖穴住居跡実測図 (1/60)

2号竪穴住居跡 (図版2、第6図)

調査区の南寄りで検出した。7号住居跡、43号土坑、5号溝を切り、10号土坑に切られる。平面の約1/3を検出したが、残りは調査区外の西へ延びる。円形住居で、規模は検出部分から判断すると直径10m前後になるものと推定される。深さは約0.3mである。ピットは5基検出しているが、うちP-1、P-2、P-3 が比較的しっかりしており、支柱穴となる可能性がある。埋土から弥生土器が出土している。

出土土器 (第7図)

5・6は壺である。5は外反する口縁の外側に大きく粘土帯を貼り付けるものである。口径12.0cm。6はわずかに外反する口縁である。7~12は甕である。7~10は突帯に刻み目を施すものである。11は三角突帯を貼り付けただけのものである。12は甕の底部で、わずかに上底気味である。底径は8.8cmである。13は鉢の口縁であろうか。口縁部分を外側に肥厚させている。14は鉢の胴部である。中位に刻み目のある三角突帯が貼り付けられる。15は混入の土師器甕であろうか。わずかに口縁を外反させる。

3号竪穴住居跡 (図版3、第6図)

調査区の中央やや南寄りで検出した。平面の約1/4を検出したが、残りは調査区外の東へ延びる。円形住居で、規模は直径6m前後になると推定される。深さは約0.1mである。床面で6基のピットを検出しているが、P-1は約0.7mと深く掘りこまれており、支柱穴の可能性が高いであろう。出土遺物は無かった。

4号竪穴住居跡 (図版3、第8図)

調査区の中央付近で検出した。遺構の5・6号住居跡を切り、24号土坑に切られる。平面の約半分を検出したが残りは調査区外の東へ延びる。円形住居で、直径7m前後になると推定される。深さは約0.2mである。多数のピットを検出しているが、うちP-3は中央土坑であろう。P-4、P-5は深くしっかりしており、支柱穴の可能性が高い。埋土から弥生土器が出土している。

出土土器 (図版68、第9図)

1~3は壺である。1は口縁部が肥厚せず、大きく外反するものである。摩滅気味であるが内外面の調整はミガキである。口径20.0cmである。2はわずかに外反する口縁部である。3は頸部の破片である。わずかに沈線が巡ることがわかる。4~19は甕である。4・6は2条の突帯を貼り付けるものである。4の口径は29.6cmである。6の口径は21.0cmである。5・7は口縁に1条の三角突帯を貼り付けるものである。5の口径21.4cmである。8は口縁をわずかに外反させるものである。刻み目は見られない。9は小さな断面三角突帯を貼り付け、刻み目を施している。10は外反させる口縁下部に大き目の断面三角突帯を貼り付け、両方に刻み目を施している。11は3条の断面三角突帯を貼り付け、全てに刻み目を施している。16~19は底部片である。16の底径は6.0cmである。17の底径は8.0cmである。18の底径は7.4cmである。19は上底の底部で、底径8.4cmである。20は混入の縄文土器の底部であろうか。器表面の調整は摩滅して不明である。色調は暗茶褐色を呈する。底径8.2cmである。

5号竪穴住居跡 (図版3、第10図)

調査区の中央やや北寄りで検出した。38・39号土坑を切り、4号住居跡に切られる。平面の約1/4を検出したが、残りは調査区外の東へ延びる。円形住居で、直径8m前後になるものと推定される。深さは約0.1mである。床面からピット多数を検出しているが、比較的深いものも多く、支柱穴になる可能性が高い。遺物はP-1から弥生土器が出土している。

出土土器 (第9図)

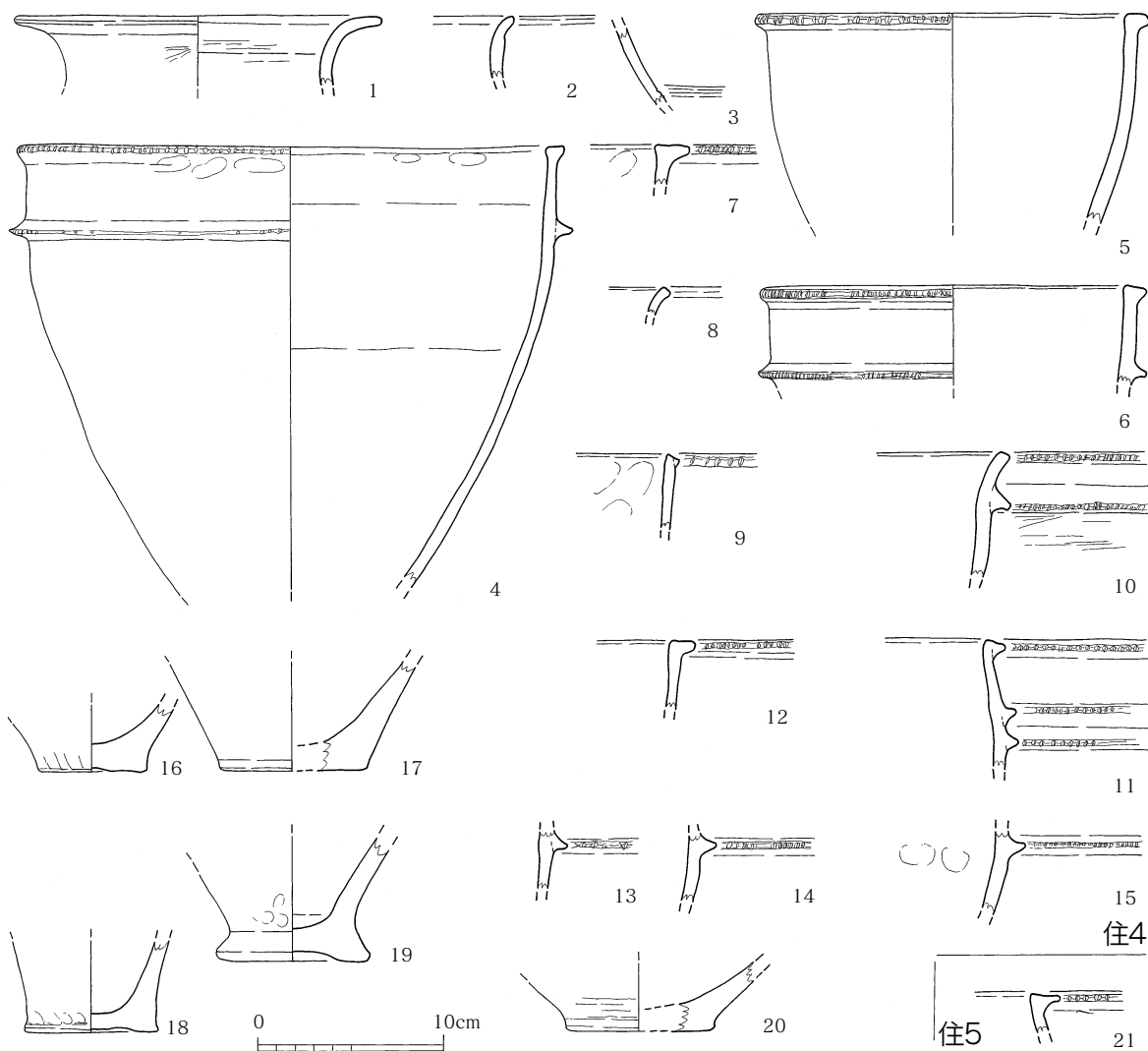
21は甕である。断面三角形の突帯を貼り付け、大き目の刻み目を施す。外面の突帯下位には何らかの工具の痕跡が残る。P-1から出土した。

6号竪穴住居跡 (図版4、第10図)

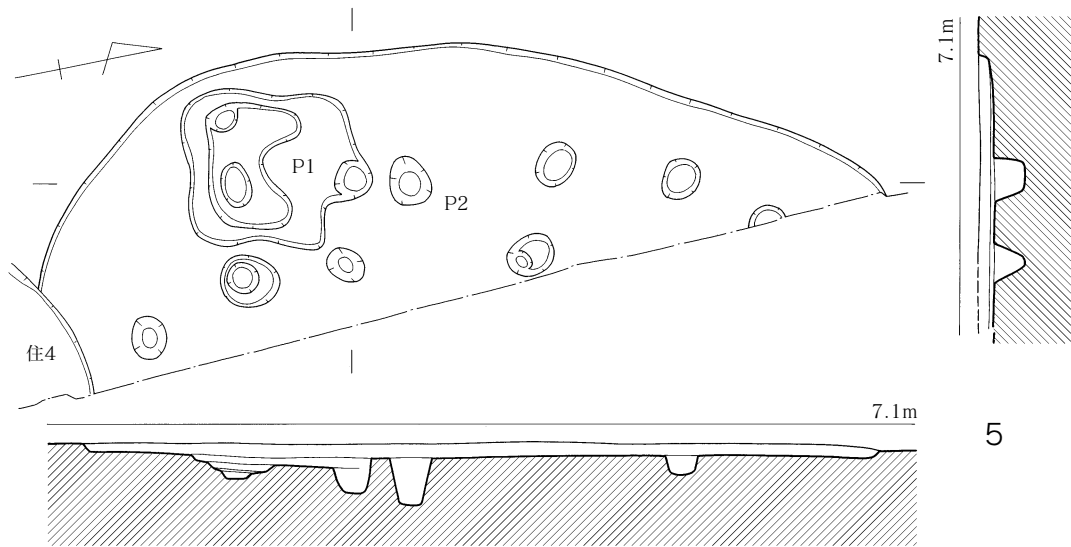
調査区の中央付近で検出した。4号住居跡、22~26・45号土坑に切られる。平面のほぼ全体を検出しているが、西側がわずかに調査区外へと延びる。円形住居で直径6.5~7.4mの楕円形を呈するが、南側付近は掘り間違いの可能性もあり、本来、正円の平面プランを呈するものと考えている。中央に深さ約0.1mの楕円形の中央土坑を検出し、長軸両側に小ピットを見つけた。中央土坑周辺にピット多数を検出しているが、いずれが支柱穴となるかの見極めは困難である。埋土から弥生土器がややまとまって出土している。

出土土器 (図版68、第11図)

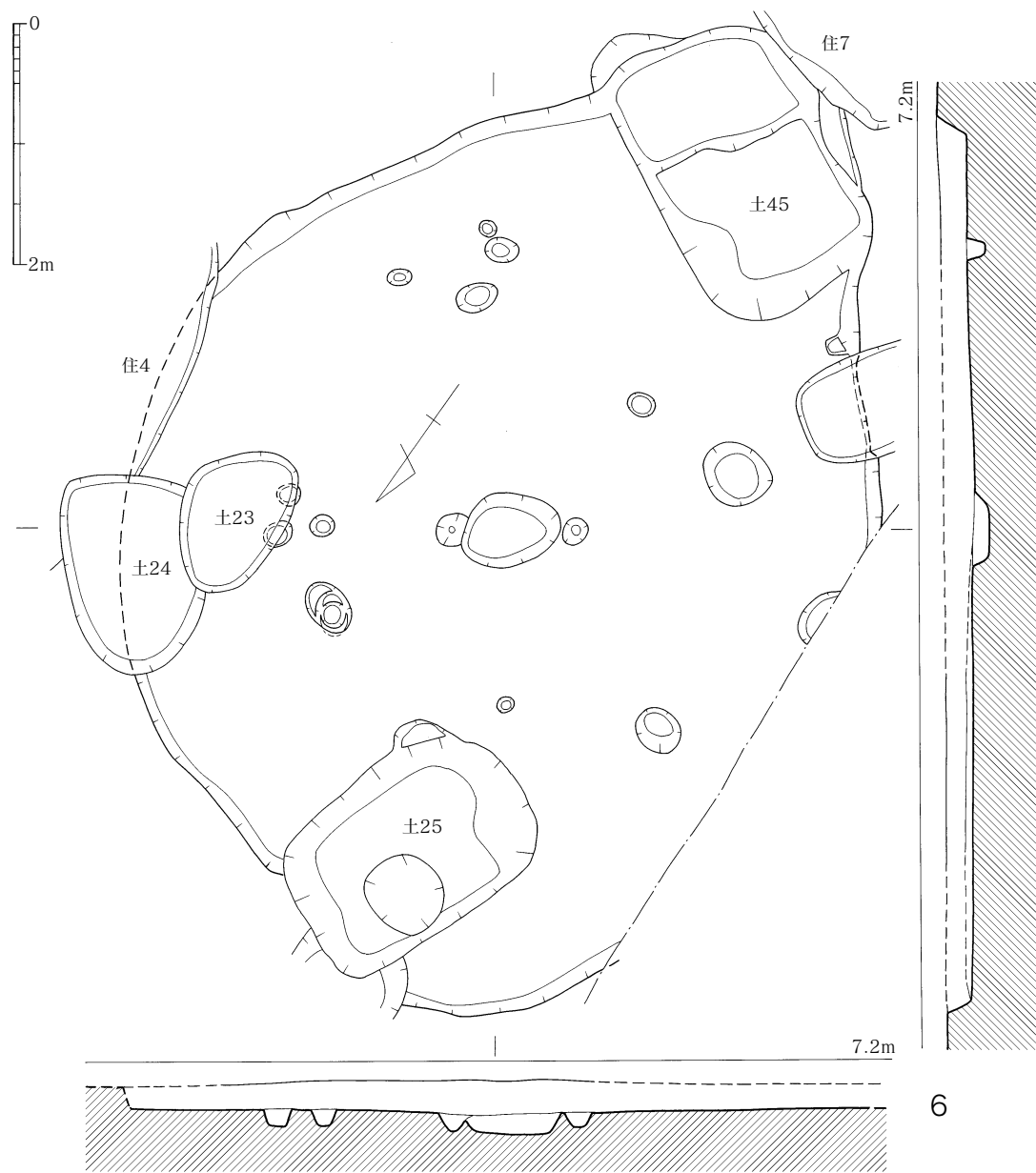
1~3は壺である。1はやや外反気味の肥厚しない口縁部で、頸部と肩部の境に3条の沈線を巡らす、



第9図 5区4・5号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

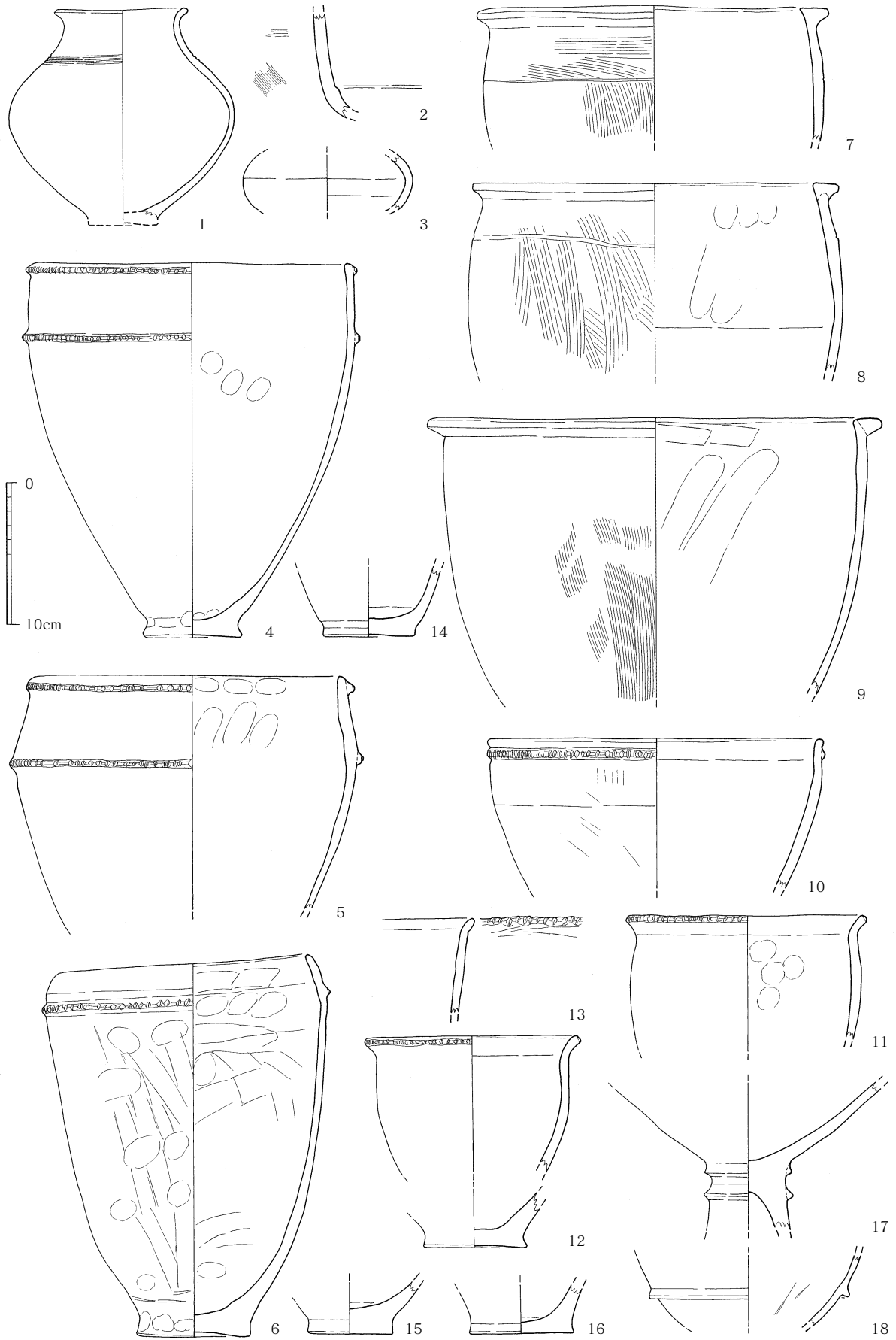


5



6

第10图 5区5·6号竖穴住居跡実測図 (1/60)



第11图 5区6号竖穴住居迹出土土器实测图 (1/4)

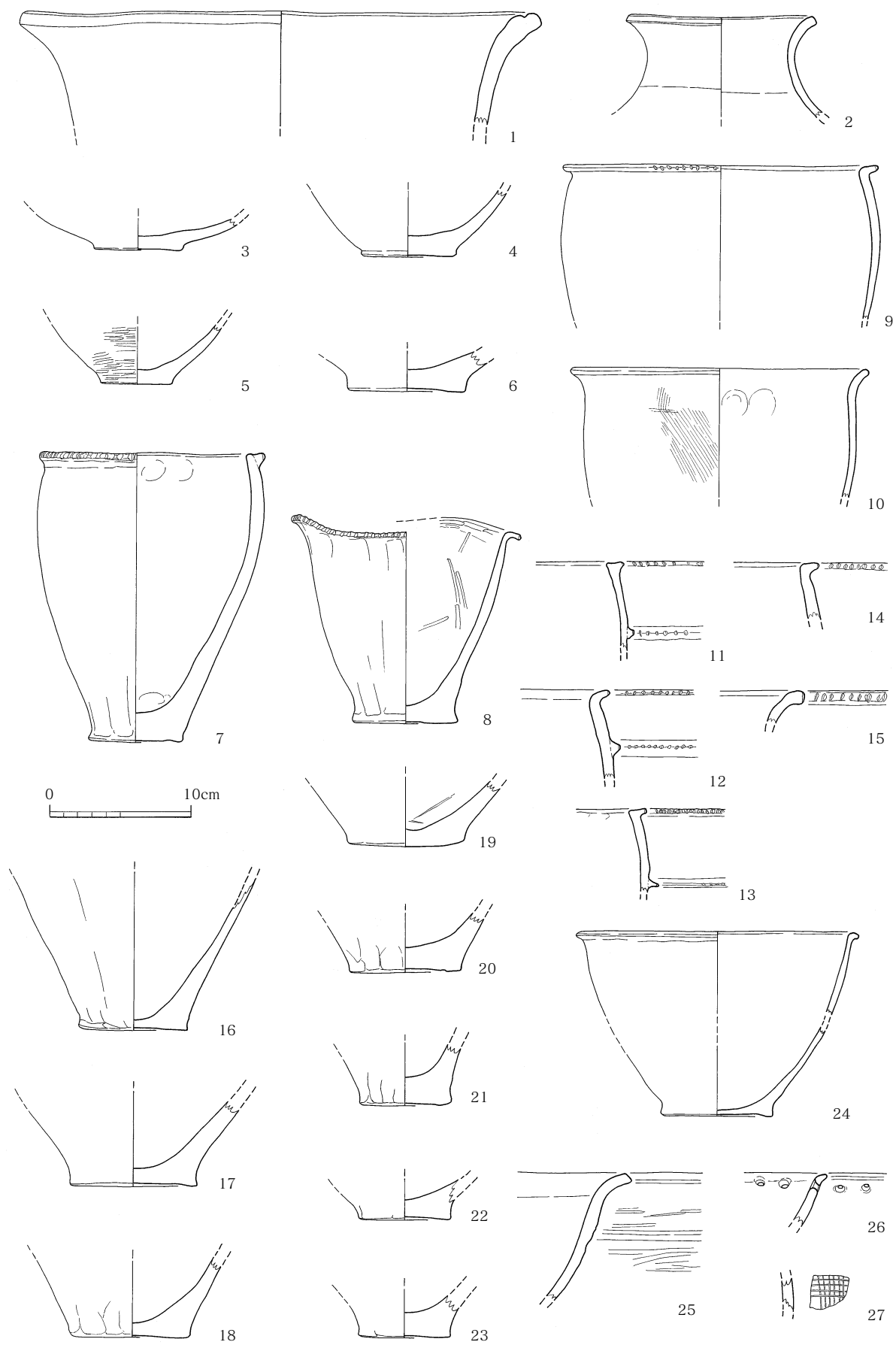
段はつかない。内外面の調整は摩滅している。口径9.0cm、胴部最大径16.0cm、器高15.2cmである。2は大型の壺の頸部と肩部の境である。境目の部分を小さな突帯状に仕上げている。内面の調整はハケメである。3は胴部片である。胴部最大径は12.0cmである。P-2から出土している。4～16は甕である。4・5は2条の刻目突帯を巡らすもの。4の外面にはススが付着する。口径は23.5cm、底径6.5cm、器高26.4cmである。5は胴部がわずかに屈曲するものである。口径21.5cmである。内外面の胴部中位にかけてススが付着する。6は胴部を屈曲させる甕で、屈曲部に1条の刻目突帯を貼り付けるものである。内外面、ナデ調整であるが部分的に圧痕が残る。口径17.6cm、底径8.2cm、器高27.0cmである。P-2の底部から据えられた状態で出土している。ほぼ完品である。7・8は口縁に三角突帯を貼り付け、口縁下に沈線を1条巡らすものである。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。7の口径は22.6cmである。8の口径は26.0cmである。9は三角突帯を貼り付けたもの。口径32.2cmである。10は口縁よりやや下った位置に刻目突帯を貼り付けるものである。外面の調整はハケメであろう。外面胴部中位にはススが付着する。口径23.6cmである。11～13は如意形口縁で、刻目を施すものである。11の口径は16.9cmである。12の口径は14.6cm、底径7.2cm。13の外面口縁下には工具痕が残る。14の底径は6.4cmである。15の底径は5.8cm。16の底径7.3cm。17は高杯である。杯部と脚部の境に2条の三角突帯を貼り付けている。器表面は摩滅している。18は高杯の杯部もしくは鉢であろうか。三角突帯を1条貼り付けている。

7号竪穴住居跡（図版5、第8図）

調査区の中央やや南寄りで検出した。2号住居跡、15・16・20・44・45号土坑に切られる。平面のほぼ全体を検出しているが、西側がわずかに調査区外へ延びる。円形住居で、直径7.5mを計る。検出当初、プランが明瞭でなく、「中央部おち」の名称で掘削していたが、途中で住居であることが判明したため、7号住居跡とした。深さは約0.4mである。中央に直径約1.2m、深さ0.4mの土坑が検出され、床面には多数のピットが見つかっている。うち、P-1、P-2は主柱穴の可能性が高い。遺物は埋土中からかなりまとまって弥生土器が出土している。

出土土器（図版68、第12図）

1～6は壺である。1は口縁の上位に1条の沈線を巡らすものである。口径37.1cmである。2は小型の壺で、頸部と肩部の境に1条の沈線は巡るが、段は付かない。3の底径は6.2cmである。4の底径は6.8cmである。5の外面は横方向のミガキ、内面はナデ調整である。6の底径は8.4cmである。7～23は甕である。7は刻目突帯を貼り付けたものである。口径16.0cm、底径6.6cm、器高20.4cmである。外面は2次被熱を受ける。8は如意形口縁の甕で、大きく歪む。口径16.3cm、底径7.6cm、器高14.5cmである。外面は2次被熱を受ける。9は口縁端部を大きく曲げ突帯状に仕上げている。内面の調整はミガキである。口径22.4cmである。10は如意形口縁であるが、刻目は無い。外面の調整はハケメである。口径21.0cmである。16の底径は7.7cmである。17の底径は9.0cmである。18の底径は8.0cmである。19はややレンズ状を呈する。底径8.0cmである。20の底径は7.9cmである。21の底径は6.4cmである。22の底径は6.5cmである。23の底径は6.4cmである。24は鉢である。内外面ともに2次被熱を受けている。口径20.0cm、底径8.0cmである。25は鉢の口縁部である。外面の調整はミガキ、内面はナデである。26は口縁部に2個の穿孔を施す鉢である。27は壺であろうか。外面に格子目状に沈線を刻む。



第12图 5区7号竖穴住居迹出土土器实测图 (1/4)

(2) 土坑

1号土坑 (図版5、第13図)

調査区の南端部で検出した。長軸約2.5m、短軸約1.2mで、一部に張り出しを持つ不整形で、深さは0.4m前後である。床面はほぼ平坦である。遺物は埋土から弥生土器が出土している。

出土土器 (第14図)

1は弥生土器の甕である。胴部で屈曲し、刻目突帯を貼り付けている。

2号土坑 (図版5、第15図)

調査区の南端部で検出した。長軸2.1m、短軸1.0mの楕円形である。深さは0.5mで北端部に2段の段がつく。床面はほぼ平坦である。遺物は埋土から弥生土器が出土している。

出土土器 (第14図)

2～4は甕である。2は屈曲の無い胴部に2条の刻目突帯を貼り付けている。3の底径は7.8cmである。4の底径は7.5cmである。5は鉢である。外面の調整はミガキである。口径14.4cmである。

3号土坑 (図版6、第13図)

調査区の南端部で検出した。長軸1.0m、短軸0.5mの楕円形である。中央がテラス状に高くなり、両端部が0.2mほど掘り込まれる。図化に耐えうる遺物は出土していない。

4号土坑 (図版6、第13図)

調査区の南端部で検出した。長軸0.9m、短軸0.5mの楕円形である。深さは北側が0.1m、南側が0.25mと一段深くなる。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第14図)

6は弥生土器の底部である。底径は7.4cmである。

5号土坑 (第13図)

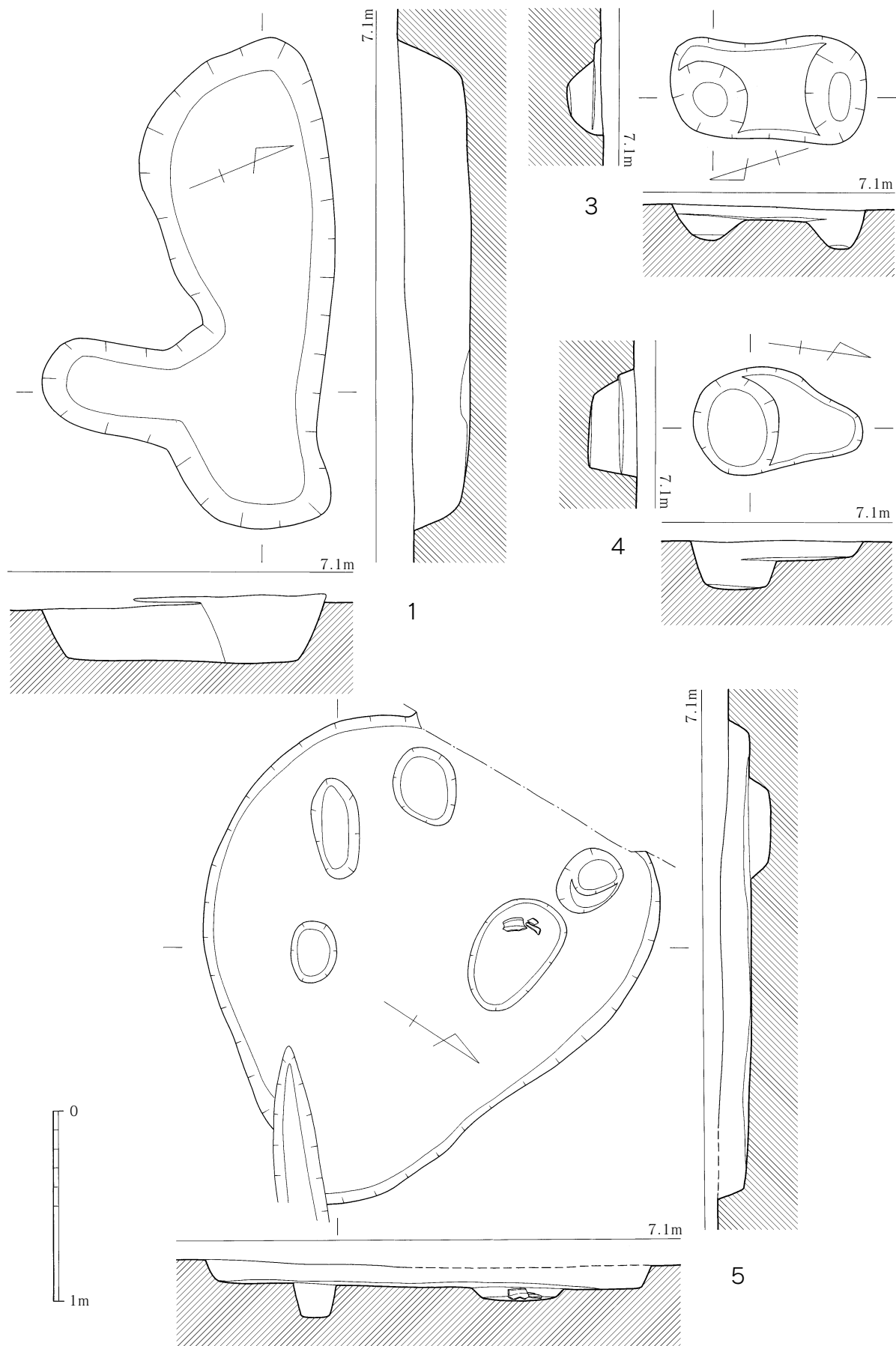
調査区の南端部で検出した。1号溝に切られる。ほぼ全体を検出しているが、一部が調査区外に延びる。長軸2.6m、短軸2.3mである。深さは0.1m程度で、床面にピットが5基掘り込まれる。遺物は埋土から弥生土器が出土している。

出土土器 (図版69、第14図)

7は壺である。口縁はわずかに外反する。頸部はあまりしまらず、頸部と肩部の境に3条の沈線を巡らす。段はつかない。沈線の下位には3条の弧文が描かれる。内外面の調整は摩滅しており不明である。口径18.6cmである。8～12は甕である。8は如意形口縁の甕である。口縁端部に大きめの刻みを施す。外面には2次被熱の痕跡とススが付着する。口径17.2cm、底径6.6cm、器高18.4cmである。12の底径は7.7cmである。

6号土坑 (図版6・7、第15図)

調査区の南端部で検出した。周囲に浅く遺構面と異なる土が堆積しており、それを剥いだ状態で、土坑のプランを検出した。長軸1.9m、短軸1.2mの隅丸方形である。深さは0.25mで、床面はほぼ平坦である。遺物はやや浮いた状態で弥生土器がまとまって出土している。また、完形に近い縄文晩期の浅鉢が出土しているが、重複している縄文時代の遺構を認識することができずに同時に掘ってしまった可能



第13图 5区1·3~5号土坑实测图 (1/30)

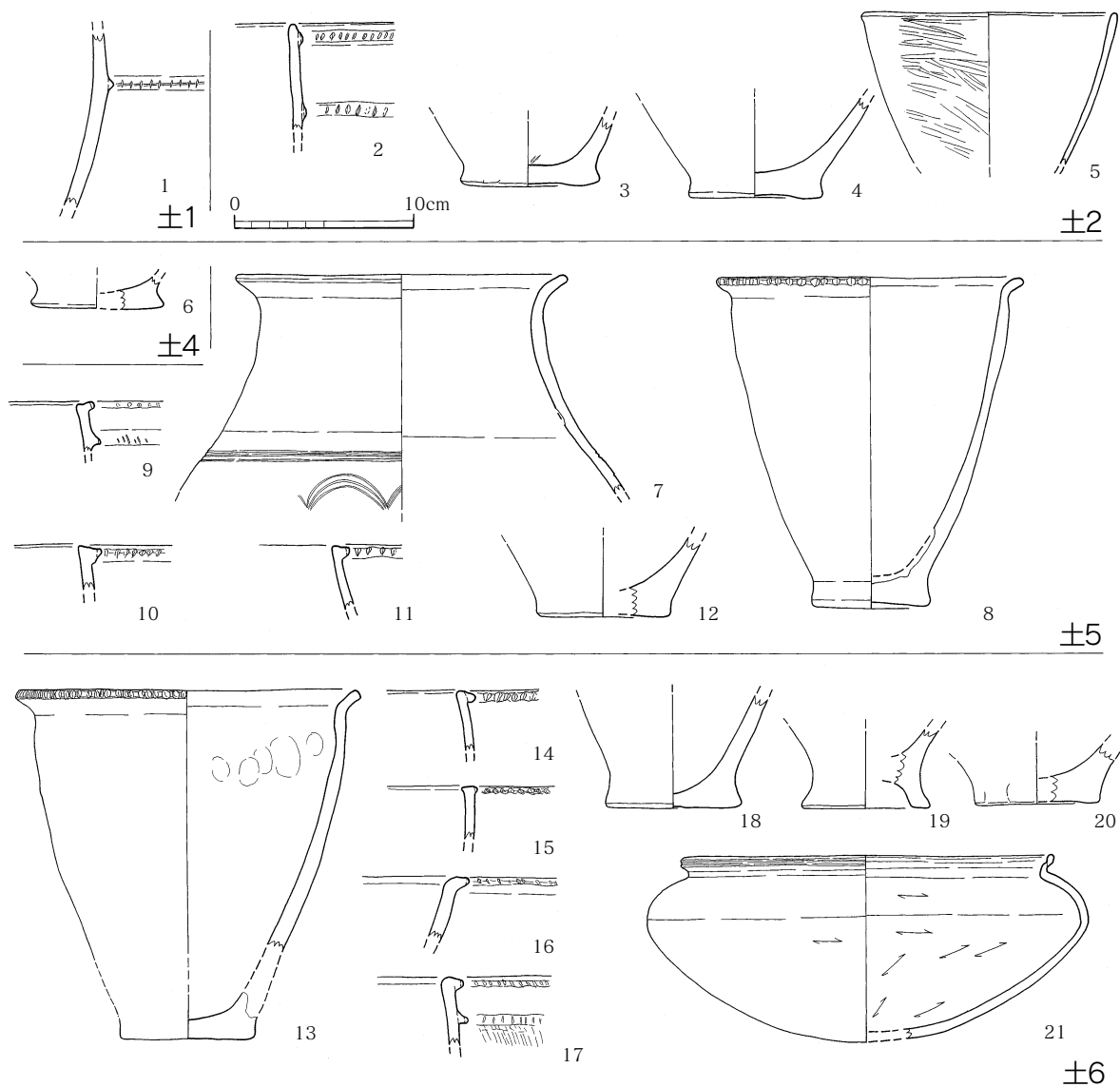
性が高い。

出土土器 (図版69、第14図)

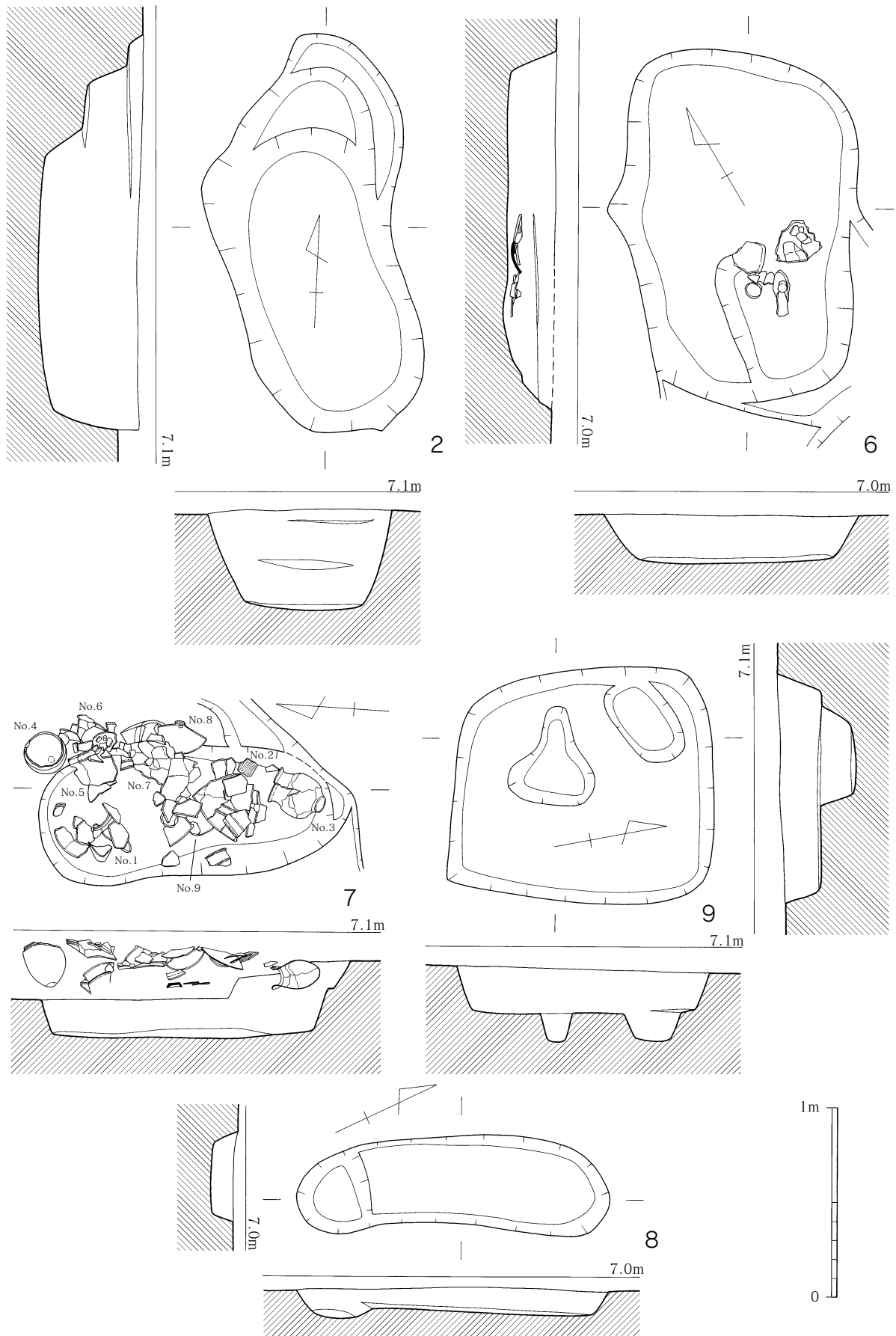
13~20は甕である。13は如意形口縁の甕で、外面にはススが附着する。内面には圧痕が残る。口径19.2cm、底径7.2cmである。18の底径は7.0cmである。19は上底の底部で、底径は7.2cmである。20の底径は7.0cmである。21は縄文晩期の精製浅鉢である。内外面はミガキ調整である。口径20.9cm、胴部最大径24.7cm、器高10.4cmである。

7号土坑 (図版7、第15図)

調査区の南端部で検出した。2号溝を切る。重機による表土剥ぎ中に土器が集中している場所があり、その時点では平面プランが確認できなかったため、土器出土状況を図化し、更に人力による掘削を行った。その後、プランが確認できたので7号土坑とした。検出できた長軸1.7m、短軸0.7mの楕円形であ



第14図 5区1・2・4~6号土坑出土土器実測図 (1/4)



第15图 5区2·6~9号土坑实测图 (1/30)

るが、土器は上位で大きく広がっており、より大きい土坑であったと考えられる。深さは0.4mほどを検出しているが、土器の出土状況からすると0.6m以上であったであろう。床面は平坦である。遺物は弥生土器がかなり浮いた状態でまとまって出土している。

出土土器 (図版69・70、第16～18図)

1は壺である。口縁部は強く外反し、端部をわずかに肥厚させている。頸部と肩部の境に2条の沈線を巡らす。胴部はあまり張らない。口径15.8cm、底径7.3cm、器高27.4cmである。No.3の位置から出土している。2・3は蓋である。2の口径は26.4cmである。No.8の位置から出土している。3の口径は24.0cmである。No.1の位置から出土している。4～20は甕である。4の外面は2次被熱を受け、ススが付着する。口径21.4cm、底径6.8cm、器高26.4cmである。No.6の位置から出土している。5の外面も2次被熱を受ける。口径20.4cm、底径7.0cm、器高22.7cmである。No.4の位置から出土している。6の口径は28.0cmである。No.2の位置から出土している。7の口径は29.8cmである。No.5の位置から出土している。8は口径26.8cmである。No.5の位置から出土している。9の口径は30.6cmである。No.1の位置から出土している。10の底径は6.8cmである。外面にススが付着する。No.9の位置から出土している。11の胴部下位は2次被熱を受ける。口径23.3cm、底径8.3cm、器高25.0cmである。No.6の位置から出土している。12は口径27.0cm、底径5.8cm、器高30.6cmである。13は底部に焼成後穿孔を施している。口径20.4cm、底径5.0cmである。No.7の位置から出土している。14の口径は27.8cmである。No.1の位置から出土している。15の外面にはススが付着する。口径27.4cm、底径7.4cm、器高32.6cmである。No.14の位置から出土している。16は口径27.7cmである。17は口径23.0cm、底径6.3cmである。No.2の位置から出土している。18はNo.2の位置から出土している。19はNo.1の位置から出土している。20は口径17.8cm、底径6.0cm、器高26.8cmである。21は鉢であろうか。口径25.0cm、底径6.8cm、器高12.5cmである。

8号土坑 (図版7、第15図)

調査区の南端部で検出した。1号住居跡と2号溝を切る。長軸1.7m、短軸0.5mの長楕円形である。深さは0.15mほどの平坦で、南側が一段深くなっている。遺物は出土しなかった。

9号土坑 (図版8、第15図)

調査区の南端部で検出した。1号住居跡と3号溝を切る。長軸1.4m、短軸1.2mの隅丸方形である。深さは0.3mで平坦、2ヶ所に掘り込みがある。遺物は埋土から弥生土器が出土している。

出土土器 (第18図)

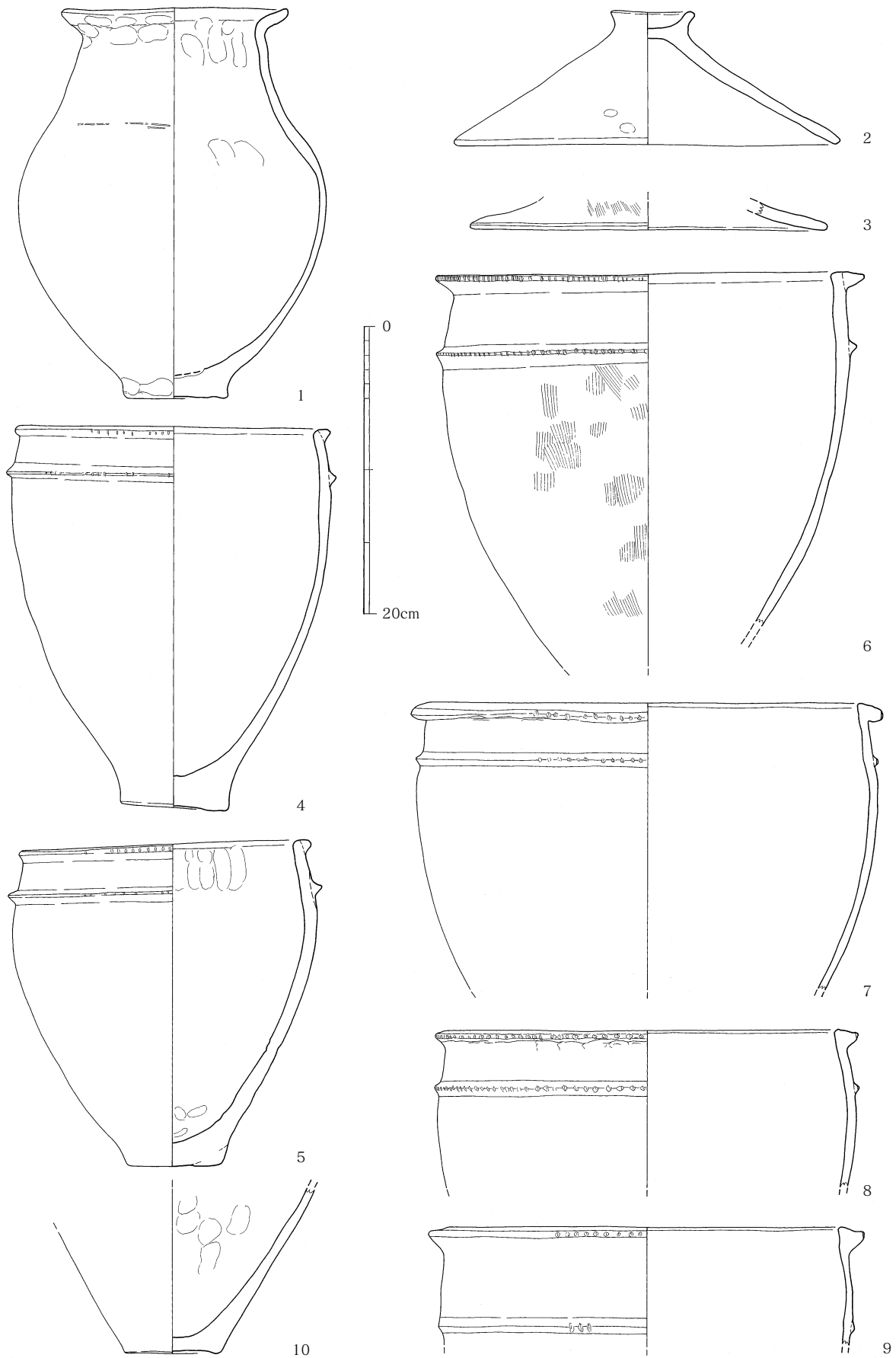
22は蓋である。23は甕の口縁部である。端部に刻目を施す。24は甕の底部で、底径7.6cmである。25は甕の口縁部であろうか。

10号土坑 (図版8、第19図)

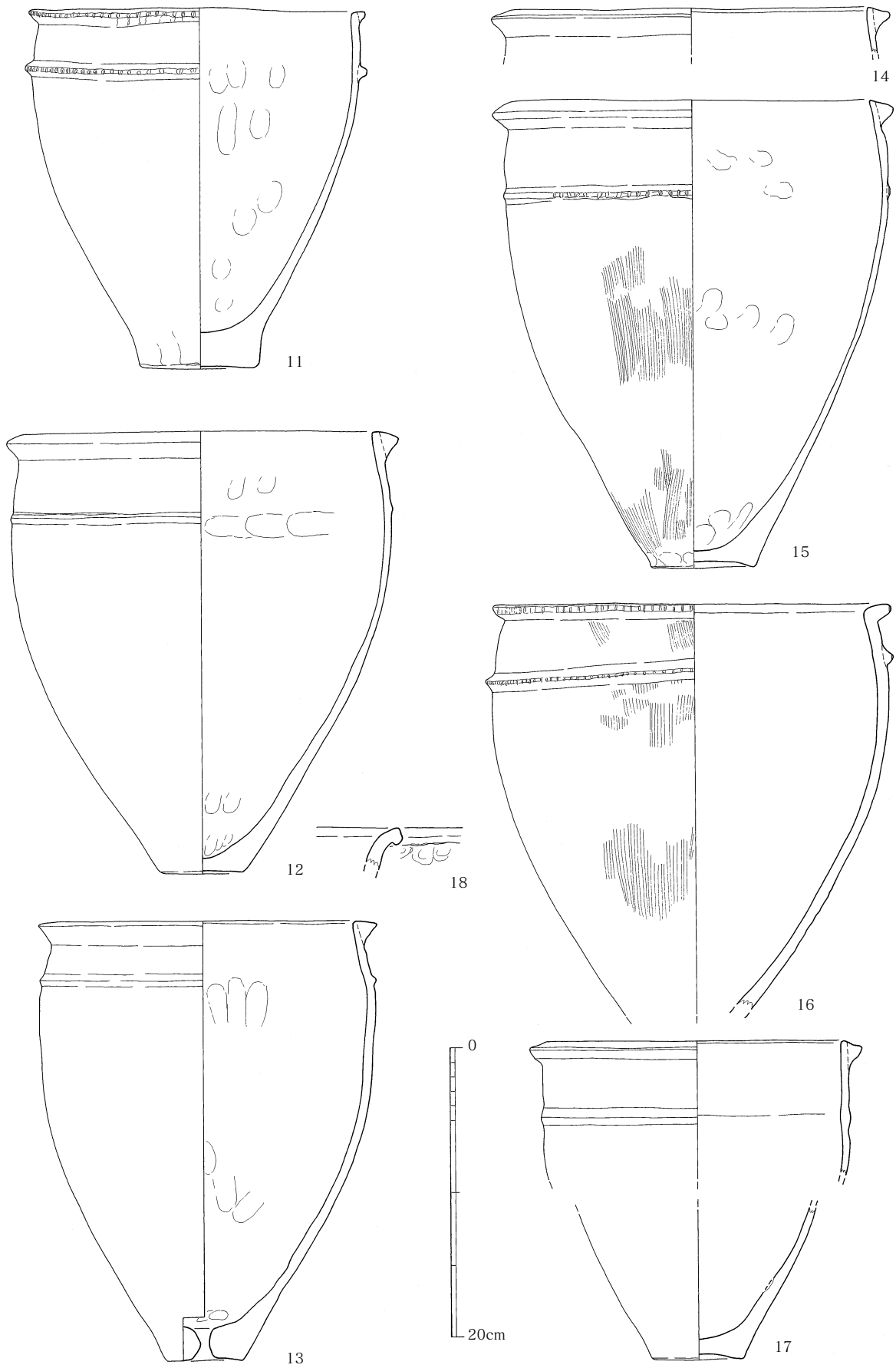
調査区の南寄りで検出した。2号住居跡・43号土坑・4号溝を切る。長軸1.8m、短軸1.5mのやや歪んだ方形である。深さは0.4mほどで、東側が一段深くなっている。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第18図)

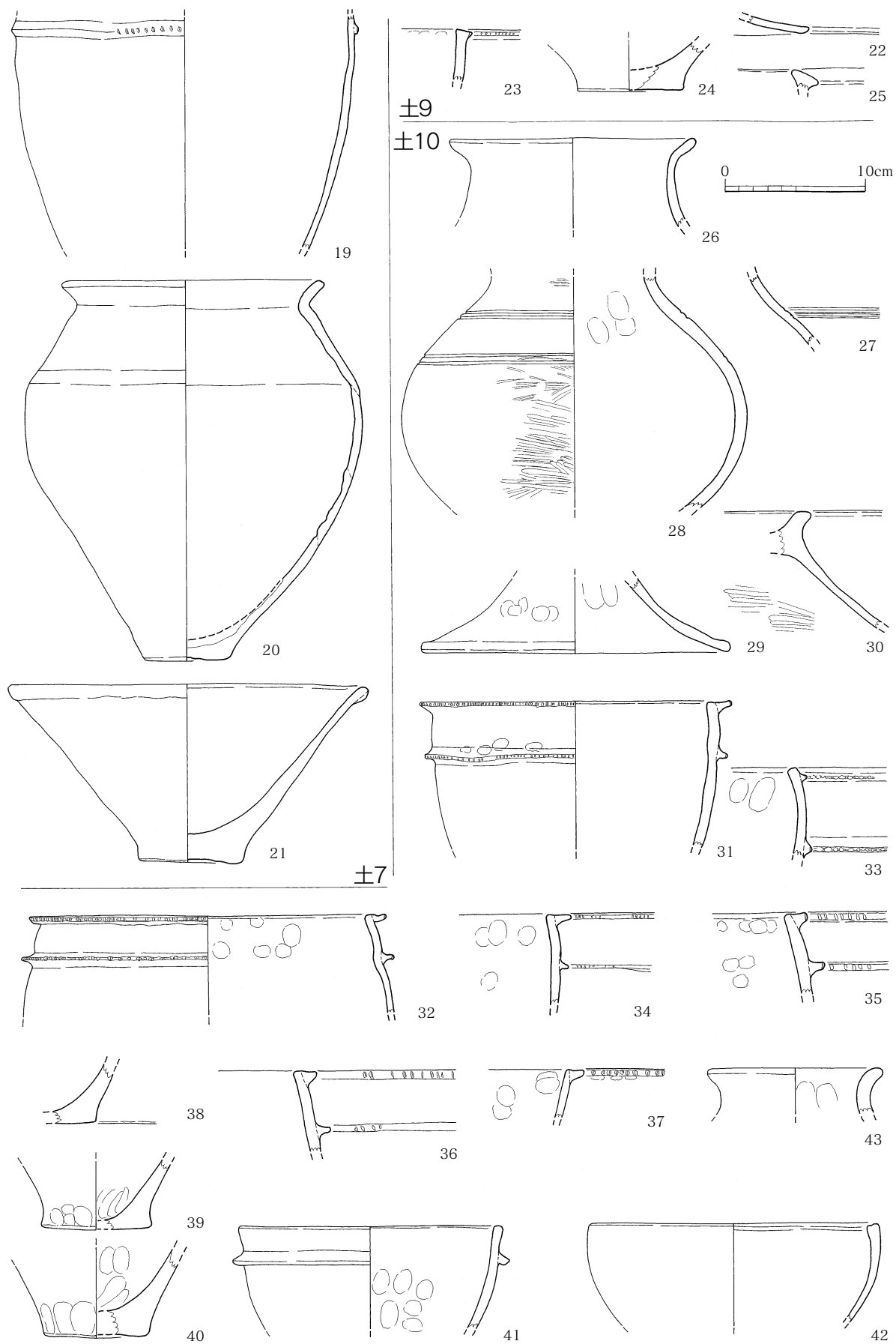
26～28は壺である。26はやや強く外反させる口縁部であるが、肥厚はしない。口径17.6cmである。27は頸部と肩部の境で3条の沈線が施される。28は頸部と肩部の境に2条、胴部上位に2条の沈線を施す。外面はミガキである。胴部最大径は24.4cmである。29・30は蓋である。29の口径は21.8cmである。



第16图 5区7号土坑出土土器实测图① (1/4)



第17图 5区7号土坑出土土器实测图② (1/4)



第18图 5区7号土坑③·9·10号土坑出土土器实测图 (1/4)

30の内面はミガキである。31～40は甕である。31は口縁端部が平坦となる。口径22.2cmである。32は口径25.4cmである。33～36は2条の三角突帯を巡らすものである。39の底径は7.9cmである。40の底径は7.6cmである。41・42は鉢である。41は口縁からやや下った位置に三角突帯を貼り付ける。口径18.6cmである。42の口径は20.6cmである。43は混入の土師器である。内面はケズリである。口径12.3cmである。

11号土坑 (図版8、第19図)

調査区の南寄りで検出した。43号土坑を切る。長軸2.2m、短軸1.8mの楕円形を呈する。深さは0.3mで、西側部分が一段深く掘り込まれている。遺物は埋土から弥生土器が出土している。

出土土器 (第20図)

1～3は壺である。1は口縁部を肥厚させている。口径16.6cmである。2は胴部片で3条の沈線とその上から連続した斜めの沈線を施す。外面の調整はミガキである。3は肩部にわずかな段を作るもので、外面の調整はミガキである。4～10は甕である。4は口径25.4cmである。5は口径21.6cmである。10の底径は7.0cmである。11は如意口縁の小型甕である。口径16.2cmである。13・14は無頸の壺であろうか。外面の調整はハケメである。

12号土坑 (図版9、第19図)

調査区の南寄りで検出した。4号溝を切る。長軸1.0m、短軸0.8mの楕円形である。深さは0.1mで、床面はほぼ平坦である。遺物は埋土から弥生土器が出土している。

出土土器 (第20図)

15は如意口縁の甕である。端部を大きく外反させる。口径22.4cmである。16は2条の刻目突帯を巡らす甕である。胴部の突帯の下位には工具痕が残る。

13号土坑 (図版9、第19図)

調査区の南寄りで検出した。長軸1.6m、短軸1.2mの楕円形である。深さは0.5mほどであるが、部分的に段掘りになる。遺物は埋土から弥生土器が出土している。

出土土器 (第20図)

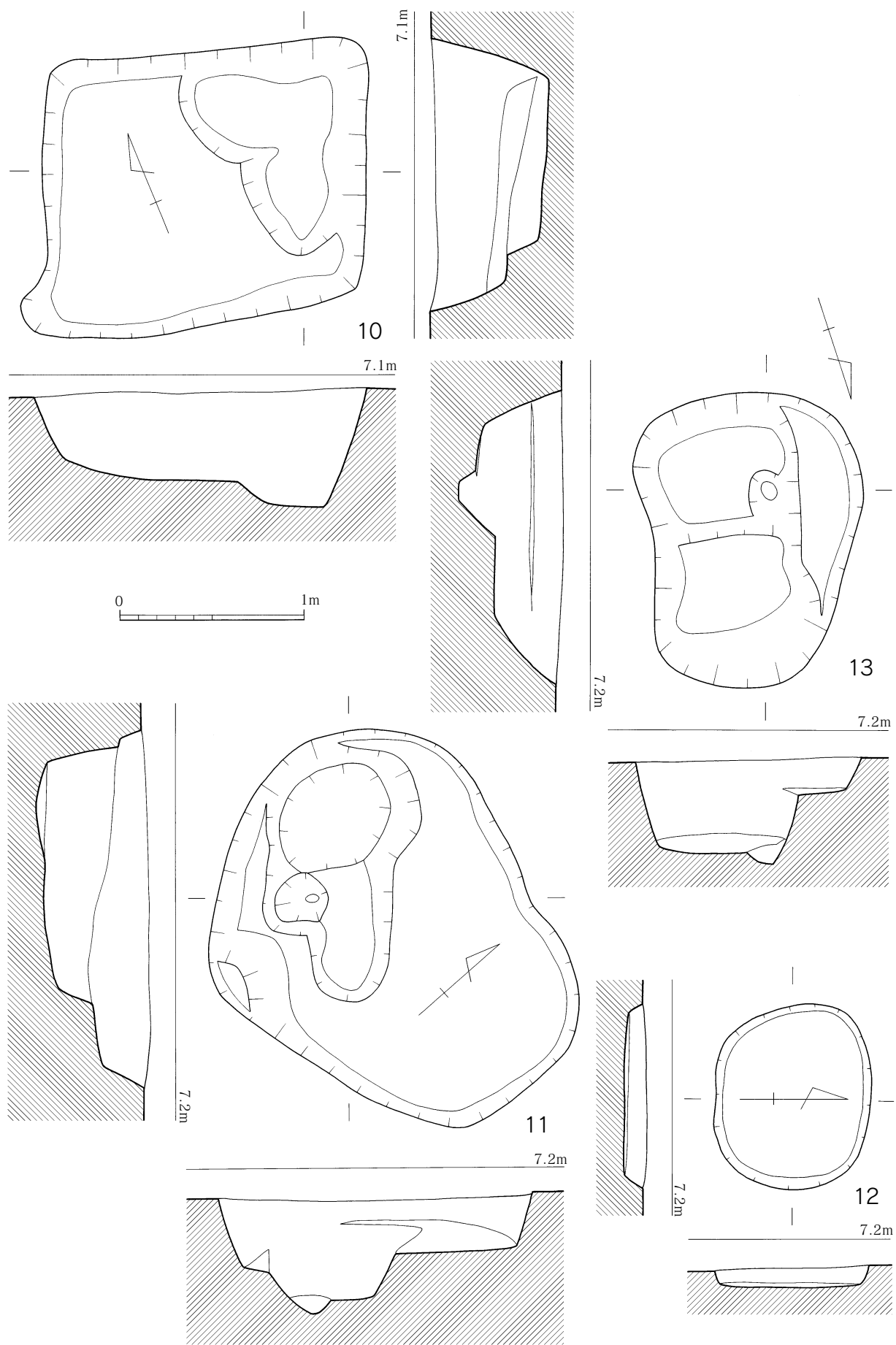
17～22は甕である。17は如意形口縁を呈し、口縁端部が沈線状に窪む。口径は25.6cmである。18の口径は20.8cmである。19・20は口縁外面に三角突帯を貼り付けるものである。21の底径は6.4cmである。22はやや上底ぎみの底部で、底径6.0cmである。

14号土坑 (図版9、第21図)

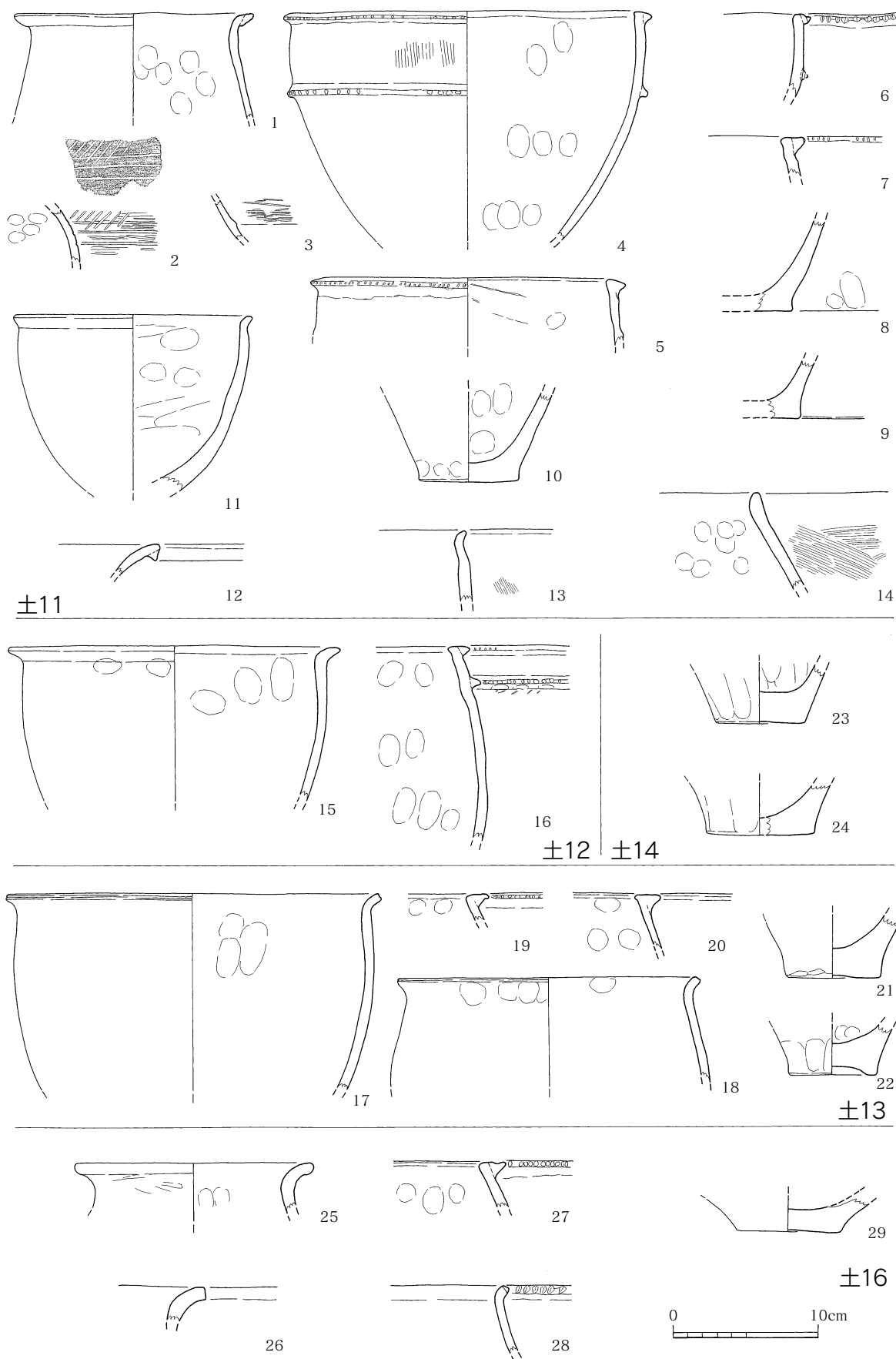
調査区の南寄りで検出した。4号溝を切る。長軸1.2m、短軸0.8mの隅丸方形である。深さは0.4mで床面はほぼ平坦である。遺物は埋土から弥生土器が出土している。

出土土器 (第20図)

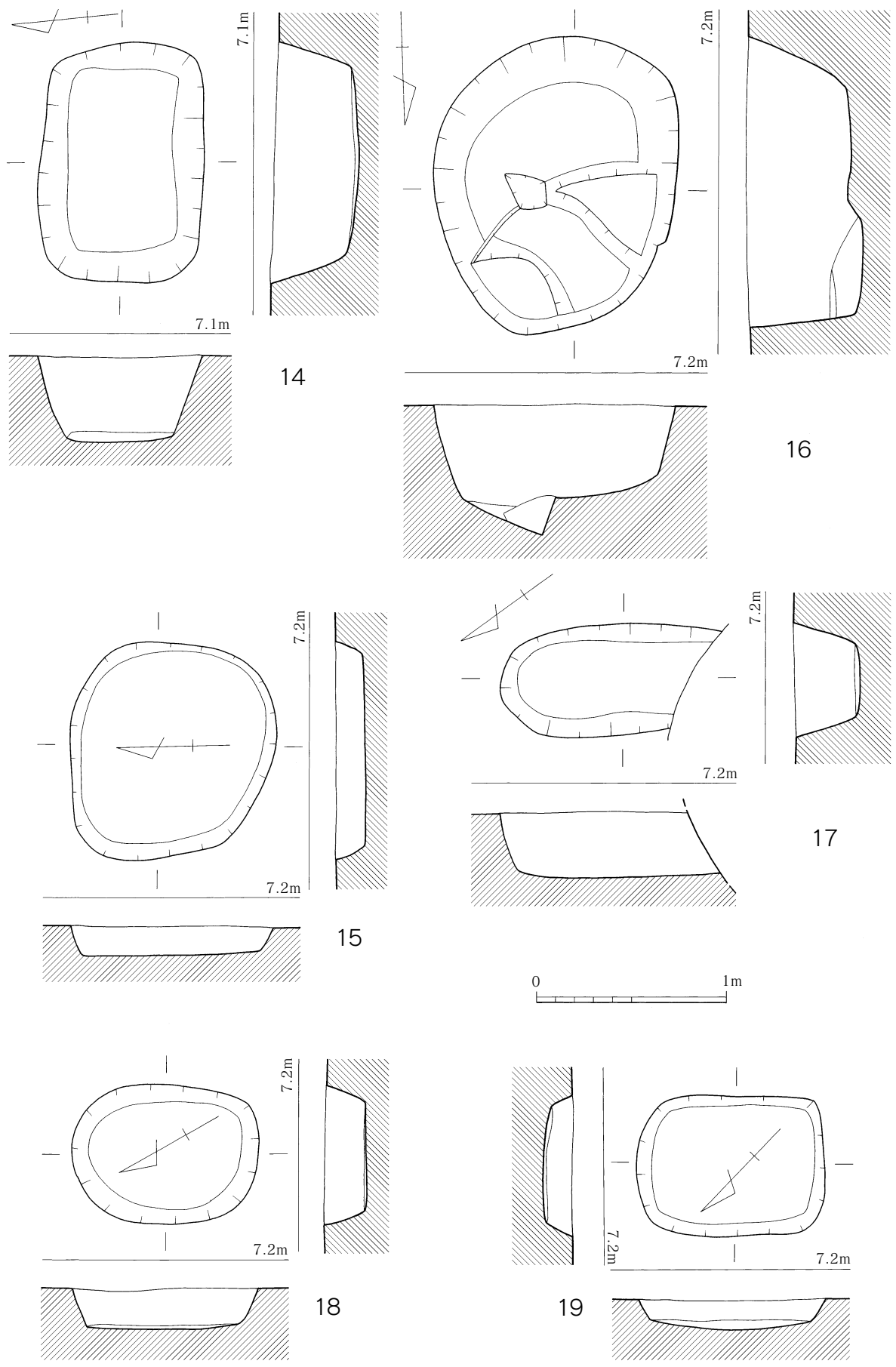
23・24は甕の底部である。23の底径は6.1cmである。24の底径は7.6cmである。



第19图 5区10~13号土坑实测图 (1/30)



第20图 5区11~14·16号土坑出土土器实测图 (1/4)



第21图 5区14~19号土坑实测图 (1/30)

15号土坑 (図版10、第21図)

調査区の中央付近で検出した。7号住居跡と16号土坑を切る。長軸1.1m、短軸1.0mの楕円形である。深さは0.15mで床面はほぼ平坦である。図化に耐え得る遺物は出土していない。

16号土坑 (図版10、第21図)

調査区の中央付近で検出した。7号住居跡と17号土坑を切り、15号土坑に切られる。長軸1.5m、短軸1.3mの楕円形である。深さは0.5mで北側部分が一段深くなっている。遺物は埋土から弥生土器が出土している。

出土土器 (第20図)

25・26は壺の口縁部である。25の口径は16.6cmである。27は刻目突帯の甕の口縁部である。28は直接、口縁に刻目を施すものである。16の底径は7.2cmである。

17号土坑 (図版10、第21図)

調査区の中央付近で検出した。16号土坑に切られる。長軸1.2m + α 、短軸0.6mである。深さは0.35mで床面は平坦である。遺物は埋土から弥生土器が出土している。

出土土器 (第22図)

1～8は甕である。1は胴部の屈曲する甕で口径22.4cmである。2・3は口縁を外反させる。2の口径は20.6cmである。4は三角突帯を貼り付けるものである。5の底径は6.0cmである。6の底径は8.0cmである。8は小型の甕の底部であろうか。底径3.2cmである。

18号土坑 (図版10、第21図)

調査区の中央付近で検出した。20号土坑を切る。長軸1.0m、短軸0.7mの楕円形である。深さは0.2mで床面は平坦である。遺物は埋土から弥生土器が出土している。

出土土器 (第22図)

9は壺の胴部である。胴部最大径の部分に2条の沈線を巡らせる。10は口縁に直接刻目を施す甕の口縁である。11は刻目突帯の甕である。12は口縁を強く外反させる甕である。13の底径は6.7cmである。

19号土坑 (図版10、第21図)

調査区の中央付近で検出した。20号土坑を切る。長軸1.0m、短軸0.7mの隅丸方形である。深さは0.2mで、中央部分がやや深くなる。遺物は出土していない。

20号土坑 (図版10、第23図)

調査区の中央付近で検出した。7号住居跡を切り、18号土坑、19号土坑に切られる。東側は調査区外へ延びる。長軸4.1m + α 、短軸1.3mの溝状の土坑である。深さは0.3mで床面は平坦である。遺物は埋土から弥生土器が出土している。

出土土器 (第22図)

14・15は口縁に直接刻目を施す甕である。16は鉢であろうか。胴部に刻目突帯を巡らす。

21号土坑 (図版10、第23図)

調査区の中央付近で検出した。平面プランは長軸1.4m、短軸1.1mの楕円形を呈する。壁の深さは

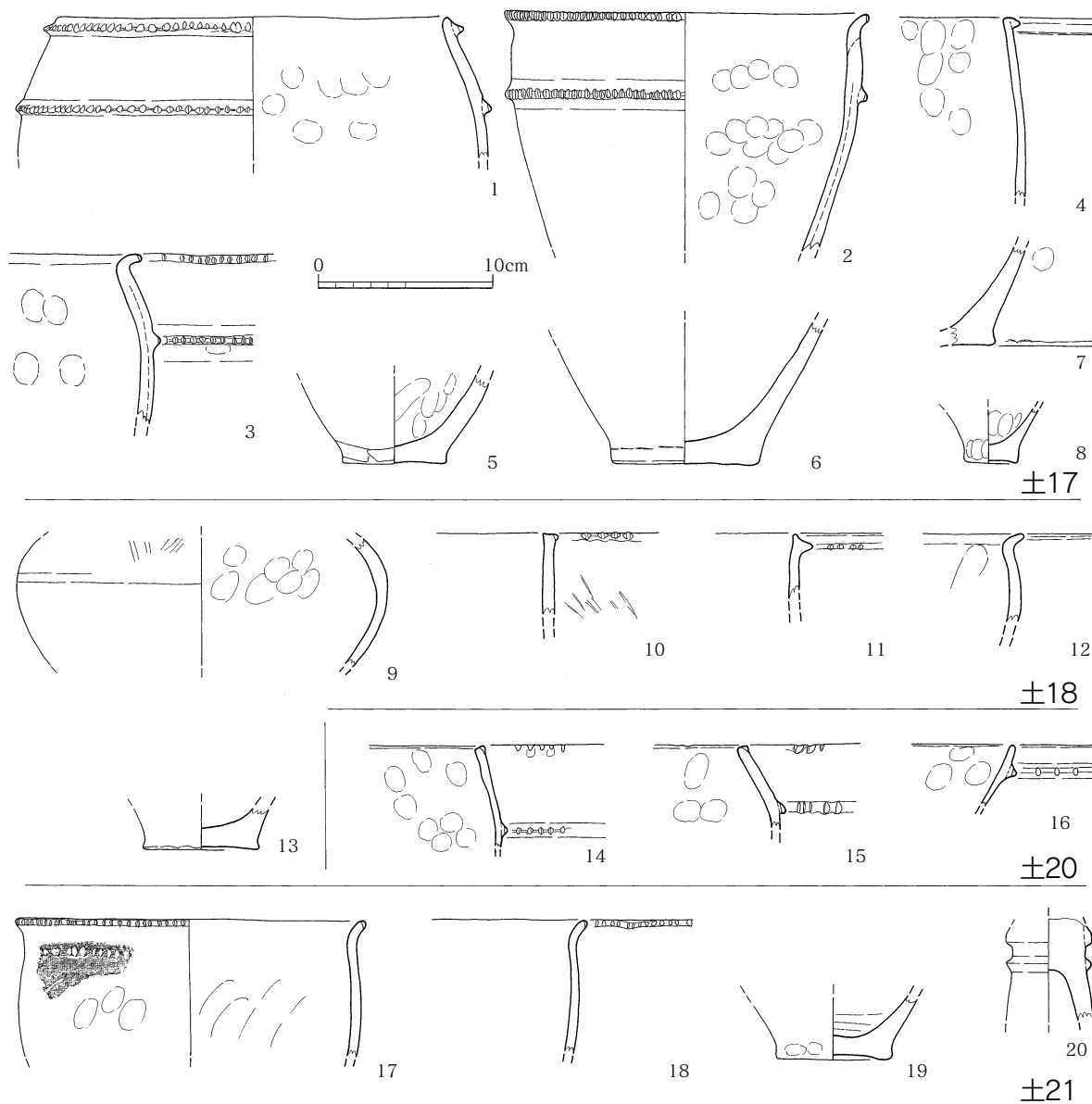
0.6m程度で、わずかな掘り込みがある他は、床面はほぼ平坦である。遺物は埋土中から弥生土器が出土している。

出土土器 (第22図)

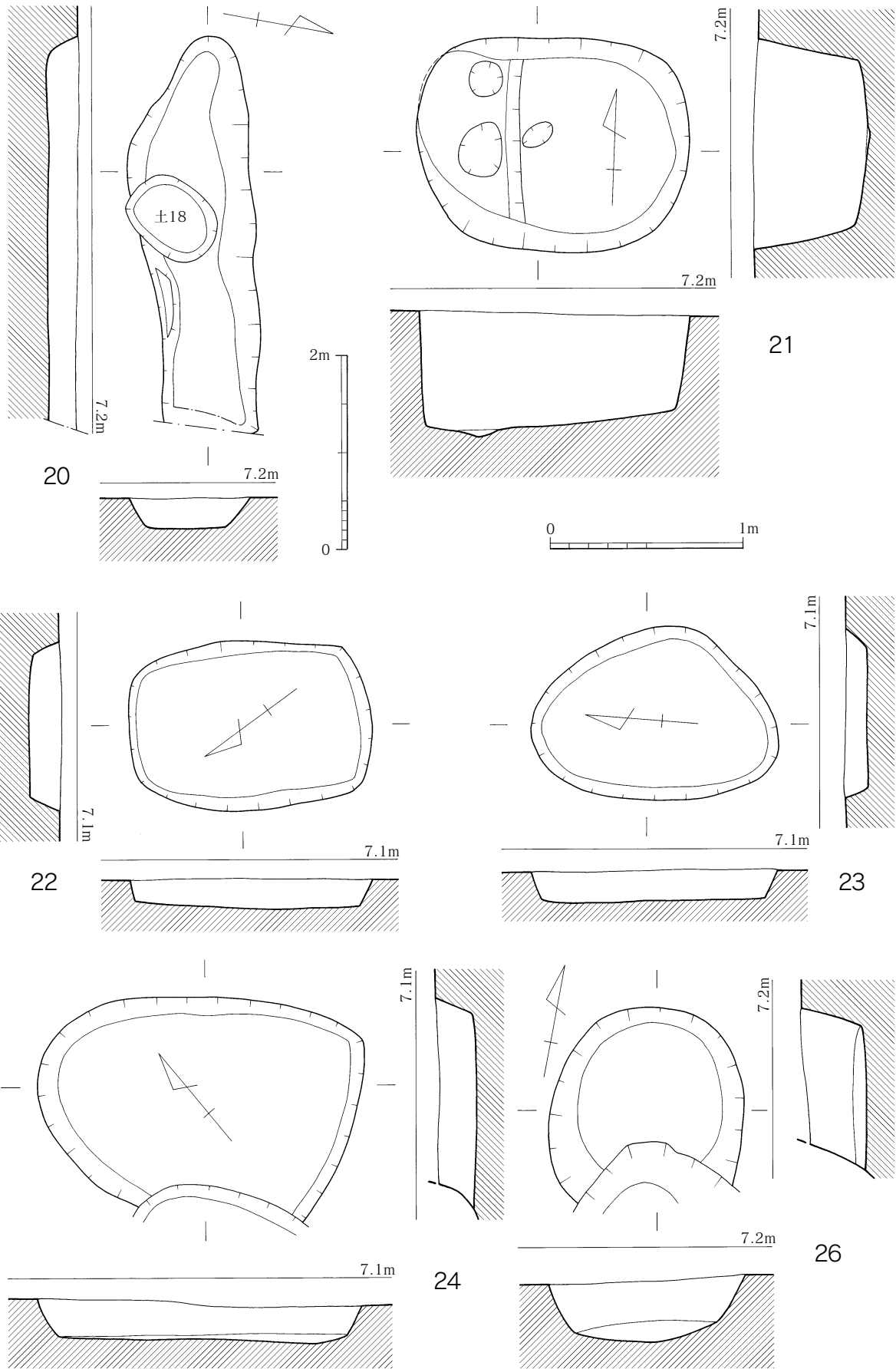
17・18は如意形口縁の甕である。17の口径は19.8cmである。19は甕の底部で、底径6.7cmである。20は高杯である。脚部の基部に2条の突帯を巡らす。

22号土坑 (図版11、第23図)

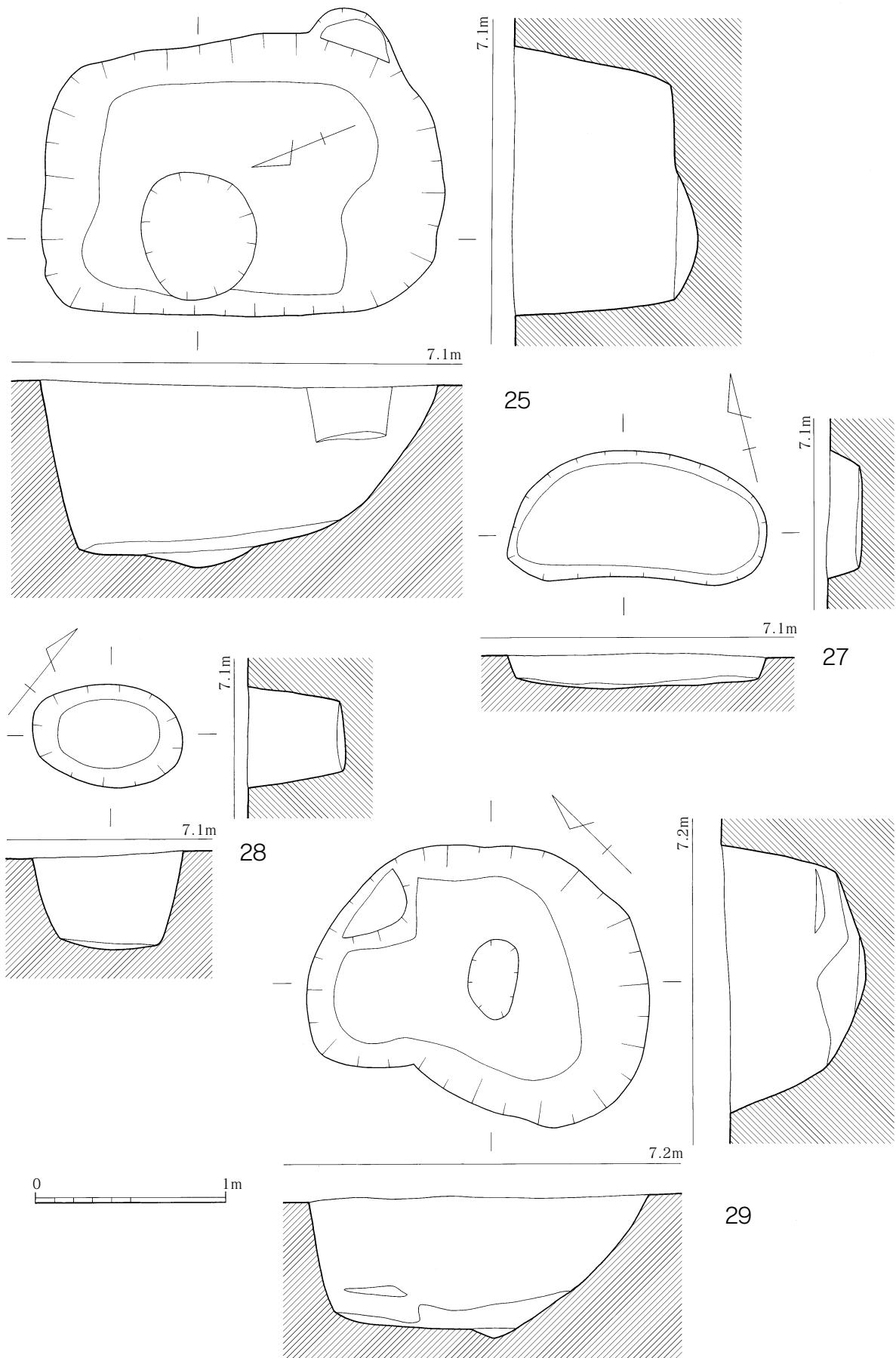
調査区の中央付近で検出した。6号住居を切る。長軸1.2m、短軸0.9mの隅丸方形である。深さは0.15mで床面は平坦である。図化に耐え得る遺物は出土していない。



第22図 5区17・18・20・21号土坑出土土器実測図 (1/4)



第23図 5区20~24・26号土坑実測図 (20は1/60、他は1/30)



第24图 5区25·27~29号土坑实测图 (1/30)

23号土坑 (図版11、第23図)

調査区の中央付近で検出した。6号住居跡、24号土坑を切る。長軸1.3m、短軸0.9mの楕円形である。深さは0.15mで床面は平坦である。出土土器はない。

24号土坑 (図版11、第23図)

調査区の中央付近で検出した。4号、6号住居跡を切り、23号土坑に切られる。長軸1.6m、短軸1.2m+ α の楕円形である。深さは0.2mで床面はほぼ平坦である。出土土器はない。

25号土坑 (図版11、第24図)

調査区の中央付近で検出した。6号住居跡、26号土坑を切る。長軸2.1m、短軸1.5mの隅丸方形である。深さは0.9mで、床面に多少の掘り込みはあるが、ほぼ平坦である。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (図版70、第25図)

1~4は壺である。1は口縁を大きく外反させる壺で、頸部に2条の沈線を巡らす。内面はミガキである。口径20.0cmである。2は口縁下に2条の沈線、頸部と肩部の境に小さな突帯を貼り付けるものである。内外面の調整はミガキである。口径16.0cmである。3は頸部と肩部の境に2条の沈線とやや下った位置に更に2条の沈線を施す。口径14.0cmである。4は頸部と肩部の境に2条の沈線を巡らす。内外面の調整はミガキである。5は蓋である。口径24.6cmである。6~15は甕である。6の口径は32.0cmである。7は3条の刻目突帯を巡らすもので、口径30.8cmである。8の口径は27.0cmである。9は外面にススが付着する。口径24.8cm、底径5.6cm、器高22.0cmである。10の口径は24.6cmである。11は底径6.0cmである。13は上底の底部で、底径5.4cmである。14の底径は6.0cmである。15は焼成後に穿孔を施す底部である。底径6.6cmである。16は大きめの鉢であろうか。17は小型の甕である。器壁が厚く、重量もある。口径13.3cm、底径6.0cm、器高18.5cmである。18は鉢である。口径18.0cm、底径6.2cm、器高10.8cmである。

26号土坑 (図版11、第23図)

調査区の中央付近で検出した。6号住居跡を切り、25号土坑に切られる。長軸1.1m+ α 、短軸1.0mの楕円形である。深さは0.3mで床面は平坦である。遺物は埋土から弥生土器が出土している。

出土土器 (図版70・71、第26図)

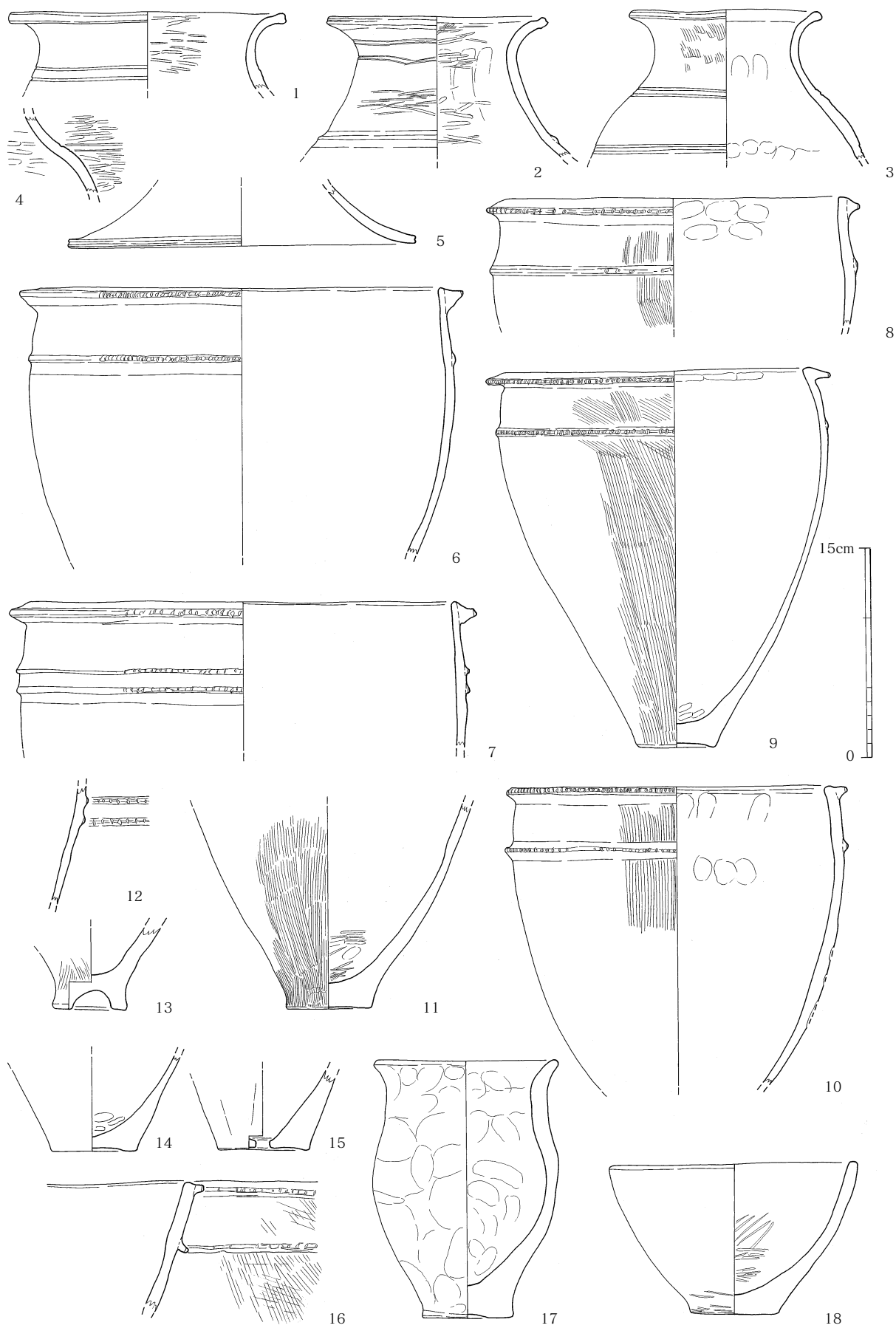
1~3は壺である。1の外面には圧痕が明瞭に残る。2は壺である。頸部から肩部にかけて、3ヶ所に沈線が施される。外面はミガキである。胴部最大径18.8cm、底径5.1cmである。3の底径は9.0cmである。4~10は甕である。5の口径は20.0cmである。6の口径は25.0cmである。7の口径は24.2cmである。8の底径は8.0cmである。9の底径は8.0cmである。10の底径は8.0cmである。

27号土坑 (図版12、第24図)

調査区の中央付近で検出した。長軸1.3m、短軸0.6mの楕円形である。深さは0.2mほどで、床面はほぼ平坦である。遺物は埋土から弥生土器が出土している。

出土土器 (第26図)

11は甕の胴部である。屈曲する部分に刻目突帯を貼り付ける。



第25图 5区25号土坑出土土器实测图 (1/4)

28号土坑 (第24図)

調査区の中央付近で検出した。29号、31号土坑を切る。長軸0.8m、短軸0.5mの楕円形である。深さは0.5mで床面はほぼ平坦である。遺物は埋土から弥生土器が出土している。

出土土器 (第26図)

12は鉢である。外面の調整はミガキ。口径20.6cmである。13は甕の底部である。底径6.4cmである。

29号土坑 (図版12、第24図)

調査区の中央付近で検出した。30号土坑を切り、28号土坑に切られる。長軸1.8m、短軸1.4mのやや不整な楕円形である。深さは0.7mである。遺物は埋土から弥生土器が出土している。

出土土器 (第26図)

14～16は壺である。14は重弧文を施すものである。15の外面はミガキである。底径7.0cmである。16の底径は9.0cmである。17～21は甕の口縁である。21は如意形口縁である。22は甕の底部で、底径5.6cmである。23は鉢であろうか。口縁端部に刻目を施す。

30号土坑 (図版12、第27図)

調査区の中央付近で検出した。29号土坑に切られる。長軸1.2m、短軸0.9m + α の楕円形である。深さは0.2mである。遺物は埋土から弥生土器が出土している。

出土土器 (第26図)

24～28は甕である。24の口径は25.0cmである。25の口径は25.0cmである。26の口径は28.0cmである。27は焼成後に穿孔を施している。底径6.2cmである。28は上底の底部である。底径7.0cmである。

31号土坑 (第27図)

調査区の中央付近で検出した。28号土坑と32号土坑に切られる。遺構は調査区の西側に延びている。長軸6.6m + α 、短軸1.2m + α である。深さは0.3m程度で、中央に掘り込みがある。遺物は埋土から弥生土器が出土している。

出土土器 (第28図)

1は甕の口縁部である。2は底部で、底径7.0cmである。3は全体の器形は不明であるが、上部に突帯が巡る。内外面の調整はハケメである。

32号土坑 (第27図)

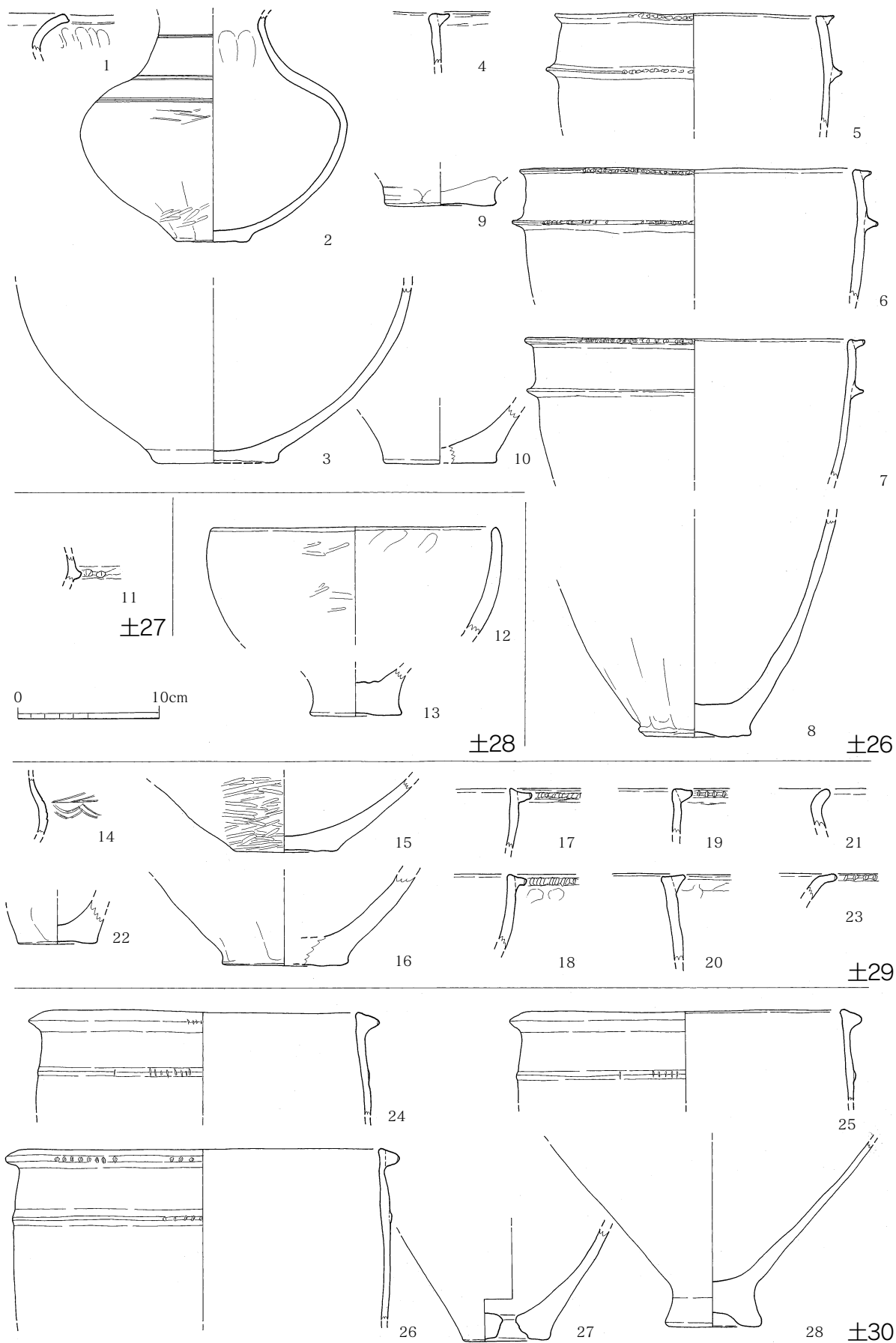
調査区の中央付近で検出した。31号土坑を切る。長軸1.7m + α 、短軸1.1mの不整な楕円形である。深さは0.7mで壁面にテラスが取り付く。遺物は埋土から弥生土器が出土している。

出土土器 (第28図)

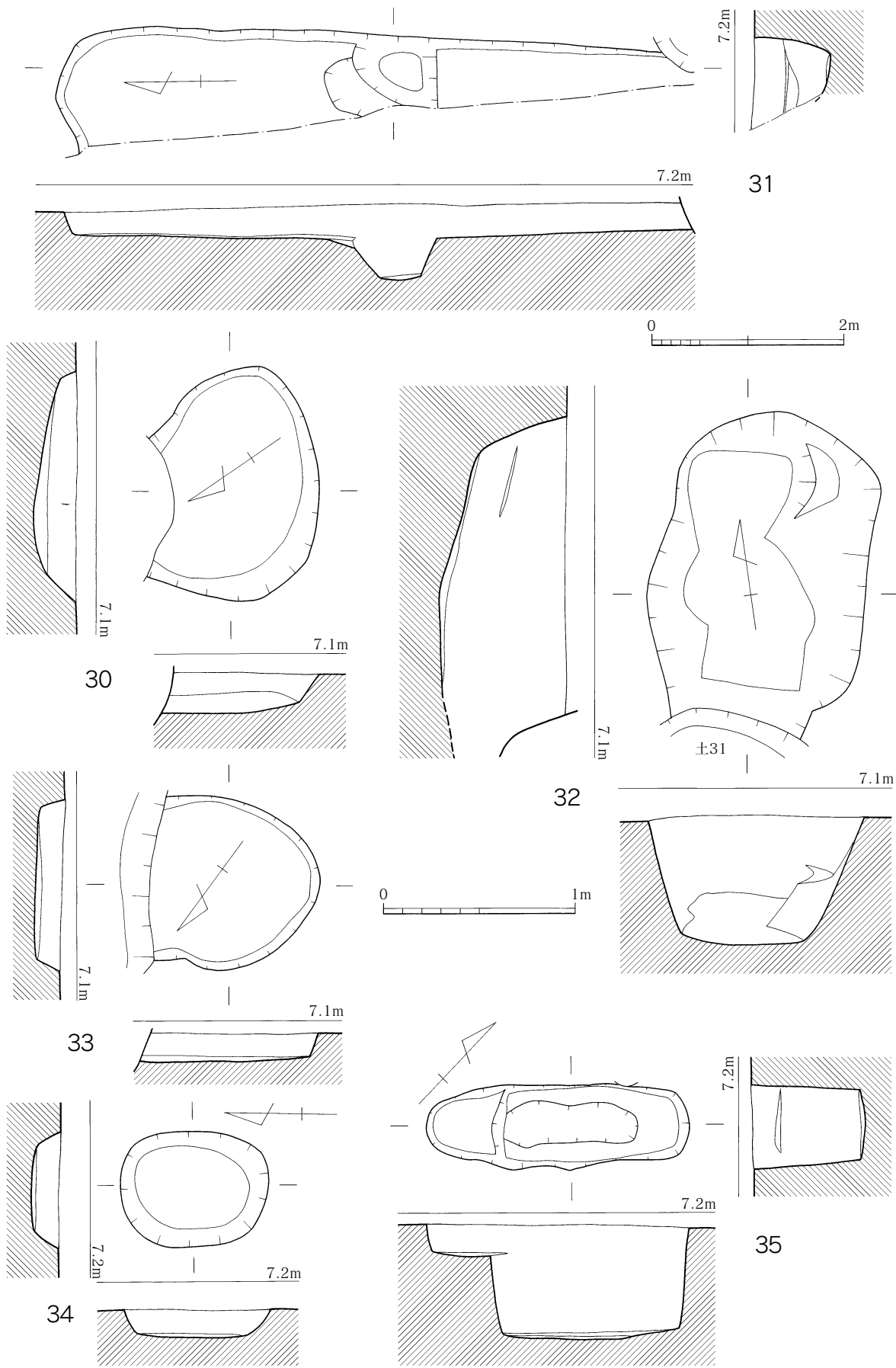
4は甕の底部である。内外面はナデ調整である。底径7.0cmである。

33号土坑 (第27図)

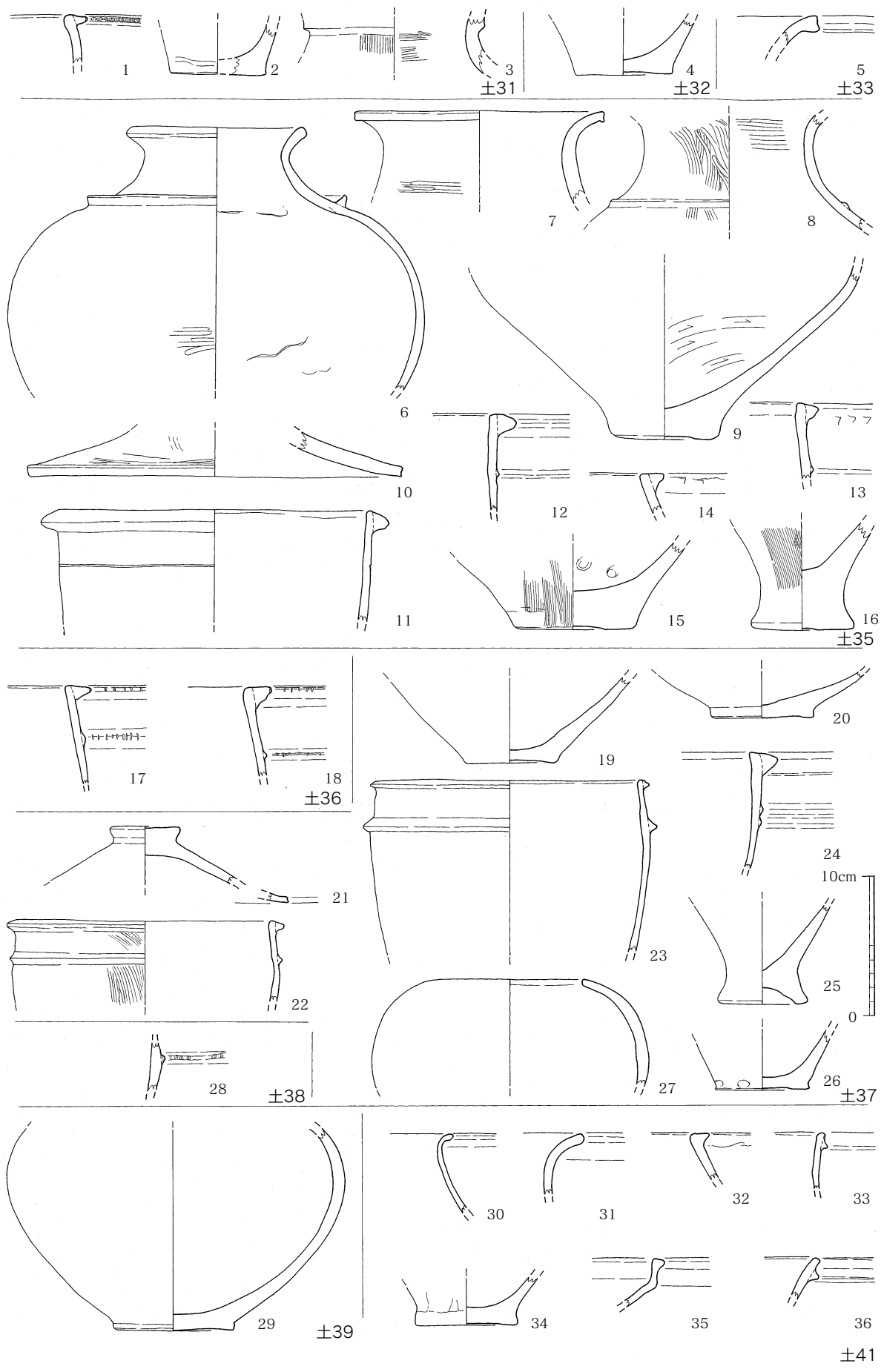
調査区の北寄りで見出した。1号波板状遺構に切られる。長軸0.9m + α 、短軸0.9mである。深さは0.15mである。遺物は埋土から弥生土器が出土している。



第26图 5区26~30号土坑出土土器实测图 (1/4)



第27図 5区30~35号土坑実測図 (31・35は1/60、他は 1/30)



第28图 5区31~33·35~39·41号土坑出土土器实测图 (1/4)

出土土器 (第28図)

5はやや大型の壺の口縁部である。口縁端部はわずかに窪み、角ばって仕上げられる。

34号土坑 (第27図)

調査区の中央付近で検出した。35号土坑を切る。長軸0.8m、短軸0.6mの楕円形である。深さは0.15mである。遺物は出土していない。

35号土坑 (図版12、第27図)

調査区の中央付近で検出した。37号土坑を切り、34号土坑に切られる。長軸2.7m、短軸0.85mの長楕円形である。南側は0.3mほど掘られ、北側は段が付き、1.1mほど掘られる。床面はほぼ平坦である。遺物は埋土から弥生土器が出土している。

出土土器 (図版71、第28図)

6～9は壺である。6の口縁は肥厚せず、胴部は大きく張る。肩部に尖り気味の突帯を貼り付ける。口径は13.0cm、胴部最大径は29.6cmである。7は大きく口縁が張る。口径18.0cmである。8の外面は縦方向のミガキ、内面は横方向のミガキである。9の底径は7.5cmである。10は蓋で、口径は27.0cmである。11～16は甕である。11の口径は25.0cmである。15の底径は8.7cmである。16の底径は7.4cm。

36号土坑 (第29図)

調査区の中央付近で検出した。37号土坑を切る。長軸0.9m、短軸0.6mの楕円形である。深さは0.15m程度で、床面はほぼ平坦である。遺物は埋土から弥生土器が出土している。

出土土器 (第28図)

17・18は甕の口縁部である。いずれも2条の刻目突帯をもつものである。

37号土坑 (第29図)

調査区の中央付近で検出した。35号土坑、36号土坑に切られる。長軸2.1m、短軸1.2mの隅丸方形である。深さ0.6m程度である。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第28図)

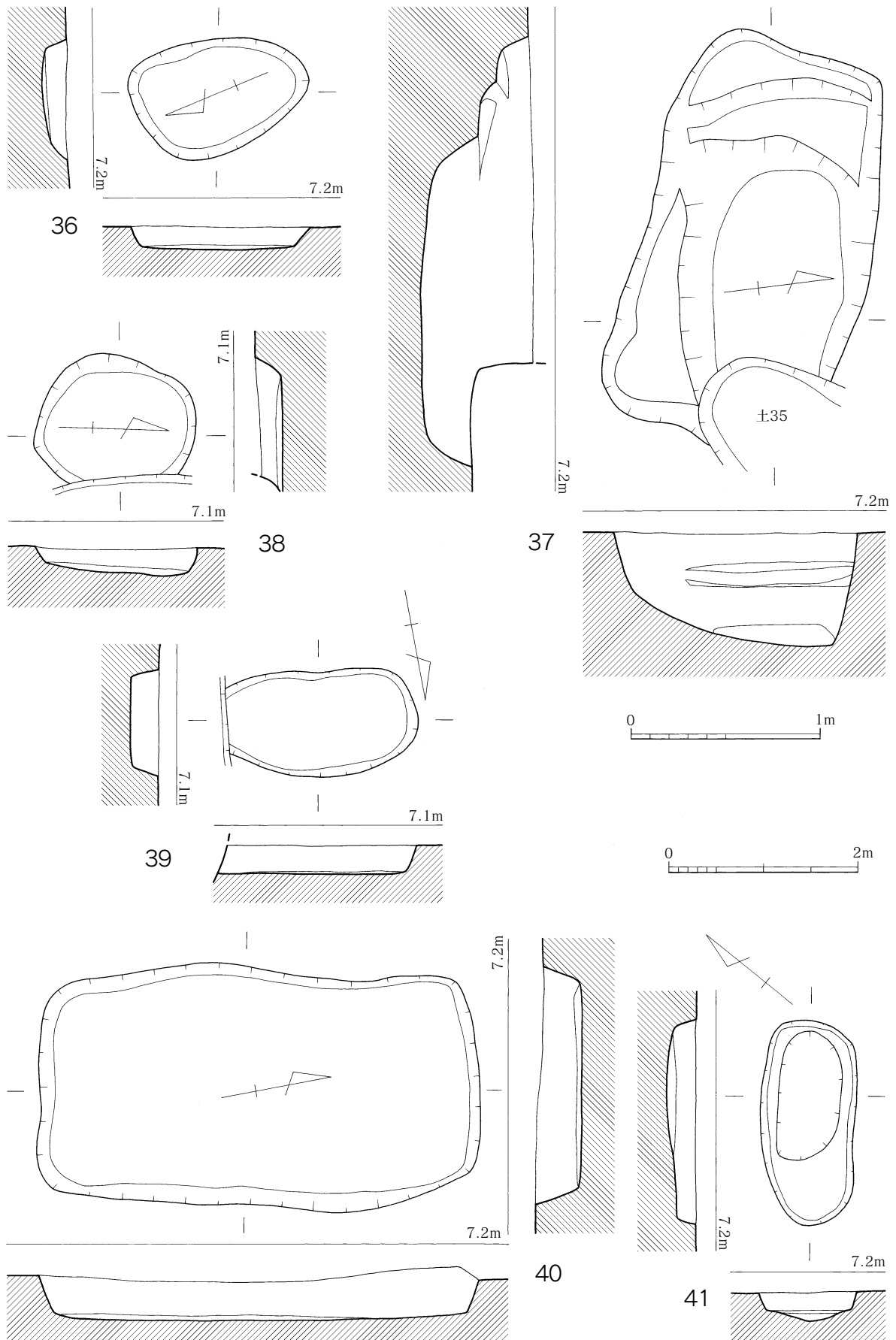
19・20は壺の底部である。19の底径は6.5cmである。20の底径は7.3cmである。21は蓋である。内外面の調整はナデである。22～26は甕である。22の口径は20.0cmである。23の口径は20.0cmである。24は3条の突帯を巡らす。25は上底の底部で、底径は6.4cmである。26の底径は6.6cmである。27は無頸の壺である。口径10.5cm、胴部最大径19.9cmである。

38号土坑 (第29図)

調査区の中央付近で検出した。5号住居跡に切られる。長軸0.85m、短軸0.65m + α である。深さ0.15mで、床面はほぼ平坦である。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第28図)

28は甕の胴部で、刻目突帯が貼り付けられる。



第29図 5区36~41号土坑実測図 (41は1/60、他は1/30)

39号土坑 (第29図)

調査区の中央付近で検出した。5号住居跡に切られる。平面プランは長軸1.0m+ α 、短軸0.55mの楕円形を呈すると思われる。壁の深さは0.15mで、床面はほぼ平坦である。遺物は埋土中から弥生土器が出土している。

出土土器 (図版71、第28図)

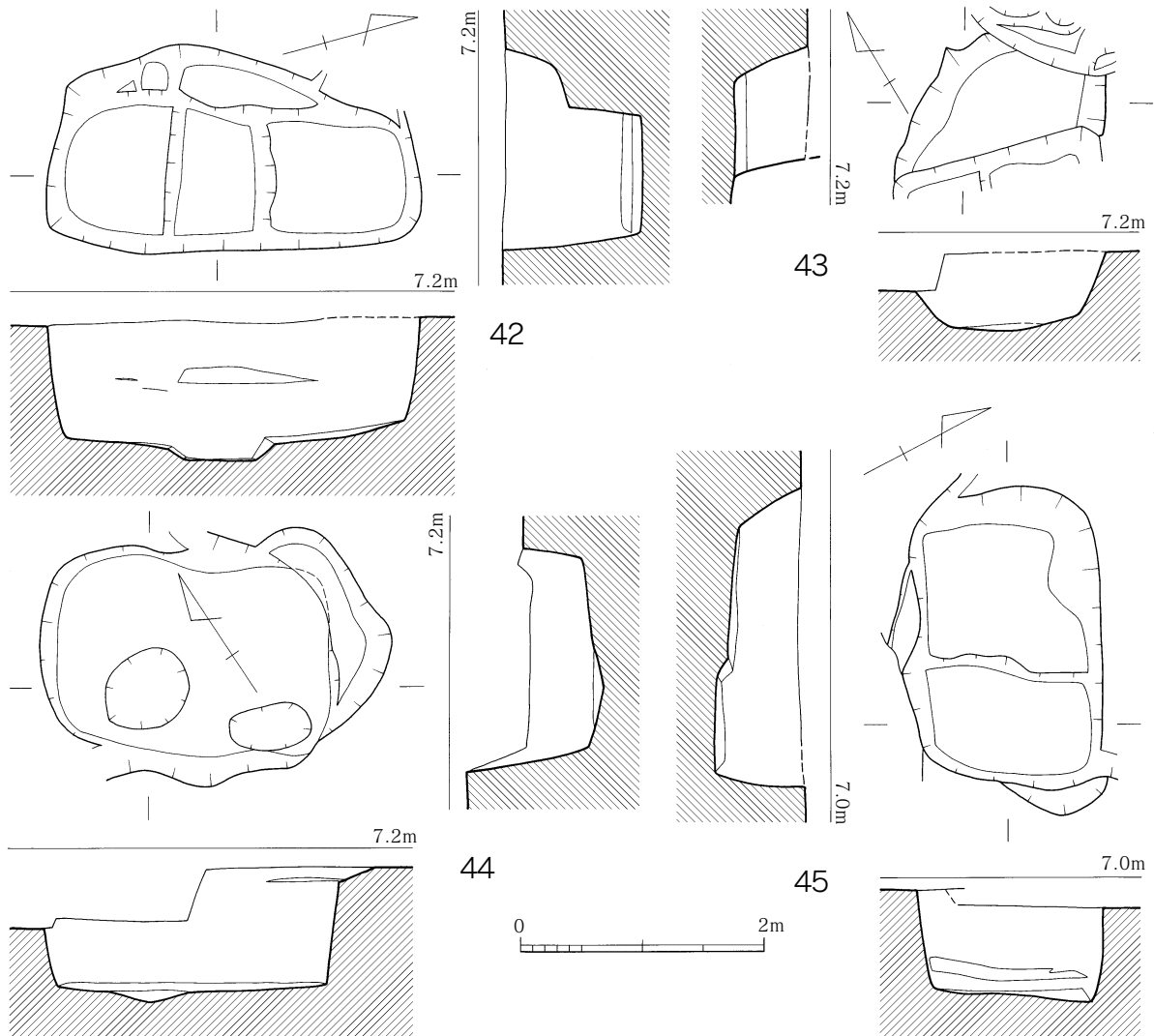
29は壺の胴部である。内外面の調整は摩滅のため不明。胴部最大径24.2cm、底径4.7cmである。

40号土坑 (図版13、第29図)

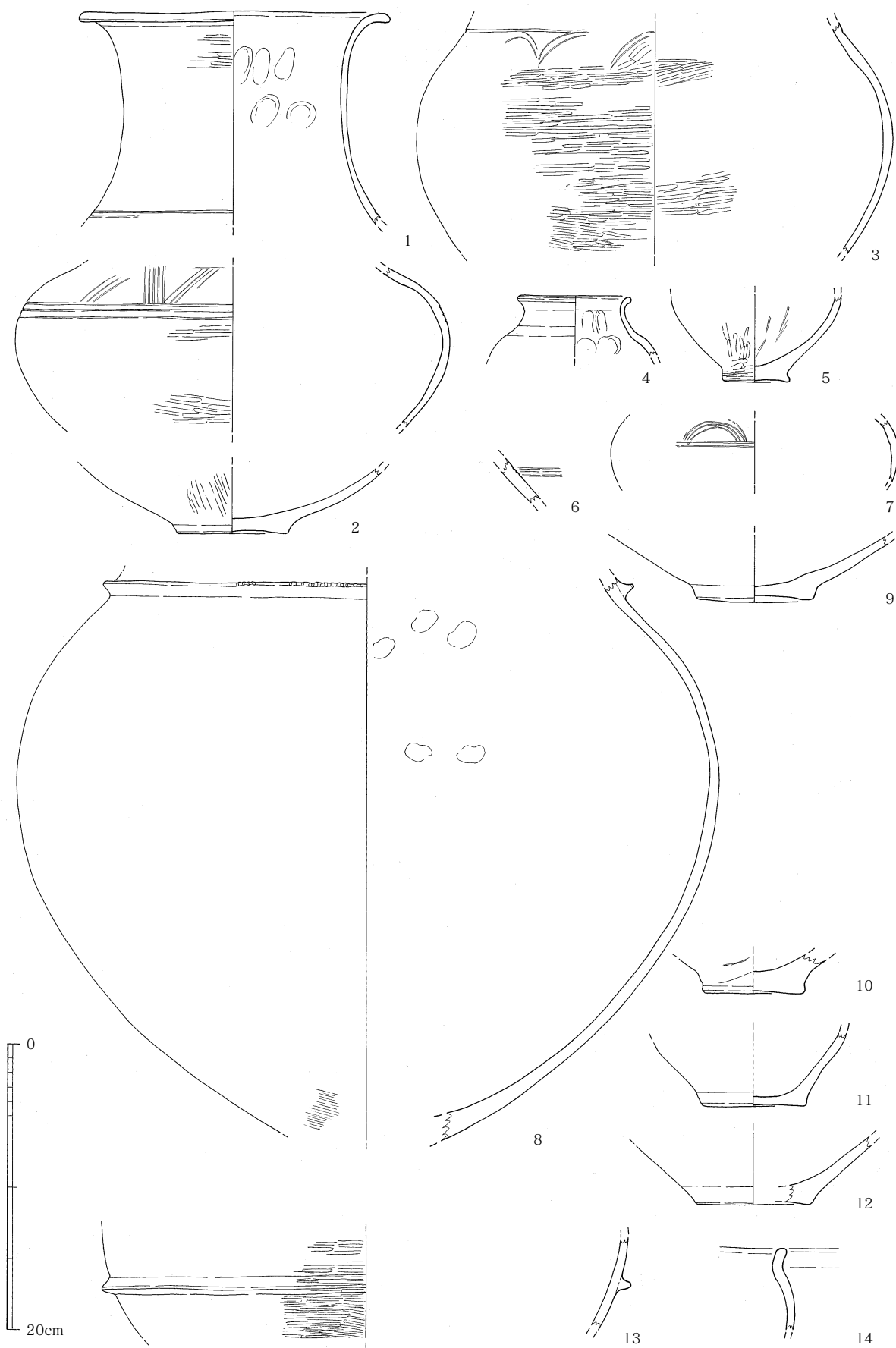
調査区の中央付近で検出した。長軸2.3m、短軸1.3mの隅丸方形である。深さは0.25mで、床面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

41号土坑 (第29図)

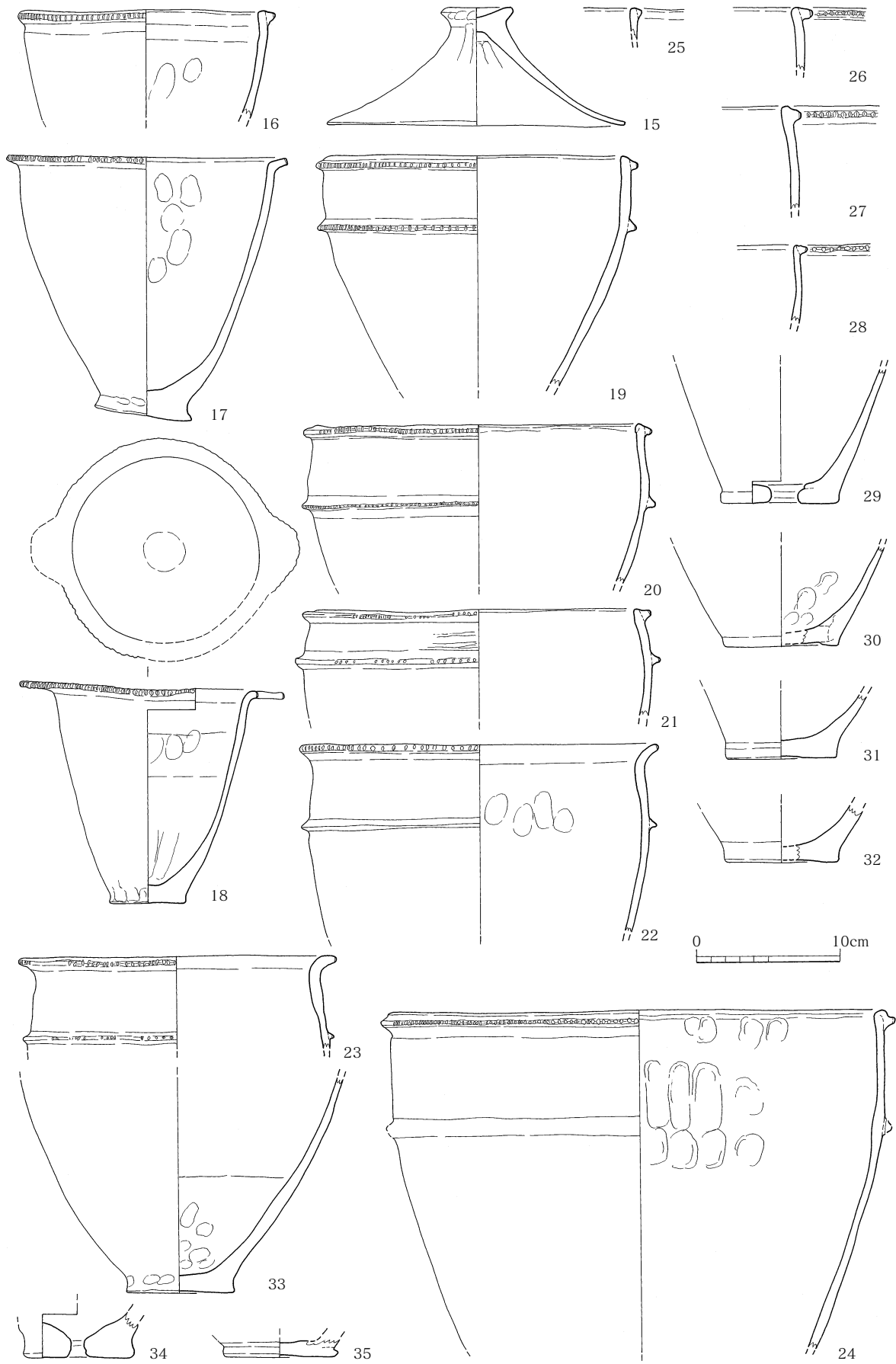
調査区の北寄りで検出した。42号土坑を切る。平面プランは長軸2.1m、短軸1.0mの長楕円形である。壁の深さは0.2mで、床面はほぼ平坦である。遺物は弥生土器が出土している。



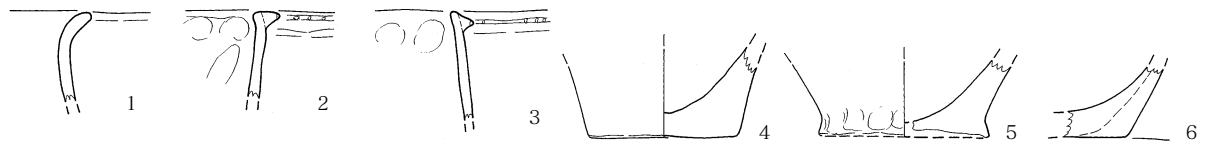
第30図 5区42~45号土坑実測図 (1/60)



第31图 5区42号土坑出土土器实测图① (1/4)

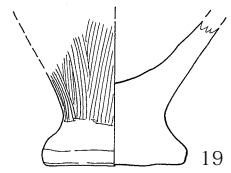
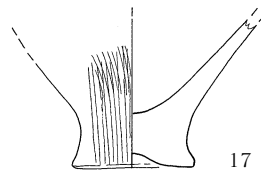
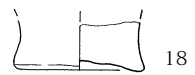
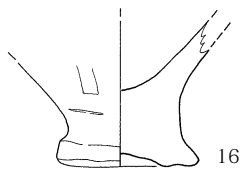
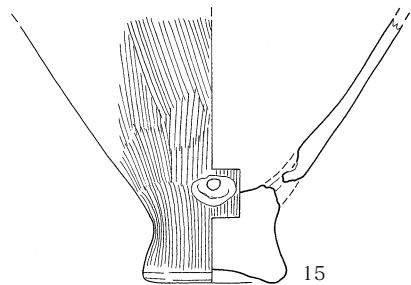
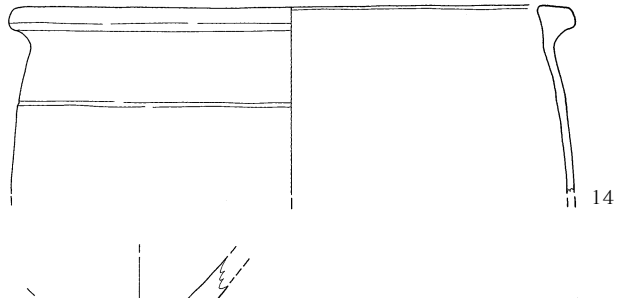
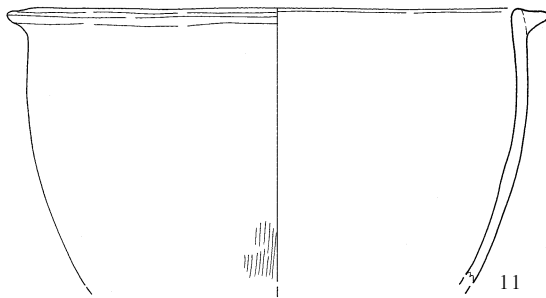
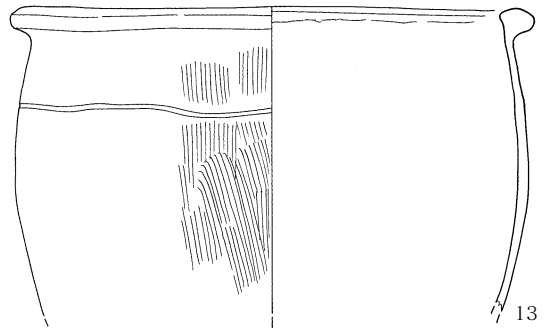
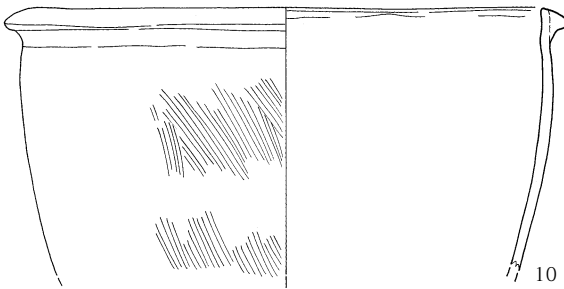
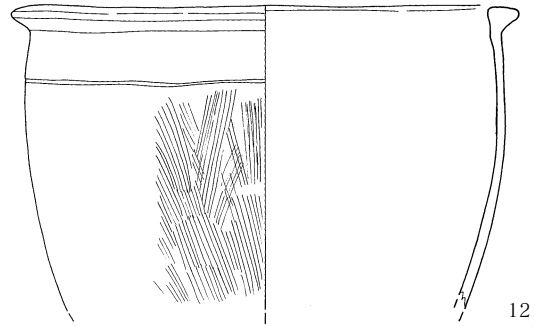
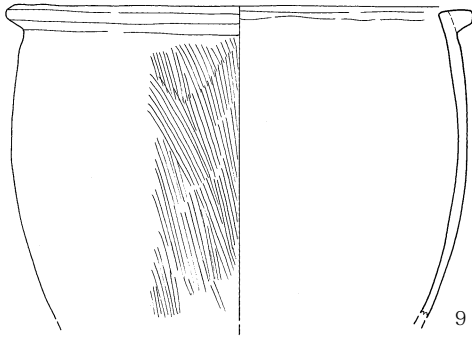
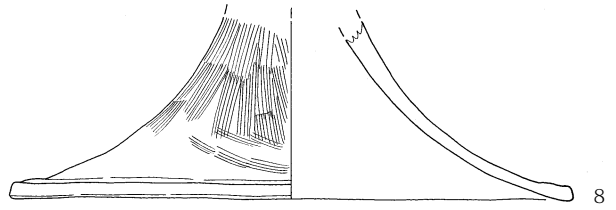
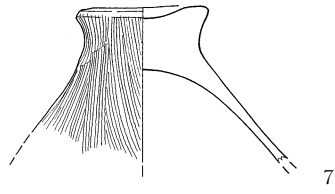


第32图 5区42号土坑出土土器实测图② (1/4)



±43

±45



第33图 5区43·45号土坑出土土器实测图 (1/4)

出土土器 (第28図)

30・31は壺である。30は器壁が薄く、端部をやや強く外反させる。32～34は甕である。34の底径は7.4cmである。35は鉢である。内外面の調整は摩滅のため不明である。36は鉢の口縁部であろうか。突帯を1条貼り付けている。

42号土坑 (図版13、第30図)

調査区の北寄りで検出した。41号住居跡に切られる。長軸3.0m、短軸1.7mの略方形である。深さ1.1mで部分的にテラスがつく。遺物は弥生土器がまとまって出土している。

出土土器 (図版71、第31・32図)

1～9は壺である。1は長く伸びる頸部に、2条の沈線を巡らせる。口径21.8cmである。2は肩部に5条一単位の文様を施す。外面の調整はミガキである。胴部最大径33.6cm、底径7.8cmである。3は肩部に沈線と円弧文を施す。内外面の調整はミガキである。胴部最大径33.5cmである。4の内面には圧痕が強く残る。口径8.0cmである。5の外面はミガキである。底径4.7cmである。7の胴部には沈線と円弧文が巡る。胴部最大径20.0cmである。8は肩部に1条の突帯を貼り付ける。胴部最大径51.2cmである。9の底径は8.4cmである。10～12は甕の底部である。10の底径は7.2cmである。11の底径は7.5cmである。12の底径は8.2cmである。13は甕の胴部で外面の調整はミガキである。15は蓋である。口径21.0cm、器高8.2cmである。16～35は甕である。16の口径は18.0cmである。17の外面にはススが付着する。口径19.4cm、底径7.0cm、器高18.3cmである。18は突帯の2ヶ所を耳状に伸ばした甕である。口径15.0cm、底径5.3cm、器高15.0cmである。19の口径は20.4cmである。20の口径は24.2cmである。21の口径は24.4cmである。22の口径は25.0cmである。23の口径は22.0cmである。24の口径は36.0cmである。29は焼成後の穿孔がある。底径8.4cmである。30の内面には圧痕が強く残る。底径8.0cmである。31の底径は7.8cmである。32の底径は8.0cmである。33の底径は7.6cmである。34は焼成後の穿孔がある。底径7.8cmである。35の底径は8.0cmである。

43号土坑 (第30図)

調査区の南寄りで検出した。2号住居跡、10号土坑、11号土坑に切られる。他遺構に大きく切られており、残存部分で長軸1.4m+ α 、短軸0.8m+ α である。深さは0.6mである。弥生土器が出土している。

出土土器 (第33図)

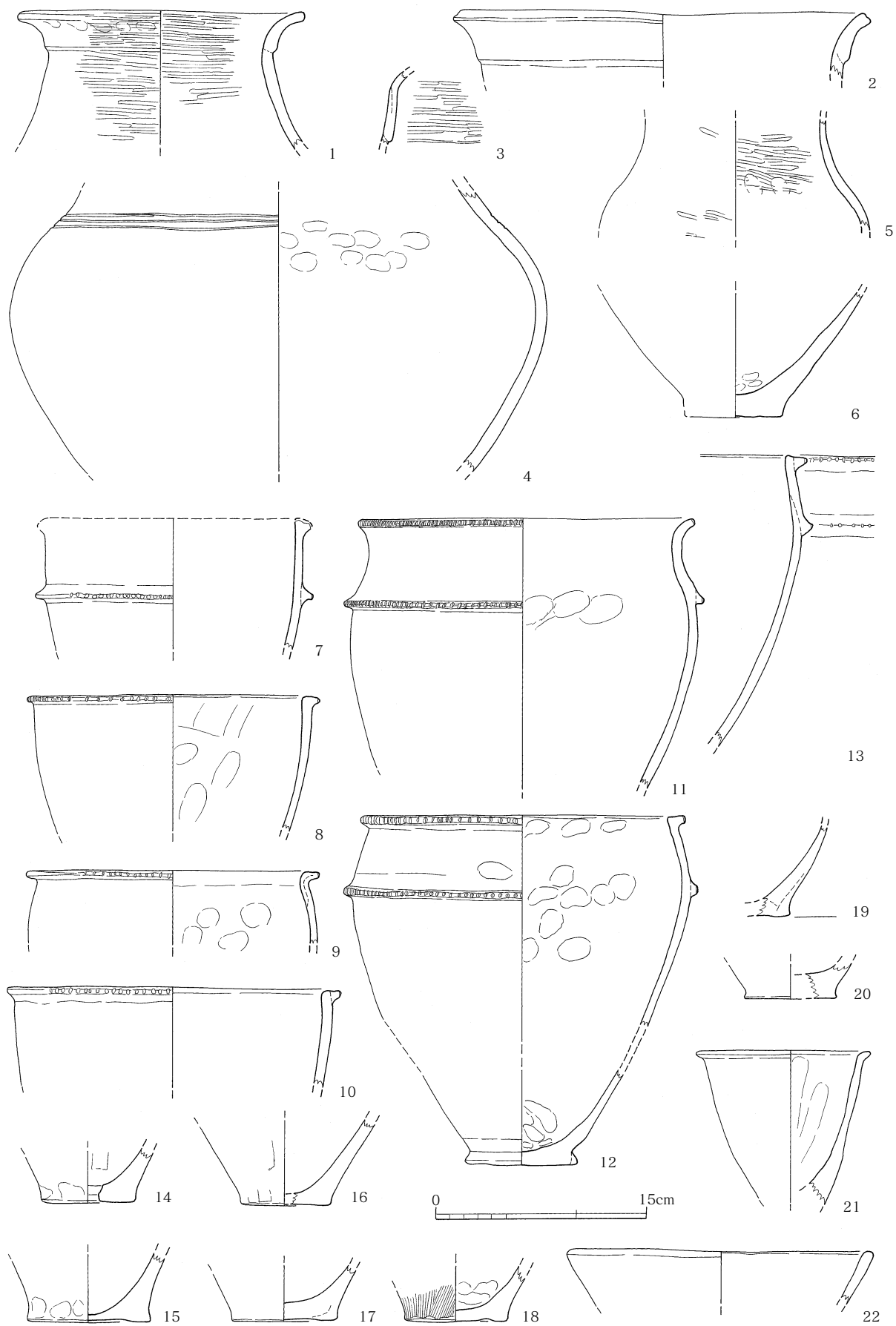
1は壺の口縁部である。外反は強くない。2～6は甕。4の底径は7.5cmである。5の底径は9.0cm。

44号土坑 (図版13、第30図)

調査区の中央付近で検出した。7号住居跡を切る。長軸2.9m、短軸1.9mの楕円形である。深さは1.0mである。遺物は弥生土器がまとまって出土している。

出土土器 (図版72、第34図)

1～6は壺である。1は口縁部を肥厚させるもので、内外面の調整は横方向のミガキである。口径20.6cmである。2はやや大型の壺で口縁部を肥厚させている。口径30.0cmである。3の外面はミガキである。4は肩部に3条の沈線を施す。胴部最大径は38.6cmである。5の内外面はミガキである。6の底径は7.7cmである。7～20は甕である。8の口径は21.0cmである。9の口径は21.0cmである。10の口径は24.0cmである。11の胴部突帯より下位にはススが付着する。口径24.2cmである。12の口径は23.3cm、底径8.0cmである。14は焼成後に穿孔が施される。6.0cmである。15の底径は8.8cmである。



第34图 5区44号土坑出土土器实测图 (1/4)

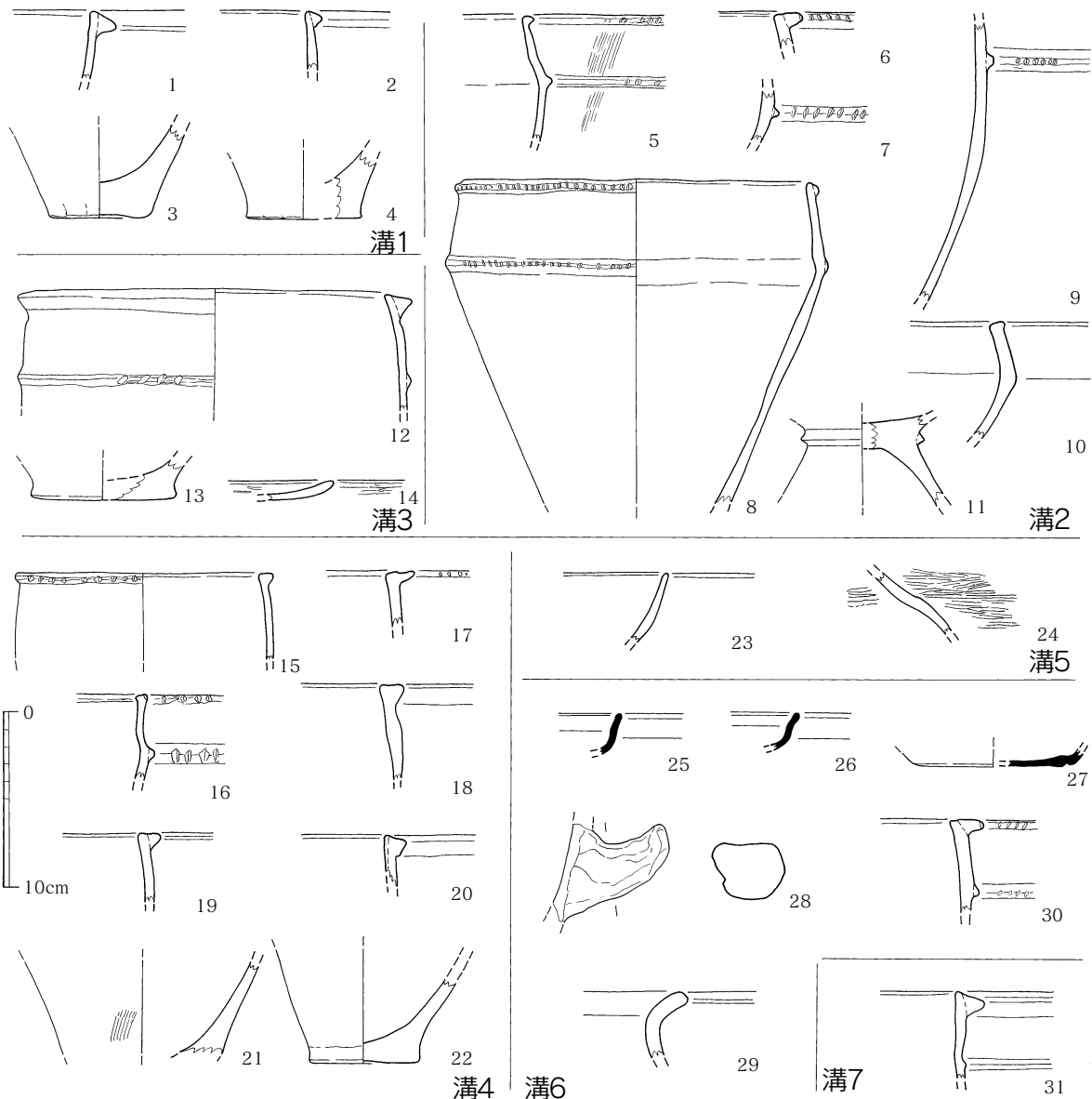
16の底径は6.6cmである。17の底径は7.6cmである。18の底径は7.0cmである。20の底径は6.6cmである。21は小型の甕である。口径12.5cmである。22は鉢で、口径22.0cmである。

45号土坑 (図版14、第30図)

調査区の中央付近で検出した。6号、7号住居跡を切る。長軸2.5m、短軸1.6mの隅丸方形である。深さは0.8mである。遺物は弥生土器がまとまって出土している。

出土土器 (図版71・72、第33図)

7・8は蓋である。8の口径は30.0cmである。9~19は甕である。9の口径は25.0cmである。10の口径は30.0cmである。11の口径は29.0cmである。12~14は胴部に1条の沈線を巡らすものである。12の口径は28.0cmである。13の口径は28.0cmである。14の口径は30.0cmである。15は上底の底部で、



第35図 5区1~7号溝出土土器実測図 (1/4)

脇の薄くなった部分に焼成後の穿孔を施している。穿孔の内面上位には、もう一つ穿孔をしようとした痕跡が残る。底径は7.8cmである。16の底径は7.5cmである。17の底径は6.0cmである。18の底径は7.0cmである。19の底径は8.0cmである。

(3) 溝

1号溝 (第5図)

調査区の南端部で検出した。5号土坑を切る。幅0.3m、深さ0.1m程度で、断面逆台形を呈する。両端は自然に消滅する。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第35図)

1～4は甕である。1・2は口縁外面に突帯を貼り付ける。3の底径は5.8cmである。4の底径は6.6cm。

2号溝 (図版14、第5図)

調査区の南寄りで検出した。1号住居跡を切り、7号、8号土坑に切られる。両端は調査区外へ延びる。幅0.9m、深さ0.5mで断面逆台形を呈する。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第35図)

5～9は甕である。8の口径は21.0cmである。10は鉢の口縁部である。11は高杯の脚部で、基部に1条の小さな突帯を貼り付けている。

3号溝 (第5図)

調査区の南寄りで検出した。9号住居跡に切られる。西端部は調査区外へ延び、東側は9号土坑に切られ、消滅する。幅0.5m、深さ0.1mの断面逆台形を呈する。遺物は弥生土器と土師器が出土している。

出土土器 (第35図)

12は甕の口縁部である。口径22.6cmである。13は甕の底部である。底径8.4cmである。14は混入の土師器の皿であろうか。内外面の調整はミガキである。

4号溝 (第5図)

調査区の南寄りで検出した。1号住居跡を切り、10号、12号、14号土坑に切られる。両端は調査区外へ延びる。幅1.1m、深さ0.4mの断面逆台形を呈する。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第35図)

15～22は甕である。15の口径は14.8cmである。22の底径は6.4cmである。

5号溝 (第5図)

調査区の南寄りで検出した。2号住居跡に切られる。東側は調査区外へ延びる。西側は2号住居跡に切られる。土師器が出土していることから、住居との切り合い関係を間違えた可能性も考えたが、西側の壁面でも5号溝の断面を確認できなかったことから、土師器が混入であると考えている。

出土土器 (第35図)

23は土師器の碗である。外面の調整はナデである。24は弥生土器の壺の肩部片である。内外面の調整は横方向のミガキである。

6号溝 (第5図)

調査区の北寄りで検出した。7号溝を切る。両端は調査区外へ延びる。幅2.2m、深さ0.2mと浅いが、凹凸が著しい。1号波板状遺構と重複するが、その関係については後述する。遺物は須恵器・土師器・弥生土器が出土している。

出土土器 (第35図)

25・26は須恵器の杯口縁部片である。27は高台が剥離した杯の底部である。28はコシキの把手の部分である。29は土師器の甕の口縁部である。30は弥生土器の甕の口縁部である。

7号溝 (第5図)

調査区の北寄りで検出した。1号波板状遺構に切られる。両端は調査区外に延びる。幅0.4m、深さ0.1mの断面逆台形を呈する。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第35図)

31は弥生土器の甕である。内外面の調整はナデである。

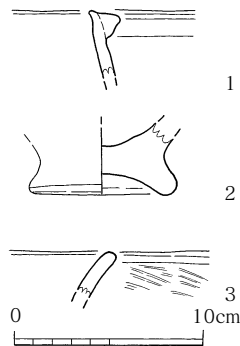
(4) 波板状遺構

1号波板状遺構 (図版14・15、第37図)

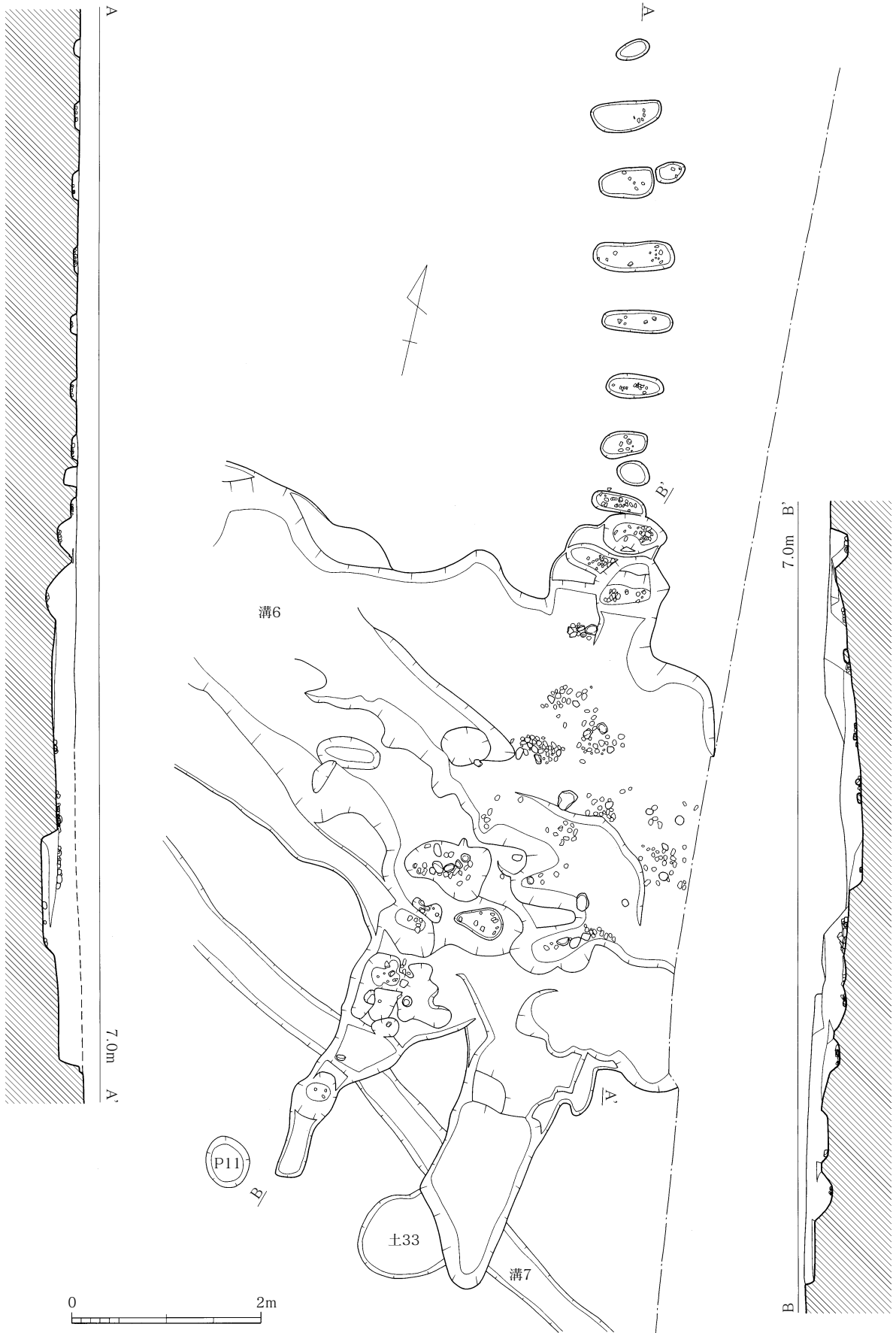
調査区の北寄りで検出した。33号土坑を切る。6号溝を挟み、北側には楕円形の土坑が連続している。土坑の底面には円礫が敷き詰められている。6号溝内において土坑は検出できなかったが円礫の集中した部分が連続している。これらは途中で2方向に分かれ、6号溝の南側で消失している。これらのことから、6号溝の廃絶後、柔軟な地盤を改良するために波板状遺構が構築されたと考えている。遺物は弥生土器が出土しているが、混入であろう。

出土土器 (第36図)

1は甕の口縁部である。断面三角突帯が貼り付けられる。2は甕の底部である。上底で、底径7.8cmである。3は縄文土器の粗製の鉢であろうか。色調は暗茶褐色を呈する。



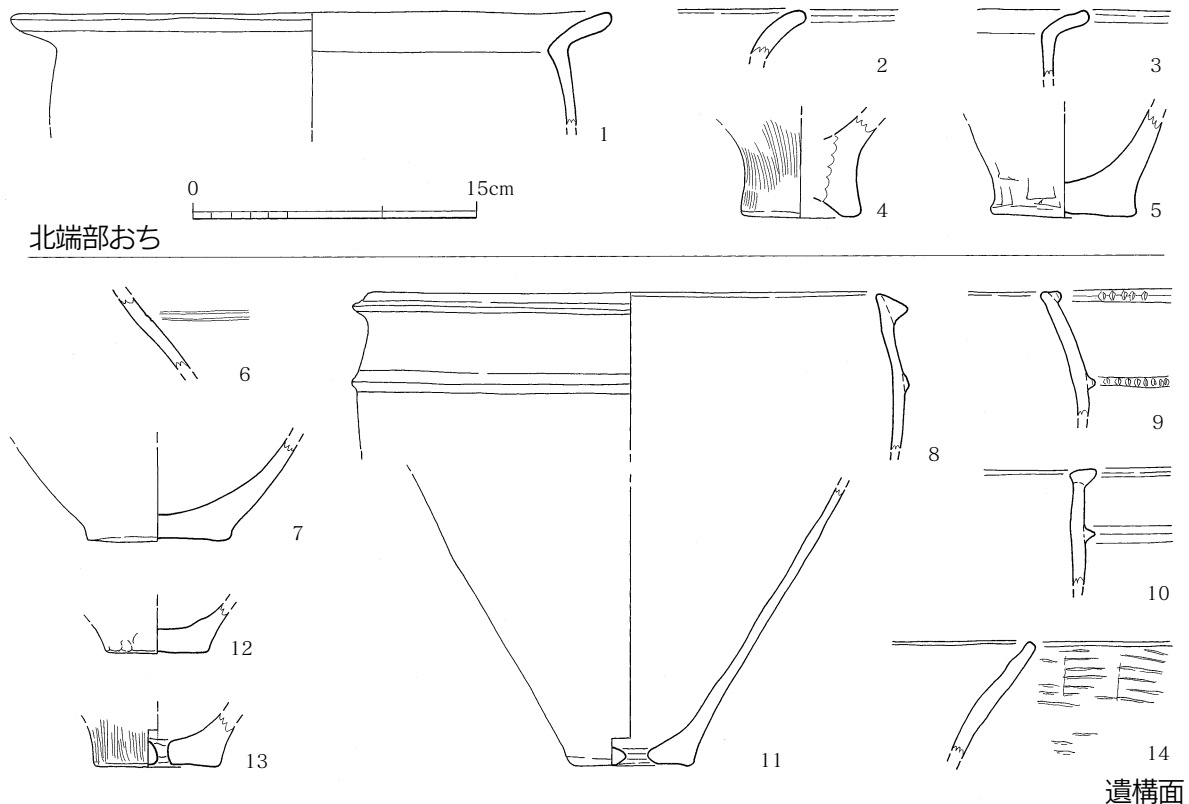
第36図 5区1号波板状遺構出土土器実測図 (1/4)



第37図 5区波板状遺構実測図 (1/60)

(5) 北端部おち・遺構面出土土器 (図版72、第38図)

1~5は北端部おちからの出土である。1~5はいずれも甕である。1は口縁部である。口径32.0cmである。2は口縁片であろうか。4の底径は6.4cmである。5の底径は7.8cmである。6~14は遺構面出土の土器である。6・7は壺である。6は肩部に2条の沈線を巡らす。7の底径は7.5cmである。8~13は甕である。8の口径は26.2cmである。11は焼成後に穿孔を施すもので、底径は6.0cmである。12の底径は5.4cmである。13は焼成後に穿孔を施すものである。底径6.7cmである。



第38図 5区北端部おち・遺構面出土土器実測図 (1/4)

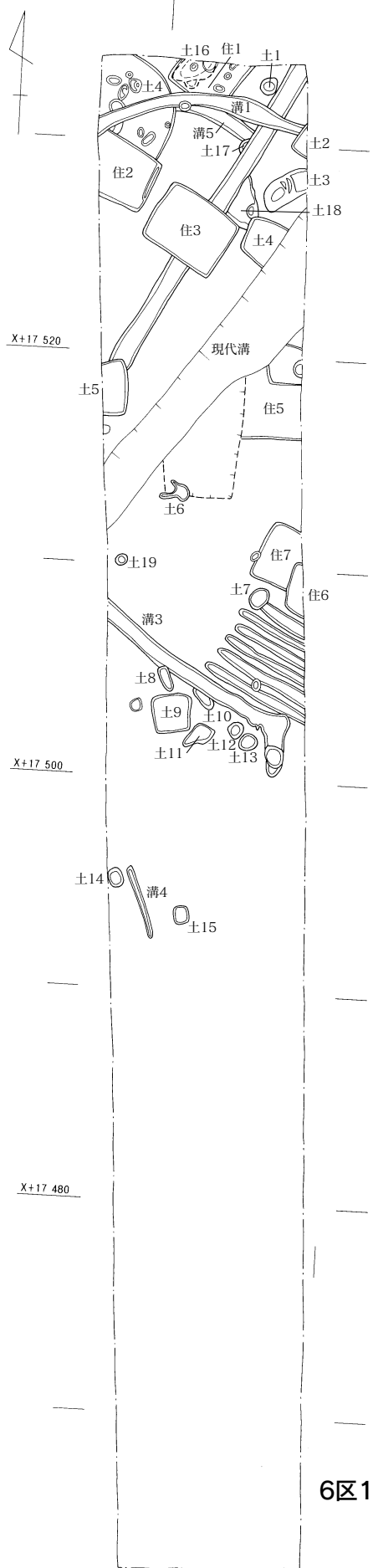
4 6区の調査の内容 (図版16、第39図)

6区は南側がおちとなっており、北に向かい、次第に上がっている。遺構面は2面に分かれ、第一遺構面の北端部で弥生時代後期の住居跡が検出されている。これらは7区に展開する集落の南端にあたるものである。第二遺構面は弥生前期の遺構を中心に展開している。おちから上がってくる途中の部分であり、遺跡の中では遺構密度は比較的薄い。10棟の竪穴住居跡の他、畑状遺構、土坑40基、溝5条を検出している。

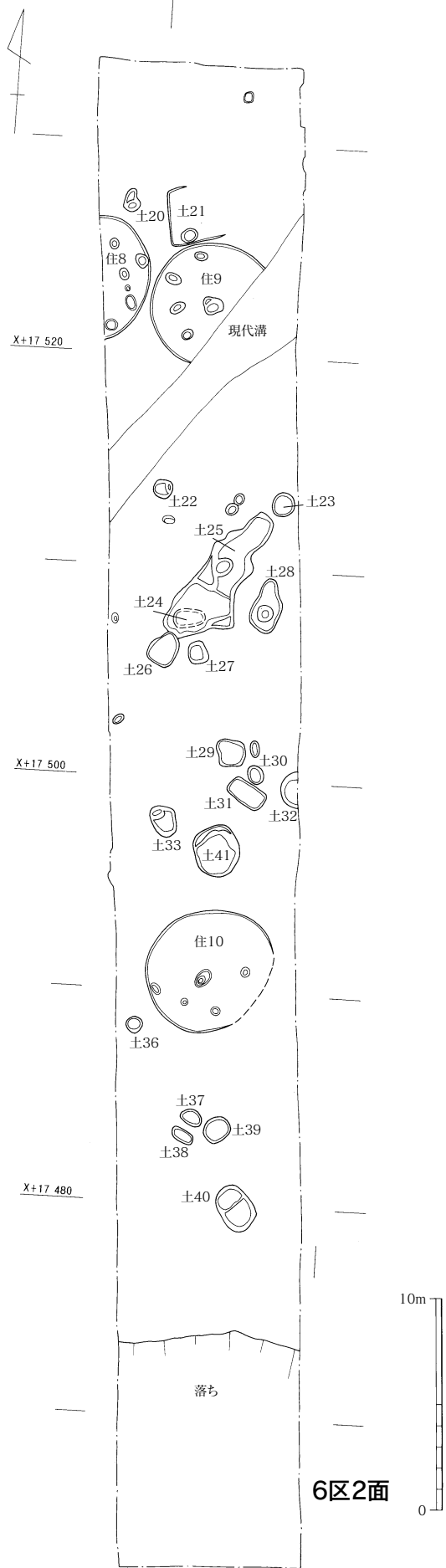
(1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡 (図版17、第40図)

第一遺構面、調査区の北端部で検出した。1号溝に切られる。北側は調査区外へ延びる。長軸2.6m+ α 、短軸3.1mの方形を呈する。深さ約0.1mである。床面からは多数の掘り込みがあるが、いずれが主柱穴となるかは不明である。部分的に壁小溝を検出している。遺物は埋土から弥生土器が出土している。



6区1面



6区2面



第39図 6区遺構配置図 (1/300)

出土土器 (第41図)

1・2は壺である。1は口縁端部に刻目を施す。3は小型の甕である。口縁部が強く内湾気味に屈曲する。4は甕の胴部である。外面に1条の突帯が巡る。5は台付甕の底部である。内外面の調整はハケメで、底径10.9cmである。

2号竪穴住居跡 (図版17、第40図)

第一遺構面、調査区の北端部で検出した。4号住居跡を切り、1号溝に切られる。西側は調査区外へ延びる。長軸3.5m+ α 、短軸3.0mの方形を呈する。深さは0.2mである。床面がほぼ4号住居跡と重複しているため、支柱穴等の掘り込みは検出が出来なかったが、東寄りの付近で炭化物の集積した炉跡を検出している。床面からは弥生土器がまとまって出土している。

出土土器 (図版73、第41図)

6~9は壺である。6は二重口縁壺の口縁である。口径14.9cmである。7は長胴の壺で、口径16.5cm、胴部位最大径23.8cm、器高36.0cmである。8の外面はハケメである。口径17.5cm、胴部最大径25.6cmである。9の口径は29.0cmである。10は長胴で下膨れの甕である。口径17.6cm、胴部最大径19.4cm、器高30.0cmである。11は小型の甕である。内外面の調整のハケメが明瞭に残る。口径14.7cmである。12は直口の鉢である。口径14.0cmである。13は小型の甕で、口径14.0cmである。14の口径は22.5cmである。15の底径は5.9cmである。

3号竪穴住居跡 (図版17・18、第40図)

第一遺構面、調査区の北端部で検出した。18号土坑、2号溝を切る。長軸3.8m、短軸2.9mの方形を呈する。壁の深さは約0.1mである。床面の南壁で屋内土坑を検出している他、数ヶ所に掘り込みがある。また、中央付近で炭化物の集積した炉跡を検出している。遺物は埋土中から弥生土器が出土している。

出土土器 (図版73・74、第42図)

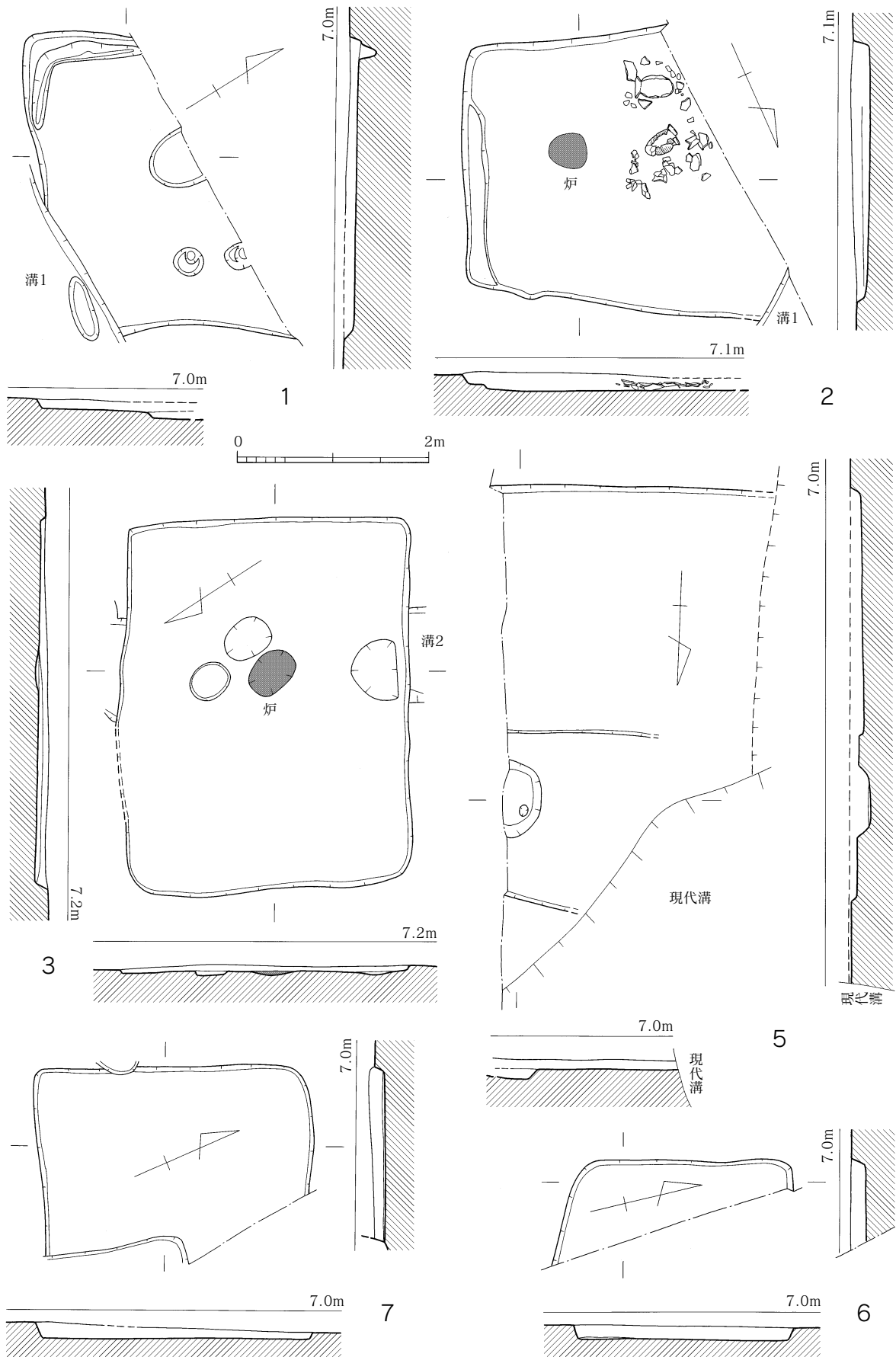
1~10は甕である。1・2は長胴の甕である。1の口径は17.4cm、胴部最大径20.3cmである。2の口径は17.8cm、胴部最大径20.3cm、器高35.4cmである。3はやや球形の胴部で、口径15.2cm、胴部最大径21.6cm、器高27.7cmである。4の口径は15.0cmである。5の口径は16.0cmである。6は口径22.0cmである。7は口縁端部に刻目を施す。口径35.6cmである。8は大型の甕の口縁部である。9・10は胴部片で、台形の突帯に刻目を施す。11は鉢である。口縁の内側を肥厚させる。口径30.0cmである。12は口縁が外反する鉢である。口径19.6cm、器高7.5cmである。13は支脚である。口径5.8cmである。

4号竪穴住居跡 (図版18、第43図)

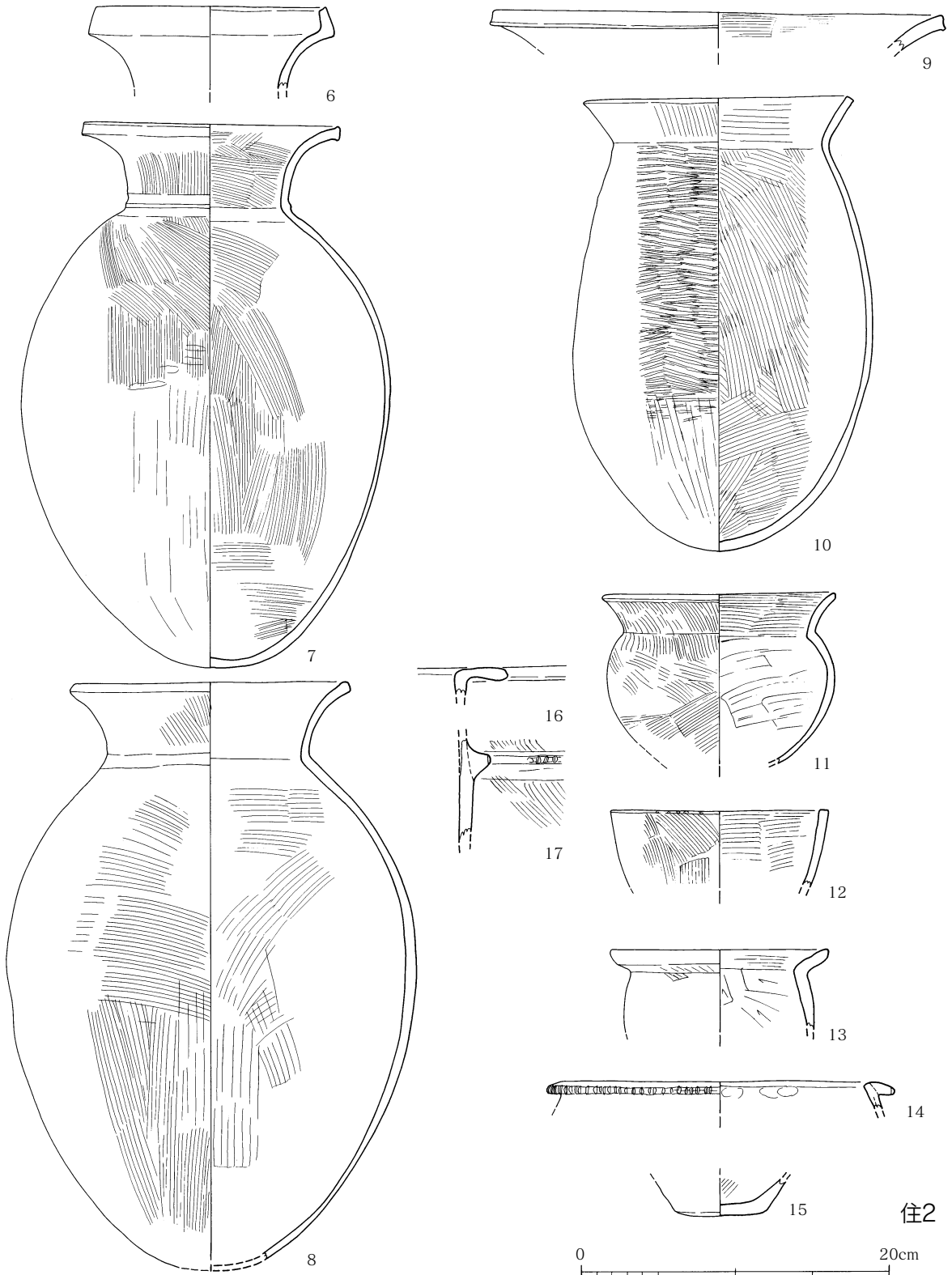
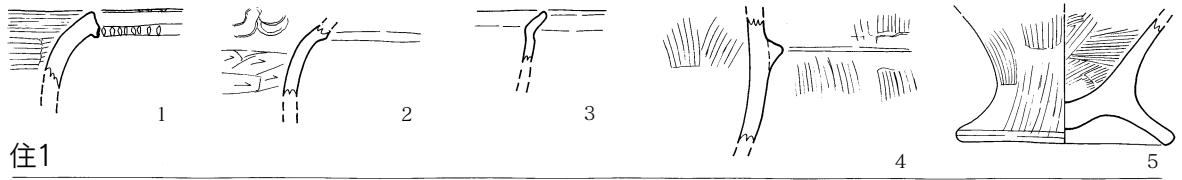
第一遺構面、調査区の北端部で検出した。5号溝を切り、2号住居跡、1号溝に切られる。平面の約1/2を検出したが、残りは調査区外の西へ延びる。円形住居で、直径6.5mである。深さは0.15mで床面は平坦である。中央に約0.5mの土坑を掘り込む。この中央土坑を取り囲むように巡るP-2、P-3、P-5、P-6、P-7が支柱穴となる可能性が高い。遺物は埋土から弥生土器が出土している。

出土土器 (第44図)

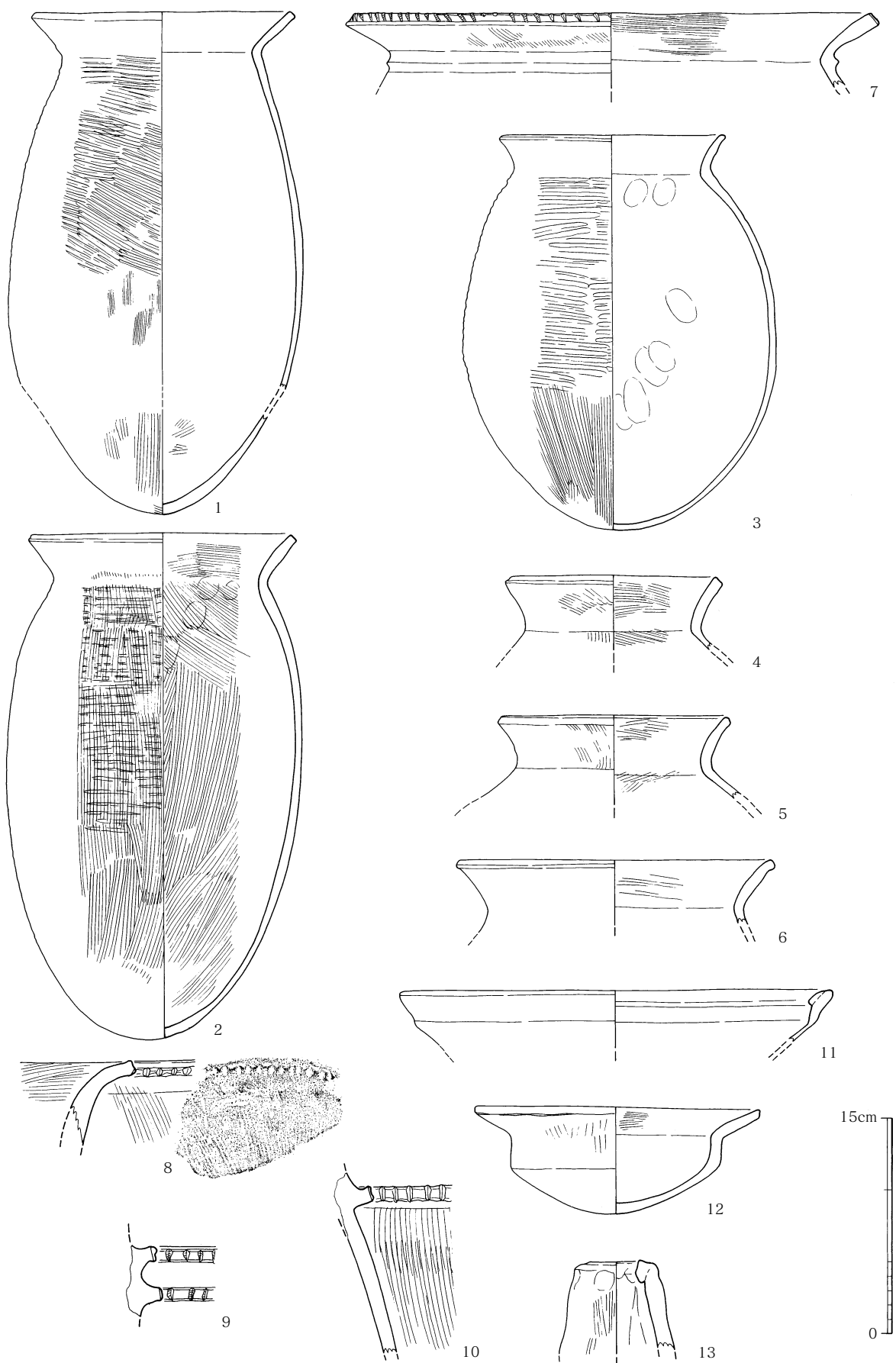
1~6は甕である。1の口縁部突帯下部には貼付痕が残る。4は大型の甕の口縁部で、端部上下に刻目を施す。5はやや上底の底部で、底径7.4cmである。6の底径は8.0cmである。



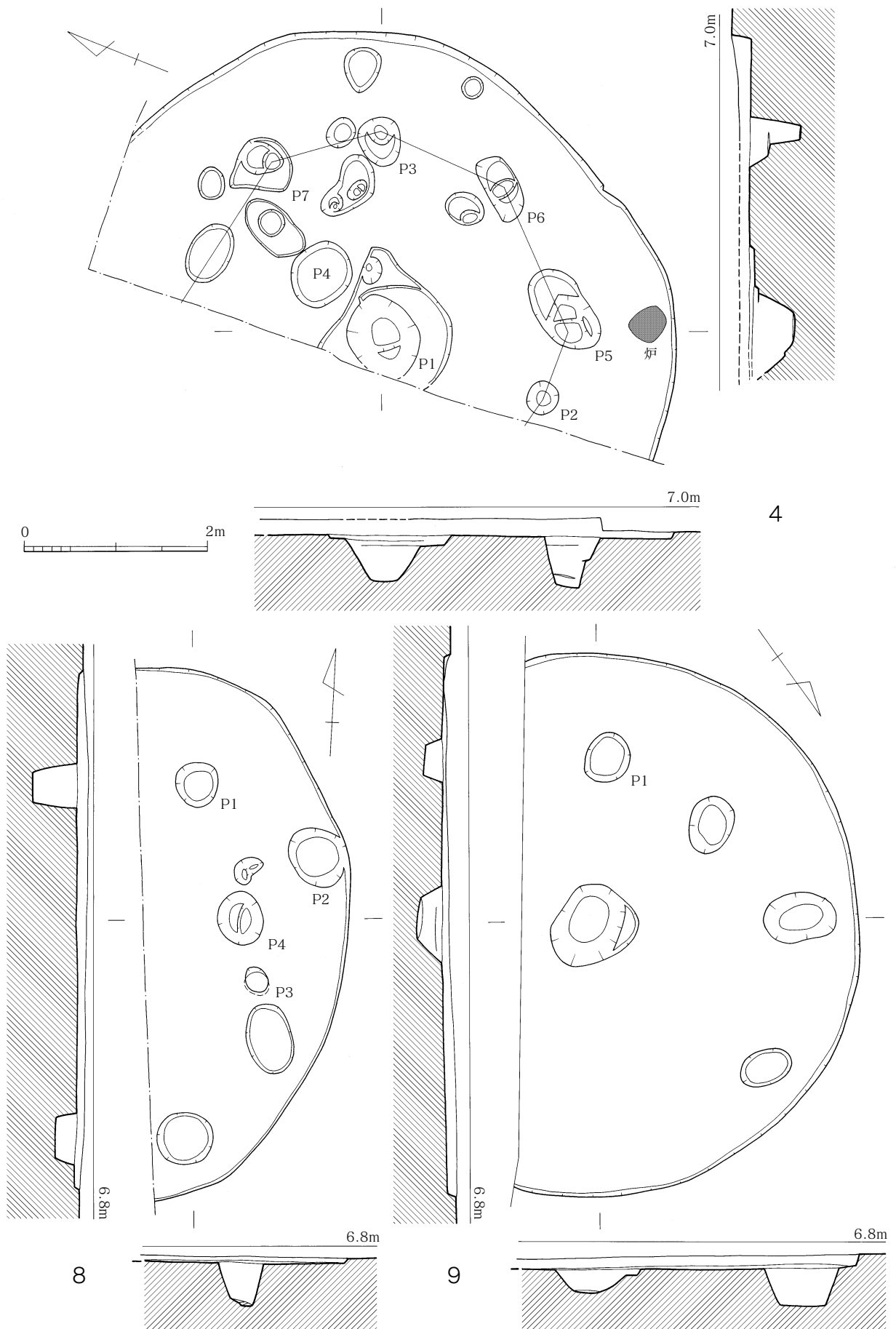
第40図 6区1~3・5~7号竪穴住居跡実測図 (1/60)



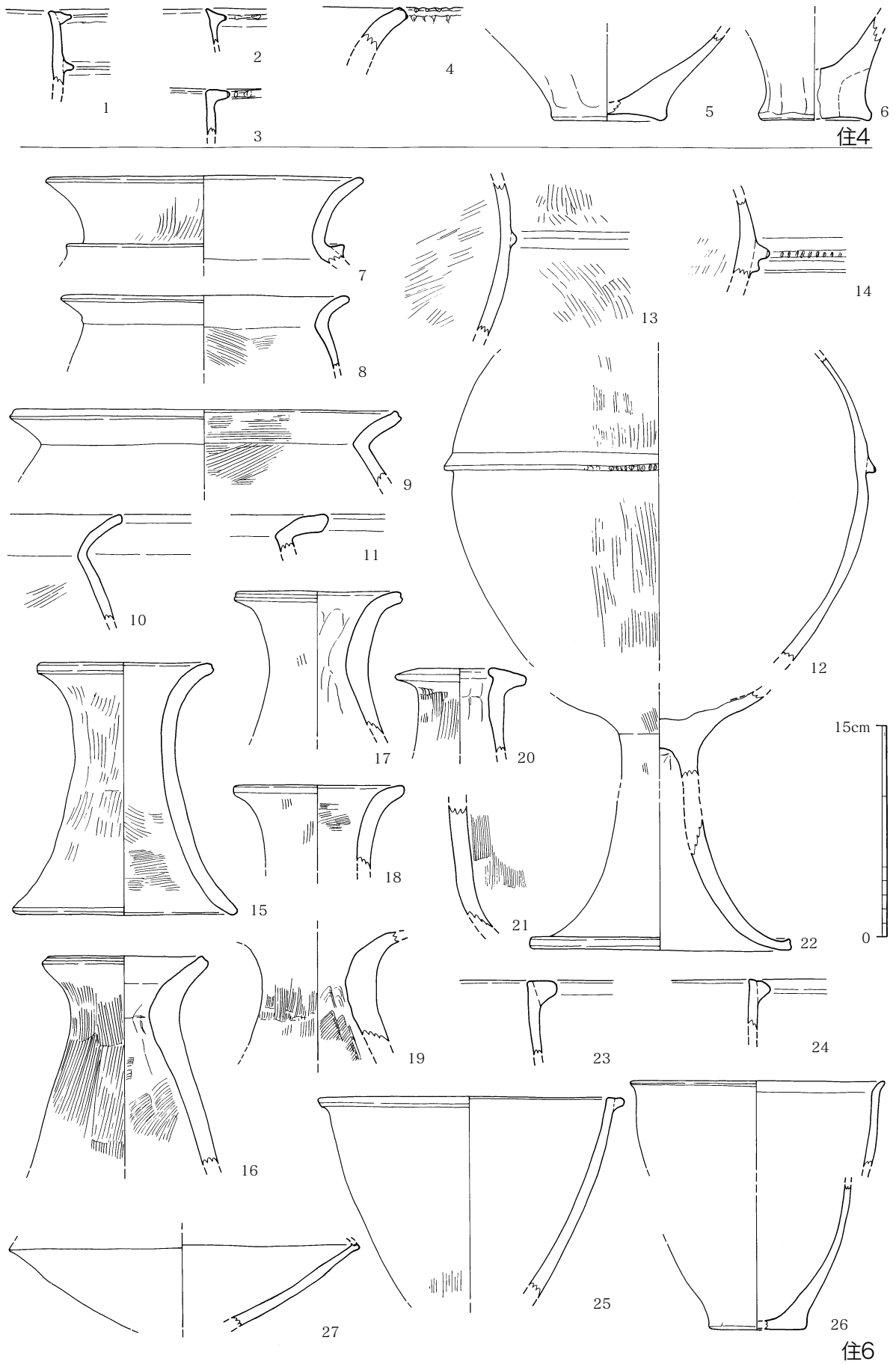
第41图 6区1·2号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)



第42图 6区3号竖穴住居迹出土土器实测图 (1/4)



第43图 6区4·8·9号竖穴住居跡実測図 (1/60)



第44图 6区4·6号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/4)

5号竪穴住居跡 (図版18、第40図)

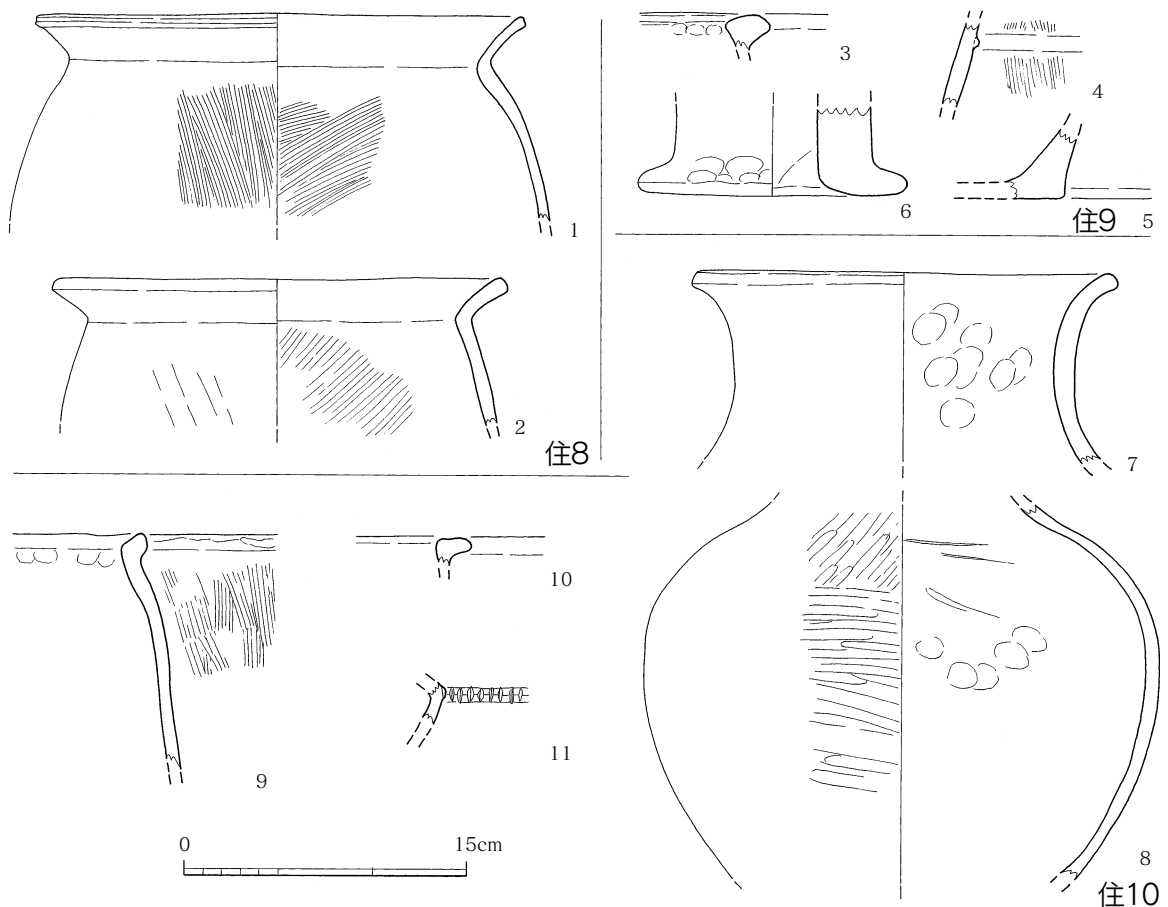
第一遺構面、調査区の北寄りで検出した。東側は調査区外に延びる。長軸5.3m+ α 、短軸2.8m+ α 、方形プランを呈するものと考えられる。深さ約0.1m。東壁に屋内土坑が掘り込まれる。出土遺物はない。

6号竪穴住居跡 (図版19、第40図)

第一遺構面、調査区の北寄りで検出した。7号住居跡を切る。東側は調査区外へ延びる。長軸2.4m、短軸1.1m+ α の方形を呈する。深さは約0.2mである。床面は平坦で、掘り込み等はない。遺物は弥生土器がまとめて出土している。

出土土器 (第44図)

7~14は甕である。7は頸部に三角突帯を貼り付ける。口径21.9cmである。8の口径は20.4cmである。9の口径は26.8cmである。12は球形の胴部で、胴部最大径の部分に刻目突帯を貼り付けている。13・14も12と同様の器形であろう。15~21は器台である。15は口径11.8cm、底径15.2cm、器高17.8cmである。16の口径は10.8cmである。17の口径は11.2cmである。18の口径は11.4cmである。20は上部に粘土帯を貼り付けるもので他とは異なる。口径9.3cmである。22は高杯である。一部にハケメが残る。底径18.2cmである。23~27は混入の可能性が高い。23~25は口縁部外面に粘土帯を貼り付ける



第45図 6区8~10号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

甕である。25の口径は21.6cmである。26は如意形口縁の甕である。口径18.0cm、底径6.8cmである。27は縄文晩期の浅鉢である。最大径24.7cmである。

7号竪穴住居跡 (図版19、第40図)

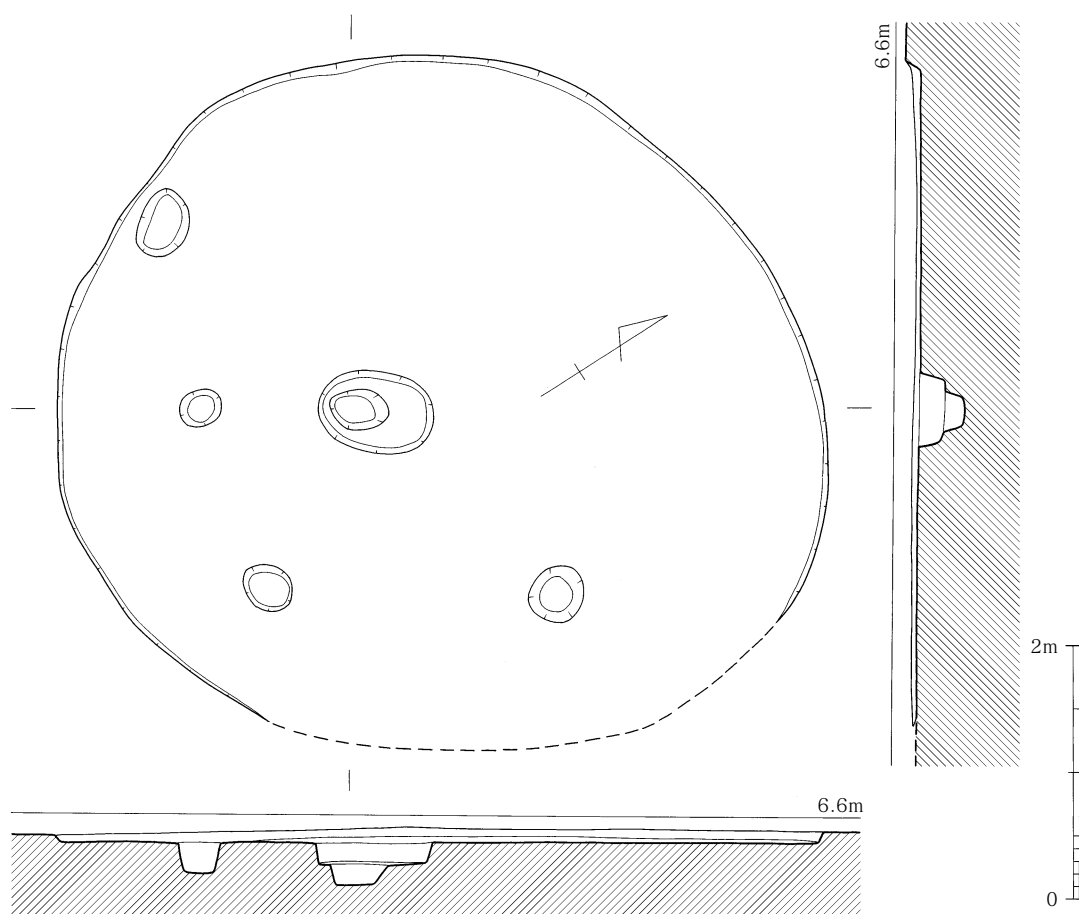
第一遺構面、調査区の北寄りで見出した。6号住居跡に切られる。東側は調査区外へ延びる。長軸 $2.0\text{m} + \alpha$ 、短軸2.8mの方形を呈する。深さは0.15m。床面は平坦で、掘り込みはない。遺物は出土していない。

8号竪穴住居跡 (図版19、第43図)

第二遺構面、調査区の北端部で見出した。平面の約1/3を見出したが、残りは調査区外の西へ延びる。円形住居で直径約6.0mである。深さ0.1mで床面は平坦である。中央に深さ約0.3mの土坑を掘り込む。中央土坑を囲むように4基のピットを見出しているが、これらが支柱穴になると考えられる。遺物は埋土から弥生土器を見出しているが、この住居に伴うものではなく混入の可能性が高い。

出土土器 (第45図)

1・2は弥生土器の甕である。外反する口縁で、内外面はハケメ調整である。1の口径は25.5cmである。2の口径は23.6cmである。いずれも後期以降の特徴を備えており、混入であろう。



第46図 6区10号竪穴住居跡実測図 (1/60)

9号竪穴住居跡 (図版19、第43図)

第二遺構面、調査区の北端部で検出した。平面の約2/3を検出したが、現代溝に切られる。円形住居で直径6.5m程度と推定される。深さは約0.1mで、床面は平坦である。P-1、P-2が比較的深く支柱穴であろう。遺物は埋土から弥生土器が出土している。

出土土器 (第45図)

3~5は甕である。3は口縁で厚い粘土帯を貼り付け、上端面がやや内傾する。6は支脚の底部であろうか。底径14.2cmである。

10号竪穴住居跡 (図版20、第46図)

第二遺構面、調査区の中央やや南寄りで検出した。円形住居で、直径約6.0mである。深さは0.1mであるが、東壁部分が残存していない。中央よりややずれた位置に土坑が掘り込まれる。また、4基のピットを検出しているが、支柱穴になるにはやや細い。遺物は埋土から弥生土器が出土している。

出土土器 (第45図)

7・8は壺である。7の内面には圧痕が残る。口径22.0cmである。8の外面はミガキ、内面はナデ調整である。胴部最大径27.3cmである。9~11は甕である。9は上端面がかなり内傾する口縁である。11は屈曲する甕の胴部で、直接、刻目が施される。

(2) 畑状遺構 (図版24、第47図)

第一遺構面、調査区の中央やや北寄りで検出。7号土坑、3号溝に切られる。6条の溝が並んでおり、最長のものは5.5mで、東側は調査区外に延びる。溝は幅0.4~0.5mで、残存する深さは0.15~0.2mである。埋土は暗黒褐色を呈していた。形状から畑状遺構としたが、確証はない。遺物はない。

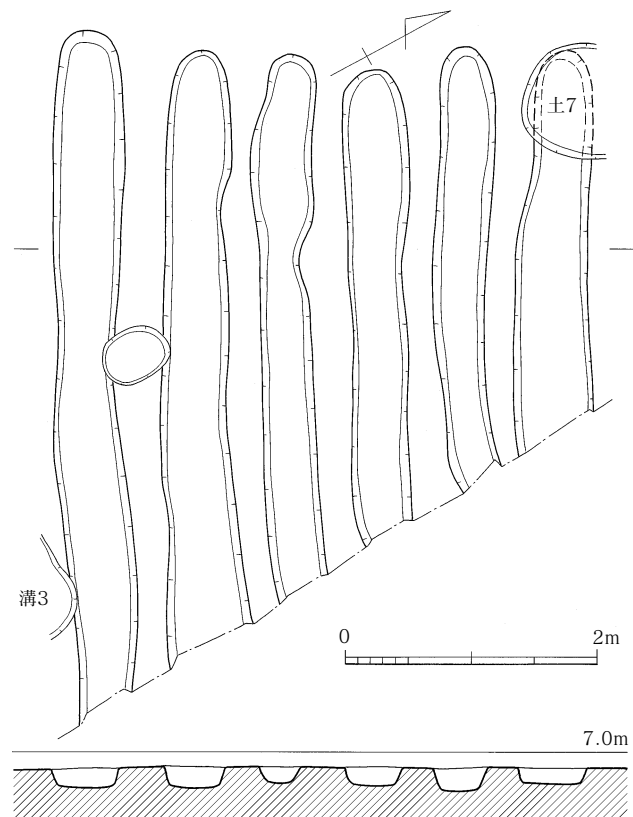
(3) 土坑

1号土坑 (図版20、第48図)

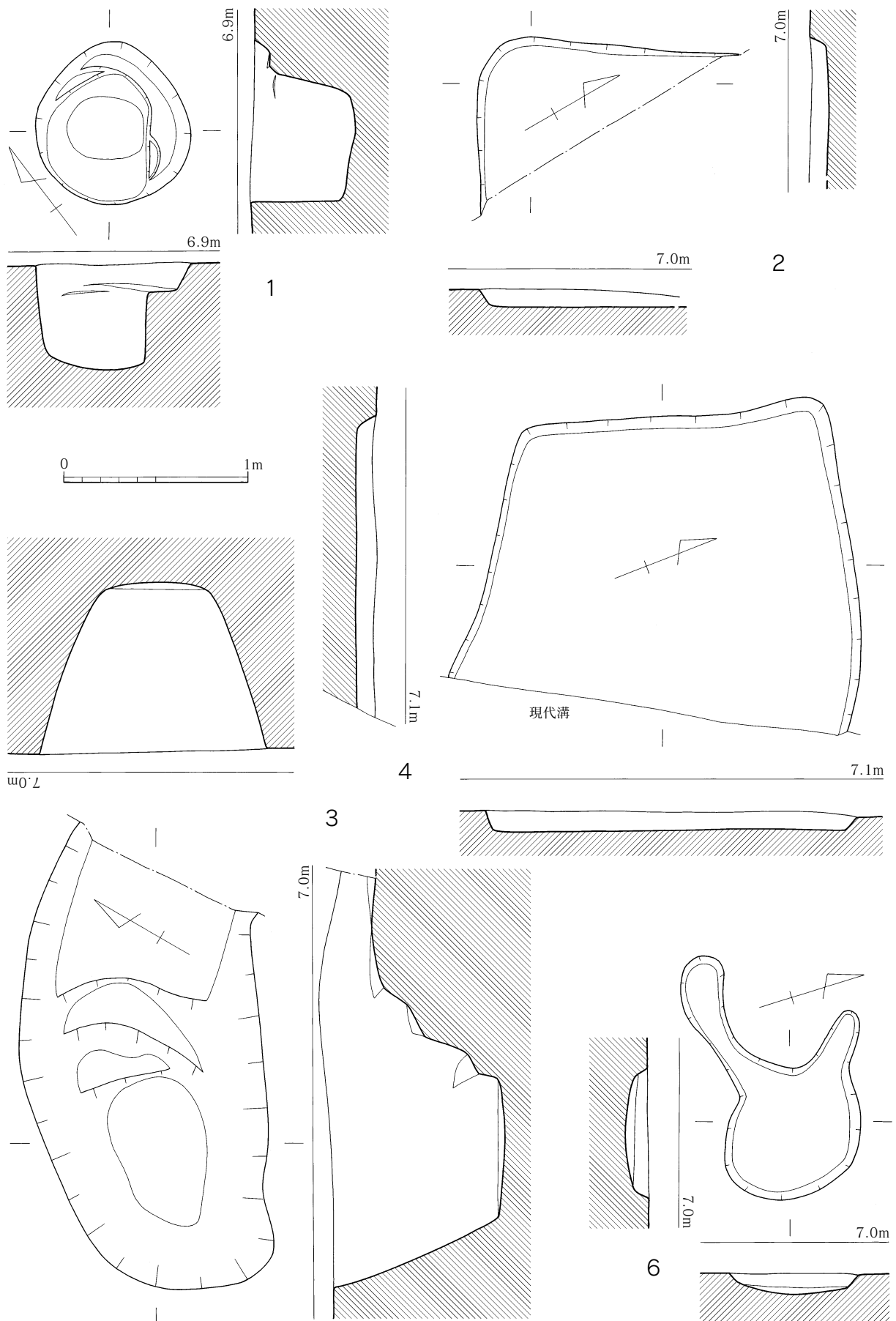
第一遺構面、調査区の北端部で検出した。長軸0.9m、短軸0.8mで東側にテラスが付くが、ほぼ円形である。深さは0.6mで、床面は平坦に近い。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第50図)

1は壺である。球形の胴部で、最大径の部分に突帯を貼り付ける。最大径21.2cmである。2は甕である。口縁端部をつまみあげるように仕上げる。口径21.6cmである。



第47図 6区畑状遺構実測図 (1/60)



第48図 6区1~4・6号土坑実測図 (1/30)

2号土坑 (第48図)

第一遺構面、調査区の北端部で検出した。1号溝を切る。東側は調査区外へ延びる。長軸1.4m+ α 、短軸0.9m+ α である。深さは0.1mで床面はほぼ平坦である。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第50図)

3は壺である。口縁部を強く外反させる。肥厚はなく、端部を角ばって仕上げる。4・5は甕である。4は刻目突帯を貼り付ける口縁部である。5は平底の底部である。内外面の調整はナデである。

3号土坑 (図版20、第48図)

第一遺構面、調査区の北端部で検出した。東側は調査区外へ延びる。長軸2.5m+ α 、短軸1.3mの長楕円形を呈すると思われる。深さ0.9mで東側から階段状に掘られる。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第50図)

6は壺の底部である。内外面ナデ調整で、底部付近に工具痕が残る。底径8.8cmである。7~14は甕である。7の口径は24.6cmである。9は大型の甕の口縁部で、端部に刻目を施す。10の底径は7.2cmである。11の底径は6.2cmである。12は上底で、底径7.0cmである。13の底径は8.8cmである。14の底径は7.2cmである。

4号土坑 (第48図)

第一遺構面、調査区の北端部で検出した。18号土坑を切り、現代溝に切られる。長軸2.2m、短軸1.8m+ α の方形を呈すると考えられる。深さは0.1mで、床面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

5号土坑 (図版21、第49図)

第一遺構面、調査区の北端部で検出した。2号溝を切る。西側は調査区外に延びる。長軸2.6m、短軸1.2m+ α である。深さは0.1mで、床面はほぼ平坦である。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第50図)

15・16は甕である。15は2条の突帯を貼り付ける。16は平底でくびれる底部。底径8.1cmである。

6号土坑 (図版21、第48図)

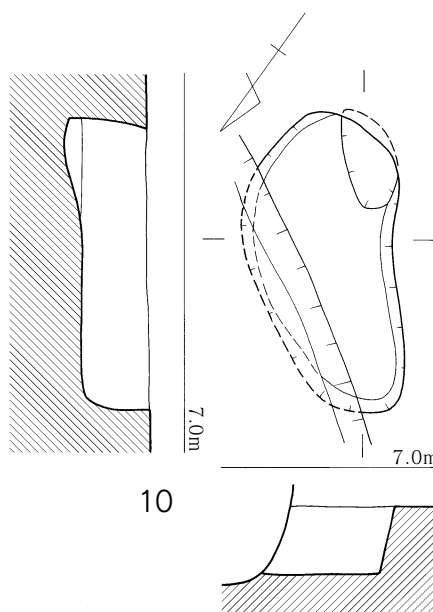
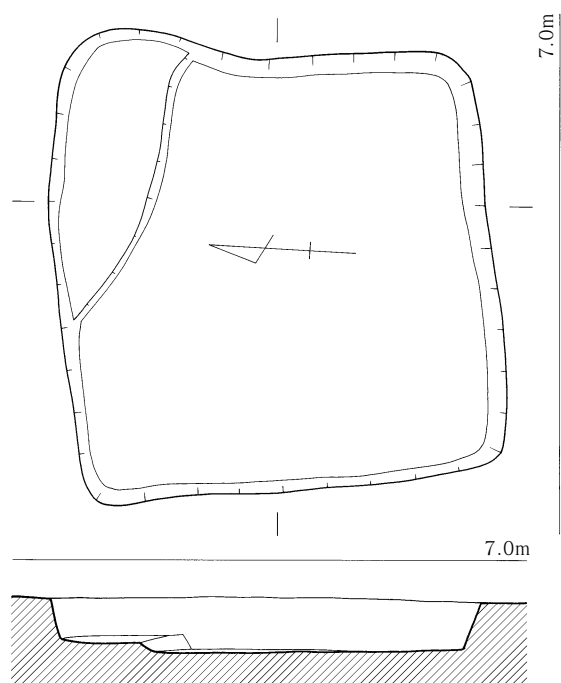
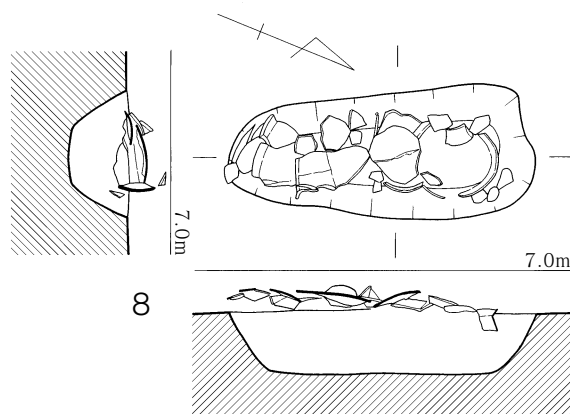
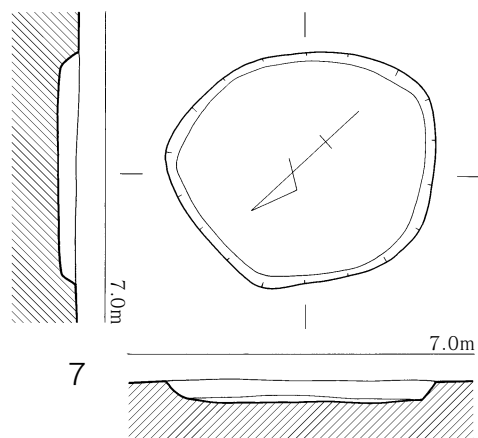
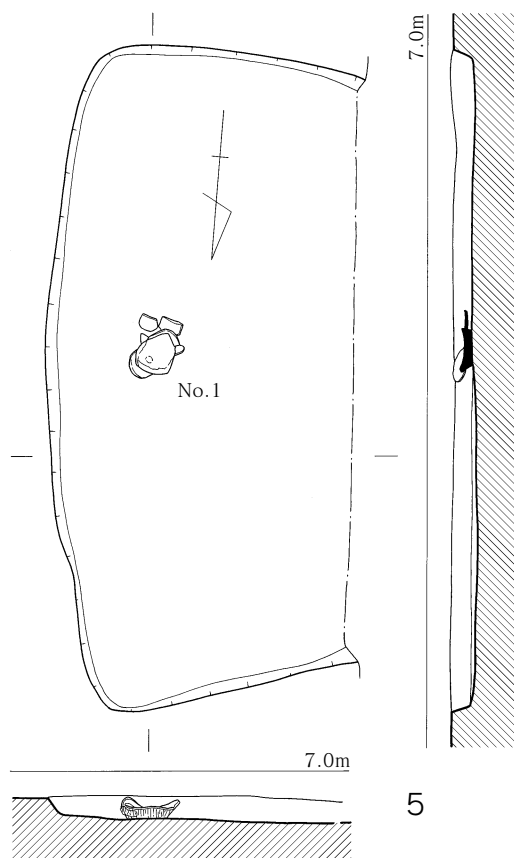
第一遺構面、調査区の北寄りで検出した。長軸1.3m、短軸0.7mで西側に2ヶ所が突起状に延びる。深さは0.15mで、埋土には炭化物が混入していた。図化に耐えうる遺物はない。

7号土坑 (第49図)

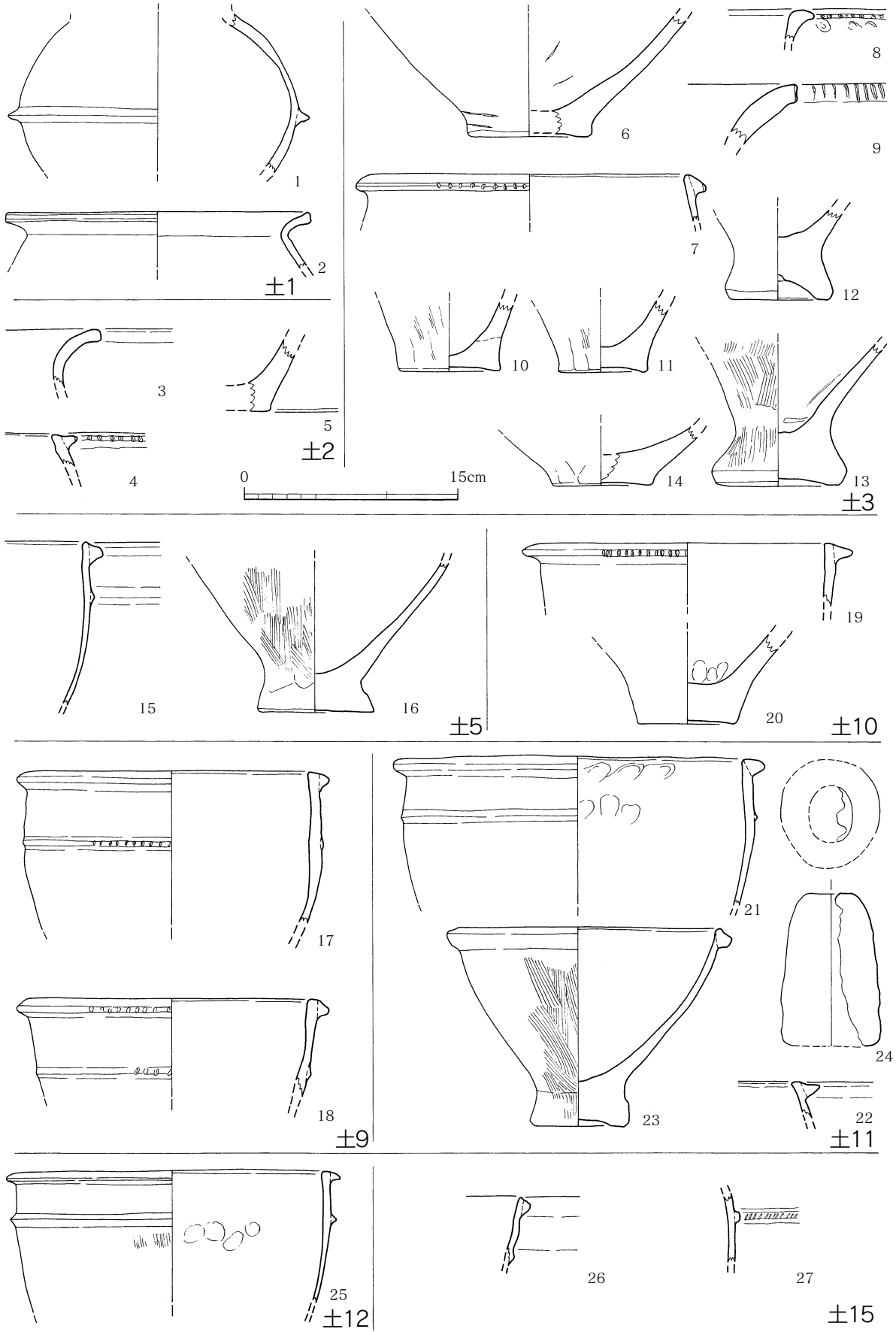
第一遺構面、調査区の北寄りで検出した。畑状遺構を切る。長軸1.1m、短軸0.9mの楕円形を呈する。深さは約0.1mで床面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

8号土坑 (図版21、第49図)

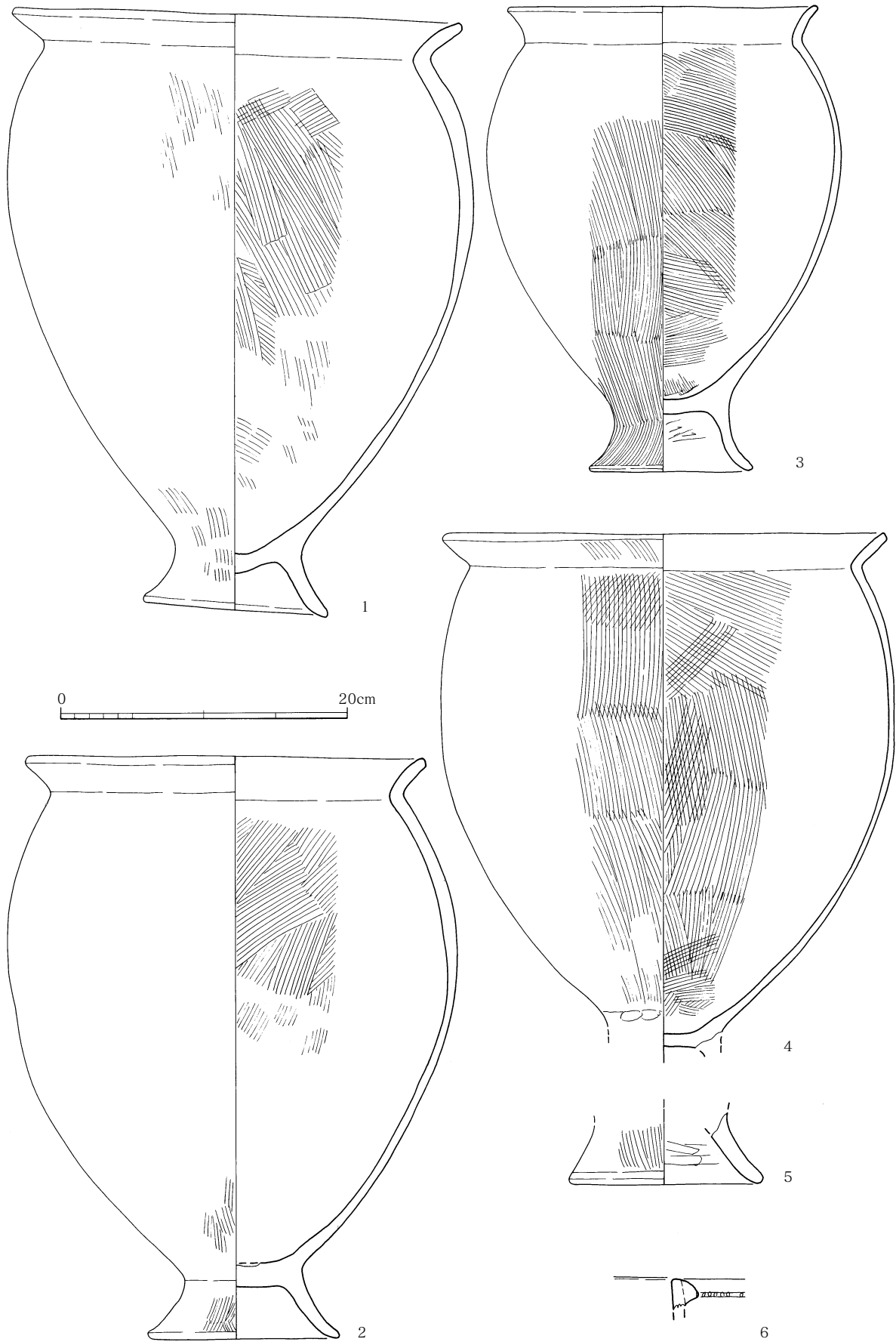
第一遺構面、調査区の北寄りで検出した。3号溝を切る。表土剥ぎの途中で土器が集中していた部分があったため、土坑とした。長軸1.2m、短軸0.5mの楕円形を呈する。深さは0.25mで床面は平坦である。遺物は上層で弥生土器の台付甕がまとまって出土している。



第49图 6区5·7~10号土坑实测图 (1/30)



第50图 6区1~3·5·9~12·15号土坑出土土器实测图 (1/4)



第51图 6区8号土坑出土土器实测图 (1/4)

出土土器 (図版74、第51図)

1～5は台付甕である。「く」字状の口縁にやや張り気味の胴部が付き、緩やかに外反する脚部が付く。内外面の調整はハケメである。1は口径31.2cm、胴部最大径32.6cm、底径12.6cm、器高42.4cmである。2は口径28.0cm、胴部最大径31.2cm、底径13.3cm、器高41.0cmである。3は口径21.5cm、胴部最大径24.8cm、底径11.5cm、器高33.0cmである。外面にはススが付着する。4は脚部が欠失している。口径31.0cm、胴部最大径31.8cmである。5の底径は13.4cmである。6は混入の甕の口縁部である。

9号土坑 (第49図)

第一遺構面、調査区の北寄りで検出した。長軸1.9m、短軸1.7mの方形を呈する。深さは0.2mである。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第50図)

17・18は甕の口縁部である。17の外面にはススが付着する。口径22.0cmである。18の外面にはススが付着する。口径22.0cmである。

10号土坑 (第49図)

第一遺構面、調査区の北寄りで検出した。3号溝に切られる。長軸1.2m、短軸0.6mの楕円形を呈する。深さは0.3mで、南端がやや深く掘られる。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第50図)

19・20は甕である。19は刻目突帯を貼り付ける口縁で、口径19.4cmである。20の内面には圧痕が強く残る。底径7.1cmである。

11号土坑 (図版22、第52図)

第一遺構面、調査区の北寄りで検出した。長軸1.6m、短軸0.9mの歪な長楕円形を呈する。深さは0.25mである。遺物は弥生土器がかなり浮いた状態で出土している。

出土土器 (図版74、第50図)

21・22は甕である。21の内面には圧痕が残る。口径26.0cmである。No.2の位置から出土している。23は小型の甕である。口径26.5cm、底径6.9cm、器高14.3cmである。No.2の位置から出土している。24は支脚である。器高10.7cmである。No.3の位置から出土している。

12号土坑 (第52図)

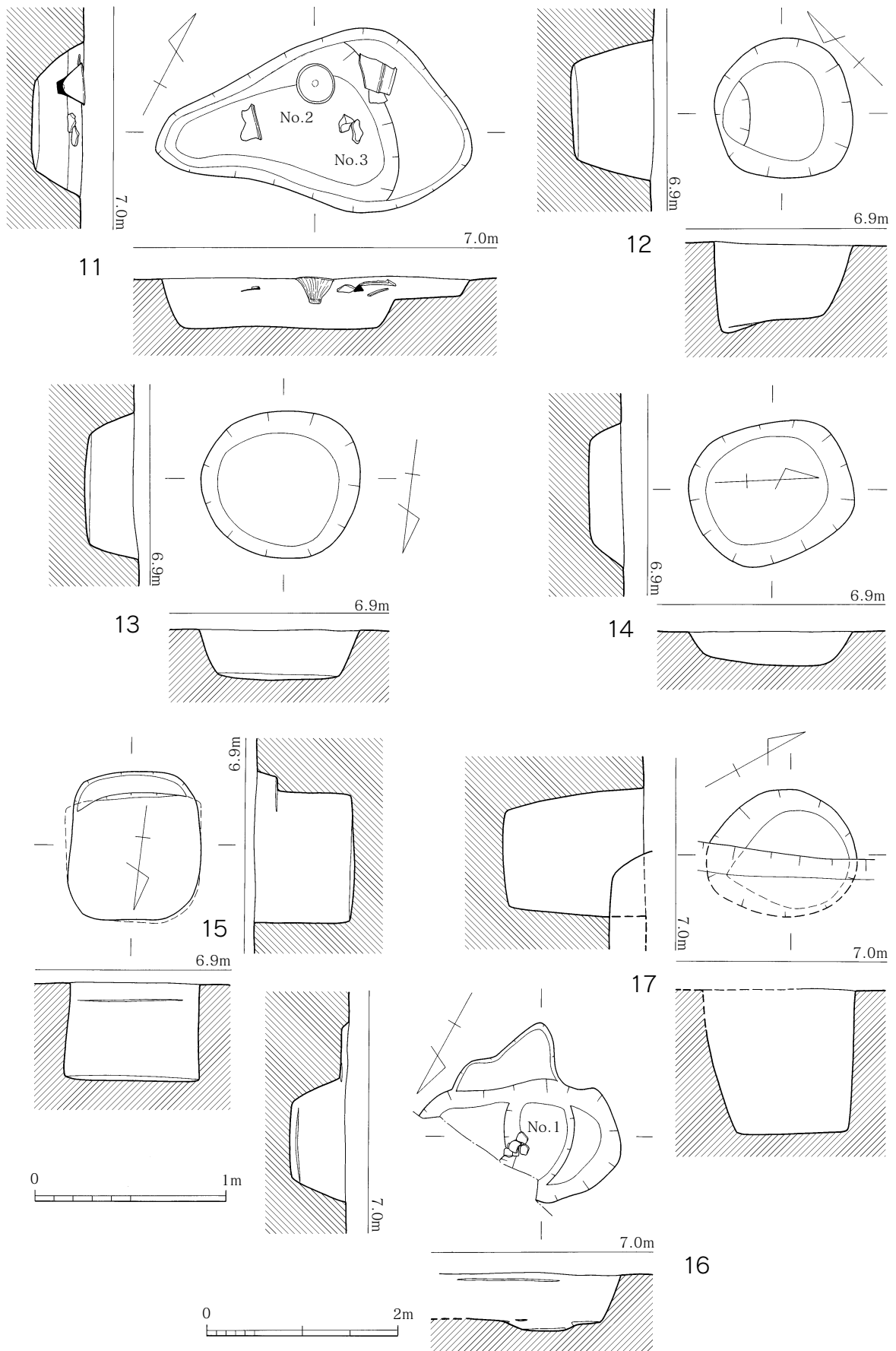
第一遺構面、調査区の北寄りで検出した。長軸0.7m、短軸0.7mのほぼ円形である。深さは0.4mで、北西部がやや深く掘られる。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第50図)

25は甕である。2条の突帯を貼り付ける。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。口径23.4cm。

13号土坑 (第52図)

第一遺構面、調査区の北寄りで検出した。長軸0.85m、短軸0.8mのほぼ円形を呈する。深さは0.25mである。図化に耐えうる遺物は出土していない。



第52図 6区11~17号土坑実測図 (16は1/60、他は1/30)

14号土坑 (第52図)

第一遺構面、調査区の中央付近で検出した。長軸0.85m、短軸0.7mの楕円形を呈する。深さは0.2mで、床面はほぼ平坦である。出土遺物はない。

15号土坑 (第52図)

第一遺構面、調査区の中央付近で検出した。長軸0.8m、短軸0.7mの隅丸方形を呈する。深さは0.5mで、南側にテラスが付く。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第50図)

26は甕の口縁である。2条の突帯を貼り付ける。27は甕の胴部片で、断面台形状の突帯に刻目を施す。

16号土坑 (図版22、第52図)

第一遺構面、調査区の北端部で検出した。1号住居跡と完全に重複して切られる。長軸2.4m、短軸2.0mで北側は調査区外へ延びる。深さは0.6mである。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第53図)

1は壺の底部である。やや上底で、底径6.6cmである。2は蓋である。端部は丸く仕上げる。口径26.0cmである。3～5は甕である。3は口径28.0cmである。4の底径は9.8cmである。No.1の位置から出土している。5はややレンズ状を呈する底部で、底径9.0cmである。混入の可能性が高い。6は混入の縄文晩期古閑式の浅鉢である。内外面の調整はミガキである。

17号土坑 (第52図)

第一遺構面、調査区の調査区の北端部で検出した。5号溝を切り、2号溝に切られる。長軸0.8m、短軸0.65mの楕円形を呈する。深さは0.65mで、床面はほぼ平坦である。図化に耐えうる遺物はない。

18号土坑 (図版22、第54図)

第一遺構面、調査区の北端部で検出した。3号住居、4号土坑、2号溝に切られる。長軸2.6m、短軸1.7mである。深さは0.2mで、部分的に深く掘り込まれる。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第53図)

7は甕である。2条の刻目突帯を貼り付ける。外面の調整はハケメである。

19号土坑 (第54図)

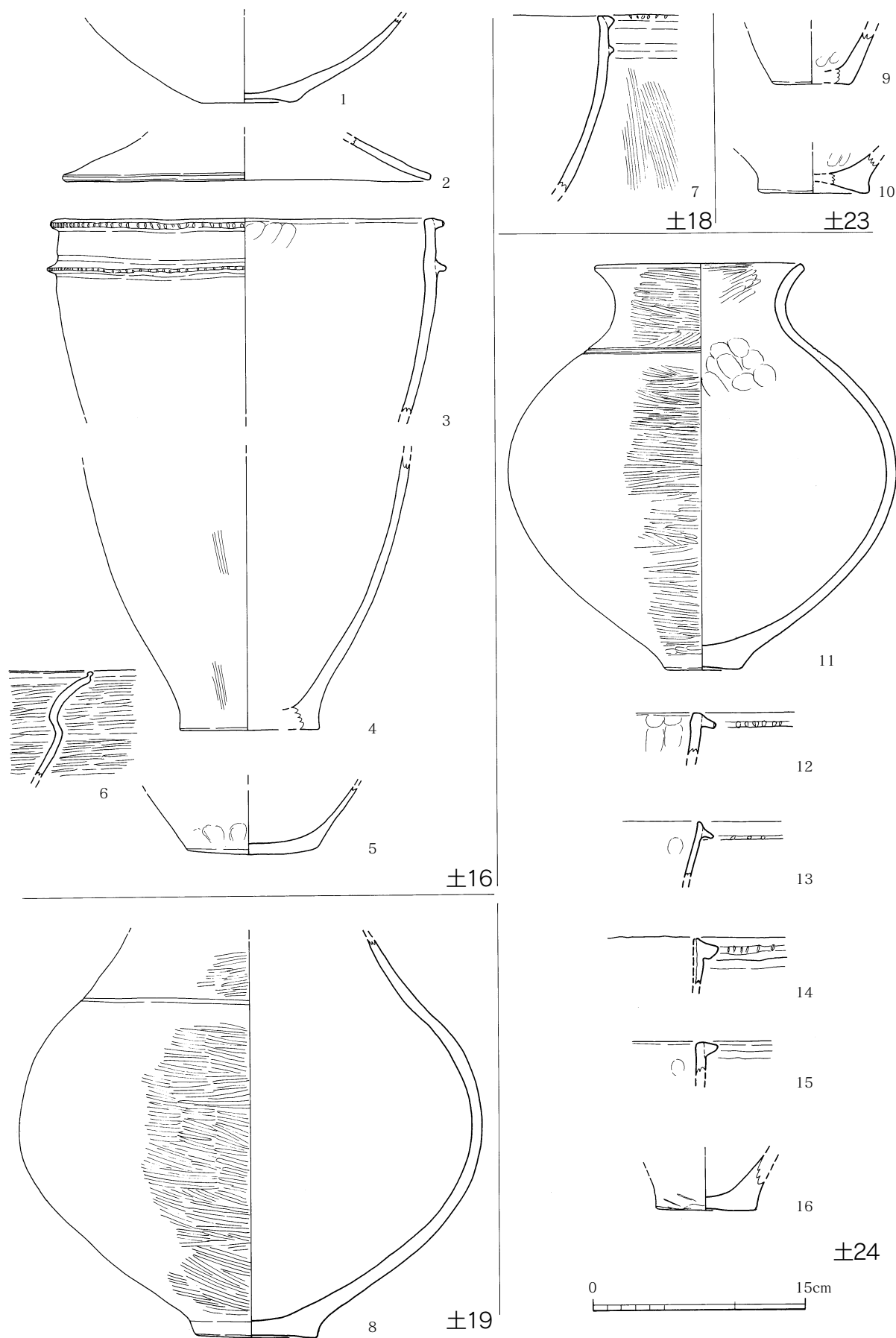
第一遺構面、調査区の北寄り検出した。長軸0.55m、短軸0.55mのほぼ円形を呈する。深さは0.4mで床面はほぼ平坦である。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (図版75、第53図)

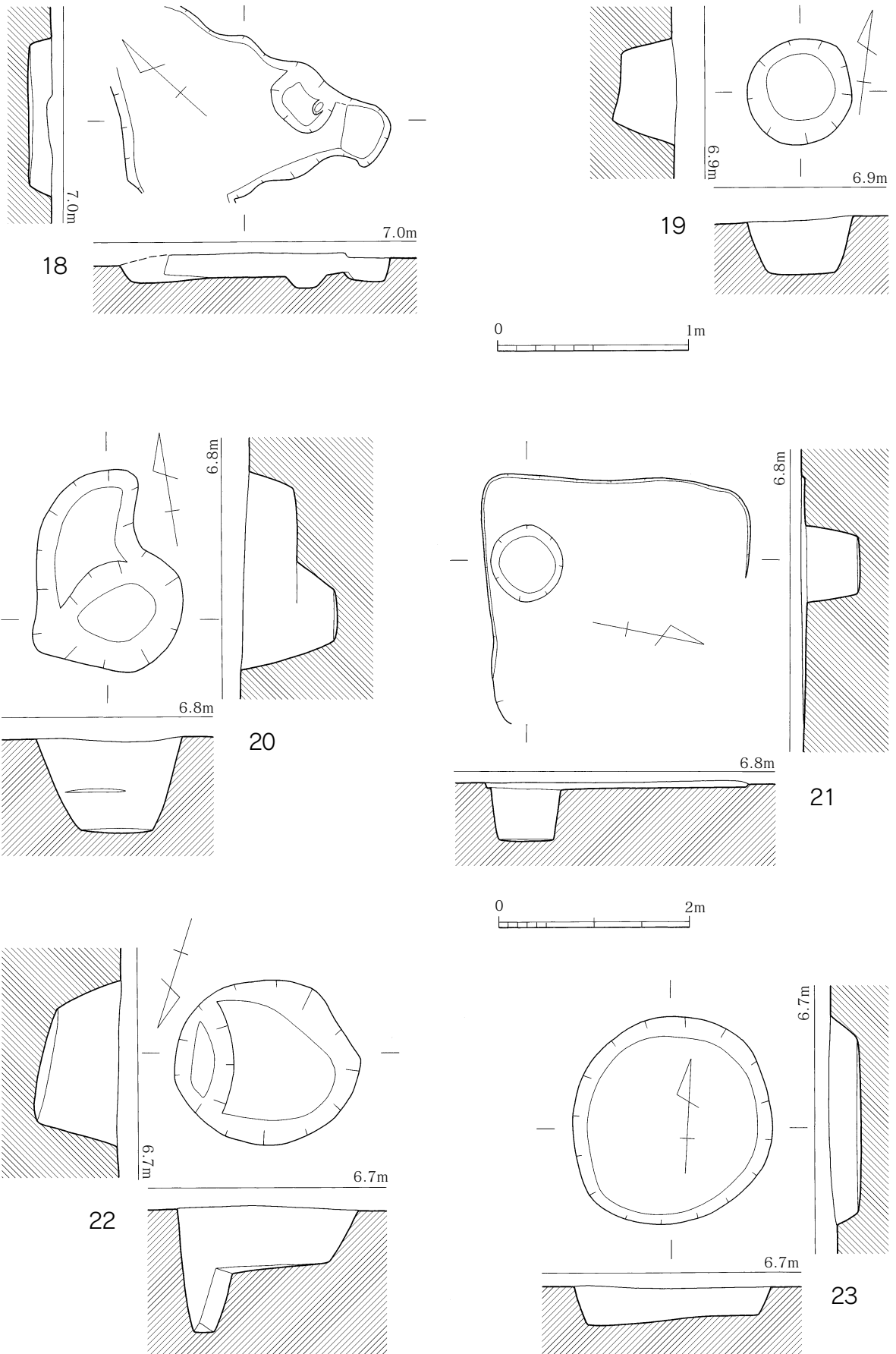
8は壺である。頸部と肩部の境に1条の沈線を巡らす。外面の調整はミガキ、内面の調整はナデである。胴部最大径32.6cm、底径8.6cmである。

20号土坑 (第54図)

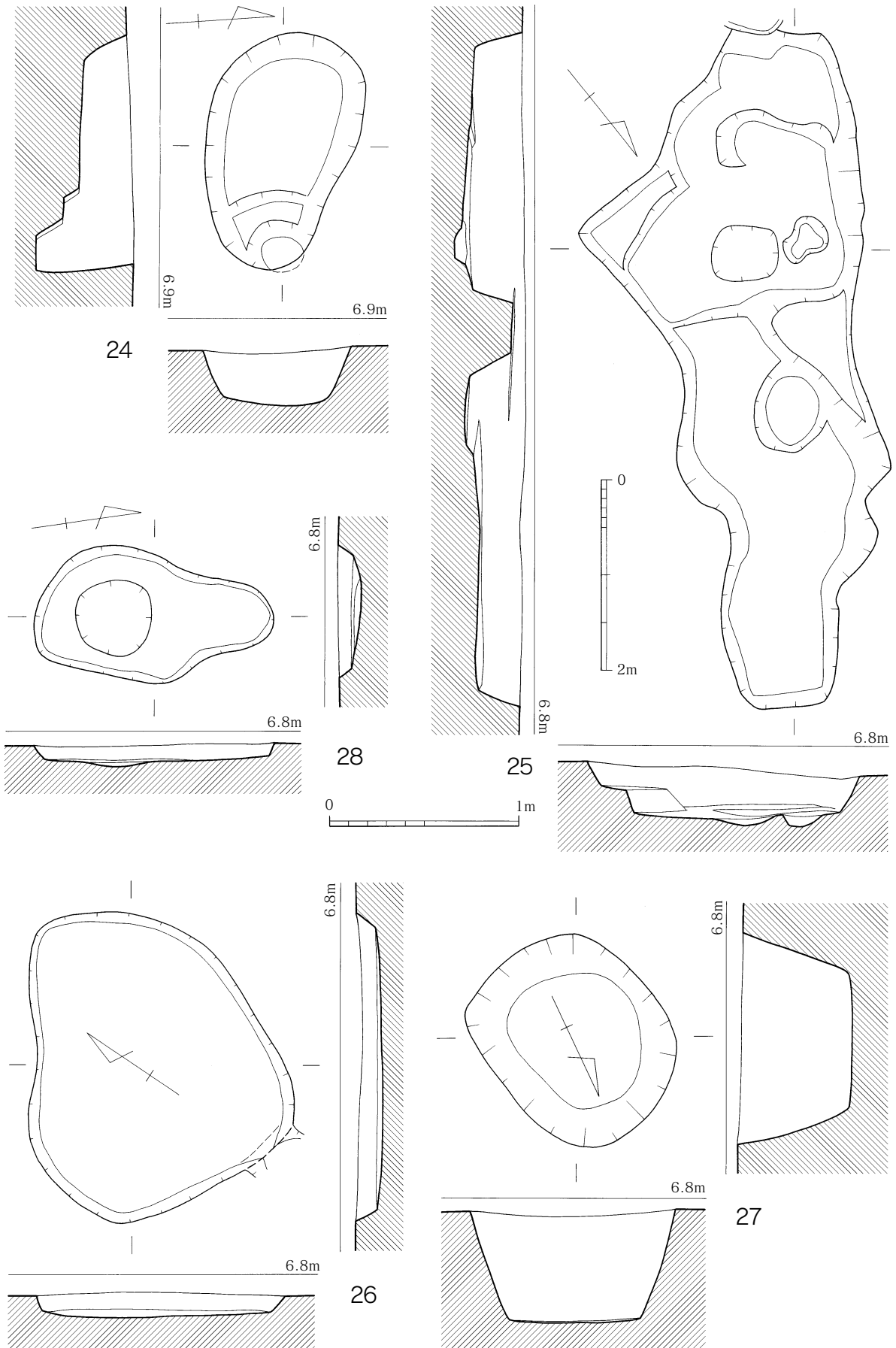
第二遺構面、調査区の北端部で検出した。長軸1.0m、短軸0.8mの不整な楕円形を呈する。深さは0.5mで、南側が一段深く掘り込まれる。出土遺物はない。



第53图 6区16·18·19·23·24号土坑出土土器实测图 (1/4)



第54図 6区18~23号土坑実測図 (18・21は1/60、他は1/30)



第55図 6区24~28号土坑実測図 (25・28は1/60、他は1/30)

21号土坑 (第54図)

第二遺構面、調査区の北端部で検出した。長軸2.8m、短軸2.6mで、北東部は消失している。深さは0.1mで、1ヶ所0.5m程のピットが掘られる。遺物は出土していない。

22号土坑 (図版23、第54図)

第二遺構面、調査区の北寄りで検出した。長軸1.0m、短軸0.9mの楕円形を呈する。深さは0.3mで東側は0.65mとかなり深く掘り込まれる。図化に耐えうる遺物は出土していない。

23号土坑 (第54図)

第二遺構面、調査区の北寄り検出した。長軸1.1m、短軸1.0mのほぼ円形を呈する。深さは0.2mで、床面はほぼ平坦である。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第53図)

9・10は甕の底部である。9は底径5.4cmである。10はやや上底で、底径8.0cmである。

24号土坑 (第55図)

第二遺構面、調査区の北寄り検出した。25号土坑と完全に重複して切られる。長軸1.25m、短軸0.8mの不整な楕円形を呈する。深さ0.3mで、東側が次第に深く掘られる。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (図版75、第53図)

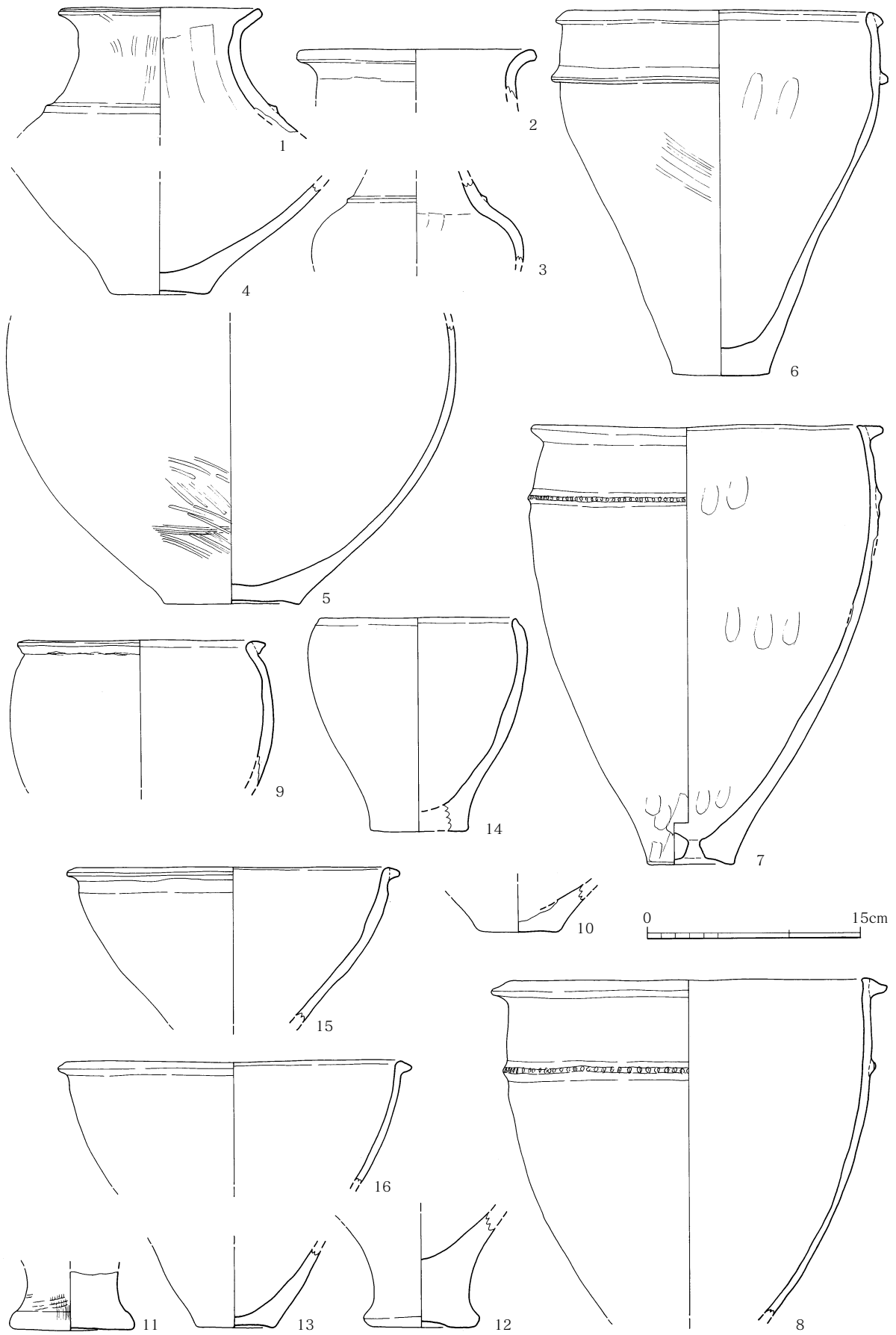
11は壺である。口縁は緩やかに外反する。頸部と肩部の境に2条の沈線が施される。段は付かない。外面の調整は横方向のミガキ、内面の調整はナデである。口径14.7cm、胴部最大径27.4cm、底径5.5cm、器高29.0cmである。12～16は甕である。12～14は刻目突帯を貼り付けるものである。15には刻目が付かない。16の外面には工具痕が残る。底径7.2cmである。

25号土坑 (図版23、第55図)

第二遺構面、調査区の北寄り検出した。24号土坑を切り、26号土坑に切られる。長軸6.0m、短軸3.0mの不整形である。深さ0.6mで、部分的に深く掘り込まれる。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (図版75、第56図)

1～5は壺である。1は口縁の内側を肥厚させるもので、端部を沈線状に仕上げる。頸部と肩部の境に突帯を貼り付ける。口径14.6cmである。2の口径は17.0cmである。3は肩部に突帯を貼り付けるものである。4の底径は6.0cmである。5の外面はミガキである。胴部最大径31.8cm、底径9.6cmである。6～13は甕である。6は2条の突帯を貼り付ける甕である。口径23.4cm、底径6.8cm、器高26.0cmである。7は焼成後に穿孔を施す甕である。内外面にススが付着する。口径23.0cm、底径6.2cm、器高31.4cmである。8の口径は28.0cmである。9は小型の甕で口径17.6cmである。10の底径は6.0cmである。11の底径は8.8cmである。12はやや上底で、底径は8.2cmである。13は底径5.7cmである。14はわずかに内湾する鉢である。口径14.0cm、底径6.8cm、器高15.3cmである。15・16は鉢である。15の口径は23.6cm、16の口径は25.0cmである。



第56图 6区25号土坑出土土器实测图 (1/4)

26号土坑 (第55図)

第二遺構面、調査区の北寄り検出した。25号土坑を切る。長軸1.6m、短軸1.4mの楕円形を呈する。深さは0.1mで、床面はほぼ平坦である。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (図版75、第57図)

1は蓋である。つまみ部径は7.2cmである。2～11は甕である。2の口径は20.0cmである。3の口径は26.0cmである。4～7は口縁下に沈線を巡らすものである。4は口縁下部に突帯貼り付け時の痕跡が強く残る。口径23.5cmである。5の口径は20.0cmである。6の口径は27.6cmである。7の口径は37.0cmである。8の口径は36.4cmである。9はやや上底気味の底部で、底径7.2cmである。10の底径は7.7cmである。11の底径は6.8cmである。12は小型の鉢である。口径10.8cmである。

27号土坑 (第55図)

第二遺構面、調査区の北寄り検出した。長軸1.1m、短軸0.9mの楕円形を呈する。深さは0.6mで、床面は平坦である。図化に耐えうる遺物は出土していない。

28号土坑 (第55図)

第二遺構面、調査区の北寄り検出した。長軸2.5m、短軸1.4mの楕円形を呈する。深さは0.25mで、中央部分が深く掘り込まれる。図化に耐えうる遺物は出土していない。

29号土坑 (第58図)

第二遺構面、調査区の中央付近で検出した。長軸1.5m、短軸1.3mの不整形を呈する。深さは0.3mである。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第57図)

13は壺である。外反する口縁はわずかに肥厚したように仕上げている。頸部内面には成形時の縦方向の圧痕が残る。口径17.0cm、胴部最大径32.8cmである。

30号土坑 (第58図)

第二遺構面、調査区の調査区の中央付近で検出した。長軸0.8m、短軸0.7mのほぼ円形を呈する。深さは0.45mで、南側部分が一段深く掘り込まれる。遺物は出土していない。

31号土坑 (第58図)

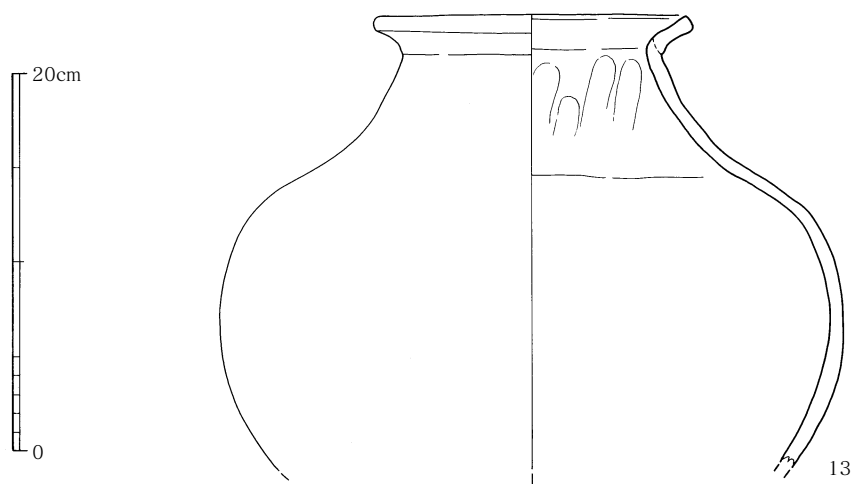
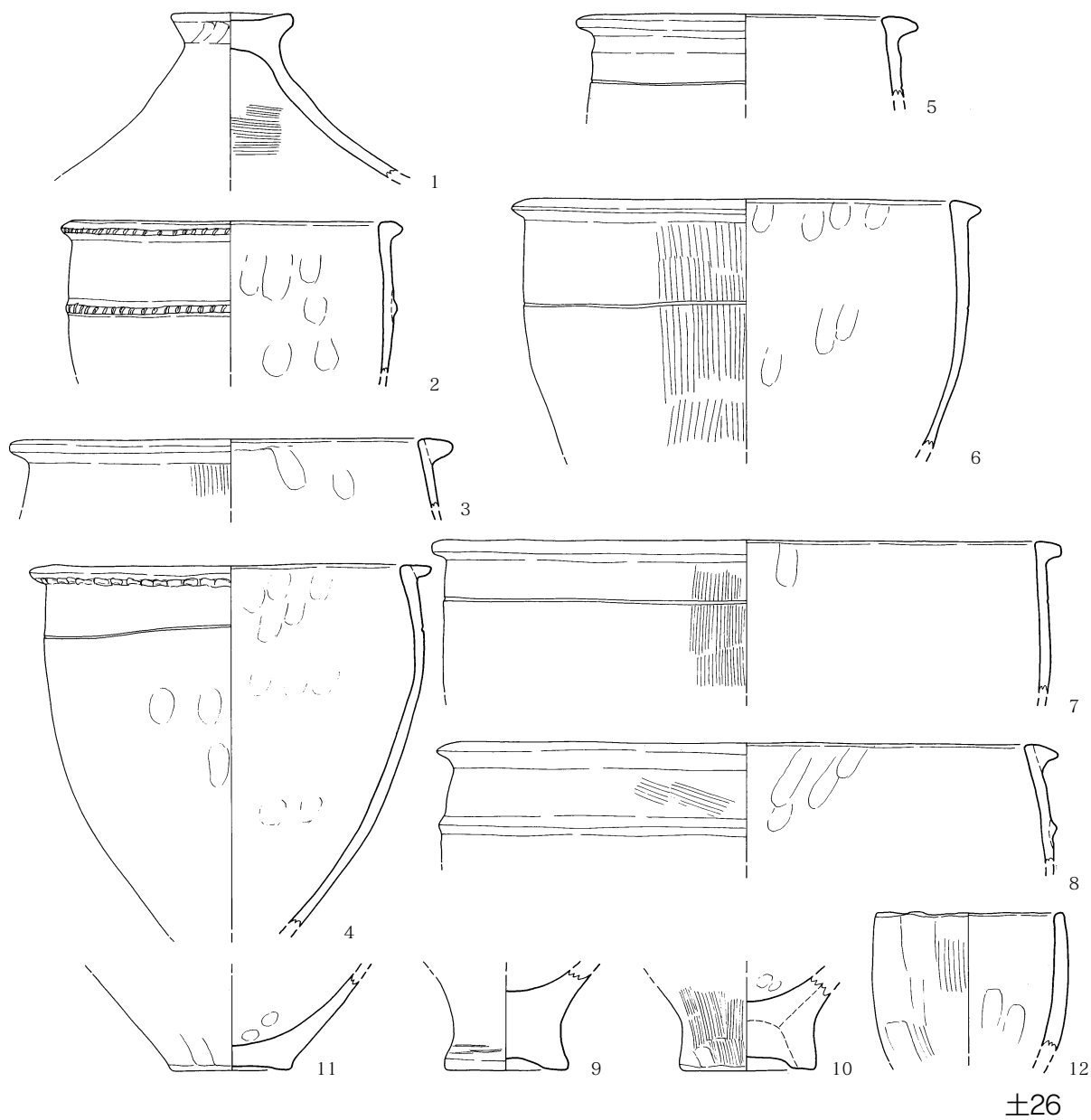
第二遺構面、調査区の調査区の中央付近で検出した。長軸1.8m、短軸1.0mの長楕円形を呈する。深さは約0.06mで、床面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

32号土坑 (図版23、第58図)

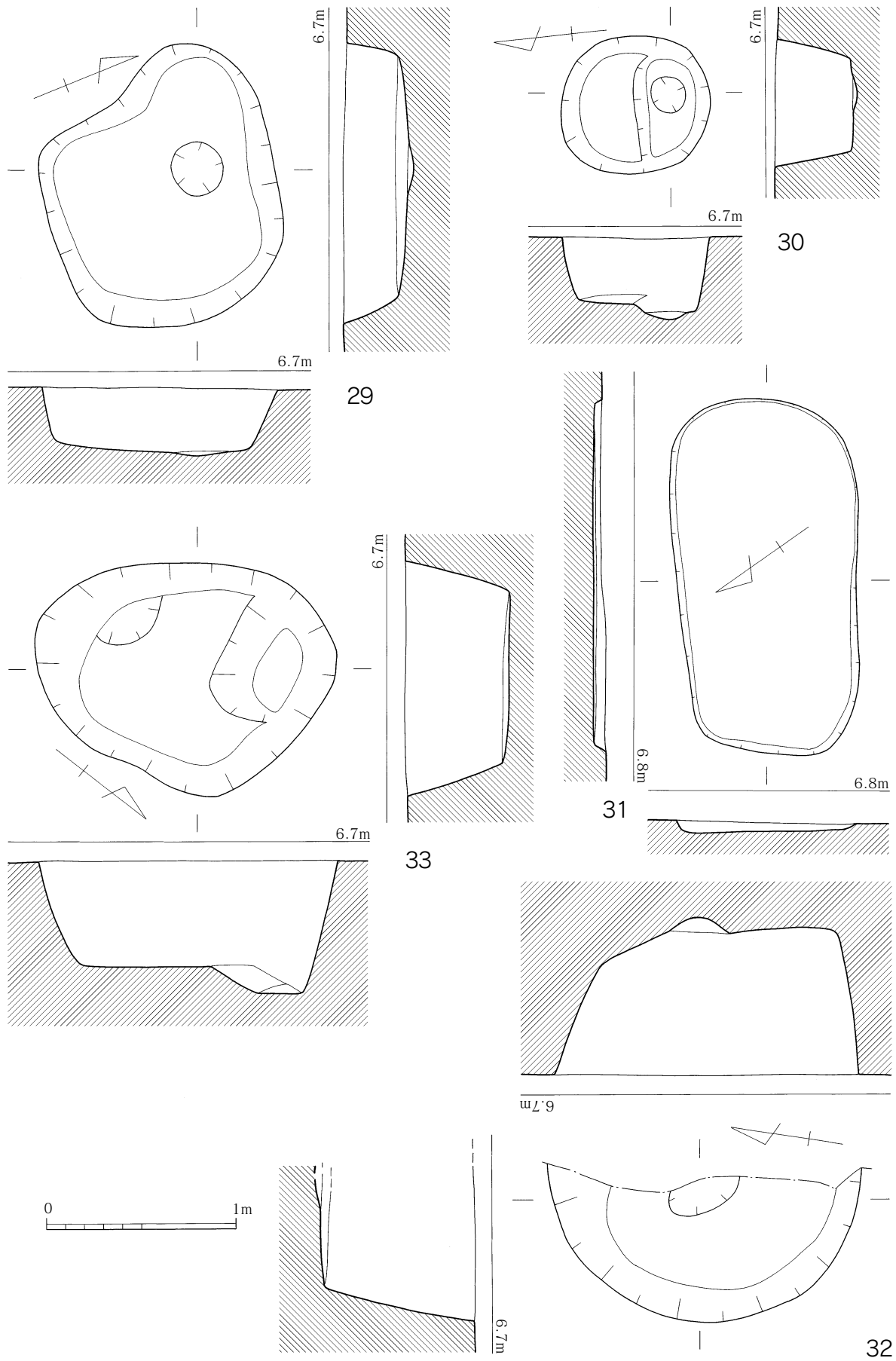
第二遺構面、調査区の調査区の中央付近で検出した。長軸1.6m、短軸0.8m+ α で東側は調査区外へ延びる。深さは0.7mで、部分的に深く掘り込まれる。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (図版75・76、第59図)

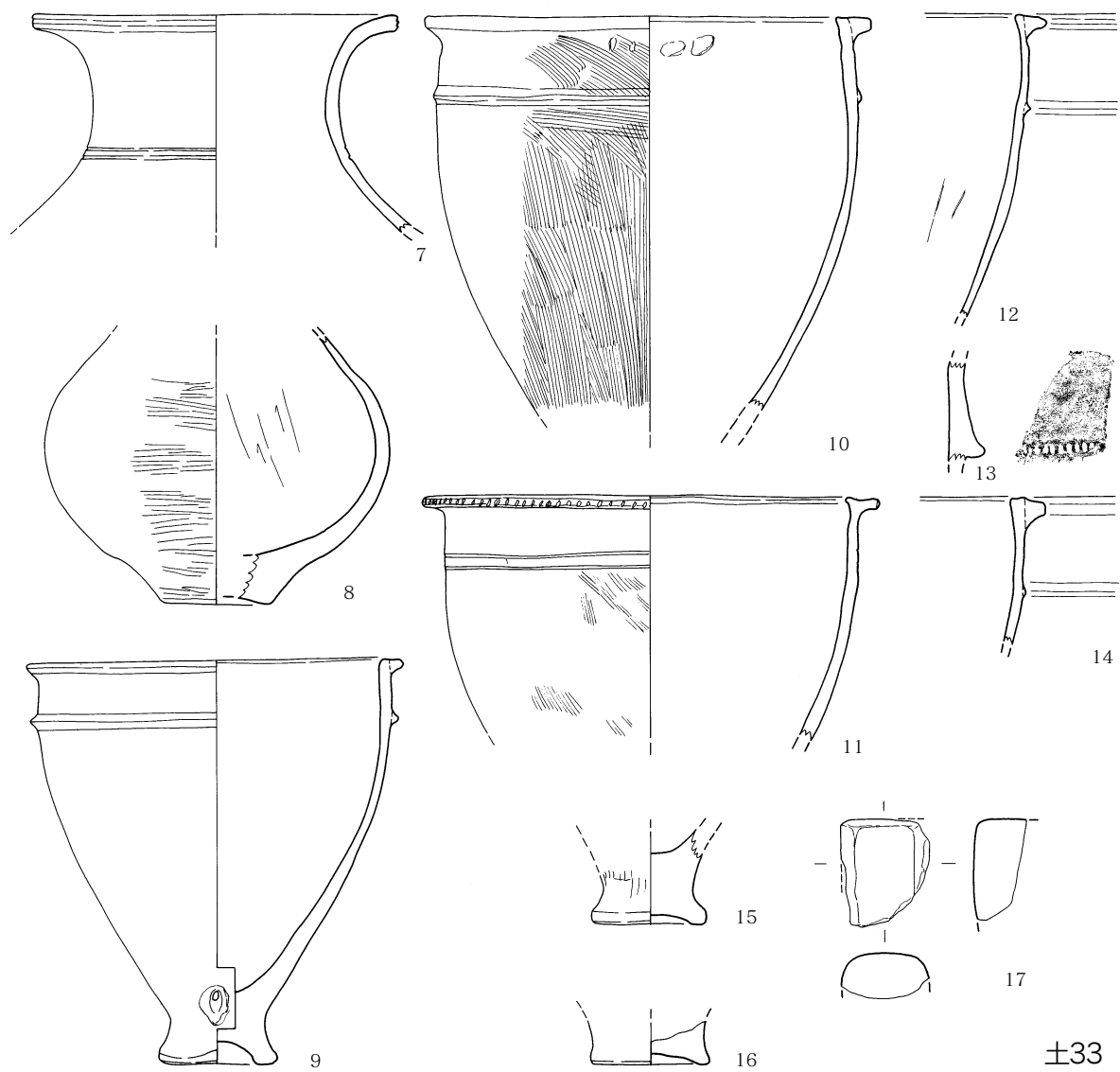
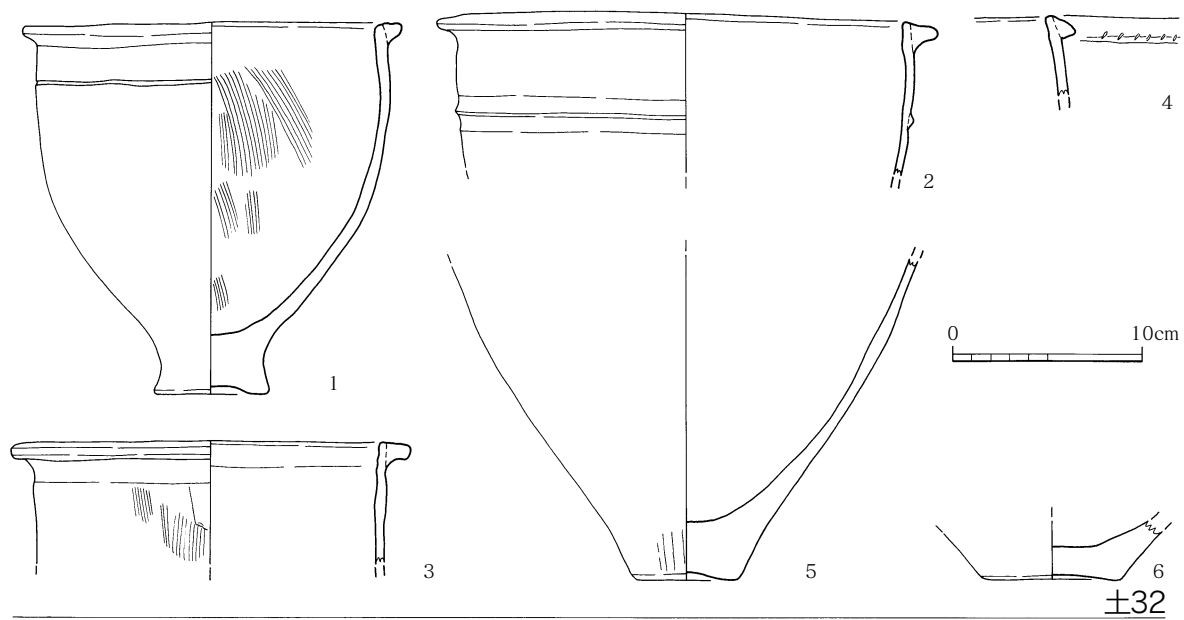
1～6は甕である。1は口縁下に沈線を施す甕で、口径20.0cm、底径6.0cm、器高20.0cmである。2の口径は26.6cmである。3の口径は21.0cmである。5の底径は5.0cmである。6の底径は7.2cmである。



第57图 6区26·29号土坑出土土器实测图 (1/4)



第58图 6区29~33号土坑实测图 (1/30)



第59图 6区32·33号土坑出土土器实测图(1/4)

33号土坑 (図版24、第58図)

第二遺構面、調査区の調査区の中央付近で検出した。長軸1.6m、短軸1.2mの楕円形を呈する。深さは0.6mで、北側は一段深く掘り込まれる。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (図版76、第59図)

7・8は壺である。7は口縁が大きく外反する壺である。頸部と肩部の境に2条の沈線を施す。口径20.2cmである。8の外面の調整はミガキ、内面の調整はナデである。胴部最大径19.2cm、底径5.8cmである。9～16は甕である。9は焼成後に底部の脇を穿孔する甕である。口径21.6cm、底径6.6cm、器高22.9cmである。10は突帯貼り付け後にハケメを施す。口径25.0cmである。11は口縁下に2条の沈線を施すもので、口径25.6cmである。15の底径は6.3cmである。16の底径は6.7cmである。17は支脚で、角柱に近い形状である。

34号土坑は欠番である。

35号土坑 (第60図)

第二遺構面、調査区の北寄りで検出した。長軸0.6m、短軸0.4mの楕円形をする。深さは0.35mで、床面はほぼ平坦である。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第61図)

1は壺で、胴部最大径25.6cm、底径7.0cmである。2は甕の口縁部であろうか。3は甕で、口径25.2cm。

36号土坑 (第60図)

第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。長軸0.8m、短軸0.75mのほぼ円形を呈する。深さは0.15mで、床面はほぼ平坦である。図化に耐えうる遺物は出土していない。

37号土坑 (第60図)

第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。長軸1.0m、短軸0.7mの楕円形を呈する。深さは0.15mで、平面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

38号土坑 (第60図)

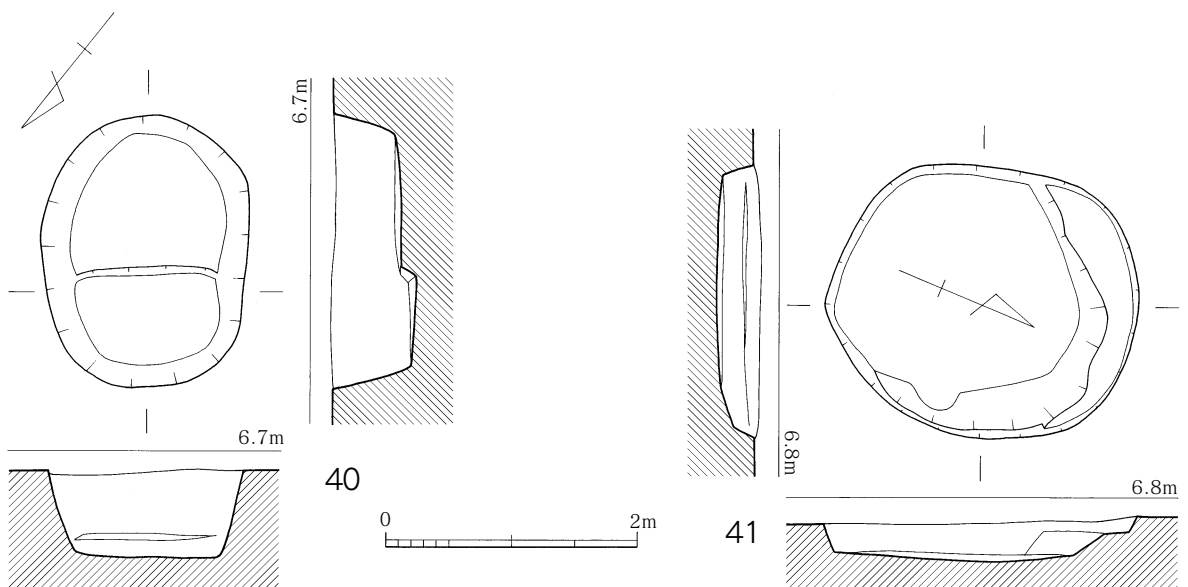
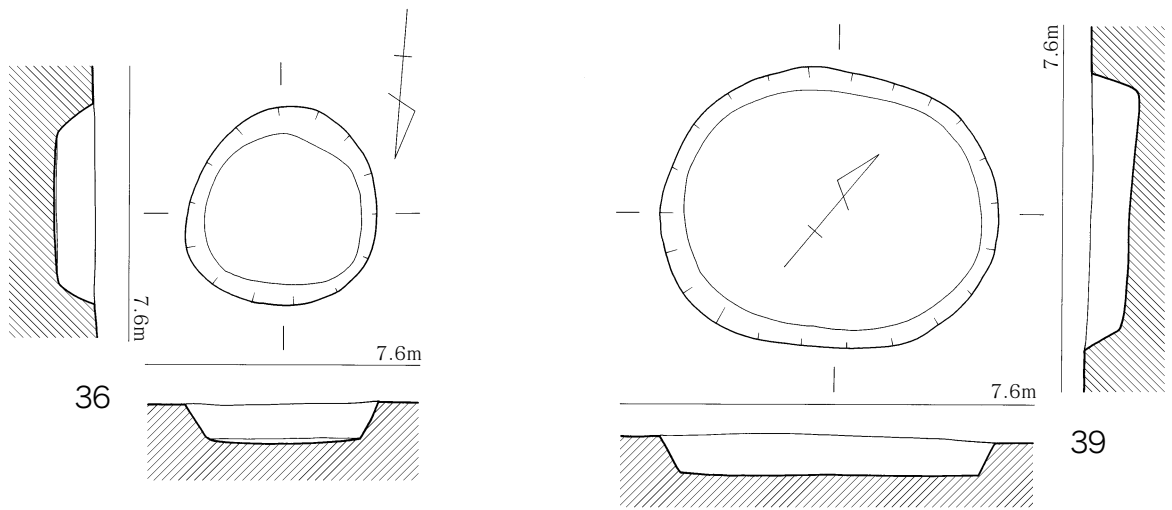
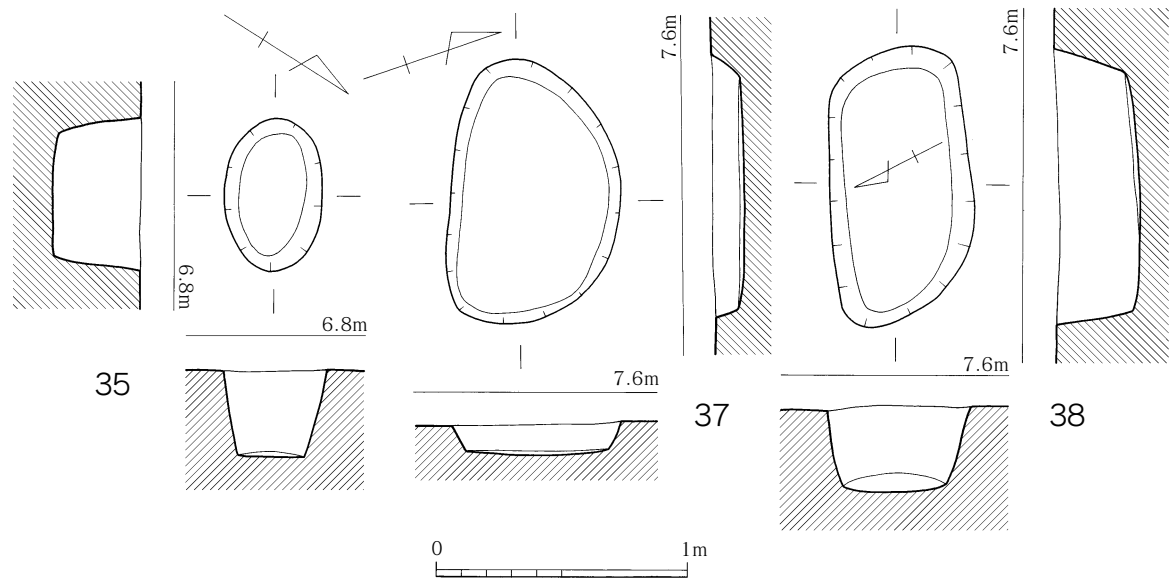
第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。長軸1.1m、短軸0.6mの長楕円形を呈する。深さは0.3mで、床面はほぼ平坦である。遺物は土器が出土している。

出土土器 (第61図)

4の器種は不明であるが、脚部である。内外面の調整は摩滅のため不明である。

39号土坑 (第60図)

第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。長軸1.3m、短軸1.1mの楕円形を呈する。深さは0.2mである。遺物は弥生土器が出土している。



第60図 6区35~41号土坑実測図 (40・41は1/60、他は1/30)

出土土器 (第61図)

5・6は甕の口縁部で、いずれも口縁に突帯を貼り付ける。7は甕の胴部で、刻目突帯を貼り付ける。

40号土坑 (図版24、第60図)

第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。長軸2.2m、短軸1.6mの楕円形を呈する。深さは0.6mで、北側が一段深く掘り込まれる。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第61図)

11は壺の底部である。底径7.0cmである。12～19は甕である。12の口径は27.3cmである。13の口径は23.6cmである。14は底径7.1cmである。19の底径は6.7cmである。

41号土坑 (第60図)

第二遺構面、調査区の調査区の中央付近で検出した。長軸2.4m、短軸2.1mの楕円形を呈する。深さは0.3mで、中央部分が深くなる。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第61図)

9・10は口縁に突帯を貼り付けるものである。10は口縁端部を角ばって仕上げ、外端部に直接、刻目を施すものである。

(4) 溝

1号溝 (第39図)

第一遺構面、調査区の北端部で検出した。1・2・4号住居跡、2・5号溝を切り、2号土坑に切られる。平面形は弧状を描き、幅0.7m、深さ0.2mで、断面逆台形を呈する。西側は調査区外へ延びる。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第62図)

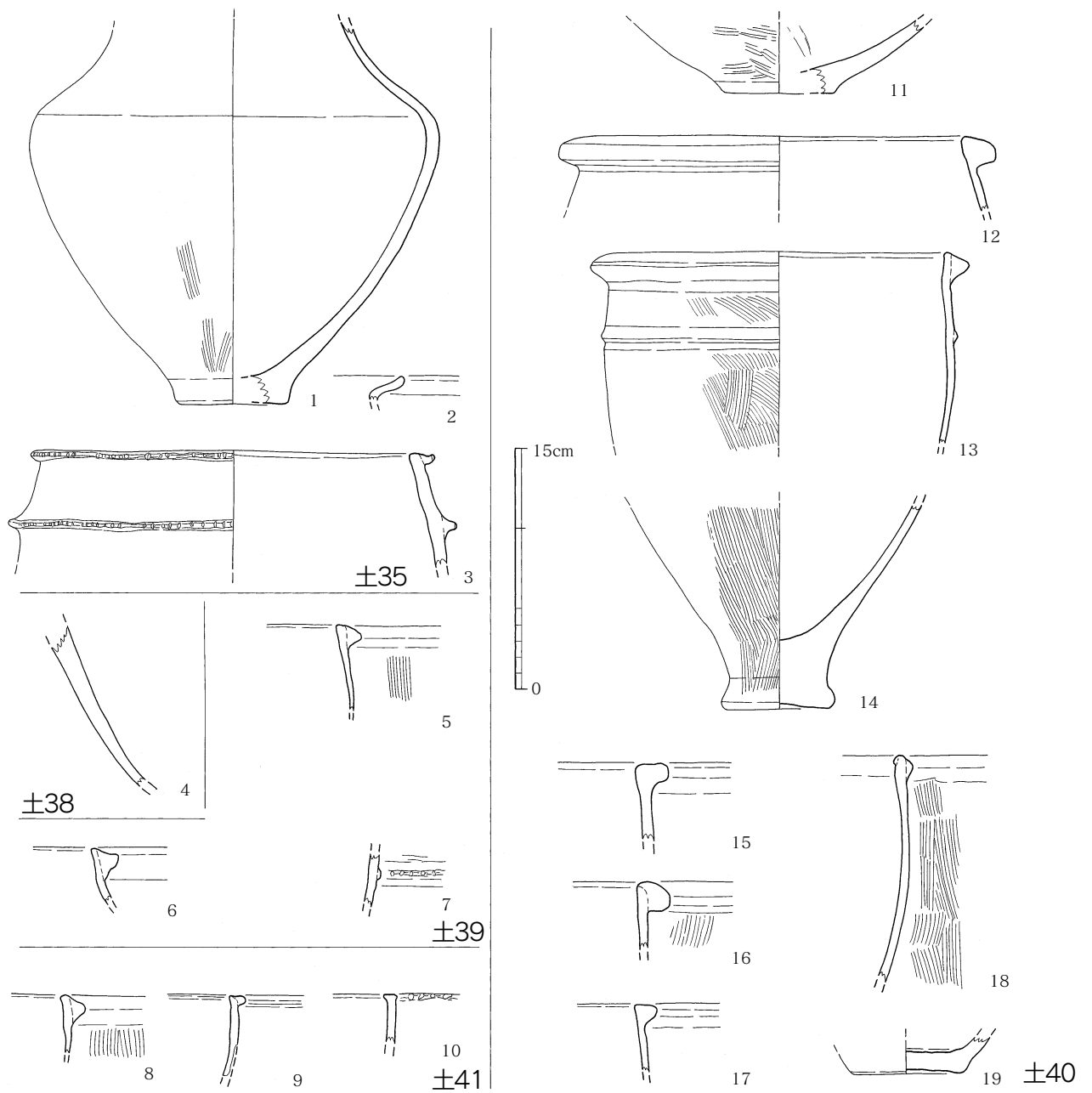
1～6は甕である。1の口径は25.0cmである。2の口径は22.0cmである。3の口径は28.0cmである。4の口径は30.0cmである。6の底径は6.8cmである。

2号溝 (第39図)

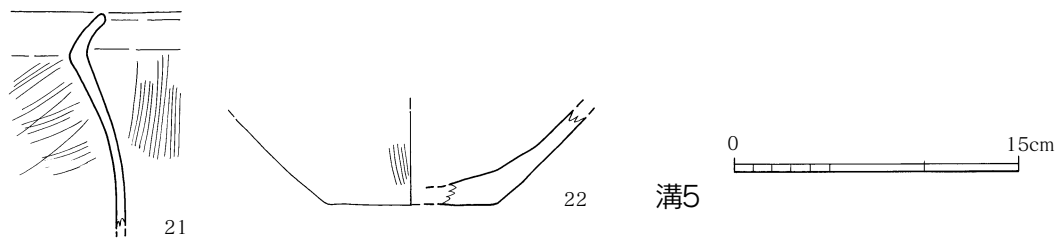
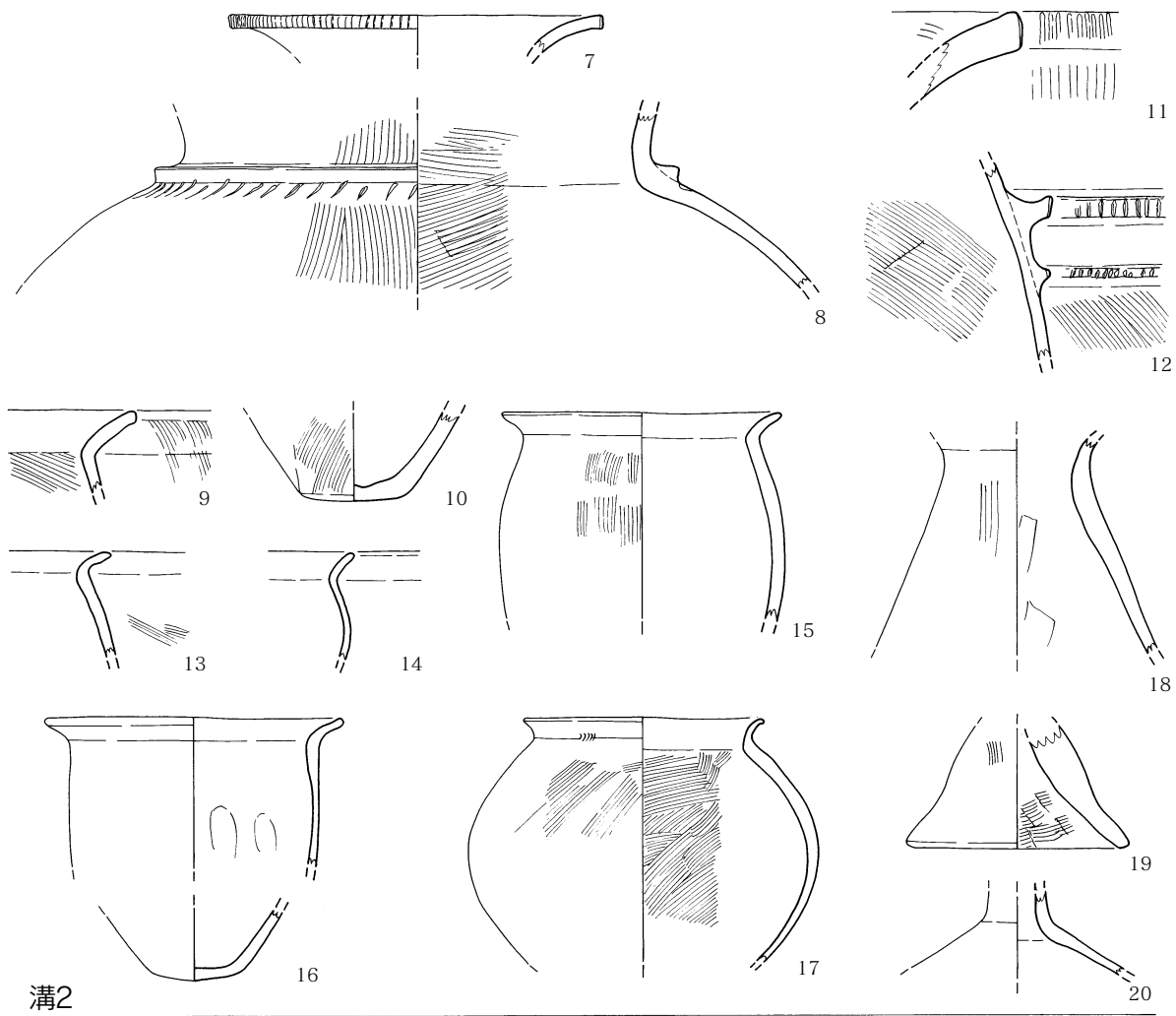
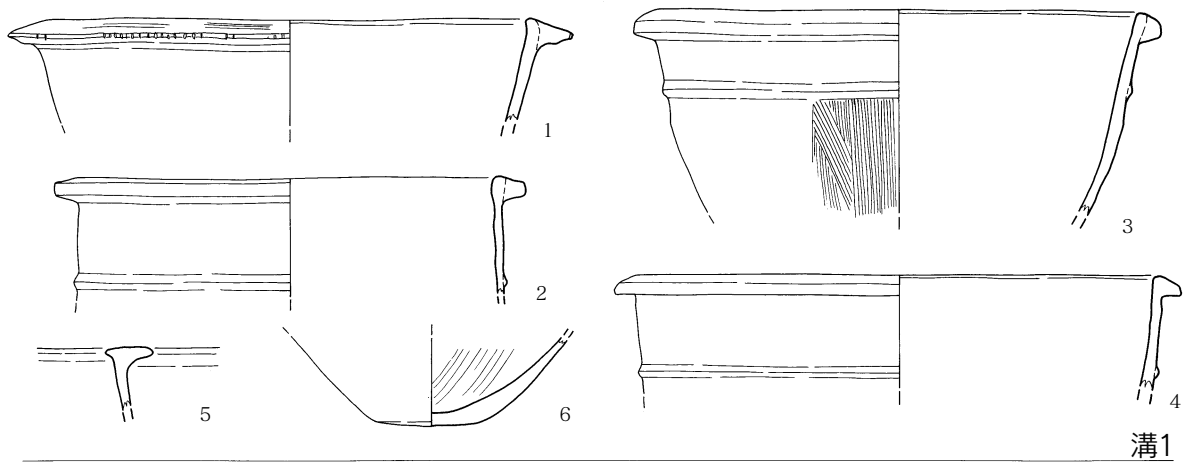
第一遺構面、調査区の北端部で検出。17・18号土坑を切り、3号住居跡、5号土坑、1号溝に切られる。幅0.9m、深さ0.2mで、断面逆台形を呈する。両端は調査区外へ延びる。弥生土器が出土している。

出土土器 (第62図)

7は壺の口縁で、端部に刻目が施される。口径20.0cmである。8は大型の壺で頸部と肩部の境に突帯が貼り付けられ、その下部に刻目が施される。9～12は甕である。9はわずかに外反する口縁の甕で、内外面の調整はハケメである。10はレンズ状を呈する底部で、底径5.8cmである。11は大型甕の口縁部で、端部に刻目を施す。12は大型甕の胴部で2条の突帯を貼り付ける。13～16は小型の甕で、15の口径は15.0cmである。16の口径は16.0cm、底径は5.0cmである。17は鉢で、口径13.0cm、胴部最大径18.8cmである。18・19は器台である。19の底径は12.0cmである。20の器種は不明であるが、脚部であろう。



第61图 6区35·38~41号土坑出土土器实测图 (1/4)



第62图 6区1·2·5号沟出土土器实测图 (1/4)

3号溝 (第39図)

第一遺構面、調査区の北寄りで検出した。10号土坑を切り、8号土坑に切られる。幅0.7m、深さ0.1mで、断面逆台形を呈する。西側は調査区外へ延び、東側は南へ直角に折れて自然に消滅する。遺物は出土していない。

4号溝 (第39図)

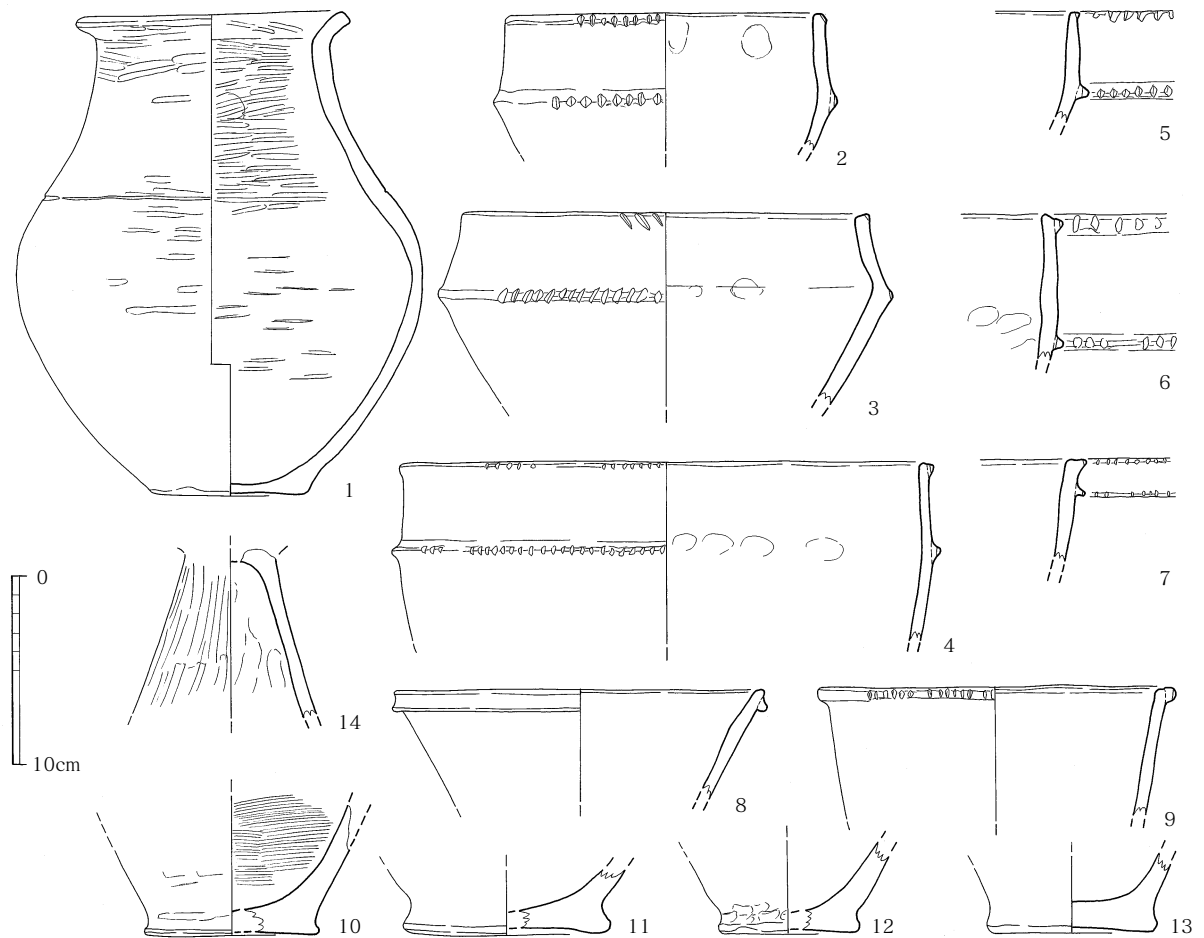
第一遺構面、調査区の中央付近で検出した。幅0.2m、深さ0.1mで、断面逆台形を呈する。両端は自然に消滅する。遺物は出土していない。

5号溝 (第39図)

第一遺構面、調査区の北端部で検出した。4号住居跡、17号土坑、1・2号溝に切られる。幅0.8m、深さ0.15mの断面逆台形を呈する。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第62図)

21は甕の口縁部である。内外面の調整はハケメである。22は甕の底部である。底径9.0cmである。



第63図 6区南端部おち出土土器実測図 (1/4)



第64图 6区遺構面出土土器実測図 (1/4)

(5) 南端部おち出土土器 (図版25・76、第63図)

1は完形で出土した壺である。緩い外反の口縁部で、頸部と肩部の境に1条の沈線が巡らされる。内外面の調整はミガキである。口径14.6cm、胴部最大径21.6cm、底径8.6cm、器高25.7cmである。2～13は甕である。2は口縁端部と胴部突帯に刻目をつけるもので、口径16.6cmである。3は屈曲する甕で、口径21.6cmである。4の口径は27.4cmである。8は大きくすぼまる甕で、口縁からやや下った位置に突帯を貼り付ける。口径19.8cmである。9の口径は19.0cmである。10の内面は横方向のハケメである。底径9.2cmである。11の底径は11.0cmである。12の底径は7.0cmである。13の底径は9.0cmである。

(6) 遺構面等出土土器 (第64図)

1は壺である。外反する口縁をわずかに肥厚させる。2～8は弥生前期から中期にかけての甕である。3の口径は22.0cmである。4の口径は25.0cmである。5の口径は25.0cmである。6の口径は30.0cmである。7の口径は32.0cmである。8の口径は29.0cmである。9～11は弥生後期の甕である。9の口径は29.0cmである。10の口径は29.6cmである。11の口径は28.0cmである。12～18は甕の底部である。12の底径は7.0cmである。13の底径は7.0センチである。14の底径は7.0cmである。15の底径は8.1cmである。16の底径は7.7cmである。17の底径は8.0cmである。18の底径は8.0cmである。

5 7区の調査の内容 (図版26～28、第65図)

7区は6区の北半の地形が上がって北部分の続きで、調査区の中でも最も遺構密度が濃い調査区であった。調査前に倉庫が建てられていたため、調査区の中央付近はコンクリートの基礎により大きく破壊されていたが、多くの遺構が検出された。遺構面は2面に分かれ、第一遺構面は弥生後期～古墳前期を中心とし、第二遺構面は弥生前期を中心としている。23棟の竪穴住居跡が複雑に切り合った状態で検出されたほか、土坑101基、溝10条を検出した。

(1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡 (図版29、第66図)

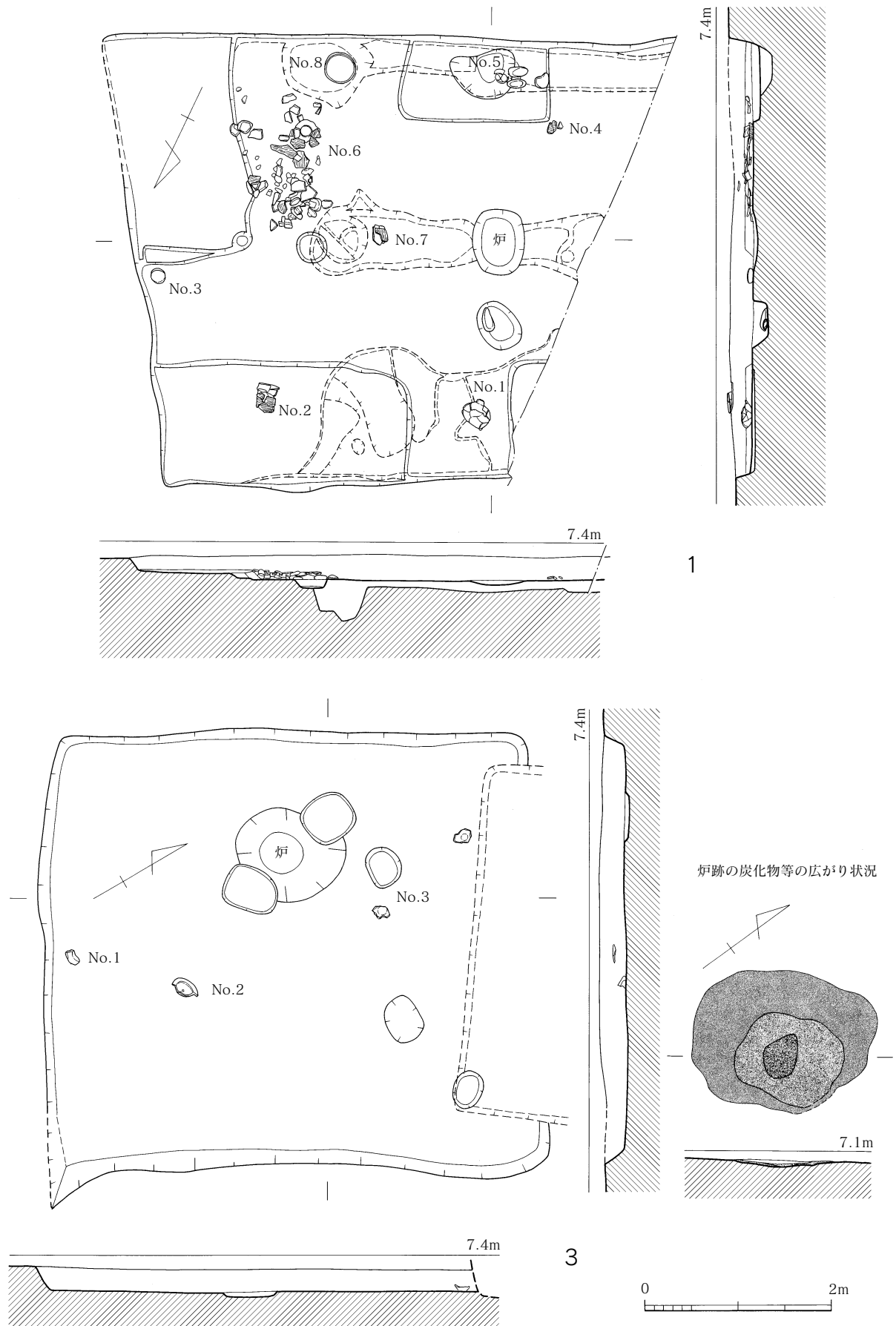
第一遺構面、調査区の北端部で検出した。2号住居跡を切る。西側は調査区外へ延びる。長軸6.1m+ α 、短軸4.8mの方形を呈する。深さは約0.1mである。中央に炭化物の集積した炉跡を検出している。炉の東側には柱穴を検出しており、これが主柱穴になるであろう。その掘り方は炉跡へ延びる溝状の土坑につながっており、更に西へと延びるため、その延長上にもう一つの主柱穴があるものと思われる。南壁中央に屋内土坑が掘られ、No.5の土器が出土している。また、主柱穴に並ぶ位置にも土坑が掘られ、No.8の土器が出土している。北壁及び南東隅で削り出しのベッド状遺構を検出している。遺物は床面に近い状態でまとまって出土している。

出土土器 (図版76・77、第67・68図)

1～4は壺である。1は大きく開く口縁端部に刻目を施すものである。底部はレンズ状を呈する。口径22.0cm、胴部最大径26.6cm、底径5.9cm、器高35.9cmである。No.6の位置から出土している。2も同様の器形であろうか、口径19.8cmである。3は内外面ハケメ調整で、口径16.8cmである。4は大型の壺で、口縁端部に竹管文を施す。口径45.8cmである。5～21は甕である。5～10は端部を角ばって仕上げるものである。6・7は端部に刻目を施す。8はあまり外反しない口縁である。10の内面にはハケメが明瞭に残る。11～13は口縁端部を丸く仕上げている。14～19は断面レンズ状を呈する底部



第65図 7区遺構配置図 (1/300)



第66図 7区1・3号竪穴住居跡実測図 (1/60)

である。14の底径は7.0cmで、No.6の位置から出土している。15の底径は4.5cmで、No.6の位置から出土している。16の底径は6.4cmである。17の底径は8.4cmで、No.6の位置から出土している。18の内面には圧痕が残る。底径8.0cmである。19の外面には工具痕が残る。20は大型の甕で口径59.4cm、胴部最大径59.6cmである。21は平底の底部で混入の可能性がある。21は底径6.0cmである。22・23は小型の甕である。22は口径20.0cm、器高21.5cmである。No.1の位置から出土している。23は口径13.2cm、器高17.4cmである。No.7の位置から出土している。24～29は屈曲する鉢である。24の口径は13.0cmである。25の14.0cmである。No.6の位置から出土している。26は口径13.6cmである。貼床下層から出土している。27の口径は15.8cmである。28は口径11.8cm、器高8.5cmである。No.5の位置から出土している。29は口径5.8cm、器高5.0cmと小型である。30～37は小型の鉢である。30の口径は11.4cm、器高4.0cmである。31は口径12.0cm、器高4.0cmである。33は口径12.0cm、器高5.8cmである。34は口径15.0cm、器高5.0cmである。No.6の位置から出土している。36の口径は13.0cm、器高は6.0cmである。37は口径16.4センチである。38・39は大型の鉢である。38の口径は26.3cm、器高は12.4cmである。No.8の位置から出土している。39の口縁端部は内傾する。40・41は高杯の口縁端部であろうか。42は高杯の脚基部である。No.6の位置から出土している。43は高杯の脚部で、底径24.5cmである。No.6の位置から出土している。44～50は器台である。46の口径は16.4cmである。47の底径は17.5cmである。48の口径は12.0cmである。No.6の位置から出土している。49の口径は16.9cmである。51は器種は不明であるが口縁部である。外面をタタキで仕上げる。52は器種不明の口縁端部である。

2号竪穴住居跡 (図版30、第70図)

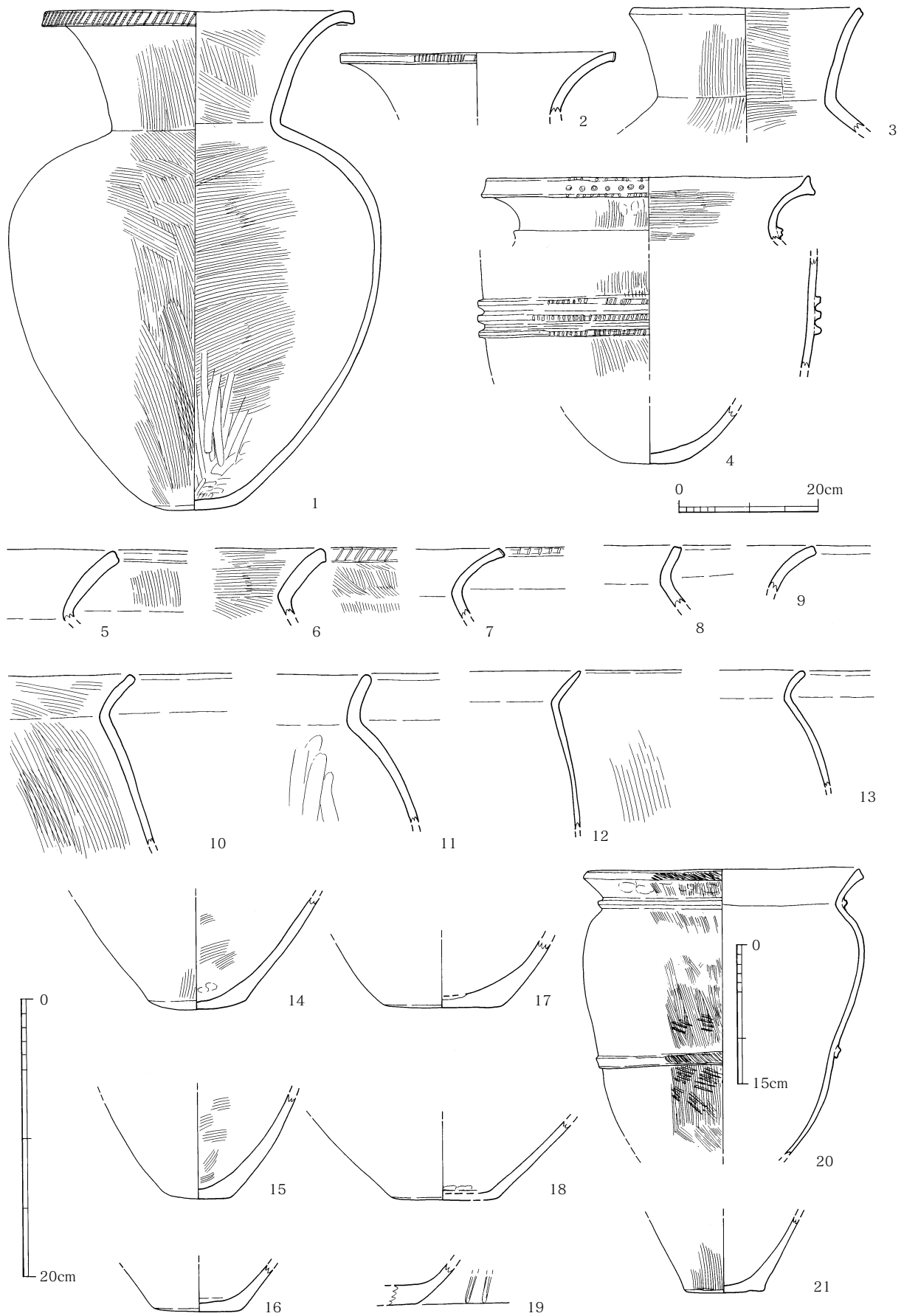
第一遺構面、調査区の北端部で検出した。1号住居跡に切られる。西側は調査区外へ延びる。長軸 $6.2\text{m} + \alpha$ 、短軸 $2.2\text{m} + \alpha$ の方形を呈すると考えられる。深さは0.1mで、床面で掘り込み等は確認できなかった。図化に耐え得る遺物は出土していない。

3号竪穴住居跡 (図版30・31、第66図)

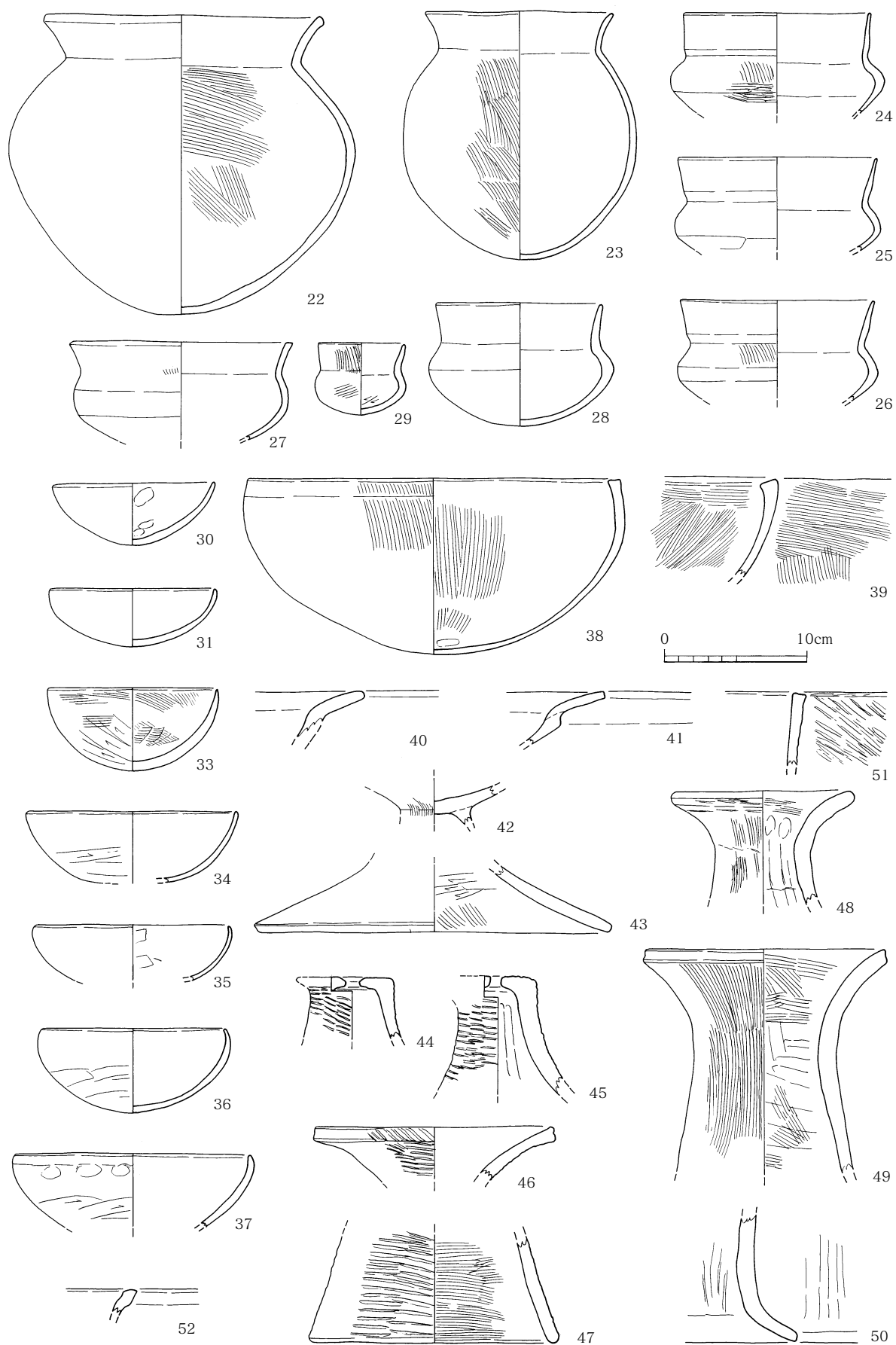
第一遺構面、調査区の北寄りで検出した。調査時点では4・9・10号住居跡を切る住居跡として調査したが、出土遺物から見る限り、少なくとも4・10号住居跡が新しく、切り合いを間違えた可能性が高い。長軸5.0m、短軸4.6mの方形を呈する。深さは0.2mである。中央やや西寄りに炉跡を検出した。炉跡はわずかにくぼんでおり、その部分から灰と炭化物が検出された。

出土土器 (図版77、第69図)

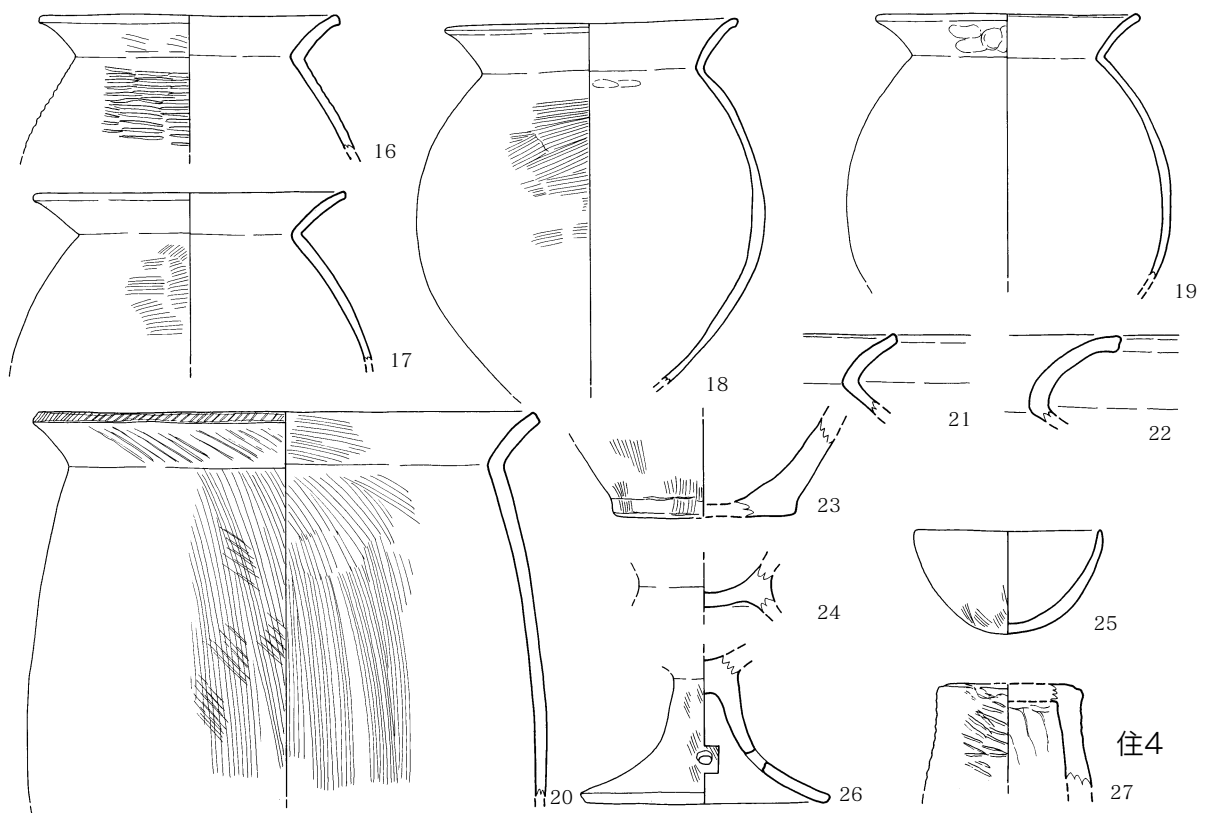
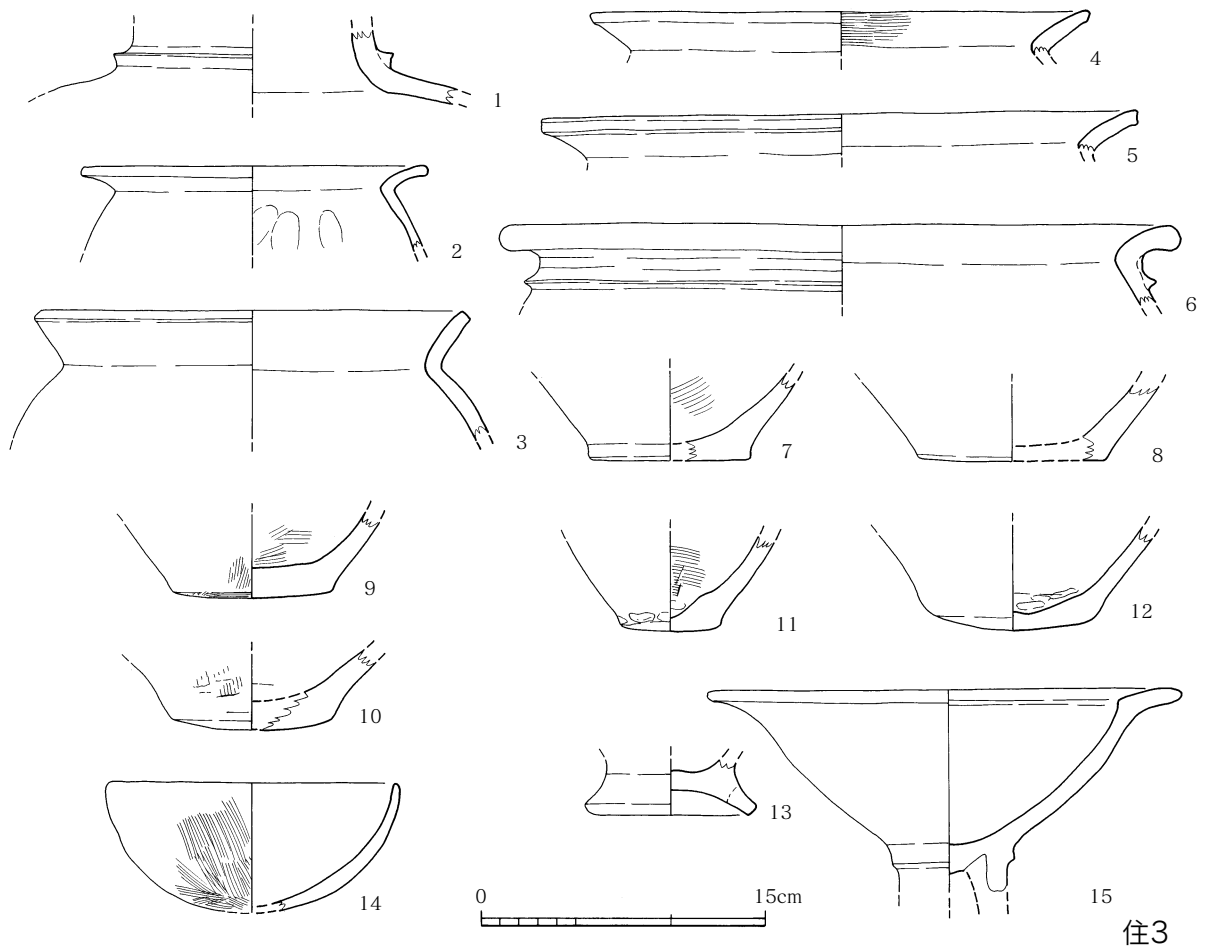
1は壺の肩部である。頸部との境の屈曲部に三角突帯を貼り付ける。No.1の位置から出土している。2～6は「く」字状の口縁の甕である。2の口径は18.4cmである。3の口径は23.2cmである。4の口径は26.4cmである。5の口径は31.6cmである。6は口縁下に突帯を貼り付ける。36.0cmである。7～13は甕の底部である。7の底径は9.5cmである。8の底径は10.0cmである。9の底径は8.4cmである。No.3の位置から出土している。10の底径は8.4cmである。11の底径は5.4cmである。12の底径は8.5cmである。13は台付甕の脚部である。底径9.0cmである。15は高杯の杯部で、端部の仕上げはあまい。口径24.5cmである。No.2の位置から出土している。



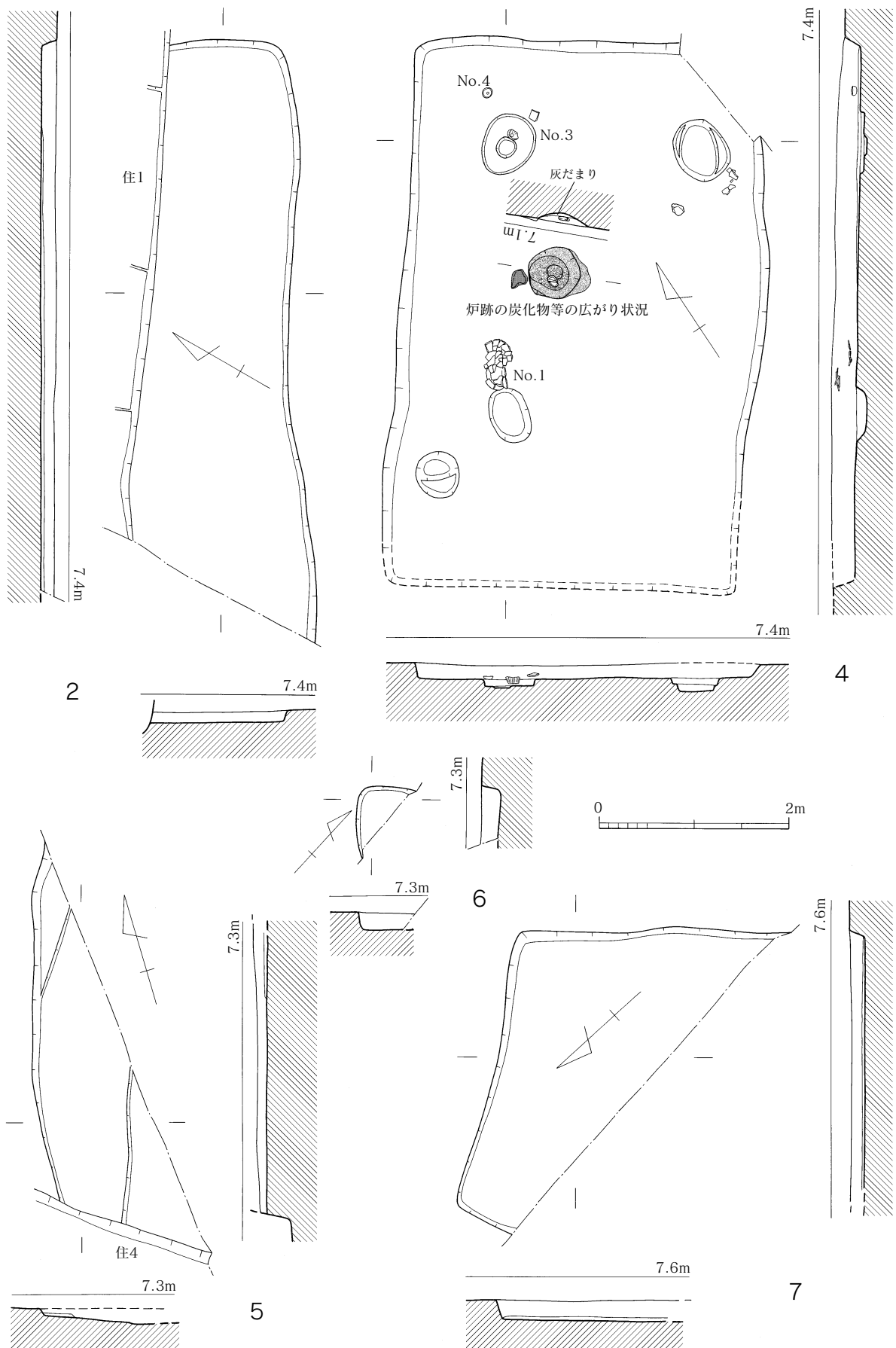
第67図 7区1号竪穴住居跡出土土器実測図① (4は1/8、20は1/6、他は1/4)



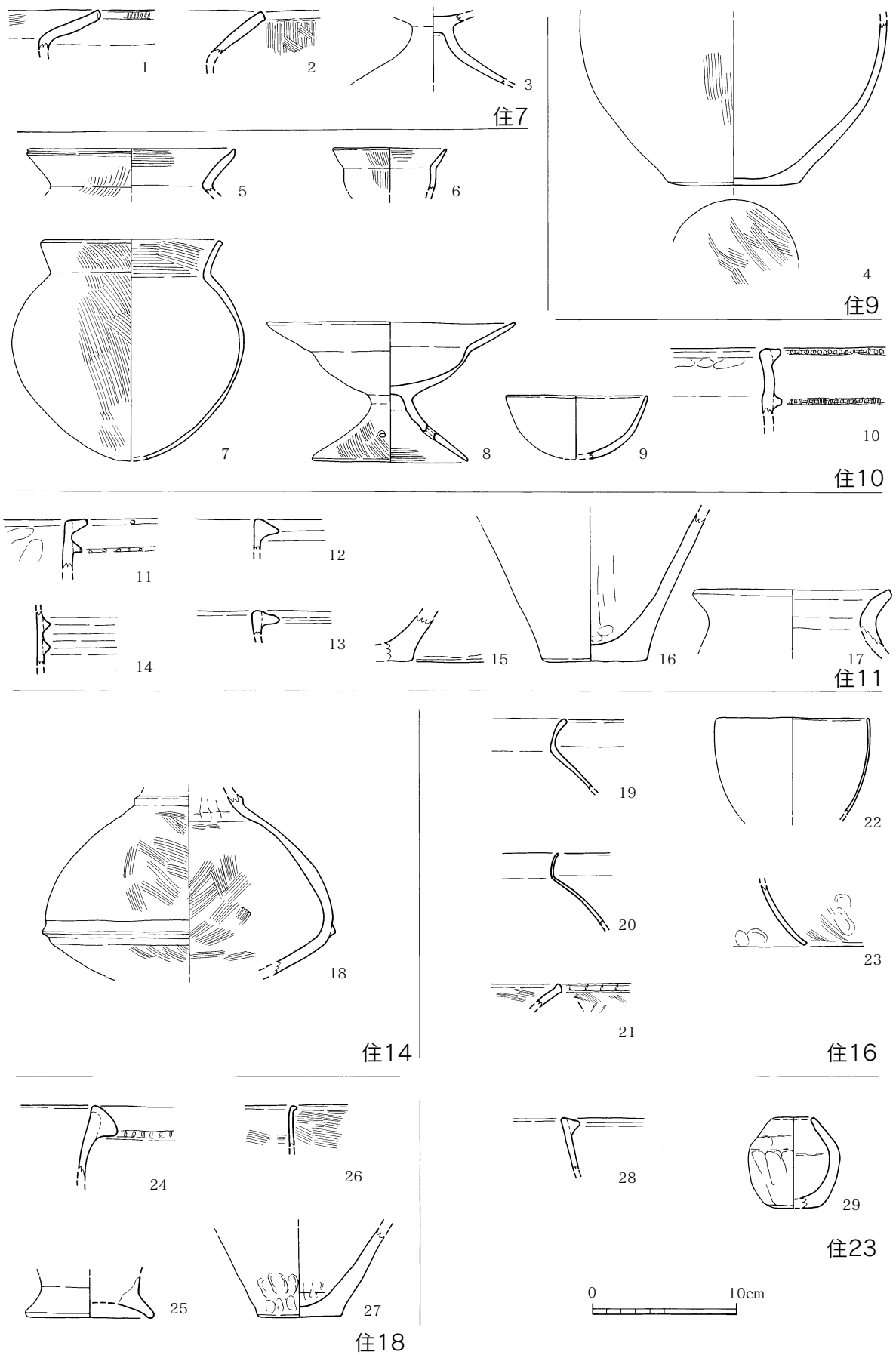
第68图 7区1号竖穴住居跡出土土器実測图② (1/4)



第69图 7区3·4号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/4)



第70図 7区2・4~7号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第71图 7区7·9~11·14·16·18·23号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

4号竪穴住居跡 (図版31、第70図)

第一遺構面、調査区の北端部で検出した。5号溝を切り、3号住居跡に切られる住居跡として調査を行ったが、遺物から見る限り、切り合いを間違えた可能性が高い。長軸5.8m、短軸3.8mの方形を呈する。深さは0.2mである。北側のややずれた位置で炉跡を検出した。床面からは数基のピットを検出しているが、いずれも浅い。遺物は床面付近を中心に出土している。

出土土器 (図版77、第69図)

16～24は甕である。16・17は庄内系の甕である。16の口径は15.8cmである。17の口径は16.8cmである。18の口径は15.5cmである。No.1の位置から出土している。19の口径は14.0cmである。20は在地系の長胴甕である。口径は26.8cmである。22はNo.4の位置から出土している。23の底径は9.0cmである。24は台付甕の脚部である。25は鉢である。口径10.0cm、器高5.5cmである。No.4の位置から出土している。26は高杯の脚部である。底径12.6センチで、4ヵ所穿孔である。No.3の位置から出土している。27は器台である。外面の調整はタタキである。

5号竪穴住居跡 (図版32、第70図)

第一遺構面、調査区の北端部で検出した。4号住居跡に切られる。遺構のほとんどが東側の調査区外へ延びる。長軸 $3.7m + \alpha$ 、短軸 $1.4m + \alpha$ である。深さは0.1m程度で、西側が一段高くなっており、ベッド状遺構であろうか。遺物は出土していない。

6号竪穴住居跡 (第70図)

第一遺構面、調査区の北寄りで検出した。遺構のほとんどが東側の調査区外へ延びる。長軸 $0.7m + \alpha$ 、短軸 $0.6m + \alpha$ である。深さは0.2mで、床面に掘り込み等はない。遺物は出土していない。

7号竪穴住居跡 (図版32、第70図)

第一遺構面、調査区の北寄りで検出した。8号住居跡を切る。西側は調査区外へ延びる。長軸 $2.7m + \alpha$ 、短軸3.1mの方形を呈する。深さは0.15mで、床面は平坦で掘り込みはない。遺物は少量出土している。

出土土器 (第71図)

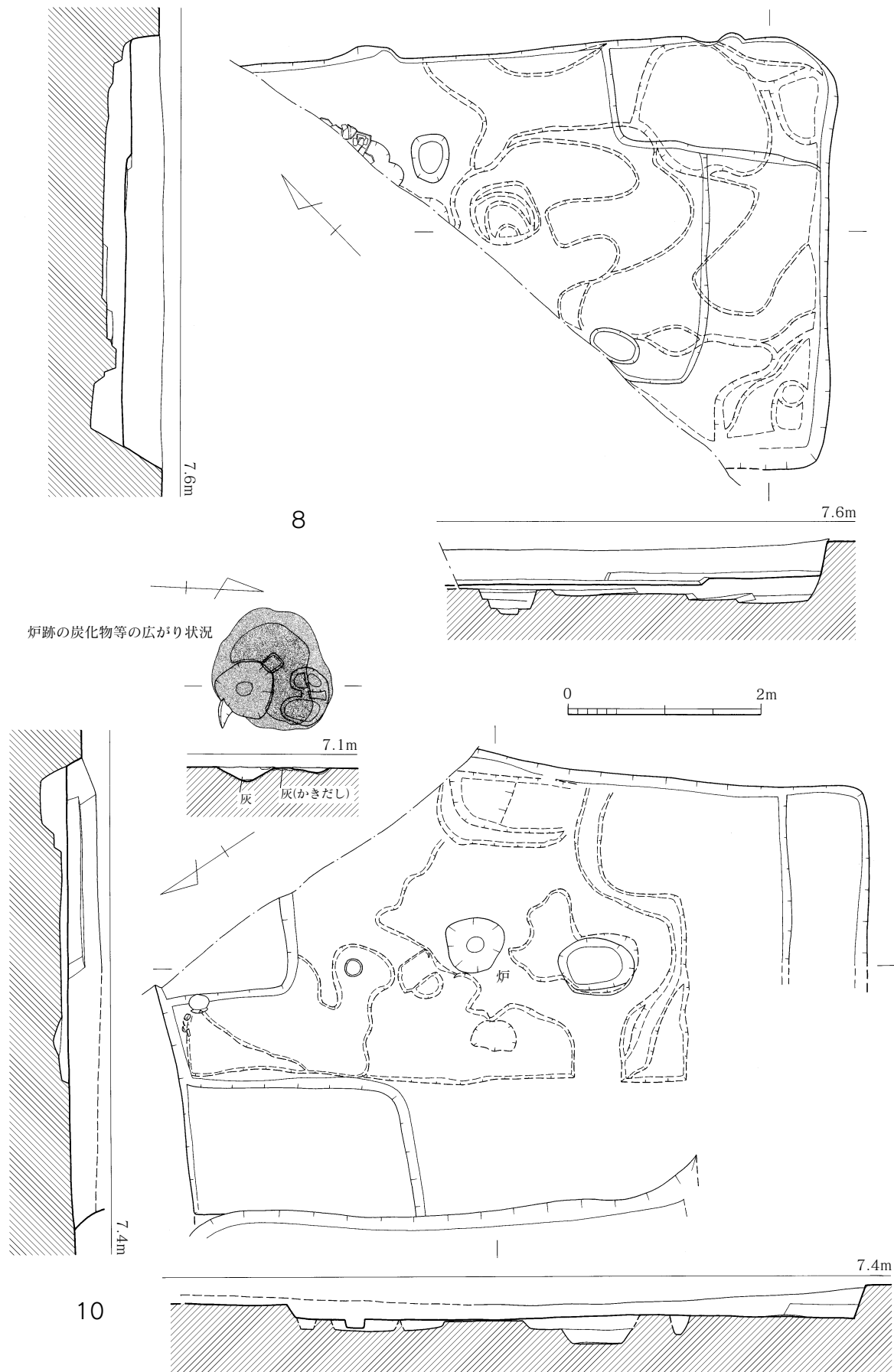
1・2は甕である。1の口縁端部には刻目を施す。3は高杯の脚部である。穿孔はない。

8号竪穴住居跡 (図版32・33、第72図)

第一遺構面、調査区の北寄りで検出した。7号住居跡に切られる。西側は調査区外へ延びる。長軸 $6.0m + \alpha$ 、短軸4.4mの方形を呈する。0.3mである。北東壁にはベッド状遺構が検出された。全体に貼床であり、床面下層はかなり凸凹していた。遺物はかなりまとまって出土している。

出土土器 (図版78、第73・74図)

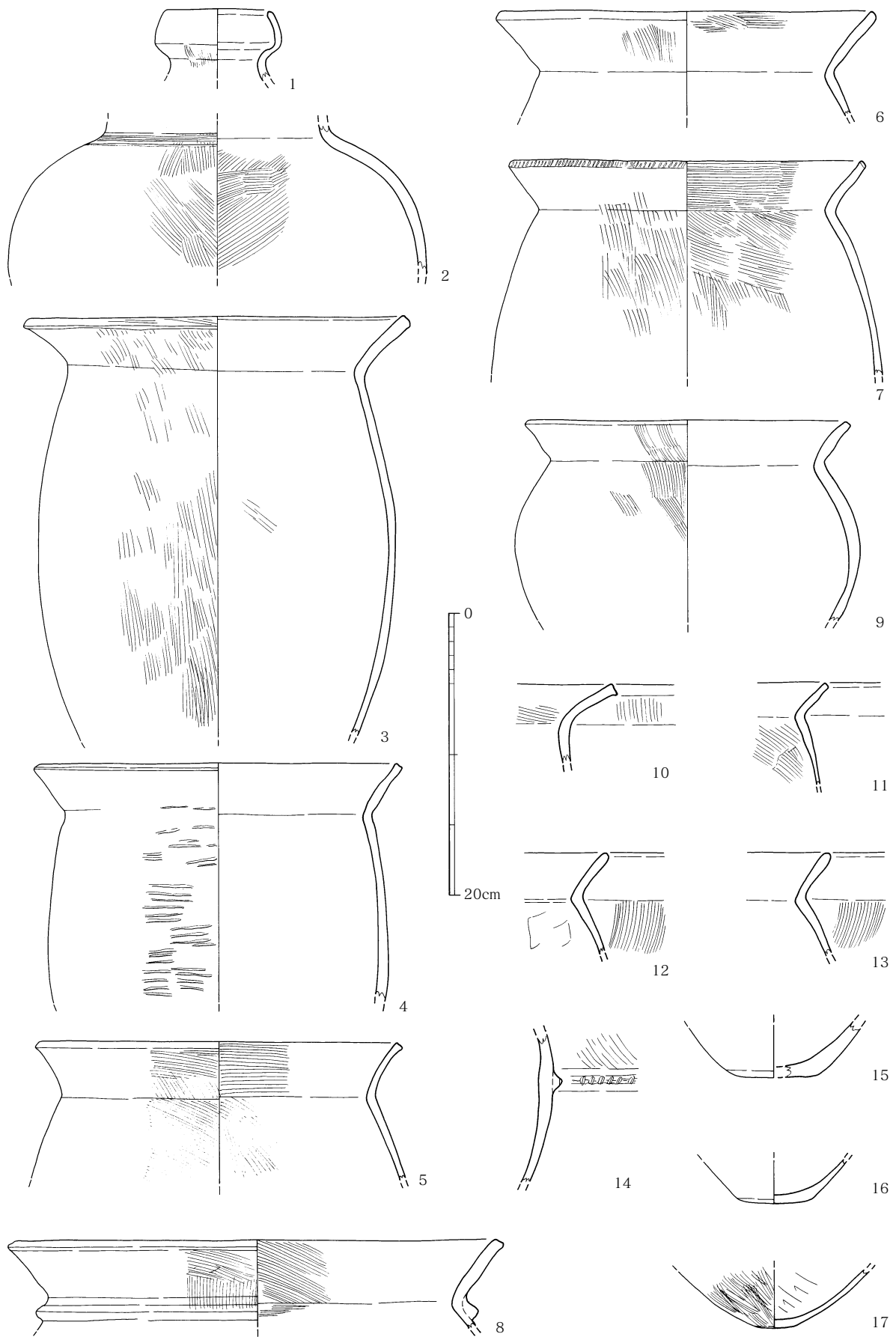
1は袋状口縁壺である。口径7.5cmである。2は壺の肩部で、頸部との境に沈線が見られる。3～17は甕である。3の口径は26.1cmである。4の外面はタタキで、口径は26.0cmである。5は内外面ハケメ調整で、口径26.0cmである。6の口径は27.0cmである。7は口縁端部に刻目が施される。8は口径35.0cmとやや大型で、頸部に突帯が貼り付けられる。9は球形に近い胴部で、口径23.0cmである。14は胴部片で、刻目突帯が貼り付けられる。貼床下層からの出土である。15の底径は7.0cmである。16は底径6.2cmである。17は底径2.5cmである。壺の底部の可能性もある。



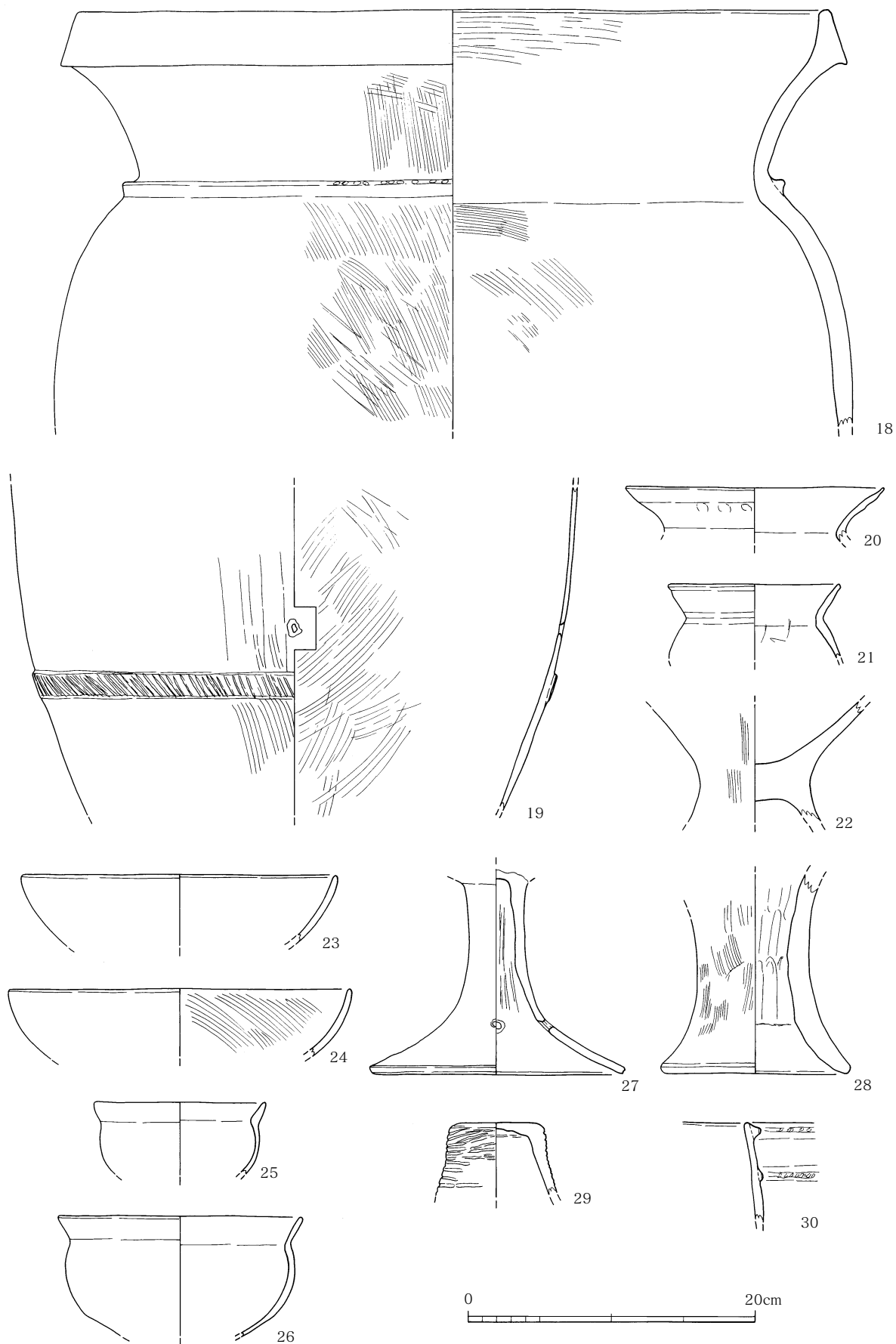
炉跡の炭化物等の広がり状況

炉

第72図 7区8・10号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第73图 7区8号竖穴住居跡出土土器実測图① (1/4)



第74图 7区8号竖穴住居跡出土土器実測图② (1/4)

9号竪穴住居跡（図版33、第75図）

第一遺構面、調査区の北寄りで見出した。10号住居跡を切り、3・8号住居跡に切られる住居跡として調査したが、10号住居跡の方が土器が新しく、切り合いを間違えた可能性が高い。長軸3.2m+ α 、短軸2.7m+ α である。深さは0.2mで、床面から数基のピットを見出している。遺物は埋土から弥生土器が出土している。

出土土器（第71図）

4は弥生土器の胴部から底部にかけての破片である。わずかにレンズ状を呈する底部はハケメ調整である。底径9.4cmである。

10号竪穴住居跡（図版34、第72図）

第一遺構面、調査区の北寄りで見出した。11・12号住居跡を切り、3・9号住居跡に切られる住居跡として調査を行ったが、土器から判断すると3・9号住居跡よりも新しく、切り合いを間違えた可能性が高い。一部、東側調査区外へ延びる。長軸7.4m、短軸4.8mの方形を呈する。深さは0.2mである。中央付近で炉跡を見出した他、その主軸上で、柱穴を見出しており、これらが支柱穴であろう。東壁中央には屋内土坑が見出された。ベッド状遺構が各コーナーで見出されている。部分的に貼床であった。遺物は土師器を中心に出土している。

出土土器（図版78、第71図）

5は布留系の甕の口縁部である。口径14.5cmである。6は屈曲する小型鉢である。口径8.0cmである。No.1の位置から出土している。7は在地系の甕で口径12.8cm、器高15.5cmである。No.2の位置から出土している。8は杯部が屈曲する高杯である。脚部には3ヶ所の穿孔が施される。口径17.3cm、底径11.0cm、器高9.8cmである。9は鉢である。口径9.8cm、器高4.6cmである。貼床下層から出土している。10は混入の弥生土器である。貼床下層から出土している。

11号竪穴住居跡（第75図）

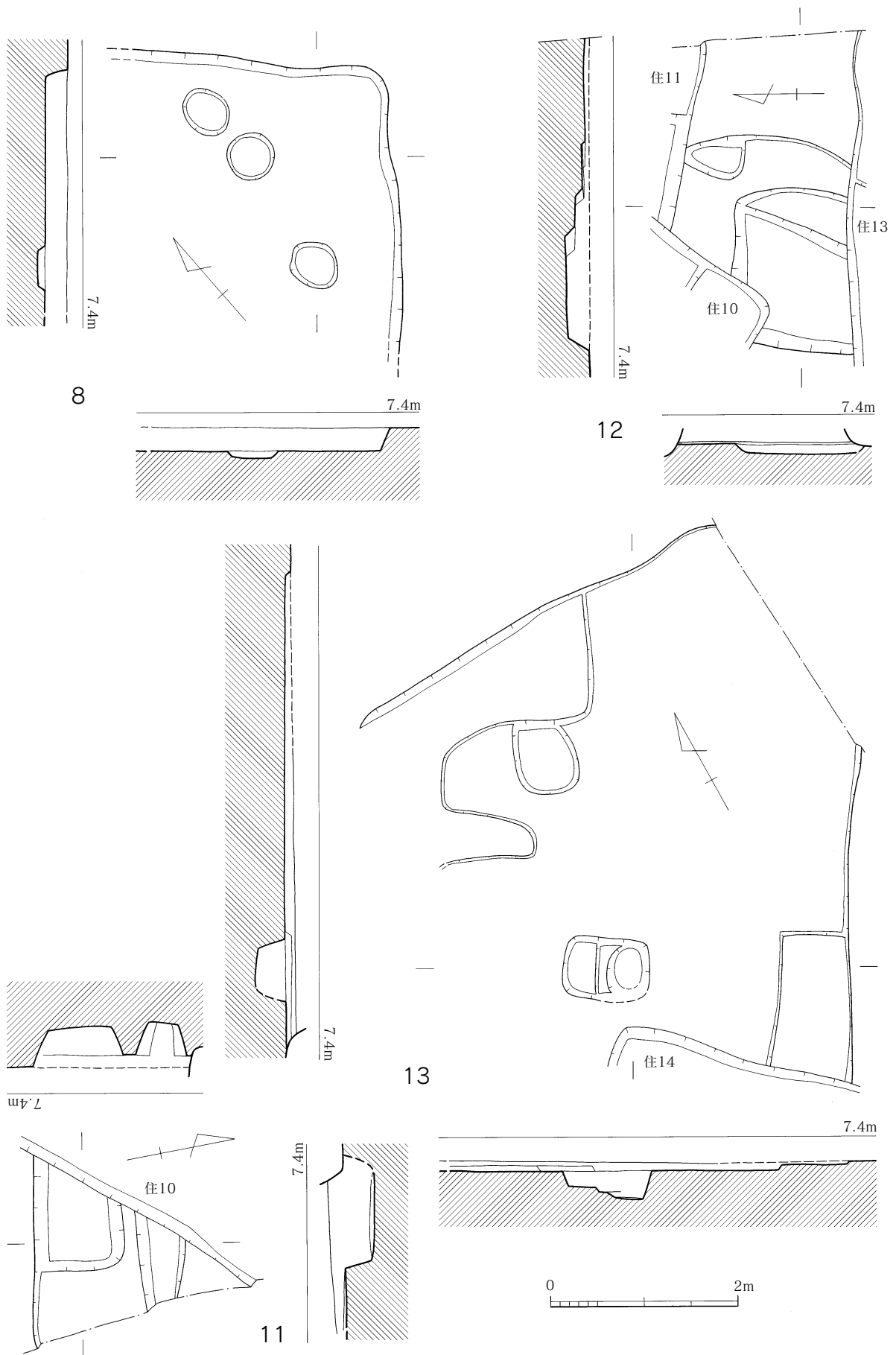
第一遺構面、調査区の北寄りで見出した。12号住居跡を切り、10号住居跡に切られる。東側は調査区外へ延びる。長軸2.0m+ α 、短軸2.2m+ α である。深さ0.1mで屋内土坑と思われる掘り込みがある他は全体の形状は不明である。遺物は弥生土器と土師器が出土しているが、いずれも混入の可能性が高い。

出土土器（第71図）

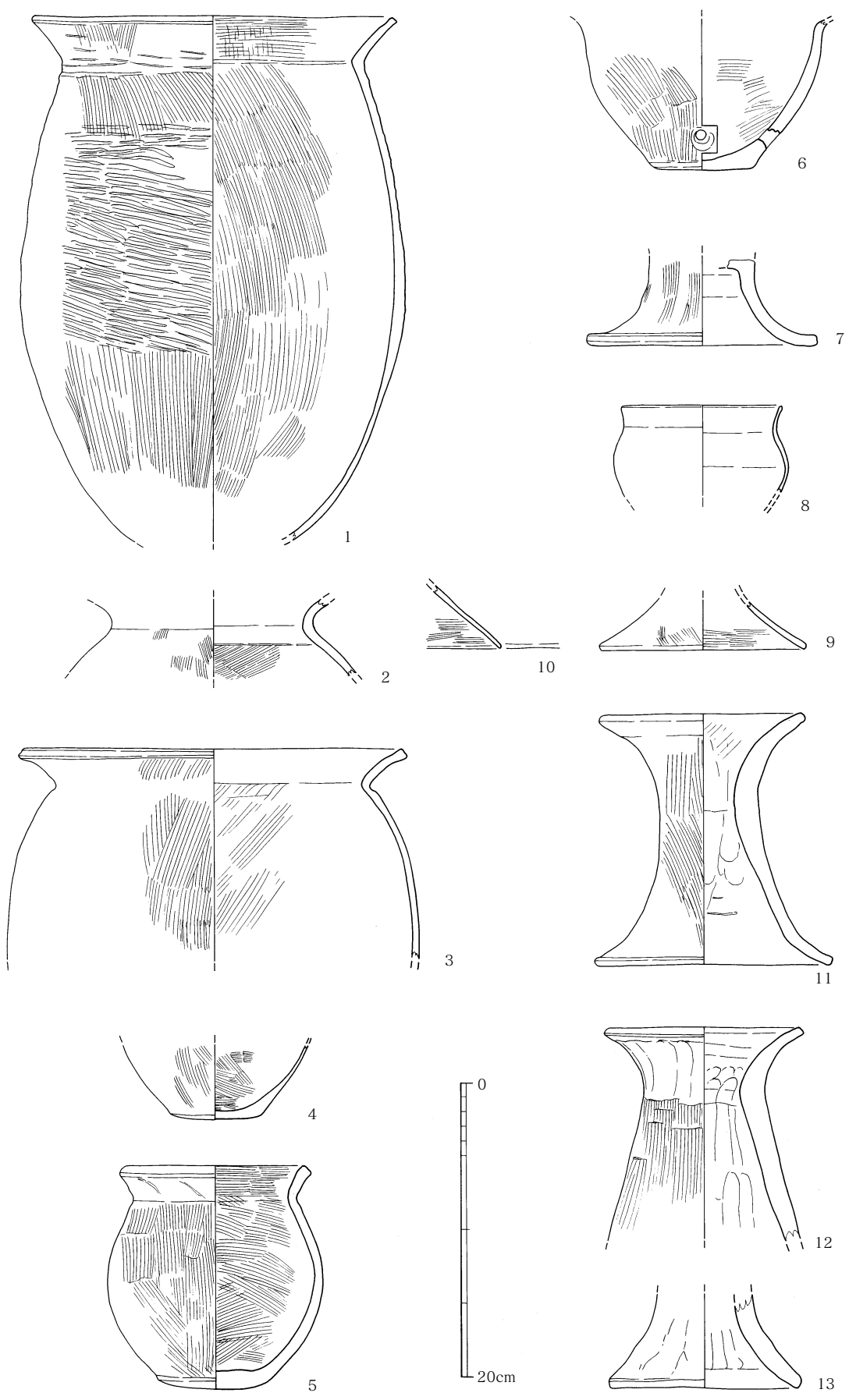
11～16は弥生土器の甕である。いずれも中期前半までの範疇に入ると思われる。16の底径は7.3cmである。17は土師器の甕である。内面の調整はケズリである。

12号竪穴住居跡（第75図）

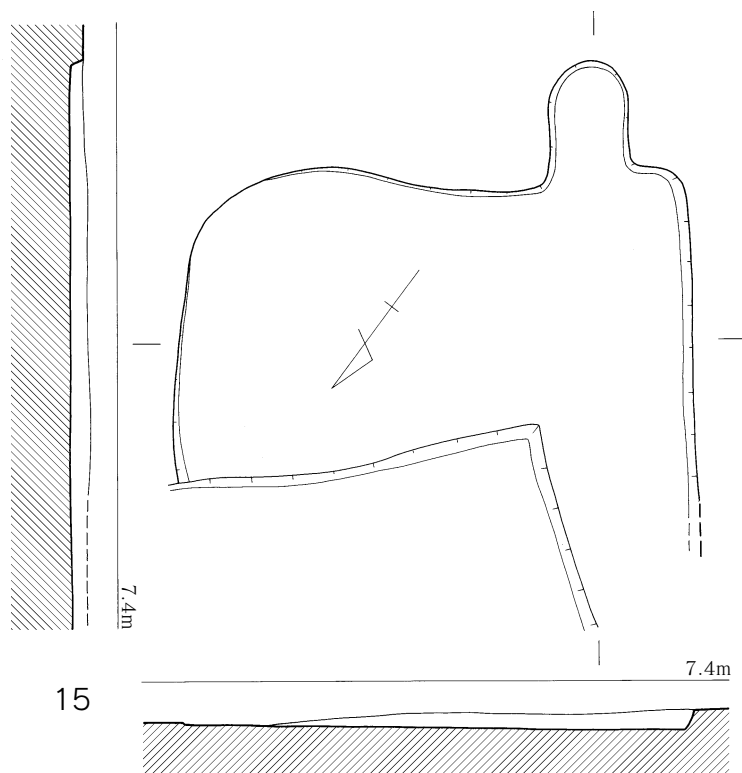
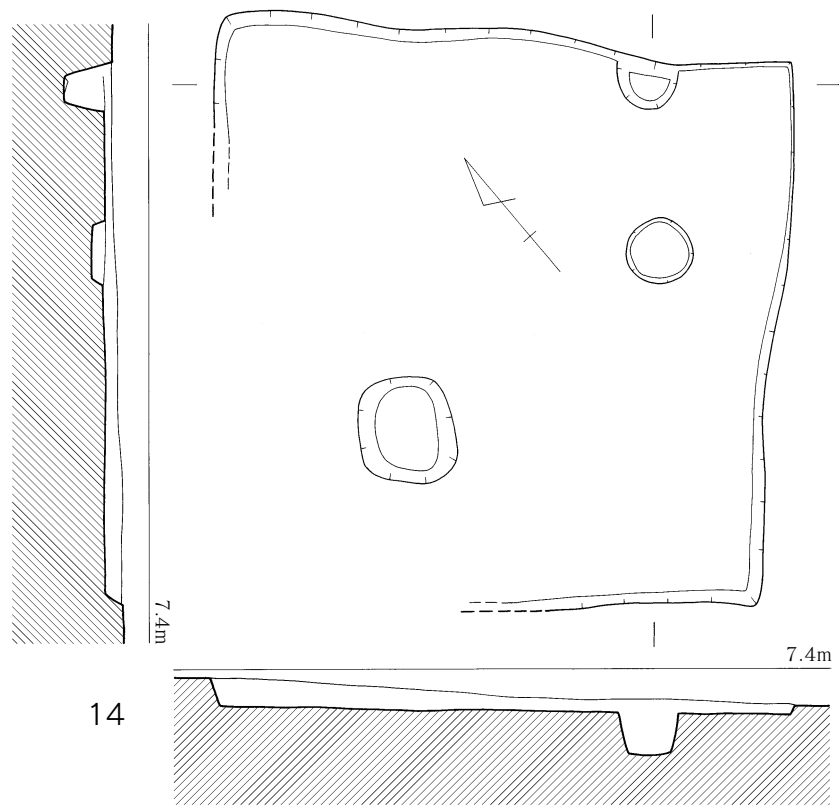
第一遺構面、調査区の北寄りで見出した。10・11・13号住居跡に切られる。東側は調査区外へ延びる。長軸3.4m+ α 、短軸1.9m+ α であるが、他の住居跡に大きく切られるため、全体の形状は不明である。深さは0.1mで西側に階段状に深くなる。図化に耐え得る遺物は出土していない。



第75图 7区9·11~13号竖穴住居跡实测图 (1/60)



第76图 7区13号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)



第77图 7区14·15号竖穴住居跡実測图 (1/60)

13号竪穴住居跡（図版34、第75図）

第一遺構面、調査区の中央付近で検出した。12号住居跡を切り、14号住居跡に切られる。東側は調査区外へ延びる。長軸 $5.5\text{m} + \alpha$ 、短軸 $4.5\text{m} + \alpha$ の不整な形状をしている。深さは 0.1m で、中央やや南寄りに支柱穴であろうピットを検出した。東西壁にはベッド状遺構を検出。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器（図版78・79、第76図）

1～7は甕である。1は長胴で、胴部中位はタタキである。外面には部分的にススが付着する。口径 24.0cm 、胴部最大径 25.8cm である。3の内外面の調整はハケメである。口径 26.0cm である。4の底径は 6.1cm である。5は小型の甕で内外面はハケメである。口径 12.0cm 、胴部最大径 14.6cm 、底径 7.4cm 、器高 15.1cm である。6は胴部下位に焼成後の穿孔が施される。底径 6.5cm である。7は台付甕の脚部である。底径 15.3cm である。8は鉢で口径 11.0cm である。9・10は何らかの脚部である。9の底径は 14.0cm である。11～13は器台である。11の口径は 8.4cm 、底径 15.4cm 、器高 17.1cm である。12の口径は 13.0cm である。13の底径は 13.0cm である。

14号竪穴住居跡（図版35、第77図）

第一遺構面、調査区の南寄りで検出した。13・15号住居跡を切る。長軸 4.6m 、短軸 4.6m のほぼ正方形を呈する。深さは 0.1m で床面で数基のピットを検出している。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器（第71図）

18は壺である。下膨れの胴部で、頸部と肩部の境および、胴部最大径の部分に突帯が貼り付けられる。内外面の調整はハケメである。

15号竪穴住居跡（図版35、第77図）

第一遺構面、調査区の南寄りで検出した。14号住居に切られる。長軸 4.1m 、短軸 $3.5\text{m} + \alpha$ の方形であるが、南側が一部張り出している。深さは 0.15m で、床面はほぼ平坦、掘り込み等はなかった。図化に耐えうる遺物は出土していない。

16号竪穴住居跡（図版35、第78図）

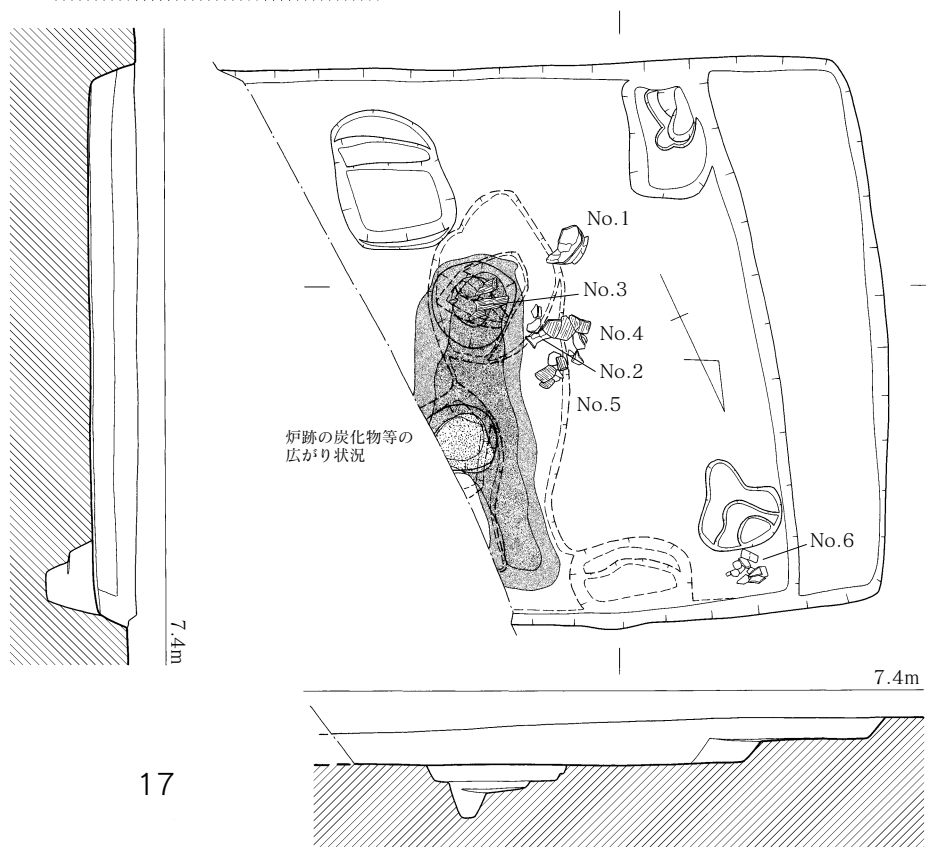
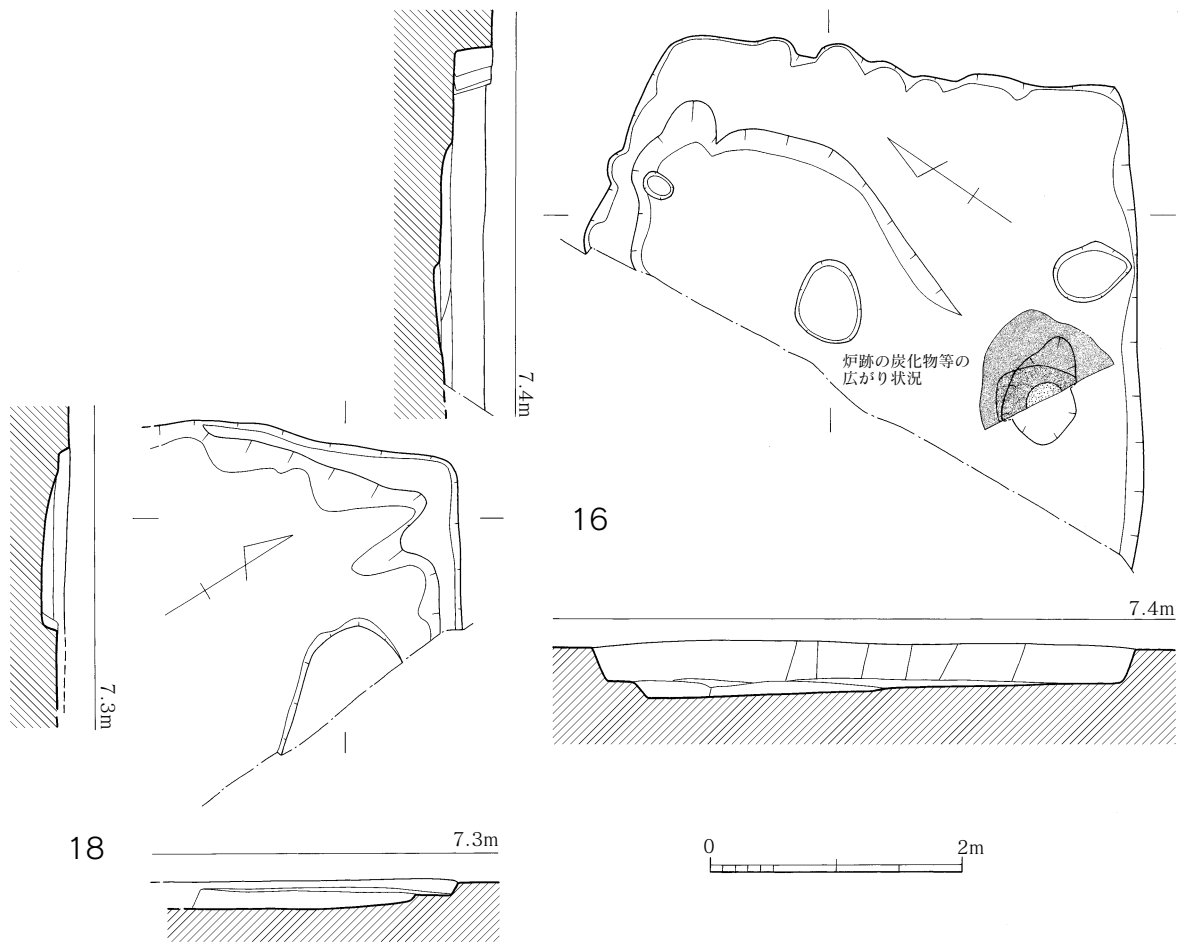
第一遺構面、調査区の南寄りで検出した。1号溝で切られる。西側は調査区外へ延びる。長軸 $3.9\text{m} + \alpha$ 、短軸 4.4m の隅丸方形を呈する。深さは 0.3m で西側がやや深くなっている。南寄りで灰と炭化物が集積した炉跡を検出している。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器（第71図）

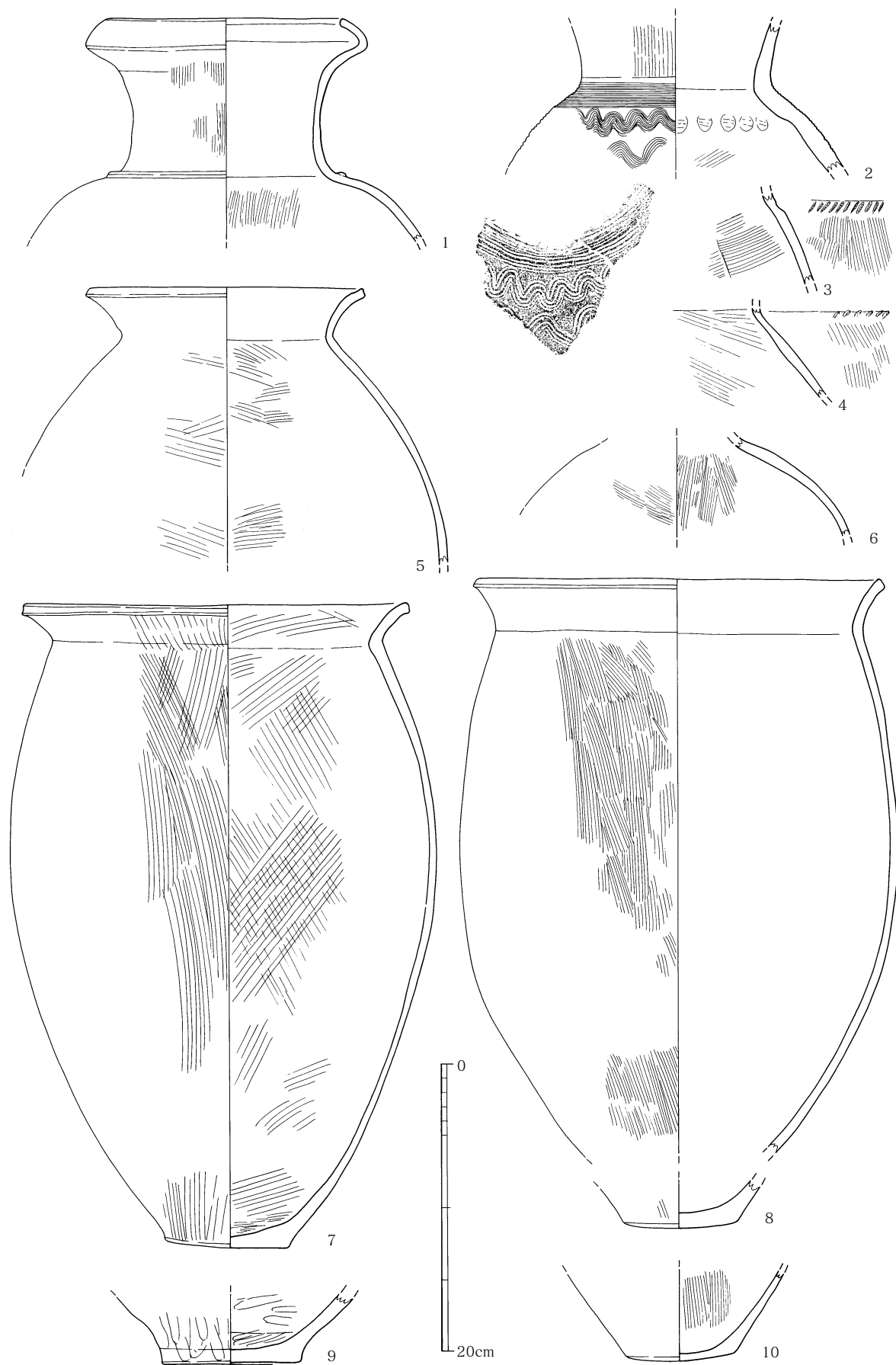
19～21は甕である。19・20は薄手のものである。21は口縁端部に刻目を施す。22は鉢である。薄手で口径 11.0cm である。23は脚部である。外面はハケメである。

17号竪穴住居跡（図版36、第78図）

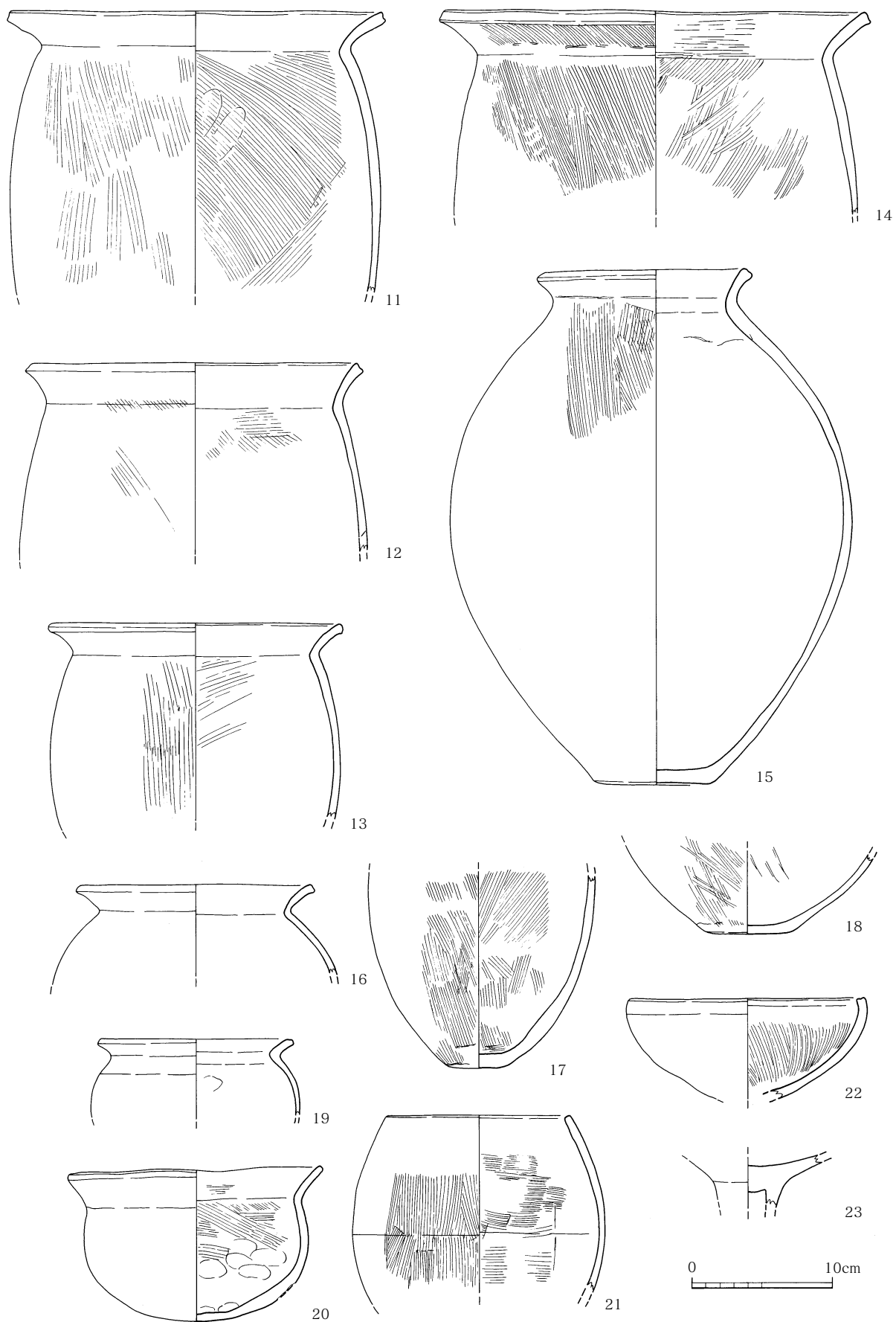
第一遺構面、調査区の南端部で検出した。東側は調査区外へ延びる。長軸 $4.9\text{m} + \alpha$ 、短軸 4.4m の方形を呈する。深さは 0.3m で、長軸上に支柱穴が掘り込まれる。そのピットより北に炭化物と灰がかたまつて検出されており、炉跡と考えている。他に数ヶ所の掘り込みがある他、西側には地山削り出しのベッド状遺構が検出された。貼床は確認できなかった。遺物は弥生土器がまとまって出土している。



第78図 7区16~18号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第79图 7区17号竖穴住居迹出土土器实测图① (1/4)



第80图 7区17号竖穴住居跡出土土器実測図② (1/4)

出土土器（図版79・80、第79～81図）

1～6は壺である。1は複合口縁の壺で、頸部と肩部の境に1条の突帯を貼り付ける。口径16.3cmである。2は肩部に沈線と波状文を巡らせる。3・4は肩部に刻目を施すものである。5の口径は18.6cmである。No.1の位置から出土している。6はNo.3の位置から出土している。7～18は甕である。7は口径26.7cm、胴部最大径29.4cm、底径8.6cm、器高44.9cmである。8は口径27.6cm、胴部最大径30.3cm、底径7.6cmである。9は平底の底部で底径9.7cmである。10の底径は7.4cmである。11の口径は27.0cmである。12の口径は23.0cmである。13の口径は21.0cmである。14の口径は30.0cmである。15の口径は15.2cm、胴部最大径28.3cm、底径8.4cm、器高36.9cmである。No.4の位置から出土している。16の口径は17.0cmである。17の底径は4.4cmである。18の底径は6.2cmである。19～22は鉢である。19の口径は13.3cmである。20の口縁は波状に歪む。口径18.2cm、器高11.1cmである。21は内湾する口縁で、口径13.4cmである。No.6の位置から出土している。22の口径は16.8cmである。23は高杯の基部である。24～26は口縁端部が外反する短頸壺である。24の口径は13.0cmである。25の口径は12.0cmである。No.2、6の位置から出土している。26の口径は12.0cmである。No.5の位置から出土している。27は大型の鉢である。口径32.0cmである。28・29は高杯である。28は口径28.6cmである。29は口径30.0cmである。30～39は器台である。30は口径12.6cm、底径16.0cm、器高19.0cmである。31は口径13.4cm、底径14.2cm、器高18.8cmである。No.2の位置から出土している。33の口径は13.0cmである。34の口径は12.0cmである。36の底径は12.3cmである。37の底径は15.8cmである。38の底径は16.4cmである。39の底径は12.1cmである。

18号竪穴住居跡（第78図）

第一遺構面、調査区の南端部で検出した。東側は調査区外へ延びる。長軸 $3.0\text{m} + \alpha$ 、短軸 $2.3\text{m} + \alpha$ である。床面は中心に向けて次第に深くなっており、最も深い部分で0.25mほどある。ただ、調査時に貼床を区別できずに掘削した可能性が高い。床面での掘り込み等は検出できなかった。遺物は弥生前期から中期にかけての土器が出土しているが、混入の可能性が高い。

出土土器（第71図）

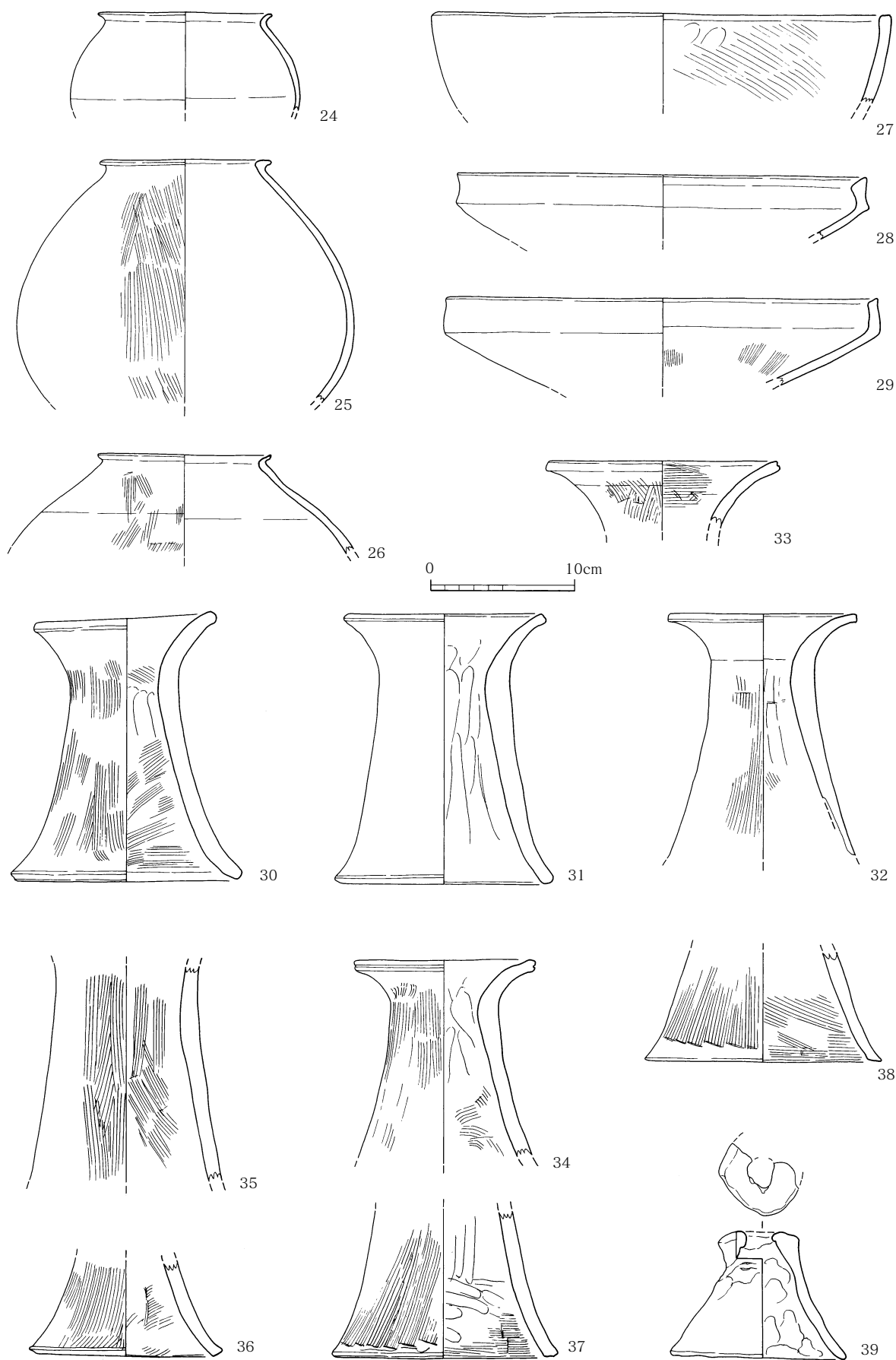
24・25は甕である。24は外面に刻目突帯が貼り付けられる。25は上底の底部である。底径9.0cmである。26は小形器種の口縁である。端部を外反させている。27は壺又は甕の底部である。底径5.8cmである。

19号竪穴住居跡（第82図）

第二遺構面、調査区の中央付近で検出した。81号土坑、4号溝を切り、70号土坑に切られる。長軸 $3.8\text{m} + \alpha$ 、短軸 $1.8\text{m} + \alpha$ 。深さ0.1mで、南東壁中央に屋内土坑を検出した。遺物は出土していない。

20号竪穴住居跡（第82図）

第二遺構面、調査区の北寄りで検出した。21号住居跡、83号土坑を切り、6号溝に切られる。西側は調査区外へ延びる。長軸 $5.0\text{m} + \alpha$ 、短軸 $3.1\text{m} + \alpha$ である。深さは0.1mで、床面からは数基のピットが検出されている。貼床はなかった。図化に耐え得る遺物は出土していない。



第81图 7区17号竖穴住居迹出土土器实测图③ (1/4)

21号竪穴住居跡（第82図）

第二遺構面、調査区の北寄りで検出した。22号住居跡を切り、20号住居跡、6号溝に切られる。長軸 $2.5\text{m} + \alpha$ 、短軸 $1.2\text{m} + \alpha$ である。深さは 0.1m で、床面でピット等は検出できなかった。貼床もなかった。遺物は出土していない。

22号竪穴住居跡（第82図）

第二遺構面、調査区の北寄りで検出した。21号住居跡、6号溝に切られる。長軸 $3.2\text{m} + \alpha$ 、短軸 $1.5\text{m} + \alpha$ である。深さは 0.1m で、床面でピット等は検出できなかった。遺物は出土していない。

23号竪穴住居跡（第82図）

第二次調査区の中央で検出した。10号溝を切り、9号溝に切られる。長軸 $3.3\text{m} + \alpha$ 、短軸 3.5m の方形を呈する。深さは 0.1m である。中央付近で 0.6m のピットを検出しており、支柱穴であろう。その他の掘り込み、貼床はない。遺物は弥生土器が出土しているが、住居に伴うものかどうかはわからない。

出土土器（第71図）

28は甕の口縁部で、端部に突帯を貼り付ける。28は小型の壺か。口径 3.0cm 、器高 6.5cm である。

(2) 土坑

1号土坑（第83図）

第一遺構面、調査区北寄りで検出した。長軸 0.8m 、短軸 0.6m の楕円形を呈する。深さは 0.2m で床面はほぼ平坦である。遺物は弥生後期の土器が出土している。

出土土器（図版80、第84図）

1は複合口縁の壺の口縁部で、口径 17.8cm である。2は接合しないが同一個体である。内外面の調整はハケメである。口径 23.0cm 、胴部最大径 27.0cm 、底径 8.4cm である。3は台付甕の底部である。4は甕の底部で、底径 7.0cm である。

2号土坑（第83図）

第一遺構面、調査区中央付近で検出した。西側は調査区外へ延びる。長軸 $1.5\text{m} + \alpha$ 、短軸 $0.5\text{m} + \alpha$ である。深さは 0.1m で床面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

3号土坑（第83図）

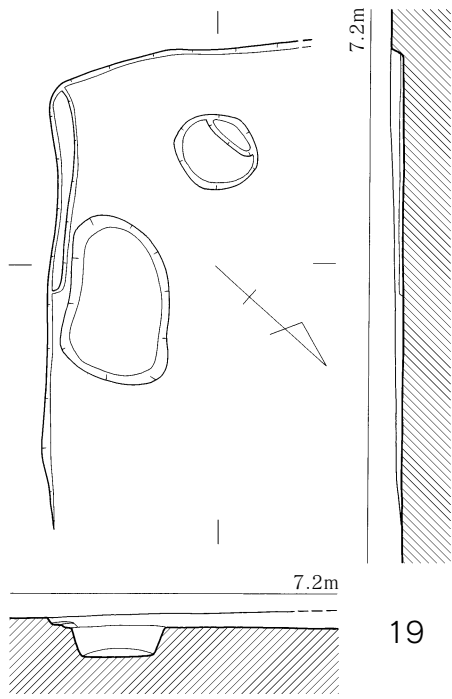
第一遺構面、調査区中央付近で検出した。西側は調査区外へ延びる。長軸 $1.5\text{m} + \alpha$ 、短軸 1.5m である。深さは 0.15m で、ほぼ平坦である。土器が少量出土している。

出土土器（第84図）

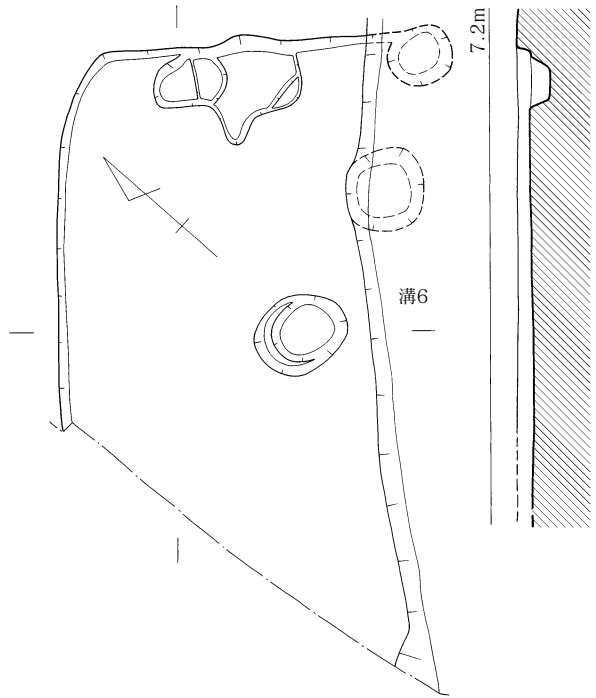
5は鉢である。手捏ねに近い粗製で外面はタタキ、内面には圧痕が残る。口径 9.6cm 、底径 6.0cm 、器高 8.1cm である。

4号土坑（第83図）

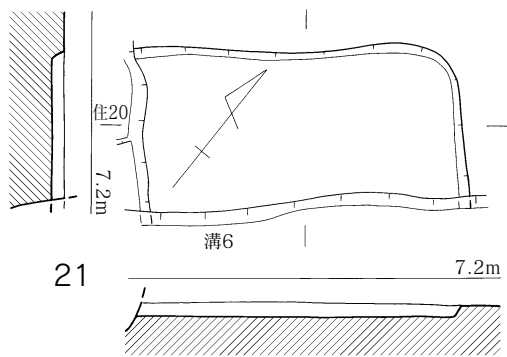
第一遺構面、調査区の南端部で検出した。南側は調査区外へ延びる。長軸 $3.5\text{m} + \alpha$ 、短軸 $1.9\text{m} + \alpha$ の不整な円形を呈する。深さは 0.15m で床面は平坦である。遺物は出土していない。



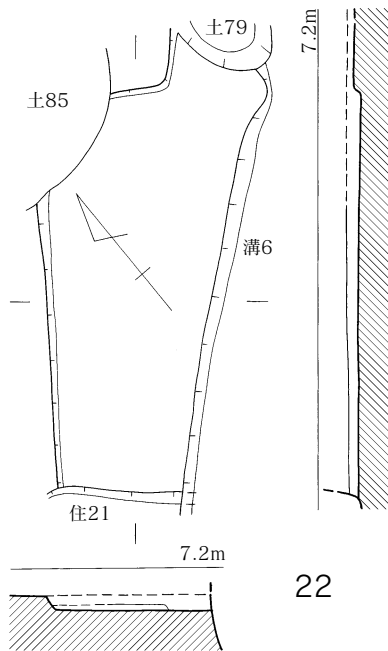
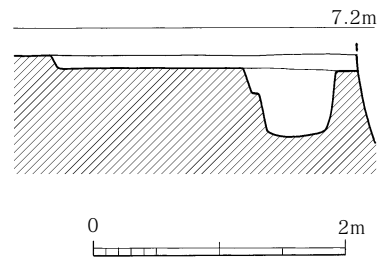
19



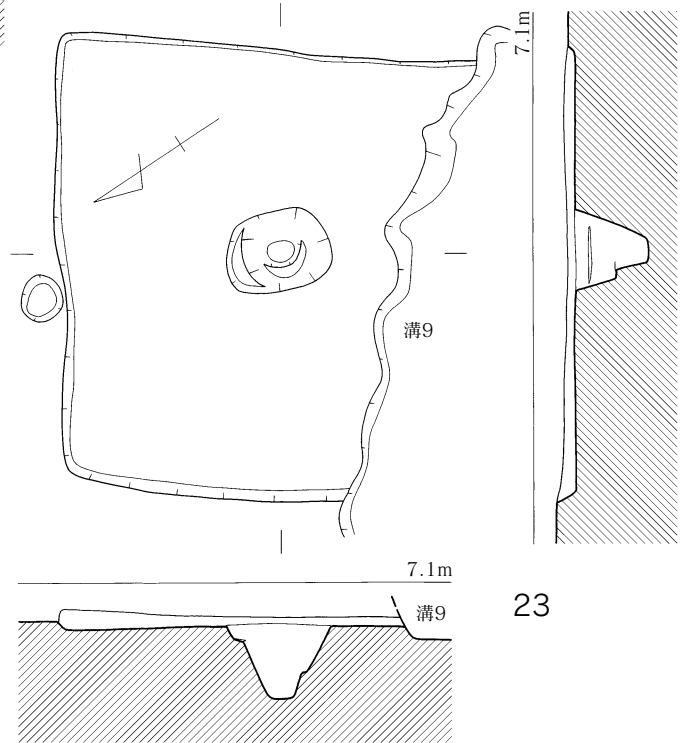
20



21



22



23

第82図 7区19~23号竪穴住居跡実測図 (1/60)

5号土坑 (図版36、第83図)

第二遺構面、調査区の南端部で検出した。南側は調査区外へ延びる。長軸2.4m、短軸2.1m+ α の不整な楕円形を呈する。深さは0.65mで中央が最も深くなる。遺物は弥生土器がまとまって出土している。

出土土器 (図版80、第85・86図)

1~11は壺である。1の内外面ミガキである。口縁端部をわずかに肥厚させ、明瞭ではない頸部と肩部の境に2条の沈線を巡らせる。口径11.6cm、胴部最大径14.0cmである。2は全体にメリハリのないもので、口径7.7cm、胴部最大径12.0cm、底径5.8cm、器高16.5cmである。3は頸部と肩部の境に突帯を貼り付け、胴部には2~3条の沈線を施すものである。外面はミガキ調整である。口径15.5cm、胴部最大径27.3cm、底径8.7cm、器高25.4cmである。4の口径は16.0cmである。5は口縁端部下に圧痕が残る。口径19.0cmである。6は口縁外側を厚く肥厚させる。8は口縁内面に縦方向の暗文を施すほか、外面の沈線と突帯の間を中心に赤色顔料で暗文を施すものである。口径30.0cmである。9は接合しないが、同一個体である。口径37.0cm、底径8.2cmである。10の底径は9.8cmである。11の底径は8.0cmである。12は蓋である。内外面調整はミガキである。口径27.4cmである。13~23は甕である。13は口径27.0cmである。14は底部に焼成後に両側から穿孔を施すものである。口径21.6cm、底径6.8cm、器高26.3cmである。15の口径は31.0cm、底径6.6cm、器高33.0cmである。19の底径は6.6cmである。20の底径は5.8cmである。21の底径は6.7cmである。22は上底で、底径8.0cmである。23の底径は7.4cmである。

6号土坑 (図版37、第83図)

第二遺構面、調査区の南端部で検出した。西側は調査区外へ延びる。長軸0.7m、短軸0.4m+ α である。深さは0.2mで、南側が一段深くなる。出土遺物はない。

7号土坑 (図版37、第83図)

第二遺構面、調査区の南端部で検出した。西側は調査区外へ延びる。長軸1.1m+ α 、短軸0.6mである。深さは0.2mで、東側が一段深くなる。図化に耐え得る遺物は出土していない。

8号土坑 (図版37、第83図)

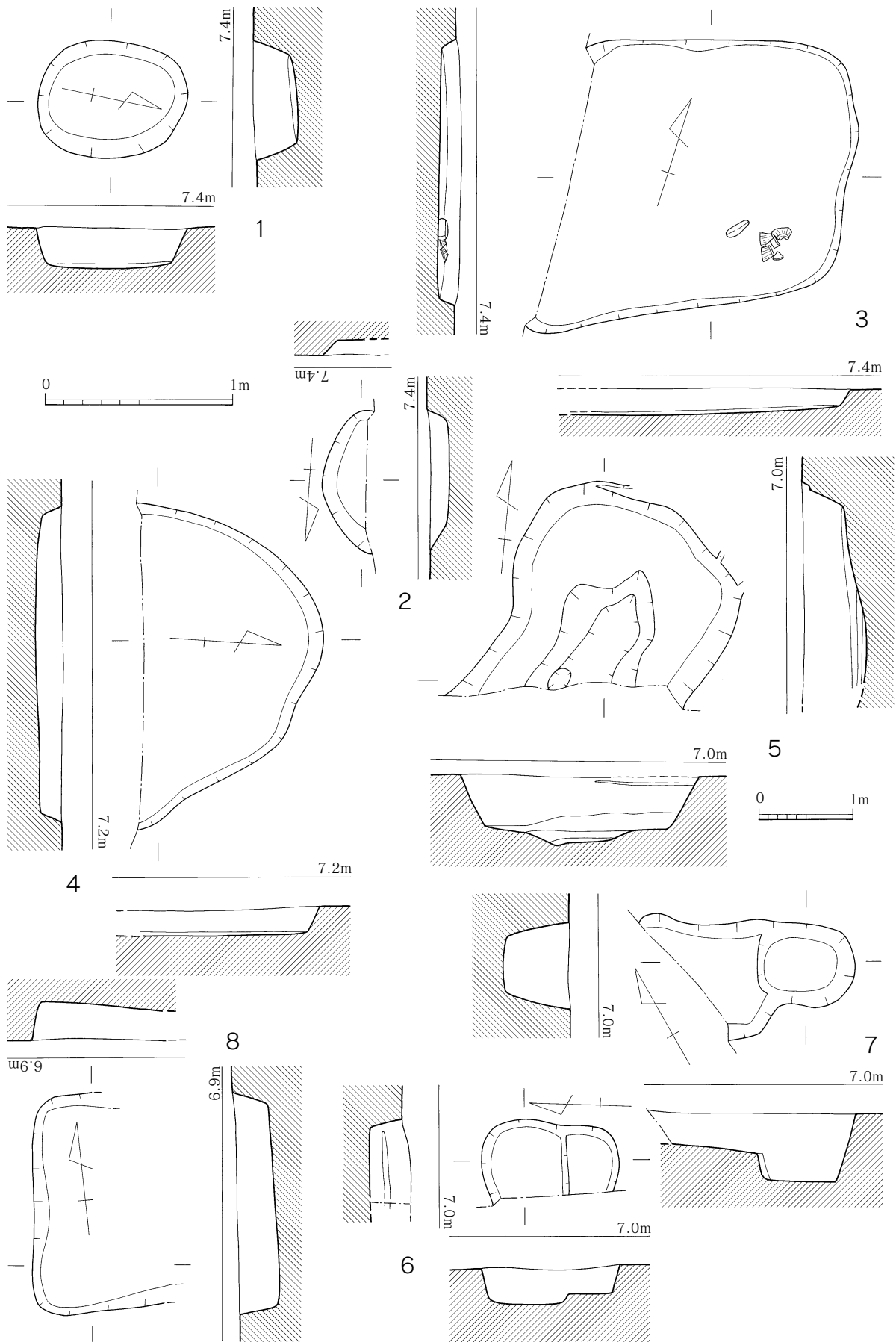
第二遺構面、調査区の南端部で検出した。長軸1.1m、短軸0.7m+ α である。深さは0.2mで床面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

9号土坑 (図版38、第87図)

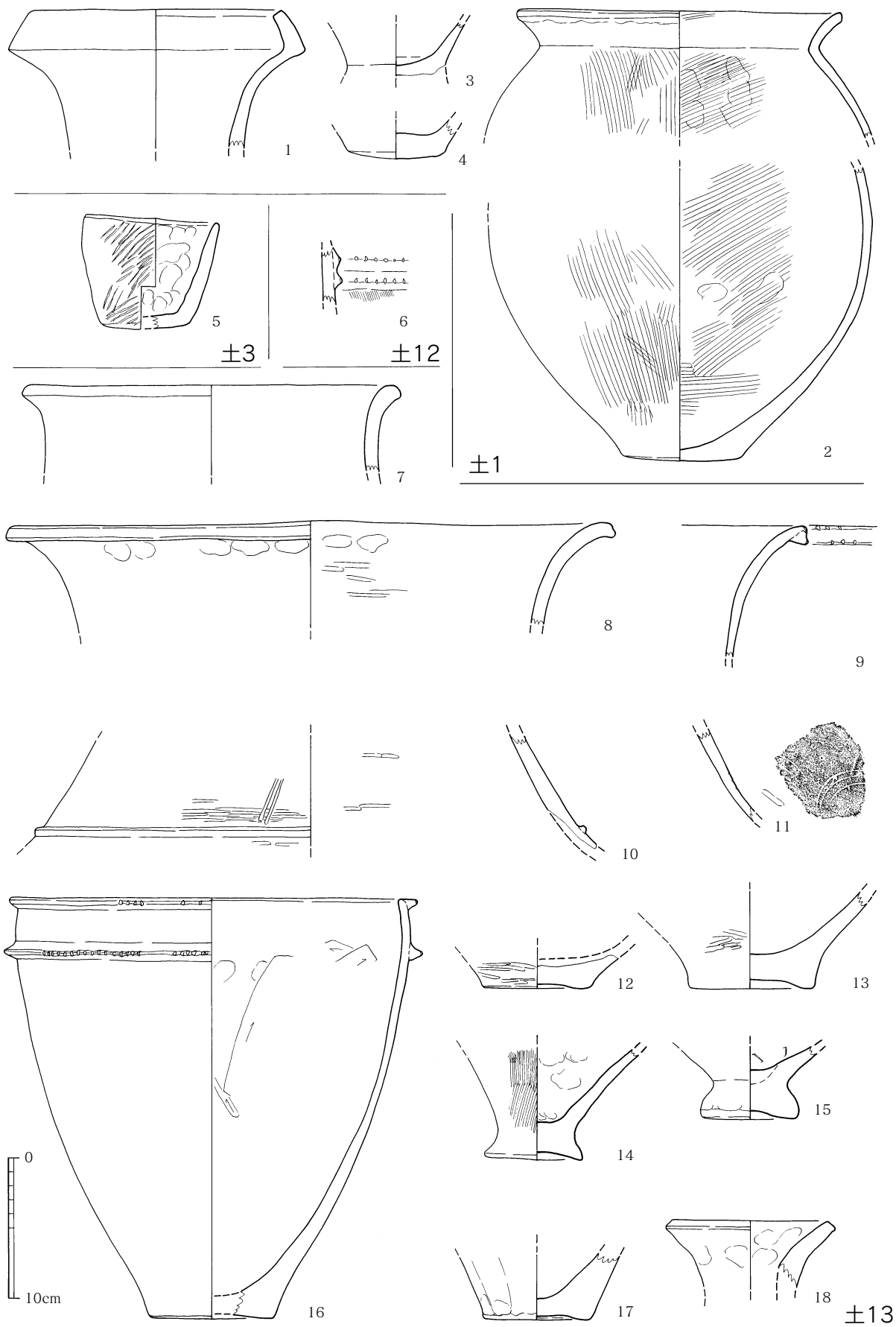
第二遺構面、調査区の南端部で検出した。長軸1.1m+ α 、短軸0.6mである。深さは0.2mで、西に向かい階段状に深くなる。遺物は出土していない。

10号土坑 (図版38、第87図)

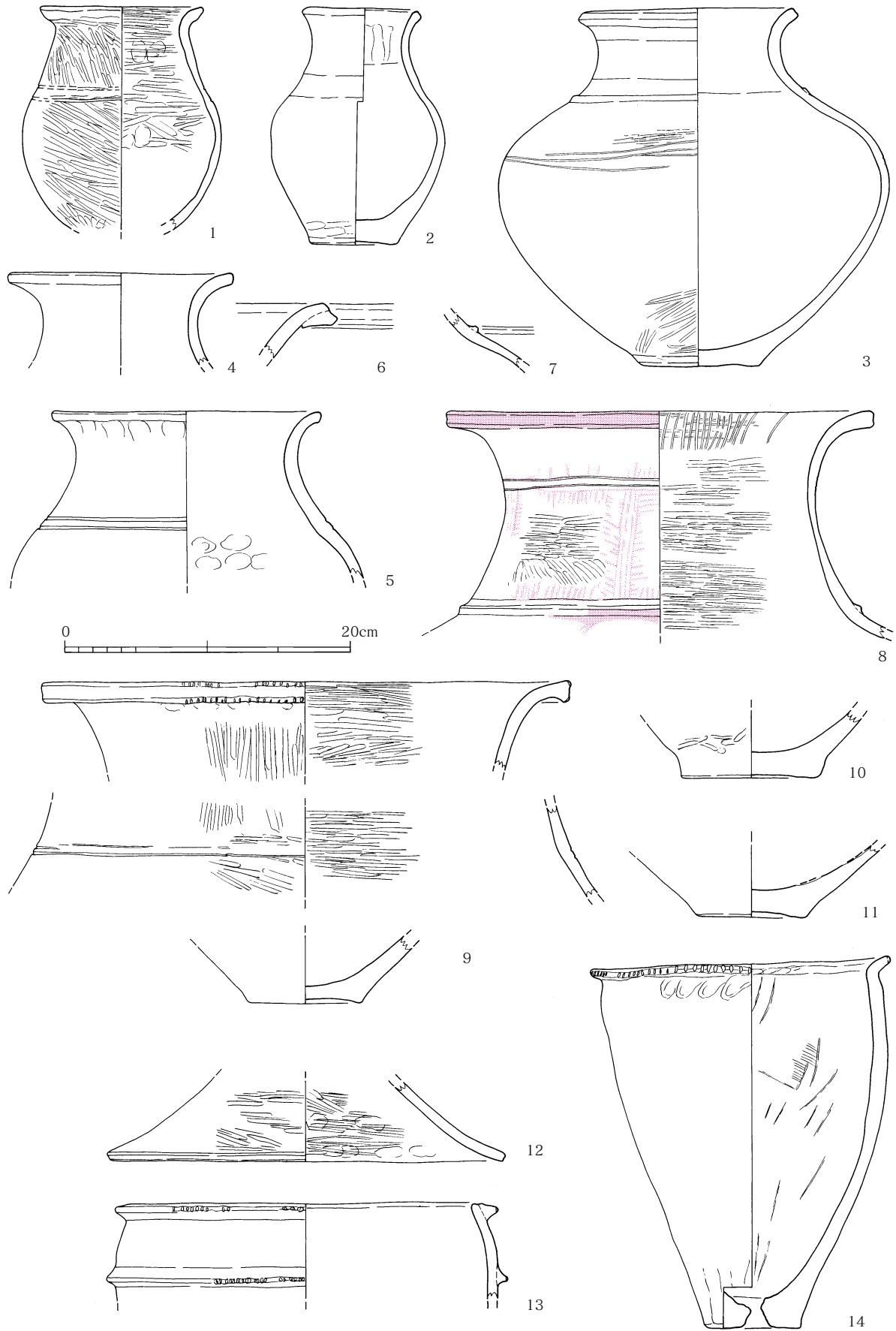
第二遺構面、調査区の南端部で検出した。11号土坑を切る。長軸2.7m、短軸0.7mの溝状を呈する。深さは0.3mで北側がやや深くなる。図化に耐え得る遺物は出土していない。



第83図 7区1~8号土坑実測図 (5は1/60、他は1/30)



第84图 7区1·3·12·13号土坑出土土器实测图 (1/4)



第85图 7区5号土坑出土土器实测图① (1/4)

11号土坑 (図版38、第87図)

第二遺構面、調査区の南端部で検出した。10号土坑に切られる。長軸1.2m、短軸0.7mの楕円形を呈すると思われる。深さは0.2mで床面はほぼ平坦である。図化に耐え得る遺物は出土していない。

12号土坑 (図版39、第87図)

第二遺構面、調査区の南端部で検出した。長軸0.8m、短軸0.7mの楕円形を呈する。深さは0.35mで、床面はほぼ平坦である。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第84図)

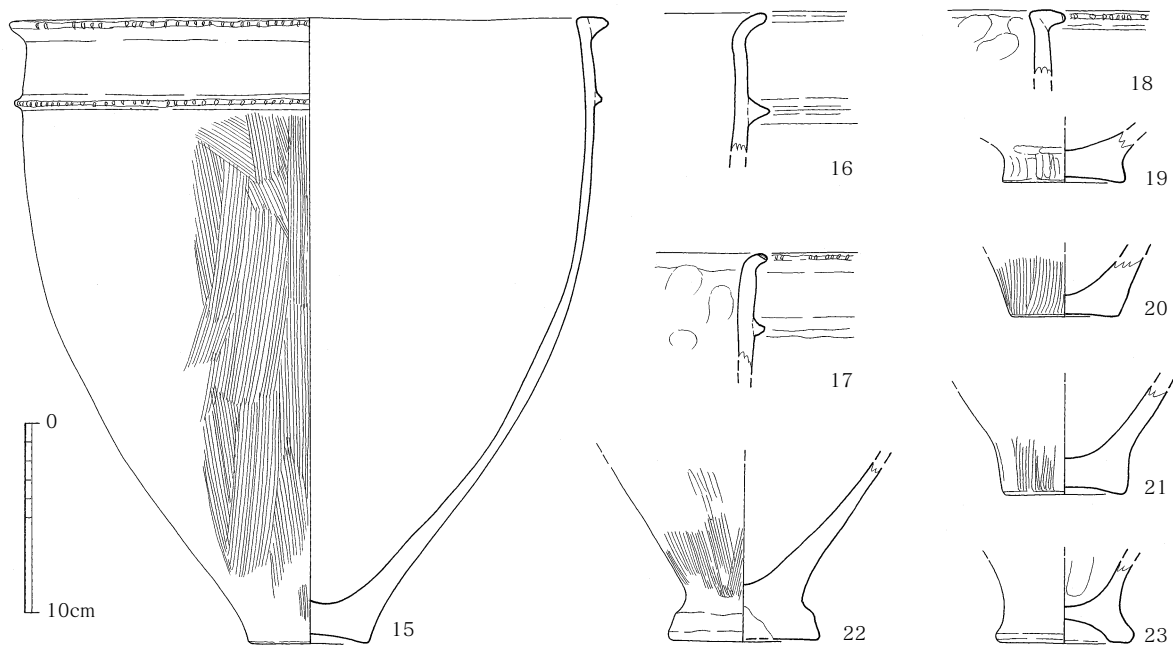
6は弥生土器の甕の胴部である。外面にハケメ調整を施した後、近接して2条の突帯を貼り付け、刻目を施す。

13号土坑 (図版39、第87図)

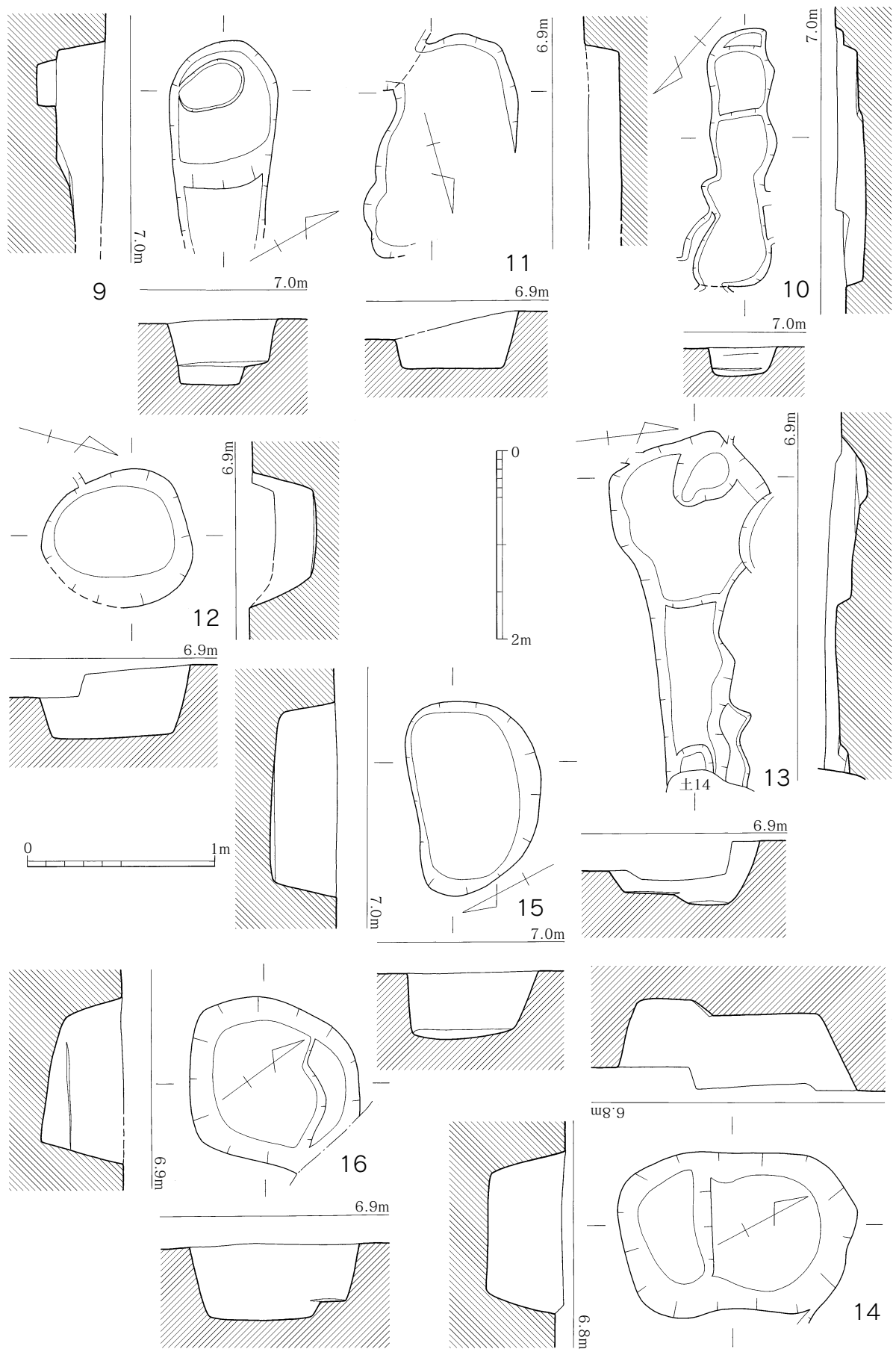
第二遺構面、調査区の南端部で検出した。15号土坑に切られる。また、切り合い関係は不明であるが、14号土坑と重複する。長軸 $3.6m + \alpha$ 、短軸1.7mである。深さは0.1mほどであるが、東西端部がかなり深くなる。遺物は弥生土器がまとまって出土している。

出土土器 (第84図)

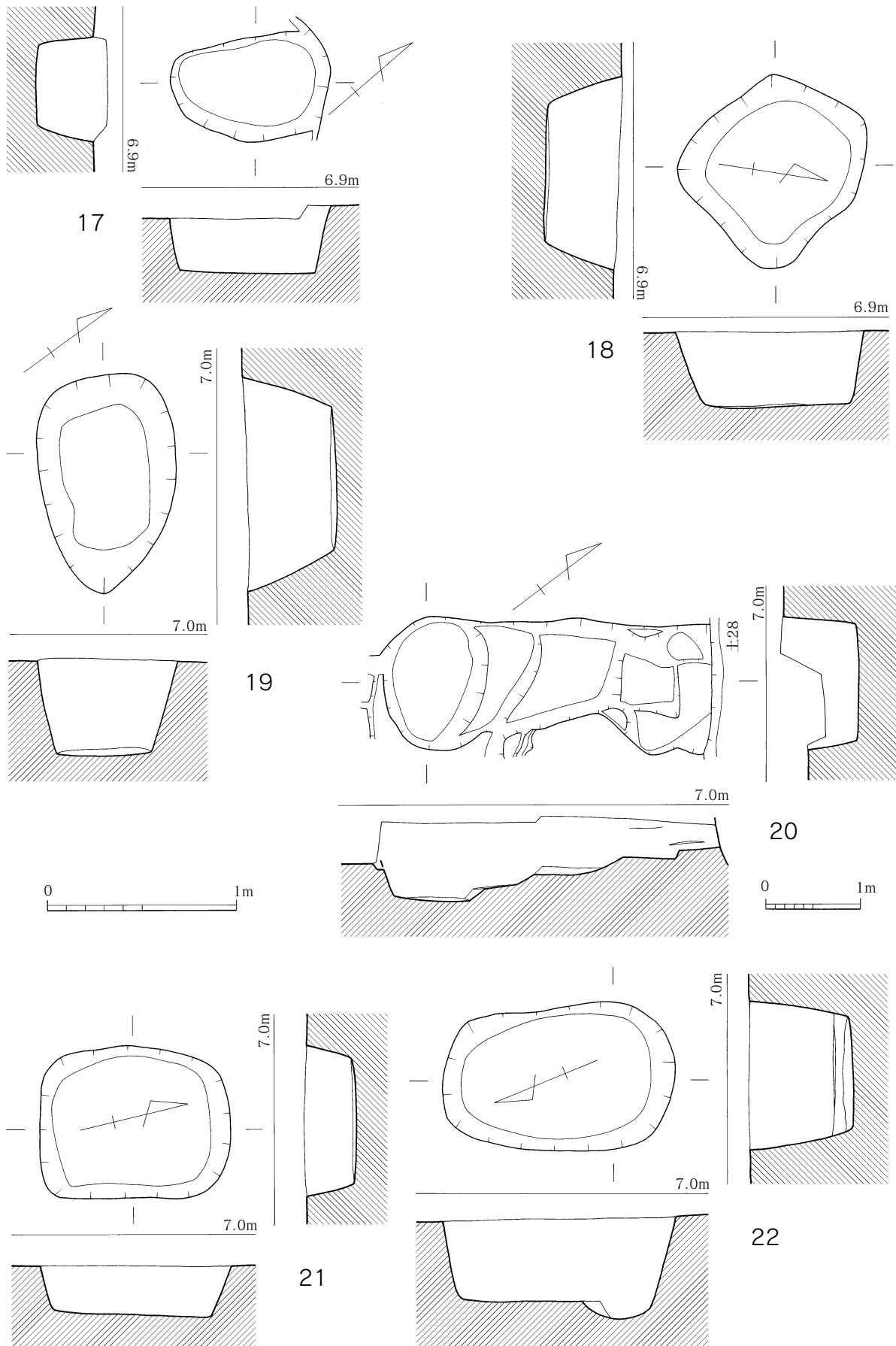
7~13は壺である。7の口径は27.0cmである。8の口径は43.0cmと大型である。9は口縁を肥厚させ、端部に刻目を施す。10は頸部と肩部の境に突帯を貼り付ける。11は重弧文を施す。12の底径は7.7cmである。13の底径は9.1cmである。14・15は蓋である。16は甕である。外面にはススが付着する。内面は板状工具でナデている。口径27.7cm、底径8.2cm、器高30.0cmである。17は甕の底部で、底径7.7cmである。18は器台で、口径12.0cmである。



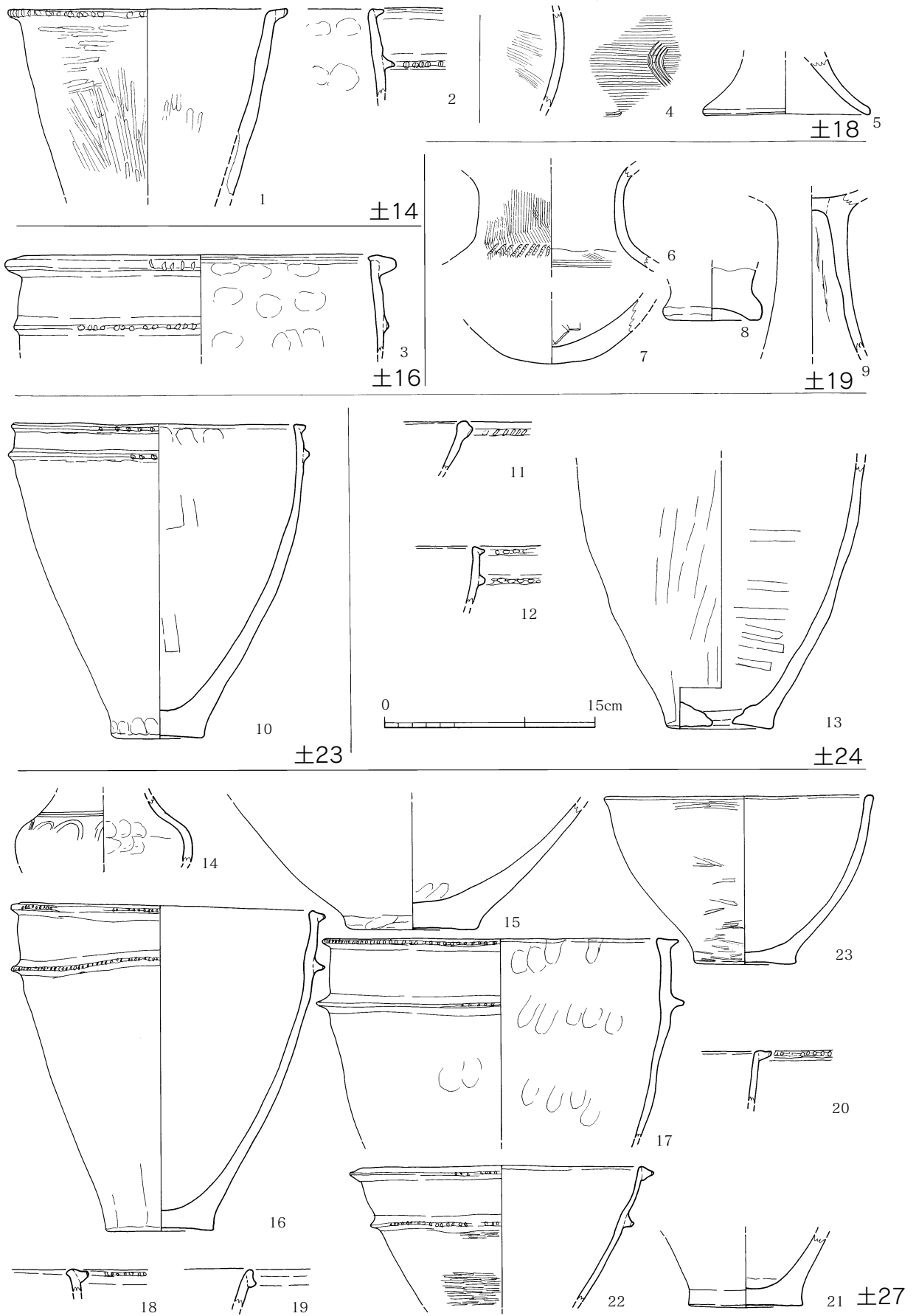
第86図 7区5号土坑出土土器実測図② (1/4)



第87図 7区9~16号土坑実測図 (10・13は1/60、他は1/30)



第88図 7区17~22号土坑実測図 (20は1/60、他は1/30)



第89图 7区14·16·18·19·23·24·27号土坑出土土器实测图 (1/4)

14号土坑（図版39、第87図）

第二遺構面、調査区の南端部で検出した。13号土坑と重複するが、切り合いは不明である。長軸1.2m、短軸0.8mの楕円形を呈する。深さは0.4mで、南側が一段深くなる。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器（第89図）

1は甕である。内外面の調整はミガキで、口径20.2cmである。2は甕の口縁部片である。内面に圧痕が残る。

15号土坑（図版40、第87図）

第二遺構面、調査区の南端部で検出した。13号土坑を切る。長軸1.0m、短軸0.7mの楕円形を呈する。深さは0.3mで床面はほぼ平坦である。図化に耐えうる遺物は出土していない。

16号土坑（図版40、第87図）

第二遺構面、調査区の南端部で検出した。長軸0.9m、短軸0.7mの楕円形を呈する。深さは0.4mで北東部にテラスがある。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器（第89図）

3は甕である。内面には圧痕が残る。口径28.0cmである。

17号土坑（図版40、第88図）

第二遺構面、調査区の南端部で検出した。長軸0.8m、短軸0.5mの楕円形を呈する。深さは0.3mで床面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

18号土坑（図版41、第88図）

第二遺構面、調査区の南端部で検出した。長軸1.0m、短軸1.0mのひし形に近い形状を呈する。深さは0.4mで、床面はほぼ平坦である。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器（第89図）

4は壺の胴部であろうか。内外面の調整はハケメで、5条の文様が入る。5は台付甕の脚部である。底径は12.0cmである。

19号土坑（図版41、第88図）

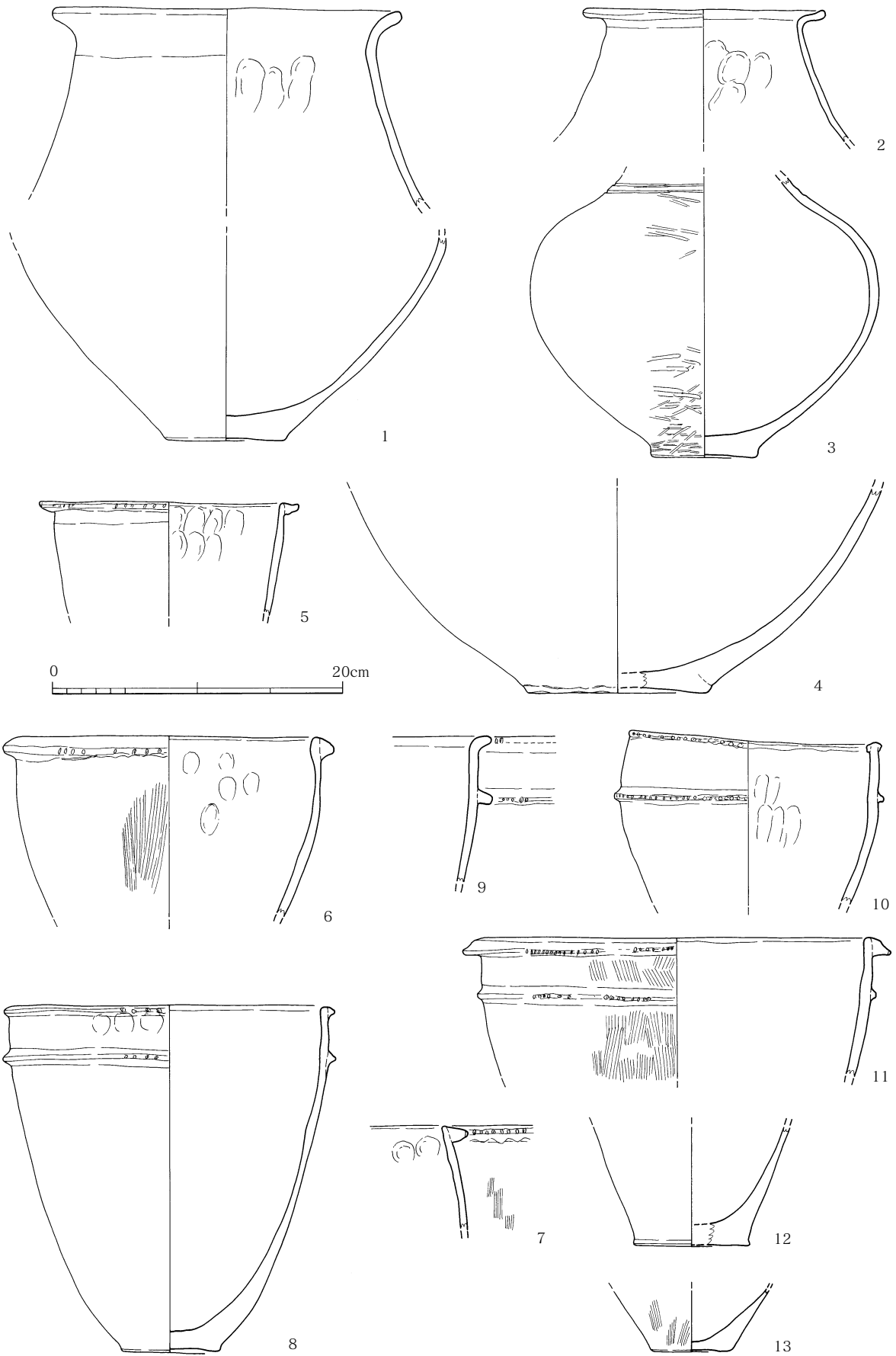
第二遺構面、調査区の南寄り検出した。20号土坑を切る。長軸1.1m、短軸0.7mの楕円形を呈する。深さは0.5mで、床面はほぼ平坦である。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器（第89図）

6は壺の頸部である。肩部との境に刻目を施している。7は甕の底部である。レンズ状で、底径7.4cmである。8はやや上底の甕の底部である。底径6.3cmである。9は高杯の脚部である。内面には絞り痕が残る。

20号土坑（図版41、第88図）

第二遺構面、調査区の南寄り検出した。19・28号土坑に切られる。長軸3.4m+ α 、短軸1.4mである。深さは0.8mで階段状に南側が深くなる。遺物は弥生土器がまとまって出土している。



第90图 7区20号土坑出土土器实测图 (1/4)

出土土器（図版81、第90図）

1～4は壺である。1の口径は24.3cm、底径は8.2cmである。2は口縁を強く外反させるもので、口径17.0cmである。3は球形に近い胴部で、頸部と肩部の境に2条の沈線を施す。胴部最大径24.0cm、底径7.4cmである。4は大型品で底径12.4cmである。5～13は甕である。5は内面に圧痕が強く残る。口径18.0cmである。6は口径23.0cmである。7は胴の膨らむものである。8は口径23.0cm、底径6.6cm、器高24.1cmである。10の口径は17.5cmである。11の口径は29.8cmである。12の底径は8.0cmである。13の底径は5.8cmである。

21号土坑（図版42、第88図）

第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。長軸1.0m、短軸0.8mの隅丸方形を呈する。深さは0.3mで、北側がわずかに深い。図化に耐え得る遺物は出土していない。

22号土坑（図版42、第88図）

第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。23・24号土坑を切る。長軸1.2m、短軸0.75mの楕円形を呈する。深さは0.4mで南側が一段深くなっている。出土遺物はない

23号土坑（図版42、第91図）

第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。24号土坑を切り、22・25号土坑に切られる。長軸1.4m、短軸0.9mの楕円形を呈する。深さは0.8mで、西側がわずかに深い。遺物は埋土から弥生土器が出土している。

出土土器（図版81、第89図）

10は甕で、胴部は屈曲せずに2条の刻目突帯を貼り付ける。口径20.6cm、底径6.6cm、器高22.5cm。

24号土坑（図版42、第91図）

第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。22・23号土坑に切られる。平面プランは長軸2.7m、短軸1.0mの長楕円形を呈する。深さは1.2mで、中央部分が深くなっている。遺物は埋土から弥生土器が出土している。

出土土器（図版81、第89図）

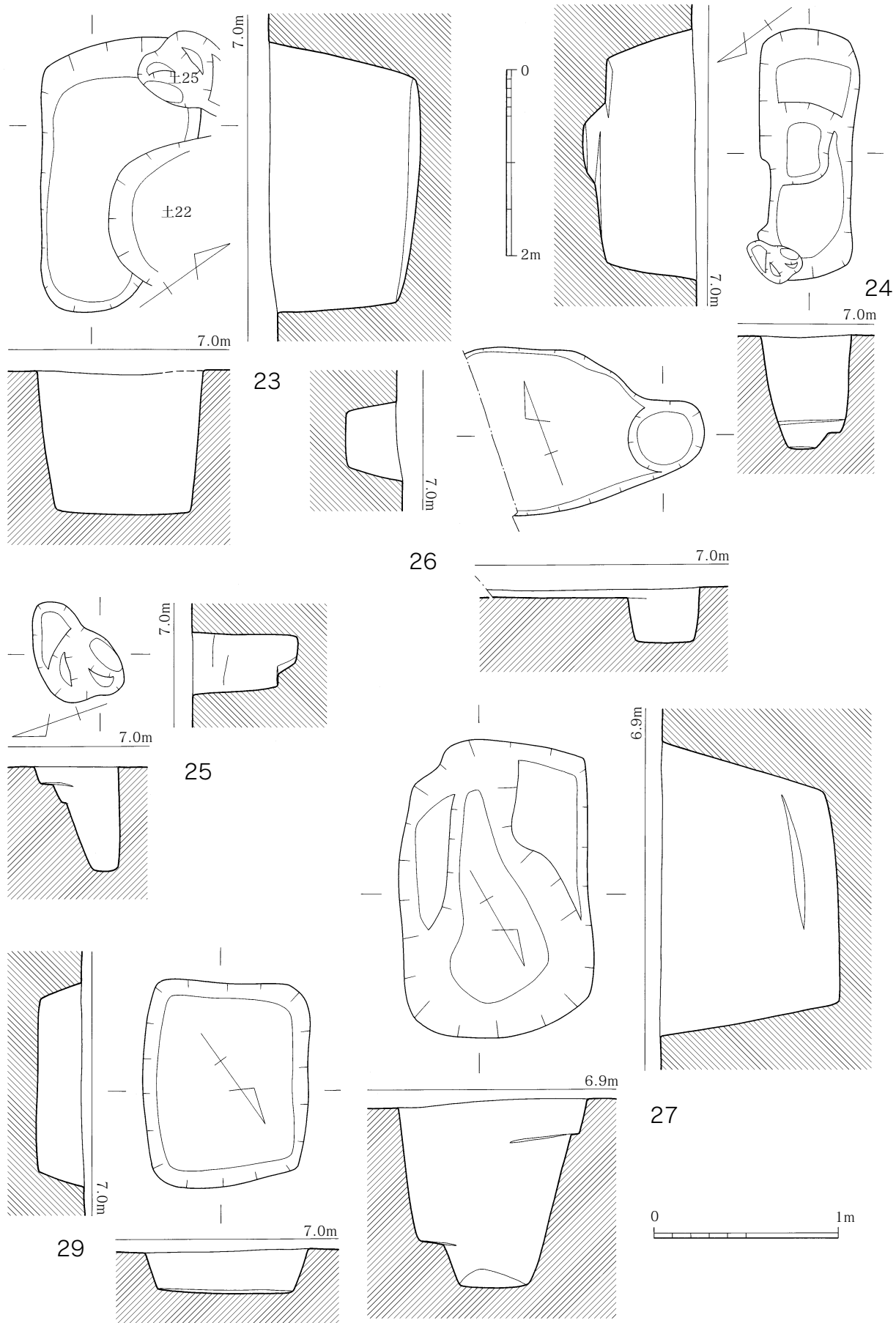
11～13は甕である。11は端部を肥厚させ、斜めに刻目を施す。13は焼成後に底部に穿孔が施される。内外面の調整は板状工具によるものである。底径0.6cmである。

25号土坑（第91図）

第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。23号土坑を切る。長軸0.5m、短軸0.4mの不整な楕円形を呈する。深さは0.55mで東側から階段状に深く掘られる。遺物は出土していない。

26号土坑（図版43、第91図）

第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。西側は調査区外へ延びる。長軸1.3m、短軸0.9mである。深さは0.1m程度であるが、東側がピット状に深く掘り込まれる。図化に耐え得る遺物は出土していない。



第91図 7区23~27・29号土坑実測図 (24は1/60、他は1/30)

27号土坑（図版43、第91図）

第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。28号土坑を切る。長軸1.6m、短軸1.0mの楕円形を呈する。深さは1.0mで中心部分が深く掘り込まれる。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器（図版81、第89図）

14・15は壺である。14は小型のもので肩部に沈線と重弧文が施される。内面には圧痕が強く残る。胴部最大径は12.8cmである。15の底径は9.5cmである。16～22は甕である。16は突帯が歪んで貼り付けられる。口径22.5cm、底径7.7cm、器高23.5cmである。17の内面には突帯貼り付け時の圧痕が残る。口径25.6cmである。21の底径は8.2cmである。22の外面は横方向のミガキである。23は鉢である。素口縁で、外面の調整はミガキである。口径19.2cm、底径7.3cm、器高12.0cmである。

28号土坑（図版43・44、第92図）

第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。20号土坑を切り、27・36号土坑に切られる。長軸3.8m、短軸2.5mの隅丸方形。深さ0.8mで、床面はほぼ平坦である。遺物は弥生土器がまとめて出土している。

出土土器（図版81・82、第93・94図）

1～4は壺である。1は口縁端部がわずかに肥厚するもので、内外面の調整はミガキである。口径15.0cmである。2はやや長胴の印象を受けるもので、肩部に2条の沈線を巡らす。口径11.4cm、胴部最大径11.8cm、底径6.0cm、器高16.7cmである。3の内外面はミガキである。口径15.6cm、胴部最大径25.2cm、底径8.2cm、器高31.1cmである。4の底径は7.6cmである。5は蓋である。口径25.6cmである。内面の口径21.0cmより外側の部分にススが付着しており、口径21.0cmの甕と組み合わせられて使用されていたことが分かる。6～15は甕である。6は口径14.9cm、底径5.9cm、器高15.1cmである。7は胴部中位までススが付着し、下位には二次被熱の痕跡が残る。口径26.6cm、底径9.2cm、器高28.2cmである。8の口径は22.3cmである。9は胴部の張る器形で口径30.0cmである。10の外面下位には二次被熱を受けた痕跡が残る。口径21.4cm、底径7.4cm、器高21.6cmである。11の口径は22.3cm、底径7.6cm、器高25.7cmである。12の口径は24.0cm、底径は9.0cmである。13は口径25.0cm、底径8.9cm、器高23.7cmである。14は3条の突帯を巡らすもので、口径50.4cmである。15の底径は9.4cmである。16は鉢であろうか。口径27.0cmである。17は鉢である。口径27.0cm、底径7.2cm、器高14.3cmである。

29号土坑（図版44、第91図）

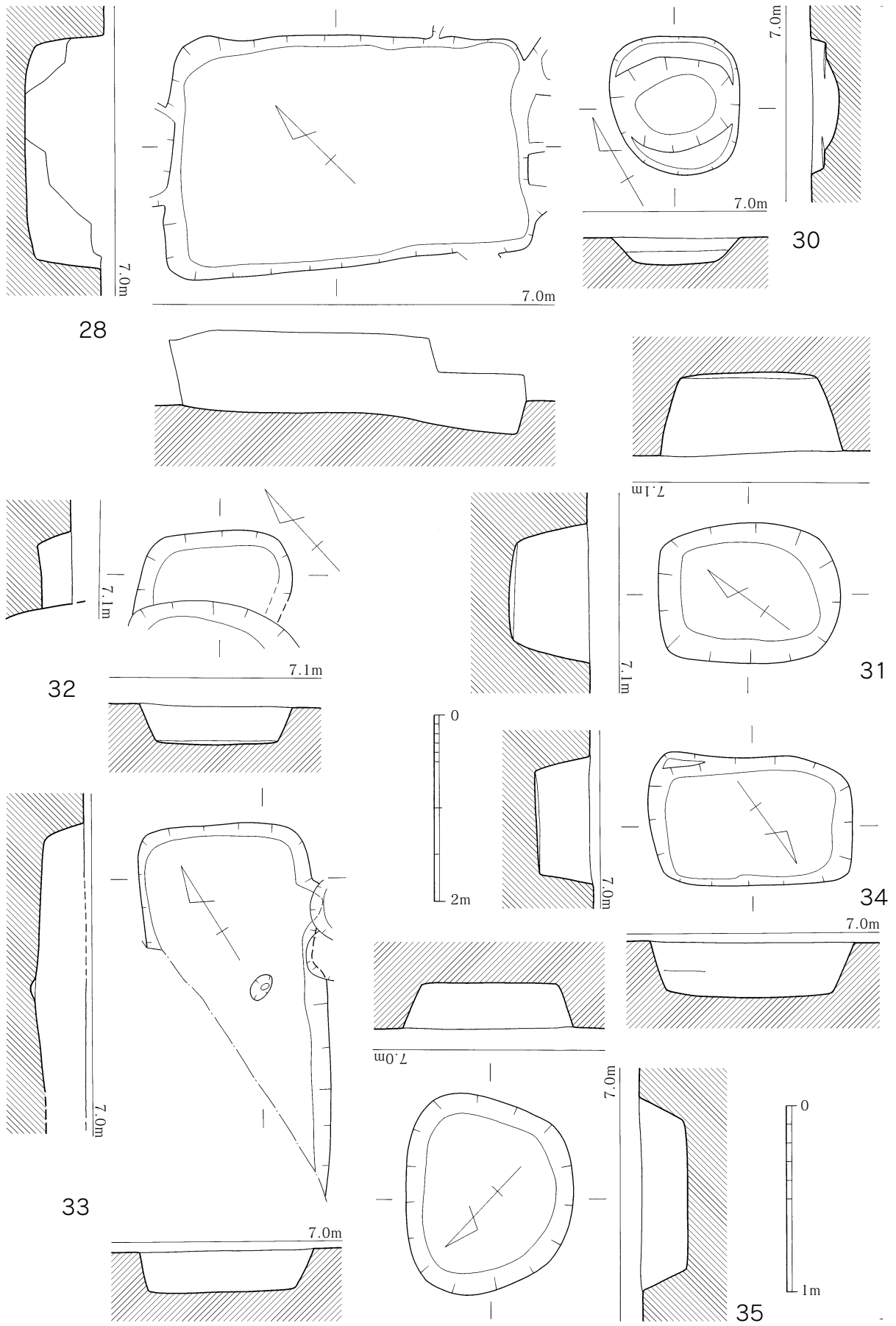
第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。長軸1.1m、短軸0.9mの隅丸方形を呈する。深さは0.25mで床面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

30号土坑（図版44、第92図）

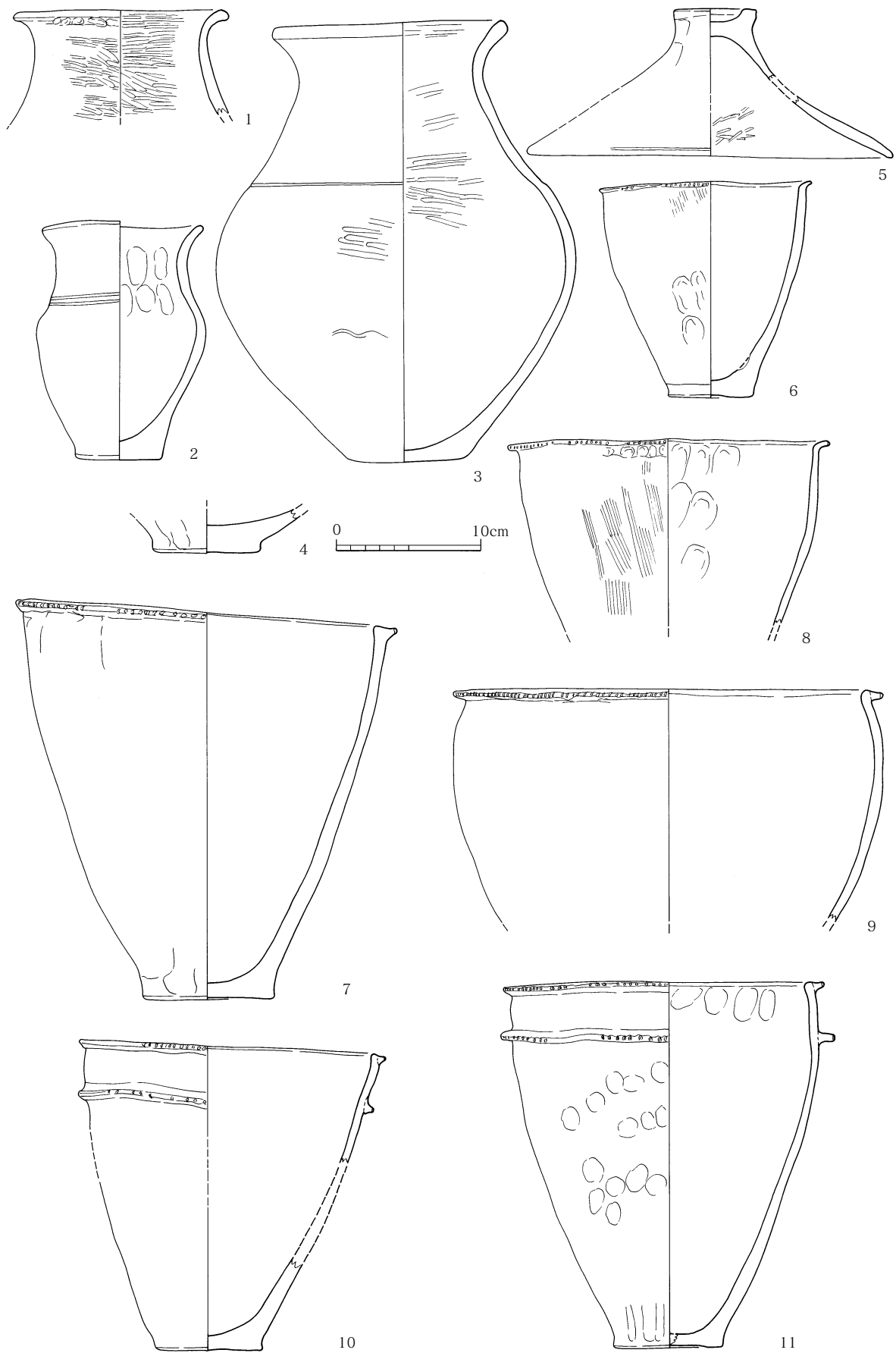
第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。長軸0.7m、短軸0.7mのやや歪んだ円形である。深さは0.15mで南北にテラスが付く。図化に耐えうる遺物は出土していない。

31号土坑（図版45、第92図）

第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。32・33号土坑を切る。長軸1.0m、短軸0.75mの楕円形を呈する。深さは0.4mで床面はほぼ平坦である。遺物は弥生土器が出土している。



第92図 7区28・30～35号土坑実測図 (28・33・34は1/60、他は1/30)



第93图 7区28号土坑出土土器实测图① (1/4)

出土土器 (図版82、第97図)

1は甕である。2条の突帯を貼り付けるが、口縁のものは大きい。口径28.7cmである。

32号土坑 (図版45、第92図)

第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。33号土坑を切り、31号土坑に切られる。長軸0.8m、短軸0.4m+ α である。深さは0.2mで床面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

33号土坑 (図版45、第92図)

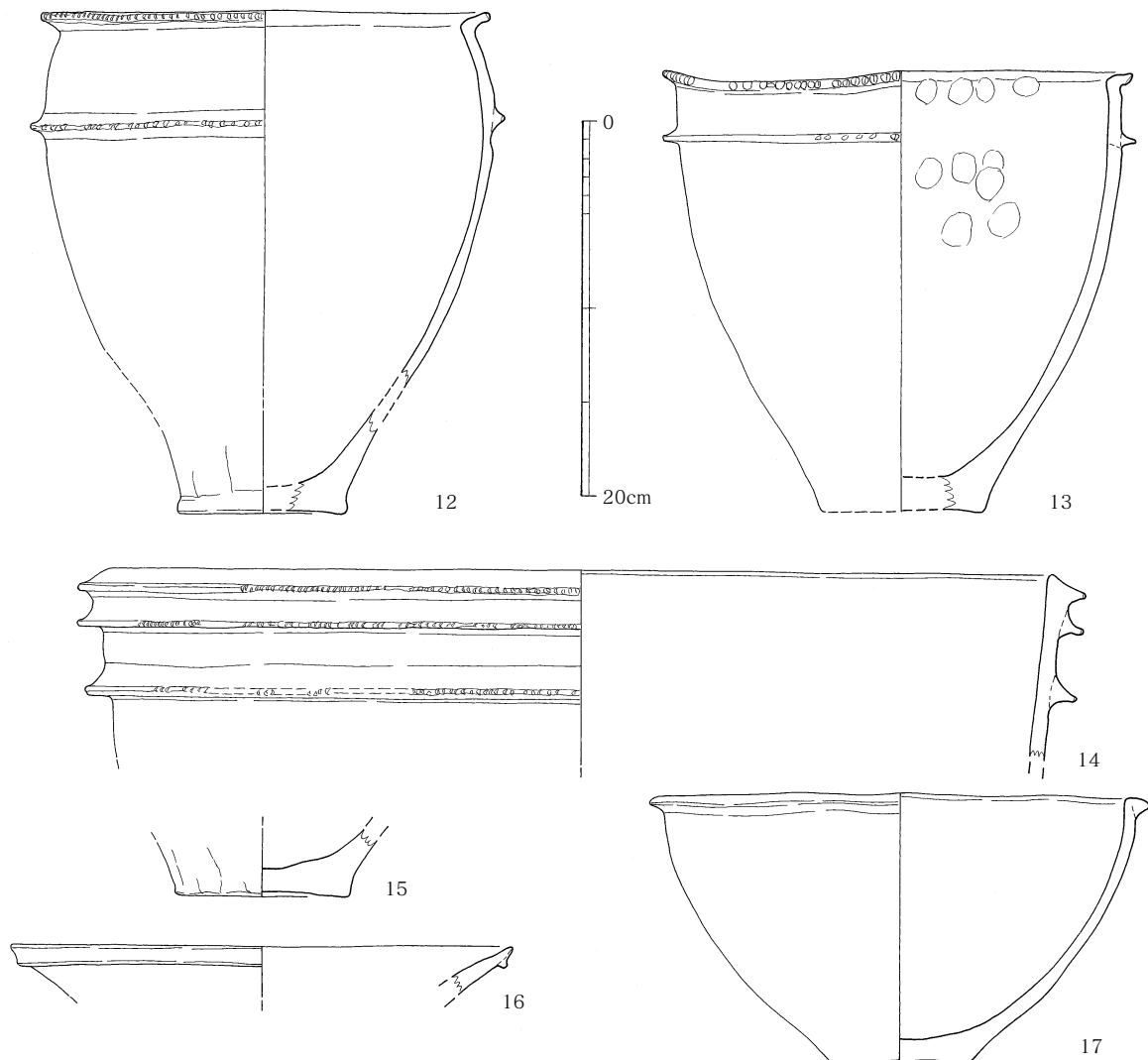
第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。東側は調査区外へ延びる。31・32号土坑に切られる。長軸3.8m+ α 、短軸1.9mの方形を呈する。深さ0.4mで床面は平坦である。弥生土器が出土している。

出土土器 (第97図)

2・3は甕である。2は口縁を外反させるもので、口径21.0cmである。

34号土坑 (図版45、第92図)

第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。53・92号土坑を切る。長軸2.2m、短軸1.3mの方形を呈する。深さは0.6mで床面は平坦である。遺物は弥生土器が出土している。



第94図 7区28号土坑出土土器実測図② (1/4)

出土土器 (第97図)

4は大型の壺の口縁部である。頸部に2条の突帯を巡らせる。口径36.0cmである。5～7は甕である。5の口径は20.0cmである。6の口径は19.4cmである。7の底径は5.6cmである。

35号土坑 (図版46、第92図)

第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。53号土坑を切る。長軸1.0m、短軸0.9mの楕円形を呈する。深さは0.25mで床面は平坦である。図化に耐え得る遺物は出土していない。

36号土坑 (第95図)

第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。28号土坑を切る。長軸0.8m、短軸0.7mの楕円形を呈する。深さは0.2mで床面は平坦である。遺物は出土していない。

37号土坑 (図版46、第95図)

第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。長軸1.7m、短軸1.4mの不整形を呈する。深さは0.2mで北側が一段深くなっている。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第97図)

8は甕の底部である。内外面はナデ調整である。底径4.0cmである。

38号土坑 (図版47、第95図)

第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。長軸1.3m、短軸1.0mの楕円形を呈する。深さは0.25mで、床面はほぼ平坦であるが、南端をピット状に深く掘り込まれる。図化に耐え得る遺物は出土していない。

39号土坑 (図版47、第95図)

第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。長軸1.1m、短軸0.9mの方形を呈する。深さは0.25mで、床面は平坦である。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第97図)

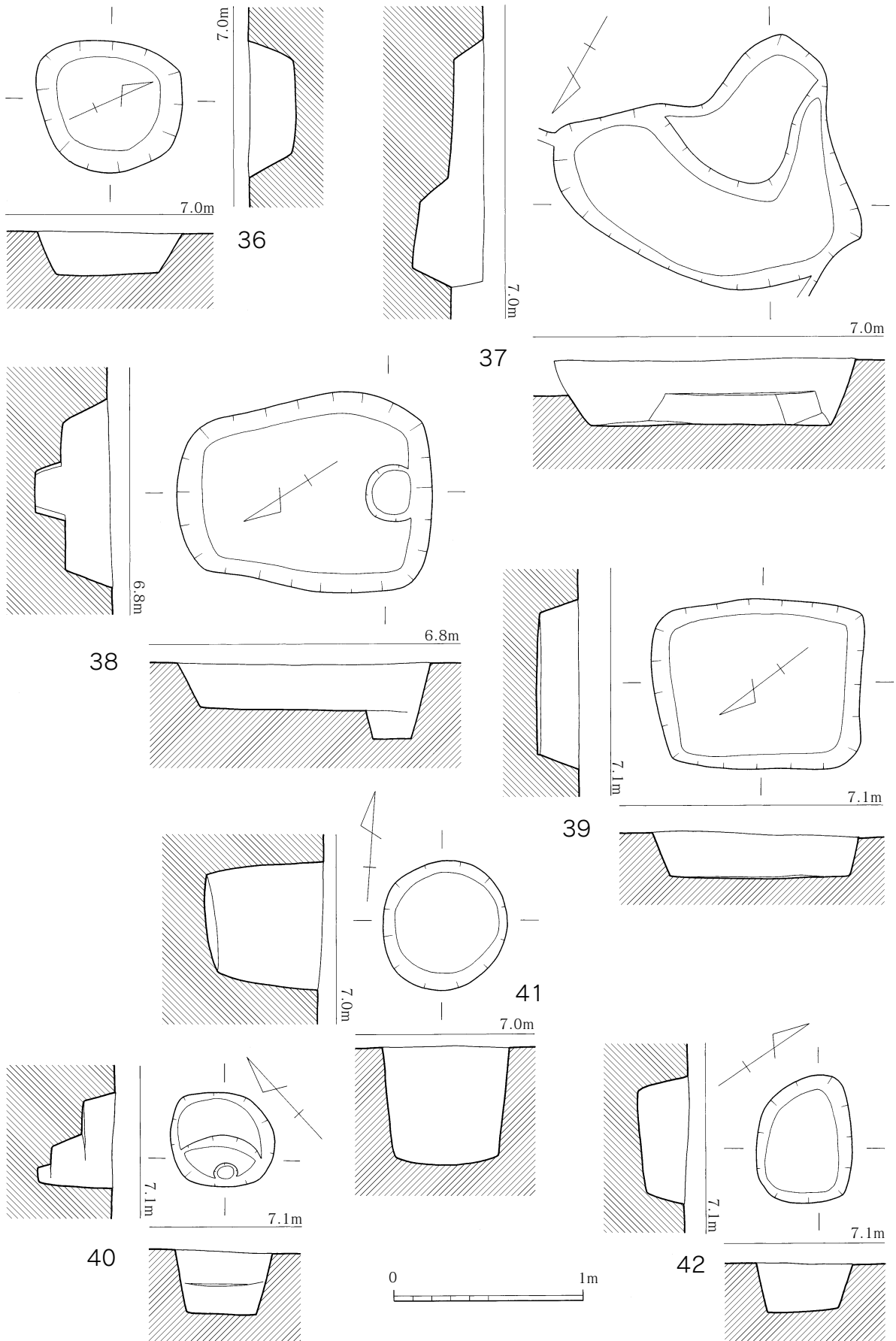
9は壺である。肩部に2条の突帯を巡らせる。口径15.0cmである。10は中期後葉の特徴をもつ甕の口縁である。口径30.0cmである。11は甕の底部である底径6.0cmである。12は支脚の脚部である。底径9.0cmである。

40号土坑 (図版47、第95図)

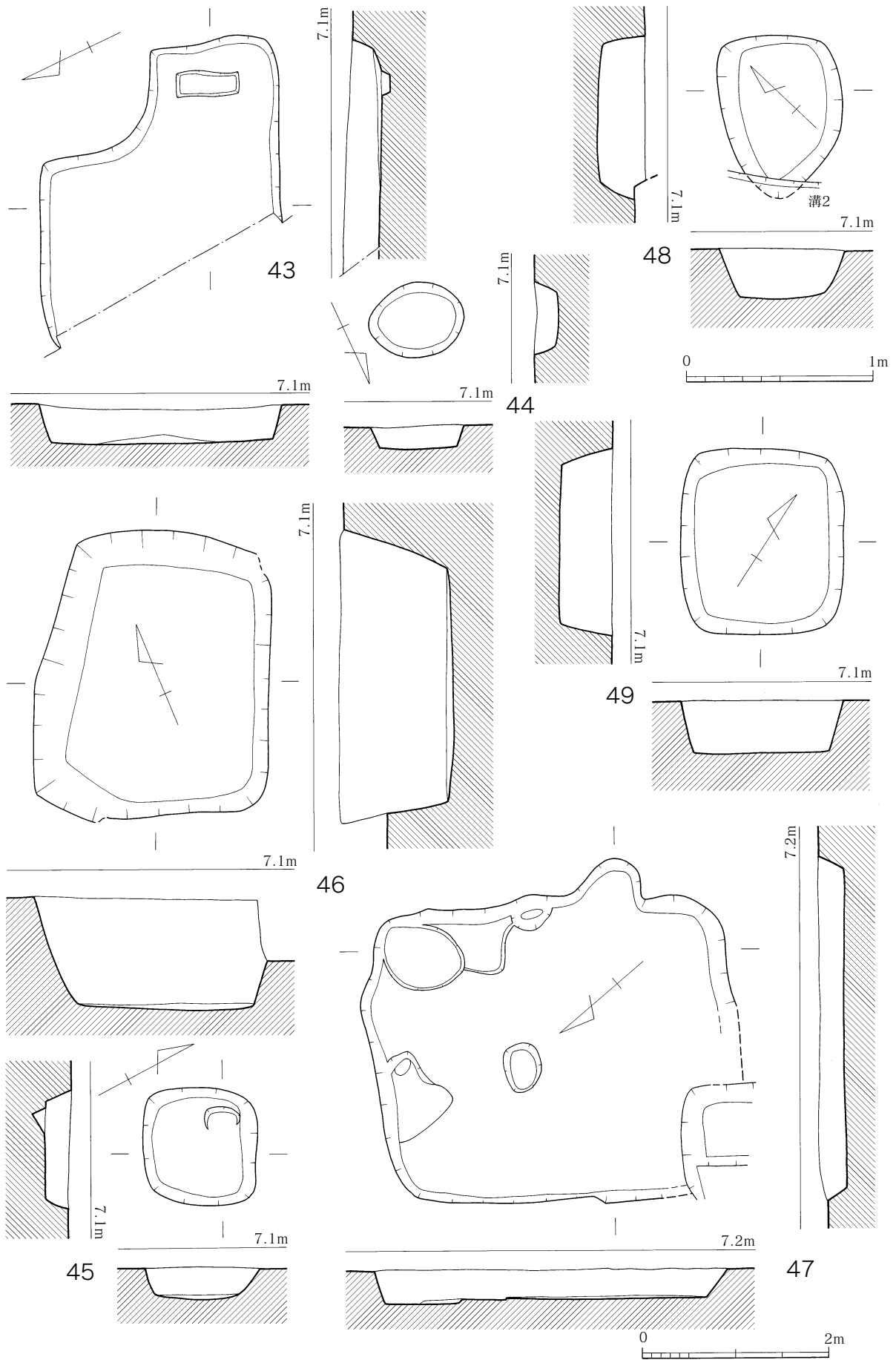
第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。長軸0.55m、短軸0.5mの円形を呈する。深さは0.4mで、南側が階段状に深く掘られる。遺物は出土していない。

41号土坑 (図版48、第95図)

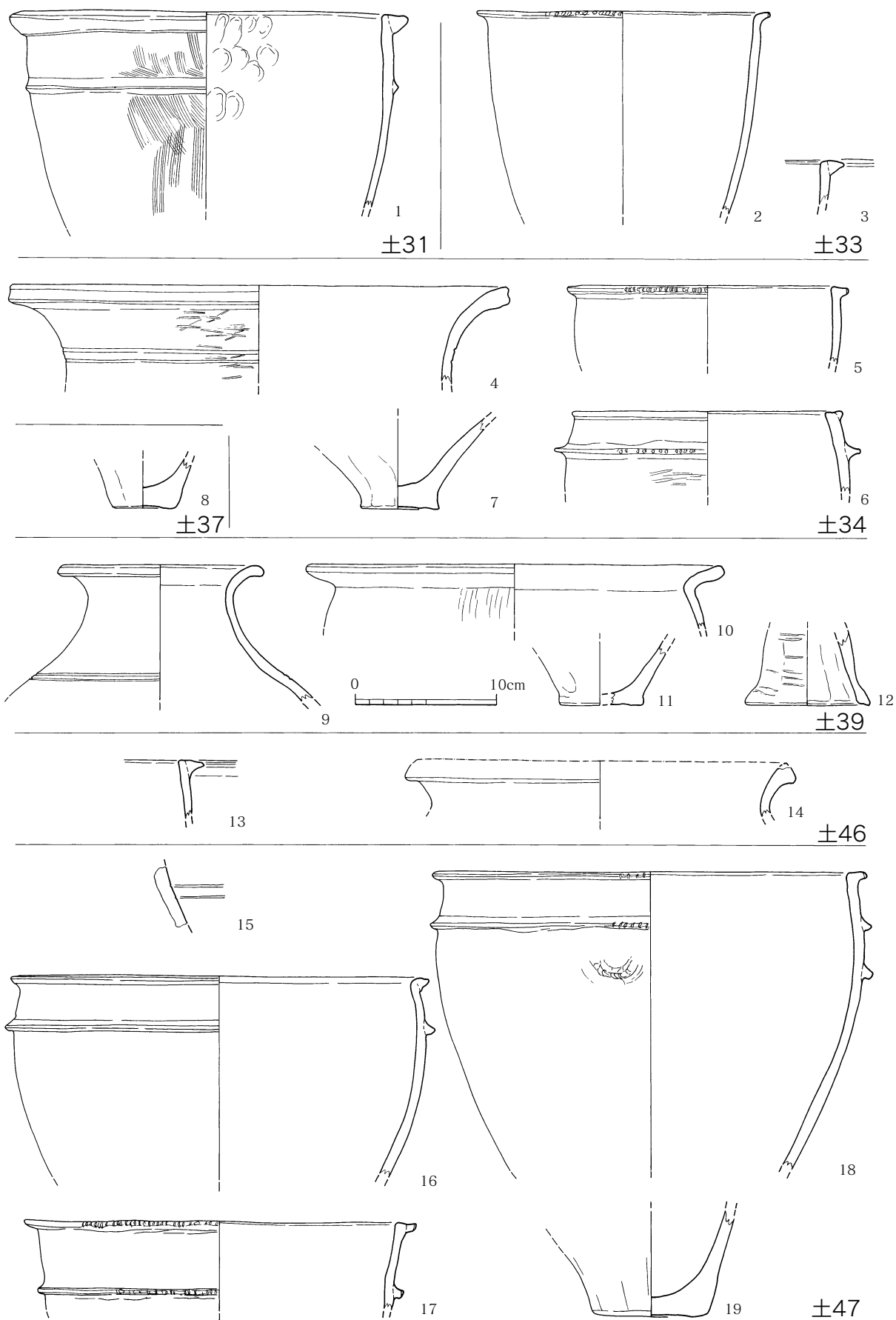
第二遺構面、調査区の中央付近で検出した。長軸0.7m、短軸0.65mの円形を呈する。深さは0.6mで、中央がレンズ状に深くなる。遺物は出土していない。



第95图 7区36~42号土坑实测图 (1/30)



第96図 7区43~49号土坑実測図 (47は1/60、他は1/30)



第97图 7区31·33·34·37·39·46·47号土坑出土土器实测图 (1/4)

42号土坑（図版48、第95図）

第二遺構面、調査区の46中央付近で検出した。長軸0.6m、短軸0.5mの楕円形を呈する。深さは0.25mで、床面は平坦である。図化に耐え得る遺物は出土していない。

43号土坑（図版48、第96図）

第二遺構面、調査区の中央付近で検出した。西側は調査区外へ延びる。長軸1.6m、短軸1.3mの不整形を呈する。深さは0.2mで、東側に方形の掘り込みを持つ。遺物は出土していない。

44号土坑（図版48、第96図）

第二遺構面、調査区の中央付近で検出した。長軸0.5m、短軸0.4mの楕円形を呈する。深さは0.1mである。遺物は出土していない。

45号土坑（図版48、第96図）

第二遺構面、調査区の中央付近で検出した。長軸0.6m、短軸0.6mの隅丸方形を呈する。深さは0.15mで、一部に掘り込みがある。遺物は出土していない。

46号土坑（図版48、第96図）

第二遺構面、調査区の中央付近で検出した。3号溝を切る。長軸1.6m、短軸1.3mの方形を呈する。深さは0.6mで、床面はほぼ平坦である。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器（第97図）

13は甕。口縁に突帯を貼り付ける。14は壺の口縁であろうか。端部を欠失するが口径28.0cmである。

47号土坑（図版49、第96図）

第二遺構面、調査区の中央付近で検出した。3号溝を切り、2号溝に切られる。長軸3.9m、短軸3.1mの隅丸方形。深さ0.3mで、床面は平坦であるが、北東部がやや深い。弥生土器が出土している。

出土土器（第97図）

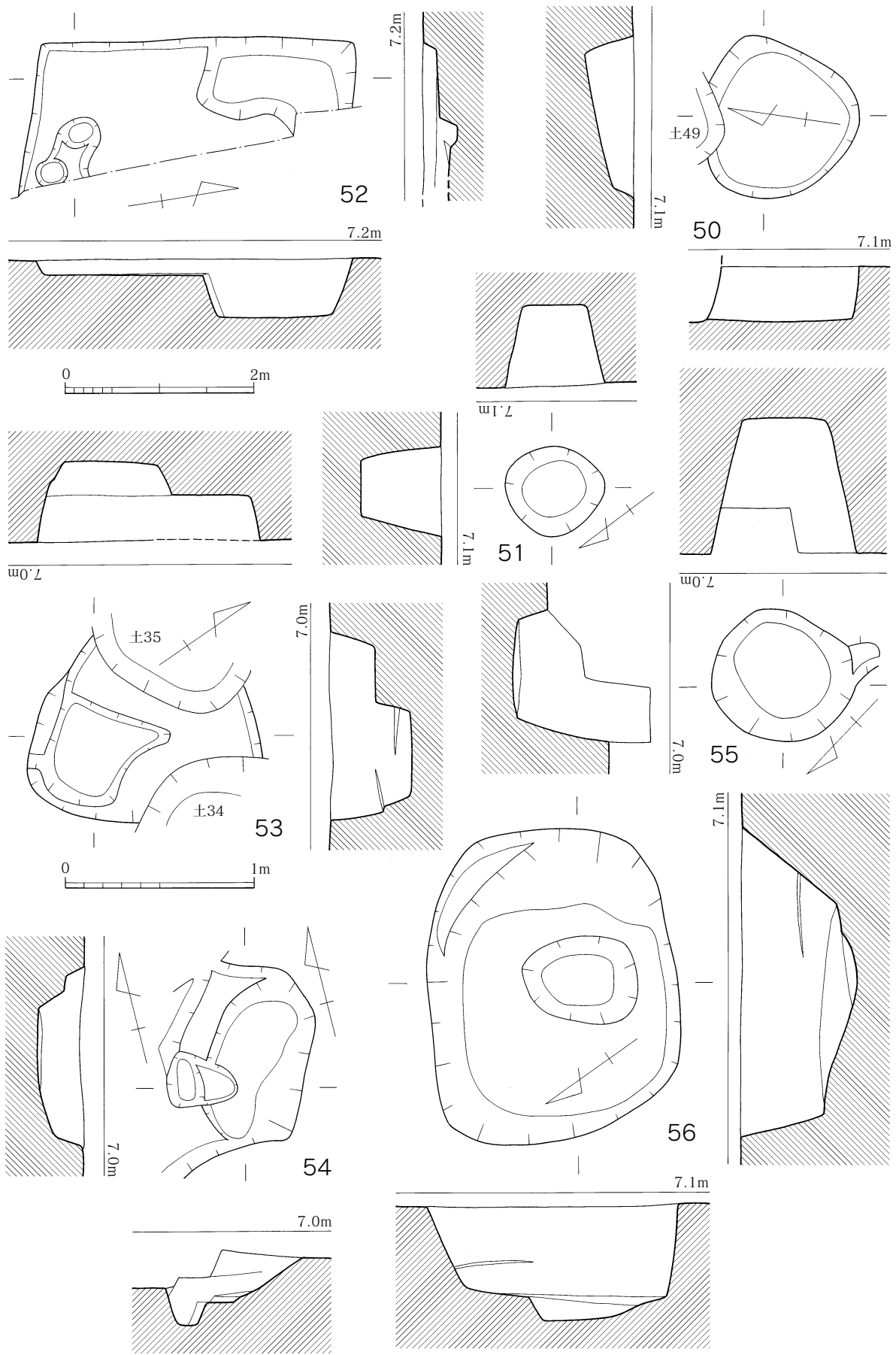
15は壺の肩部である。2条の沈線を巡らせる。16～19は甕である。16の口径は30.0cmである。17の口径は28.0cmである。18は2条の突帯を巡らせる他に、「U」字状の刻目突帯を貼り付けている。剥がれているために全体の形状は不明である。口径28.0cmである。19の底径は8.2cmである。

48号土坑（図版49、第96図）

第二遺構面、調査区の中央付近で検出した。2号溝を切る。長軸0.75cm + α 、短軸0.6mの楕円形を呈する。深さは0.25mで、床面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

49号土坑（図版49、第96図）

第二遺構面、調査区の中央付近で検出した。50号土坑を切る。長軸1.0m、短軸0.9mの隅丸方形を呈する。深さは0.25mで、床面は平坦である。図化に耐え得る遺物は出土していない。



第98図 7区50~56号土坑実測図 (52は1/60、他は1/30)

50号土坑（図版49、第98図）

第二遺構面、調査区の中央付近で検出した。49号土坑に切られる。長軸0.85m、短軸0.8mの円形を呈する。深さは0.3mで、床面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

51号土坑（第98図）

第二遺構面、調査区の中央付近で検出した。3号溝を切る。長軸0.5m、短軸0.45mの円形を呈する。深さは0.4mで、床面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

52号土坑（図版50、第98図）

第二遺構面、調査区の中央付近で検出した。東側は調査区外へ延びる。3号溝を切る。長軸3.3m、短軸1.5m+ α である。深さ0.15mで平坦で、北側が0.6mと深くなる。弥生後期の土器が出土している。

出土土器（図版83、第99図）

1は袋状口縁壺で、口縁下に1条の突帯を貼り付ける。口径10.3cmである。2は壺の口縁部で、端部に刻目を施す。3・4は「く」字口縁の甕の口縁である。3は口径28.0cmである。5は高杯の脚部である。3ヶ所に穿孔される。混入の土師器の可能性もある。底径14.0cmである。

53号土坑（図版50、第98図）

第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。34・35号土坑に切られる。長軸1.2m、短軸1.1m+ α である。深さは0.2mであるが、南側が一段深く掘り込まれる。遺物は出土していない。

54号土坑（図版50、第98図）

第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。長軸1.0m、短軸0.8m+ α である。深さは0.4mで、東側が階段状に深くなる。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器（図版83、第99図）

6は鉢である。内外面の調整は粗いハケメである。口径12.2cm、底径3.8cm、器高8.0cmである。

55号土坑（図版51、第98図）

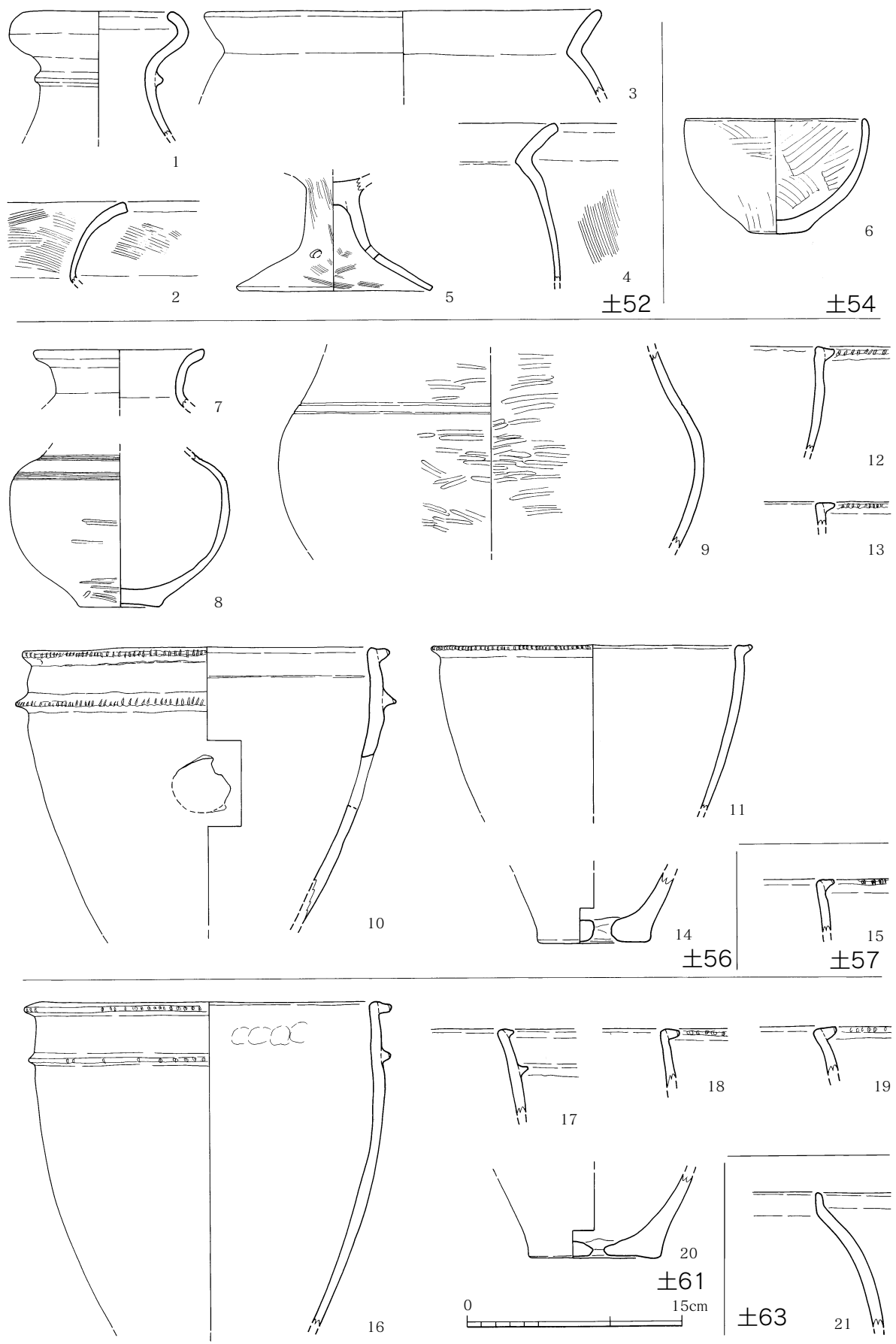
第二遺構面、調査区の中央付近で検出した。3号溝を切る。平面プランは長軸0.8m、短軸0.7mのほぼ円形を呈する。壁の深さは0.7mである。床面はほぼ平坦である。図化に耐え得る遺物は出土していない。

56号土坑（図版51、第98図）

第二遺構面、調査区の中央付近で検出した。57・77号土坑を切る。平面プランは長軸1.6m、短軸1.3mの楕円形を呈する。深さは0.6mで、中央部分が次第に深くなる。遺物は埋土から弥生土器が出土している。

出土土器（図版83、第99図）

7～9は壺である。7は口縁端部をわずかに肥厚させる口縁部で、口径12.0cmである。8は球形に近い胴部で、肩部の2ヶ所に3条ずつの沈線を施す。胴部最大径15.3cm、底径5.6cmである。9は胴部で、内外面の調整はミガキである。肩部に2条の沈線を施す。胴部最大径29.7cmである。10～14は甕である。10は胴部に焼成後、穿孔を施している。口径25.9cmである。11の口径は22.6cmである。14は



第99图 7区52·54·56·57·61·63号土坑出土土器实测图 (1/4)

焼成後に底部に穿孔を施したもので、底径7.9cmである。

57号土坑 (第100図)

第二遺構面、調査区の中央付近で検出した。56号土坑に切られる。長軸0.8m、短軸0.7m+ α である。深さは0.3mで、床面はほぼ平坦である。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第99図)

15は甕である。口縁外面に刻目突帯を貼り付ける。

58号土坑 (第100図)

第二遺構面、調査区の中央付近で検出した。長軸0.65m、短軸0.5mの楕円形を呈する。深さは0.2mで、床面は平坦である。遺物は出土していない。

59号土坑 (図版51、第100図)

第二遺構面、調査区の中央付近で検出した。長軸1.8m、短軸1.0mの楕円形を呈する。深さは0.5mで、中心部分が階段状に深くなる。図化に耐え得る遺物は出土していない。

60号土坑 (第100図)

第二遺構面、調査区の中央付近で検出した。長軸0.8m、短軸0.4mの長楕円形を呈する。深さは0.2mで、床面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

61号土坑 (図版52、第100図)

第二遺構面、調査区の中央付近で検出した。長軸2.2m、短軸1.6mである。深さは0.8mで南に向かって階段状に深くなる。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (図版83、第99図)

16～20は甕である。16の内外面は工具痕が残る。20は焼成後に底部に両面から穿孔が施される。

62号土坑 (図版52、第100図)

第二遺構面、調査区の中央付近で検出した。長軸1.2m、短軸0.9mの方形を呈する。深さは0.55mで、東側に2段のテラスが付く。遺物は出土していない。

63号土坑 (図版52、第101図)

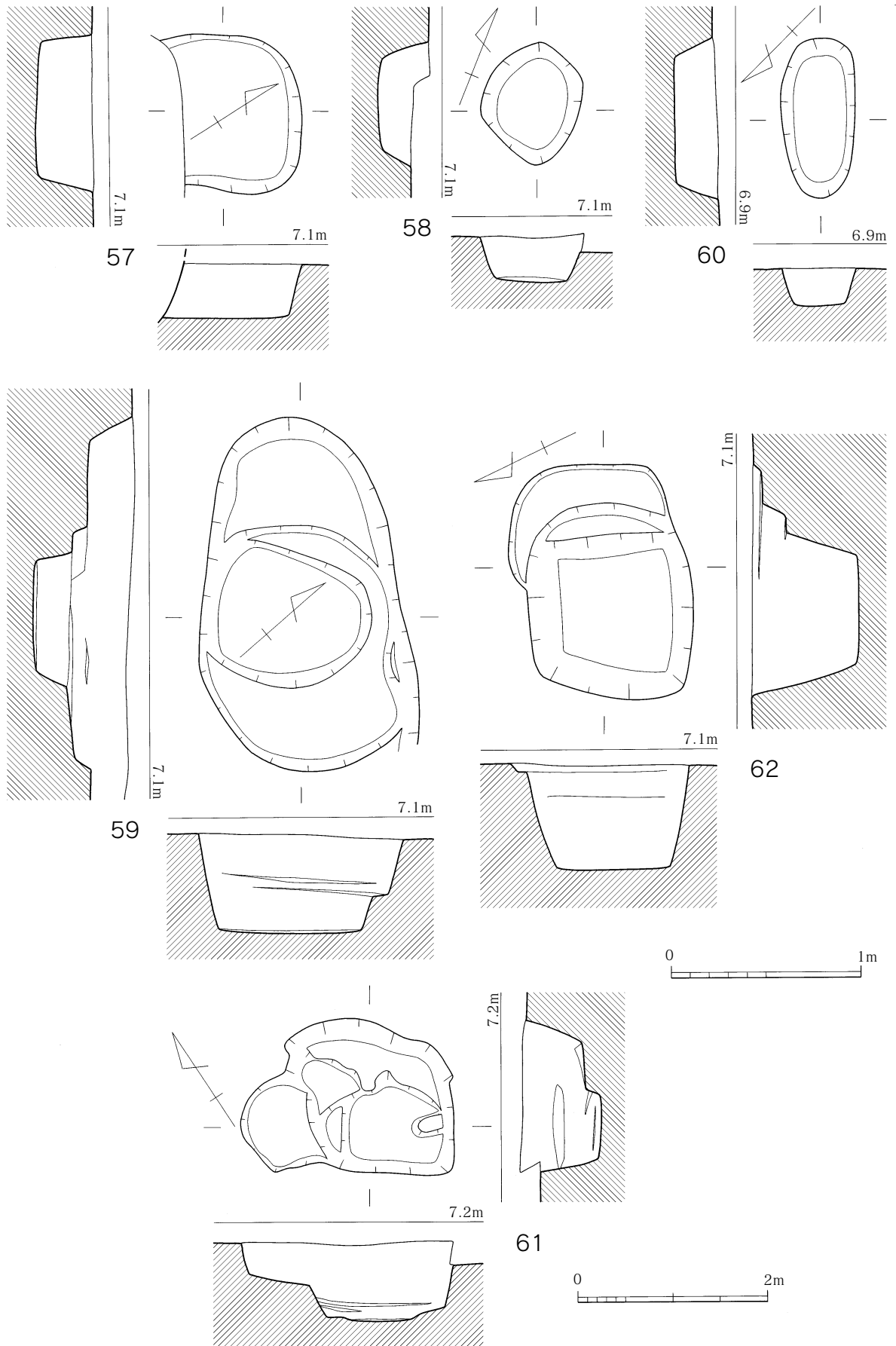
第二遺構面、調査区の中央付近で検出した。長軸1.8m、短軸1.4mの不整な楕円形である。深さは0.5mで、東側にテラスが付き、中央部分が次第に深くなる。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第99図)

21は短頸の壺であろうか。球形の胴部に直立する口縁が付く。内外面の調整はナデである。

64号土坑 (第101図)

第二遺構面、調査区の中央付近で検出した。長軸0.8m、短軸0.75mの楕円形を呈する。深さは0.1mで、床面はほぼ平坦である。図化に耐え得る遺物は出土していない。



第100図 7区57~62号土坑実測図 (61は1/60、他は1/30)

65号土坑 (第101図)

第二遺構面、調査区の中央付近で検出した。3号溝を切る。長軸1.4m + α 、短軸0.4m + α である。深さは0.35mで床面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

66号土坑 (第101図)

第二遺構面、調査区の中央付近で検出した。67号土坑に切られる。長軸1.4m、短軸1.0mである。深さは0.25mで床面は平坦である。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (図版83、第102図)

1は壺の底部である。外面の調整はミガキで、底径7.0cmである。2は壺の胴部であろうか。器壁が極めて厚く、重い。内外面の調整、板状工具によるナデである。胴部最大径14.4cm、底径8.5cmである。3～6は甕である。3の口径は32.6cmである。4は胴部最大径40.6cmである。

67号土坑 (第101図)

第二遺構面、調査区ので検出した。66号土坑を切る。長軸1.3m + α 、短軸1.0mである。深さは0.2mで東側がやや深くなる。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第102図)

7は2条の突帯を巡らす甕である。8は口縁外面に大きめの刻目突帯を貼り付けるものである。

68号土坑 (第101図)

第二遺構面、調査区の北寄りでは検出した。4号溝に切られる。平面プランは長軸2.0m、短軸1.4m + α である。壁の深さは0.6mである。床面はレンズ状を呈する。遺物は弥生土器がまとまって出土している。

出土土器 (図版83・84、第103図)

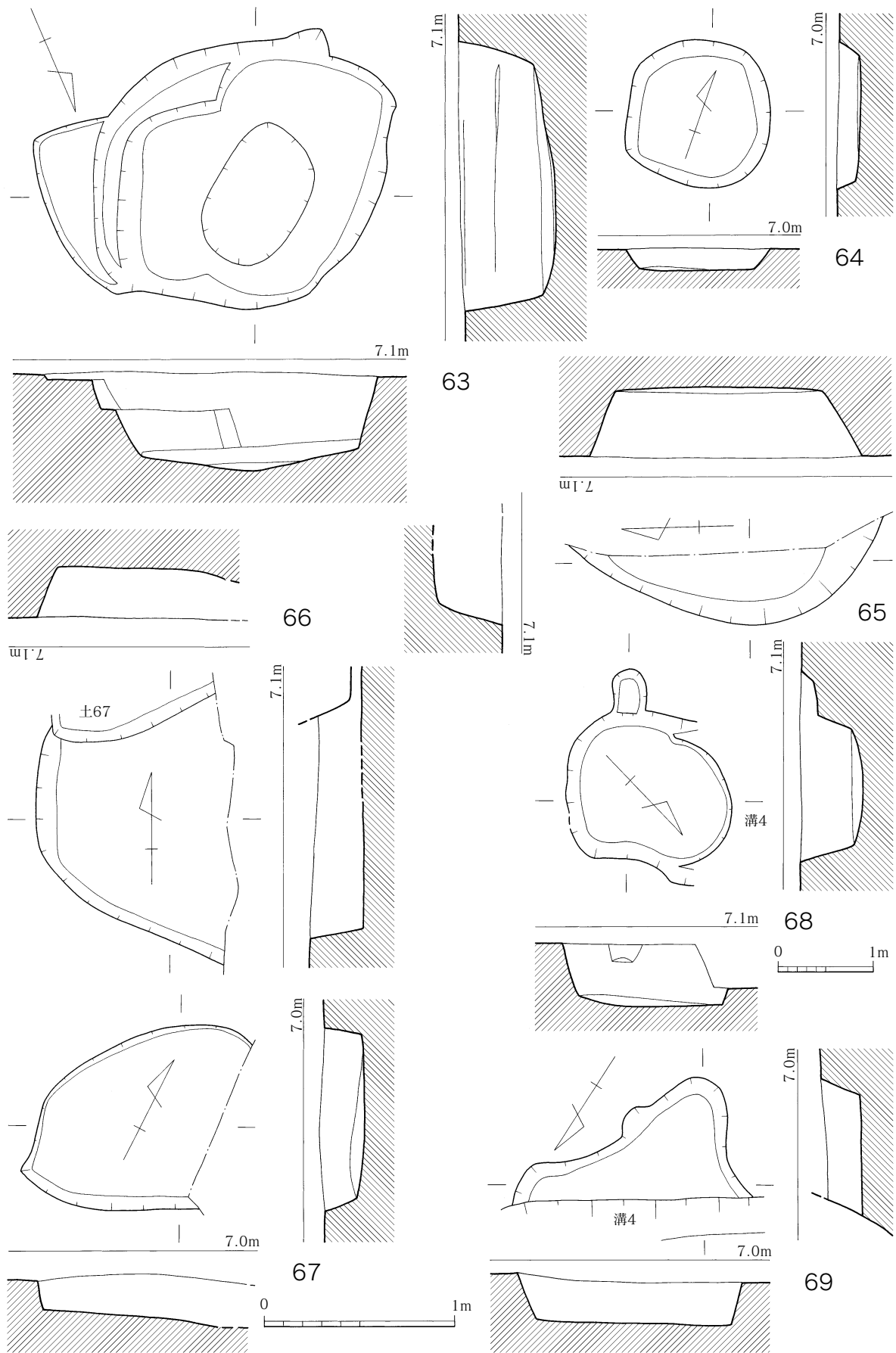
1は壺である。口縁部は肥厚せず、肩部に2条の沈線を施す。内外面の調整はミガキである。2～10は甕である。2の口径は25.0cmである。3は胴部中位にススが付着する。口径21.4cm、底径6.5cm、器高23.8cmである。6・7は3条の突帯を貼り付けるもので、6は口径31.0cmである。7の口径は40.0cmである。8の外面は板状の工具痕が残る。底径7.5cmである。9の底径は10.0cmである。10は大型の甕の口縁部か。端部に刻目を施す。

69号土坑 (第101図)

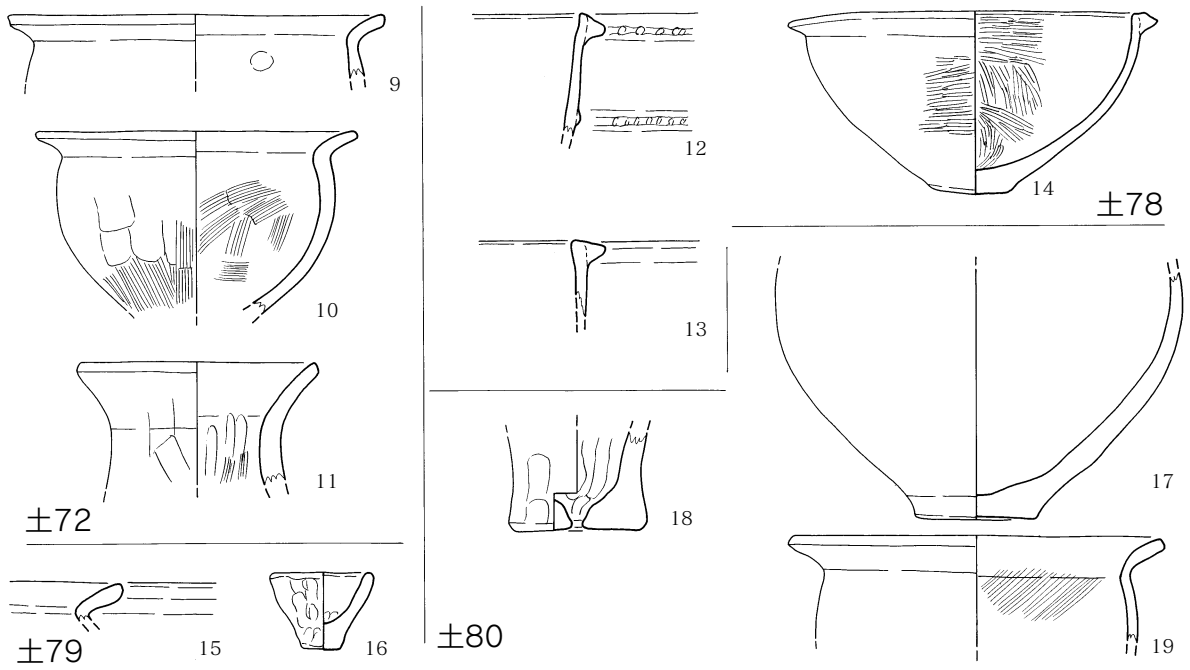
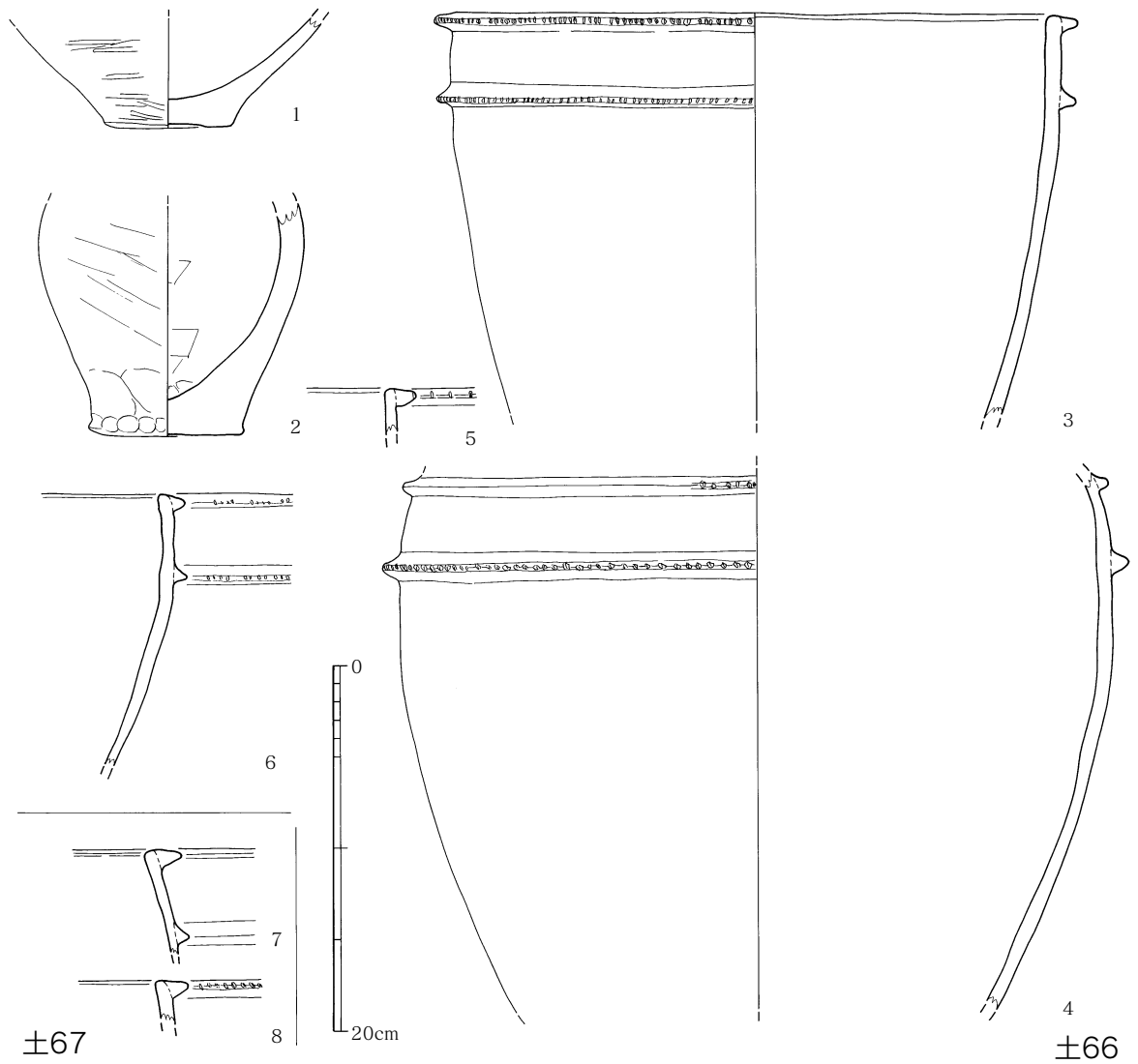
第二遺構面、調査区の北寄りでは検出した。4号溝に切られる。長軸1.2m、短軸0.6m + α である。深さは0.2mで床面はほぼ平坦である。図化に耐え得る遺物は出土していない。

70号土坑 (第104図)

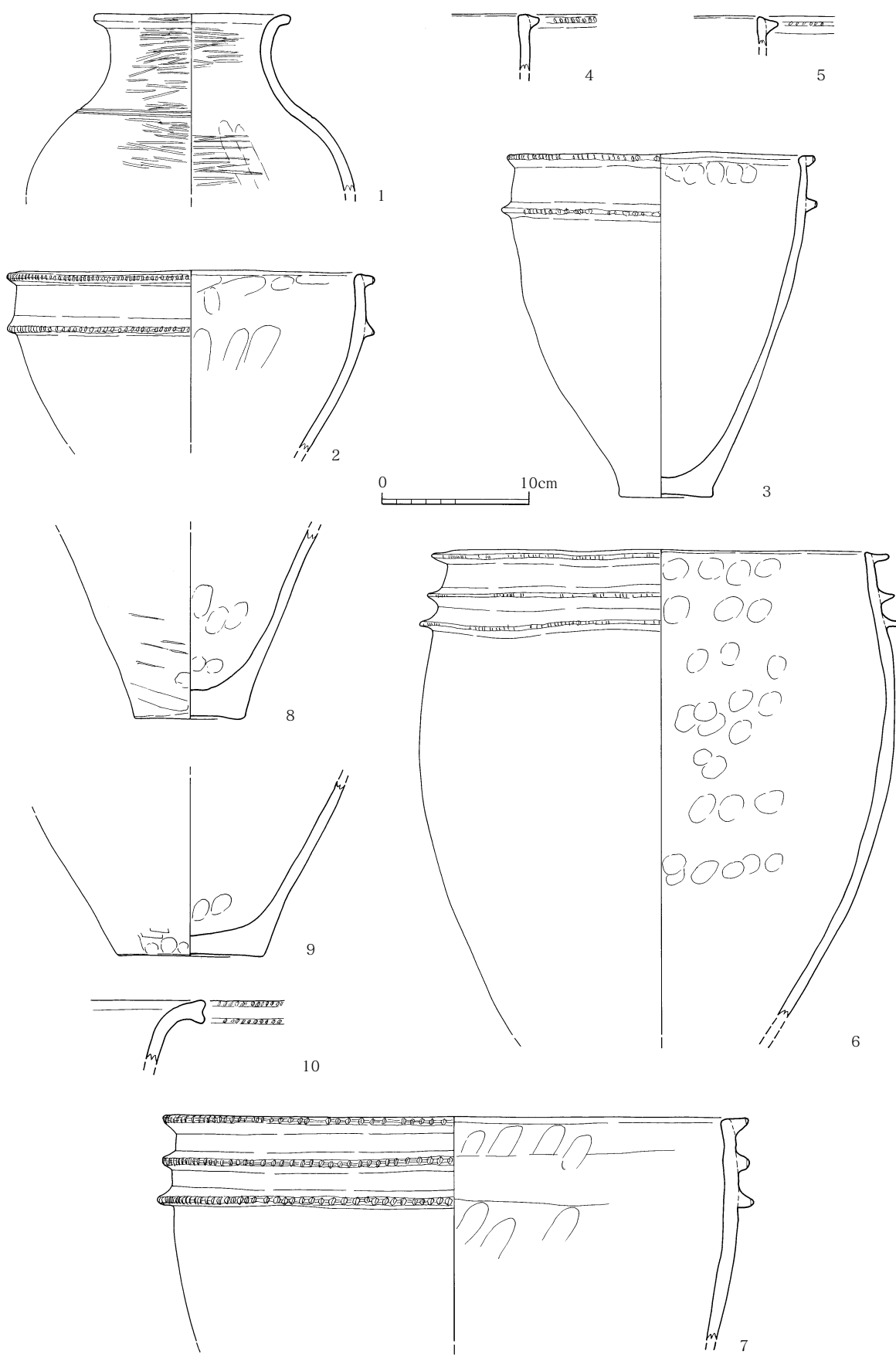
第二遺構面、調査区の北寄りでは検出した。19号住居跡、4号溝を切る。長軸0.7m、短軸0.6mの楕円形を呈する。深さは0.5mで、床面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。



第101図 7区63~69号土坑実測図 (68は1/60、他は1/30)



第102图 7区66·67·72·78~80号土坑出土土器实测图 (1/4)



第103图 7区68号土坑出土土器实测图 (1/4)

71号土坑 (第104図)

第二遺構面、調査区の北寄りで検出した。長軸0.9m、短軸0.55mの楕円形を呈する。深さは0.3mで床面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

72号土坑 (図版53、第104図)

第二遺構面、調査区の北寄りで検出した。平面プランは長軸1.3m、短軸1.1mの不整な楕円形を呈する。壁の深さは0.3mで、東側が一段深く掘り込まれている。遺物は弥生中期後葉の土器が出土している。

出土土器 (第102図)

9は甕である。口径は19.6cmである。10は鉢である。口径17.0cm。11は器台。口径12.4cmである。

73号土坑 (第104図)

第二遺構面、調査区の北寄りで検出した。長軸0.8m、短軸0.6mである。深さは0.2mであるが、中心部分がピット状に深く掘り込まれる。遺物は出土していない。

74号土坑 (第104図)

第二遺構面、調査区の北寄りで検出した。長軸0.75m、短軸0.7mの円形を呈する。深さは0.75mで床面はレンズ状である。遺物は出土していない。

75号土坑 (図版53、第104図)

第二遺構面、調査区の北寄りで検出した。76号土坑、5号溝を切る。長軸1.6m、短軸1.0mの不整な楕円形を呈する。深さは0.4mである。遺物は出土していない。

76号土坑 (第104図)

第二遺構面、調査区の北寄りで検出した。75号土坑に切られる。長軸1.2m、短軸1.1mである。深さは0.1mで、南側がピット状に掘り込まれる。図化に耐え得る遺物は出土していない。

77号土坑 (第105図)

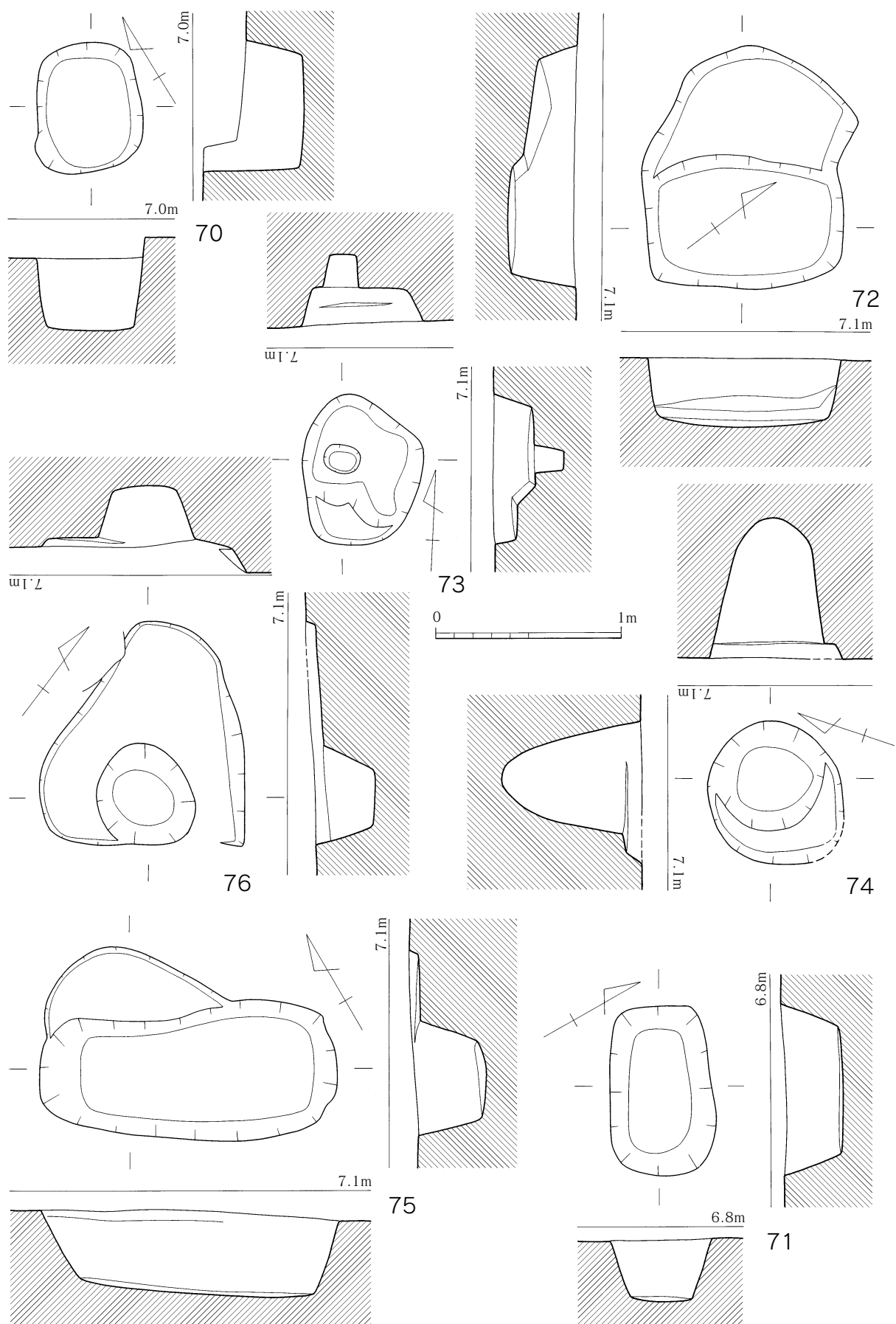
第二遺構面、調査区の中央付近で検出した。56号土坑に切られる。長軸0.8m、短軸0.7mの隅丸方形を呈する。深さは0.2mで床面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

78号土坑 (第105図)

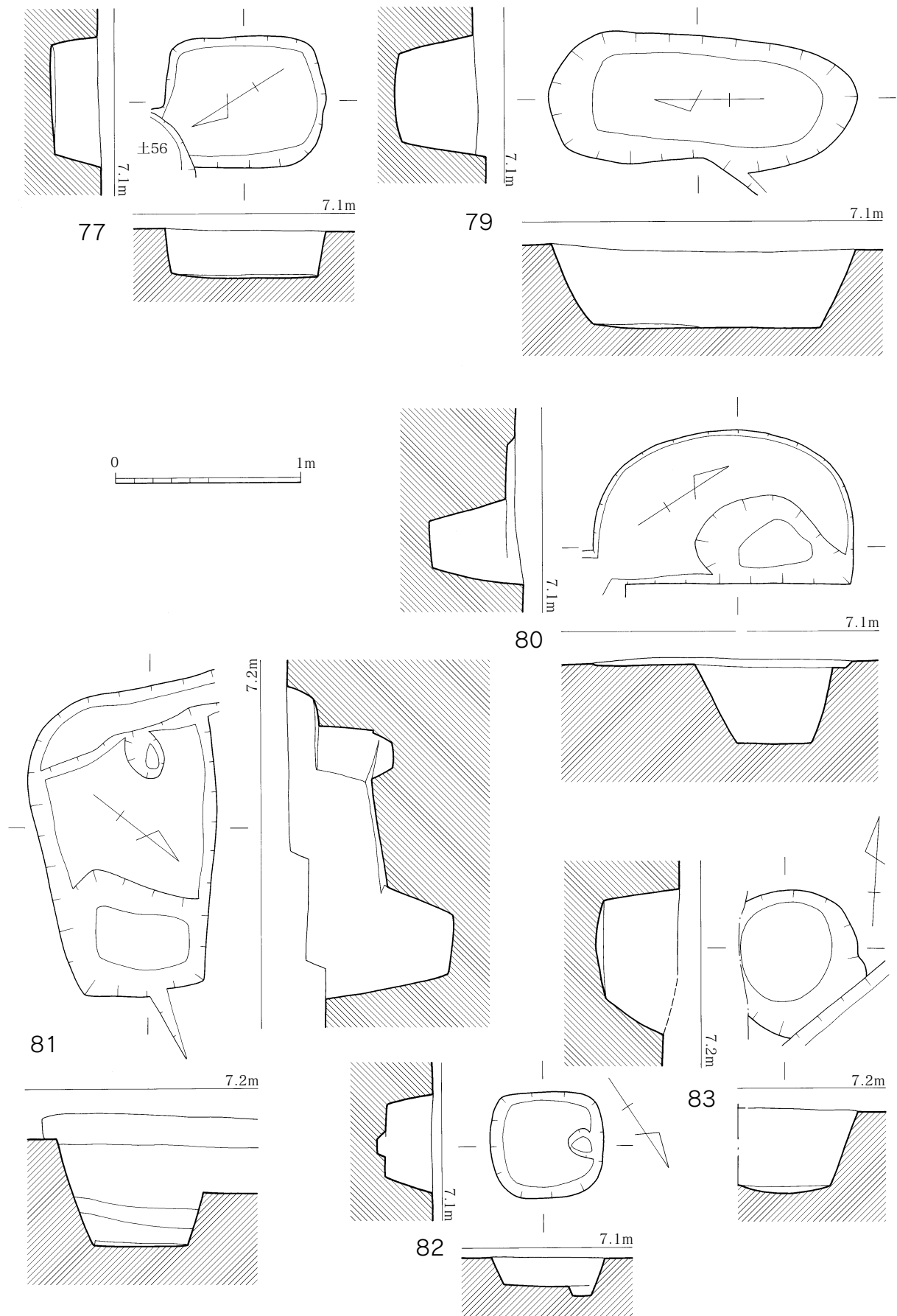
第二遺構面、調査区の北寄りで検出した。長軸0.75m、短軸0.75mの円形を呈する。深さは0.1mである。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (図版83、第102図)

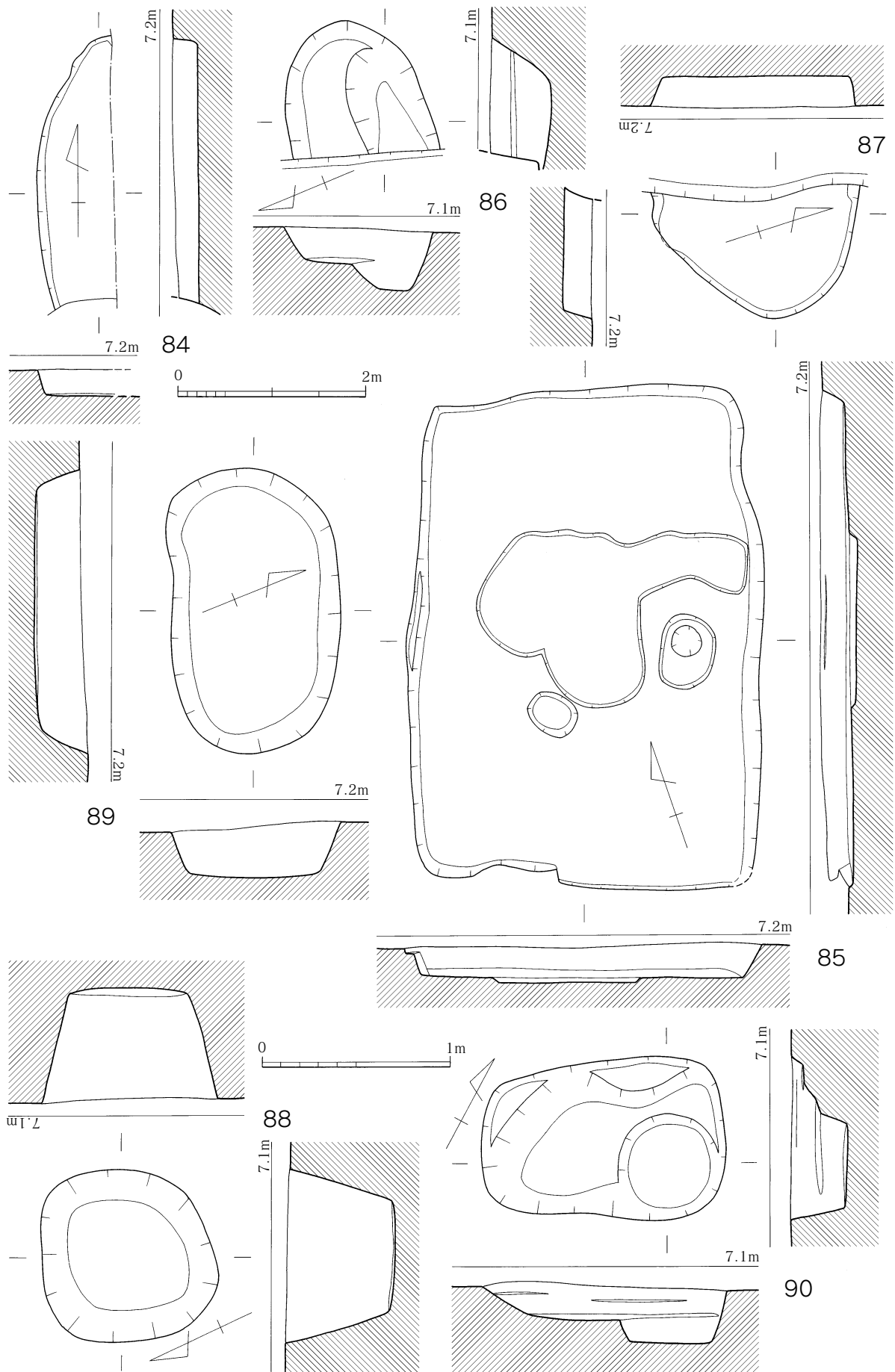
12・13は甕である。12は2条の刻目突帯を貼り付けるものである。13には刻目はない。14は鉢である。口径19.6cm、底径3.9cm、器高9.7cmである。



第104图 7区70~76号土坑实测图 (1/30)



第105图 7区77·79~83号土坑实测图 (1/30)



第106図 7区84~90号土坑実測図 (84・85・87は1/60、他は1/30)

79号土坑 (図版53、第105図)

第二遺構面、調査区の北寄りで検出した。6号溝を切る。長軸1.7m、短軸0.7mの長楕円形を呈する。深さは0.4mで、床面は平坦である。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第102図)

15は「く」字口縁の甕である。16は手捏ね土器である。口径5.5cm、底径2.1cm、器高4.1cmである。

80号土坑 (第105図)

第二遺構面、調査区の北寄りで検出した。6号溝に切られる。長軸1.4m、短軸0.8m+ α である。深さは0.05mで東側が大きくピット状に掘り込まれる。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第102図)

17は弥生中期前半以前の壺である。底径は6.5cmである。18は甕の底部であろうか。焼成前の穿孔である。19は小型の甕である。弥生後期に属するものであろう。

81号土坑 (第105図)

第二遺構面、調査区の北寄りで検出した。19号住居跡に切られる。長軸1.6m、短軸1.0mの方形に近い形状を呈する。深さは0.9mで、北東部が階段状に深く掘り込まれる。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (図版84、第107図)

1は壺である。内外面の調整はハケメである。底径6.8cmである。2~7は甕である。2は胴部外面中にスガが付着する。口径23.2cm、底径7.2cmである。3の口径は26.0cmである。4の口径は22.0cmである。7は内外面ミガキである。底径6.2cmである。

82号土坑 (第105図)

第二遺構面、調査区の北寄りで検出した。長軸0.6m、短軸0.55mの隅丸方形を呈する。深さは0.15mで西側が一部掘り込まれる。遺物は出土していない。

83号土坑 (第105図)

第二遺構面、調査区の北寄りで検出した。20号住居跡に切られる。西側は調査区外へ延びる。長軸0.7m+ α 、短軸0.6mの円形を呈する。深さは0.5mでわずかにレンズ状である。遺物は出土していない。

84号土坑 (図版54、第106図)

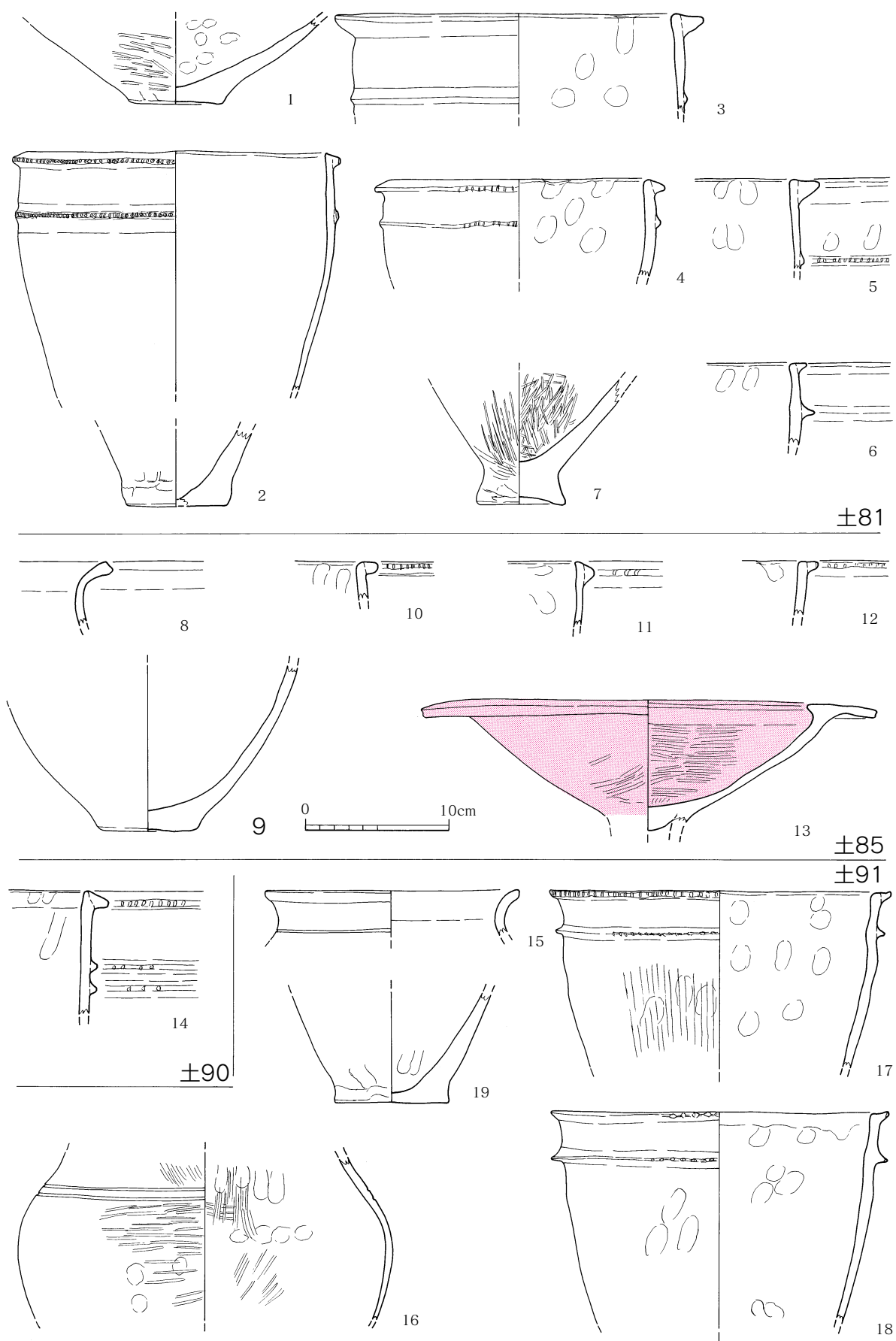
第二遺構面、調査区の北端部で検出した。6号溝に切られる。東側は調査区外へ延びる。長軸2.8m+ α 、短軸0.8m+ α である。深さは0.25mで、床面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

85号土坑 (図版54、第106図)

第二遺構面、調査区の北端部で検出した。86・87号土坑、8号溝を切る。長軸5.2m、短軸3.8mの方形を呈する。深さは0.2mで、床面は平坦であるが中央に浅い堀込みがある。弥生土器が出土している。

出土土器 (図版84、第107図)

8は壺である。外反は強くない。9は壺の底部である。底径6.2cmである。10~12は甕の口縁である。



第107图 7区81·85·90·91号土坑出土土器实测图 (1/4)

いずれも刻目突帯を貼り付ける。13は他の土器より新しく弥生中期後半の高杯である。全面ミガキの後、丹塗を施す。口径32.1cmである。

86号土坑 (図版54、第106図)

第二遺構面、調査区の北端部で検出した。85号土坑に切られる。長軸0.7m + α 、短軸0.8mである。深さは0.3mで、南側が一段深くなっている。遺物は出土していない。

87号土坑 (図版55、第106図)

第二遺構面、調査区の北端部で検出した。8号溝を切り、85号土坑に切られる。長軸2.2m、短軸1.3m + α である。深さは0.3mで床面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

88号土坑 (図版55、第106図)

第二遺構面、調査区の北端部で検出した。長軸0.9m、短軸0.9mの不整な円形を呈する。深さは0.5mで、床面はほぼ平坦である。図化に耐え得る遺物は出土していない。

89号土坑 (図版55、第106図)

第二遺構面、調査区の北端部で検出した。長軸1.5m、短軸0.9mの長楕円形を呈する。深さは0.25mで床面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

90号土坑 (図版56、第106図)

第二遺構面、調査区の北端部で検出した。長軸1.3m、短軸0.8mの楕円形を呈する。深さは0.3mで東側が階段状に深くなっている。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第107図)

14は甕である。口縁部に1条、胴部に2条の刻目突帯を貼り付ける。

91号土坑 (第108図)

第二遺構面、調査区の北端部で検出した。7号溝を切る。北側は調査区外へ延びる。平面プランは長軸1.7m、短軸0.7m + α である。深さは0.4mで、中心部が一段深くなる。弥生土器が出土している。

出土土器 (第107図)

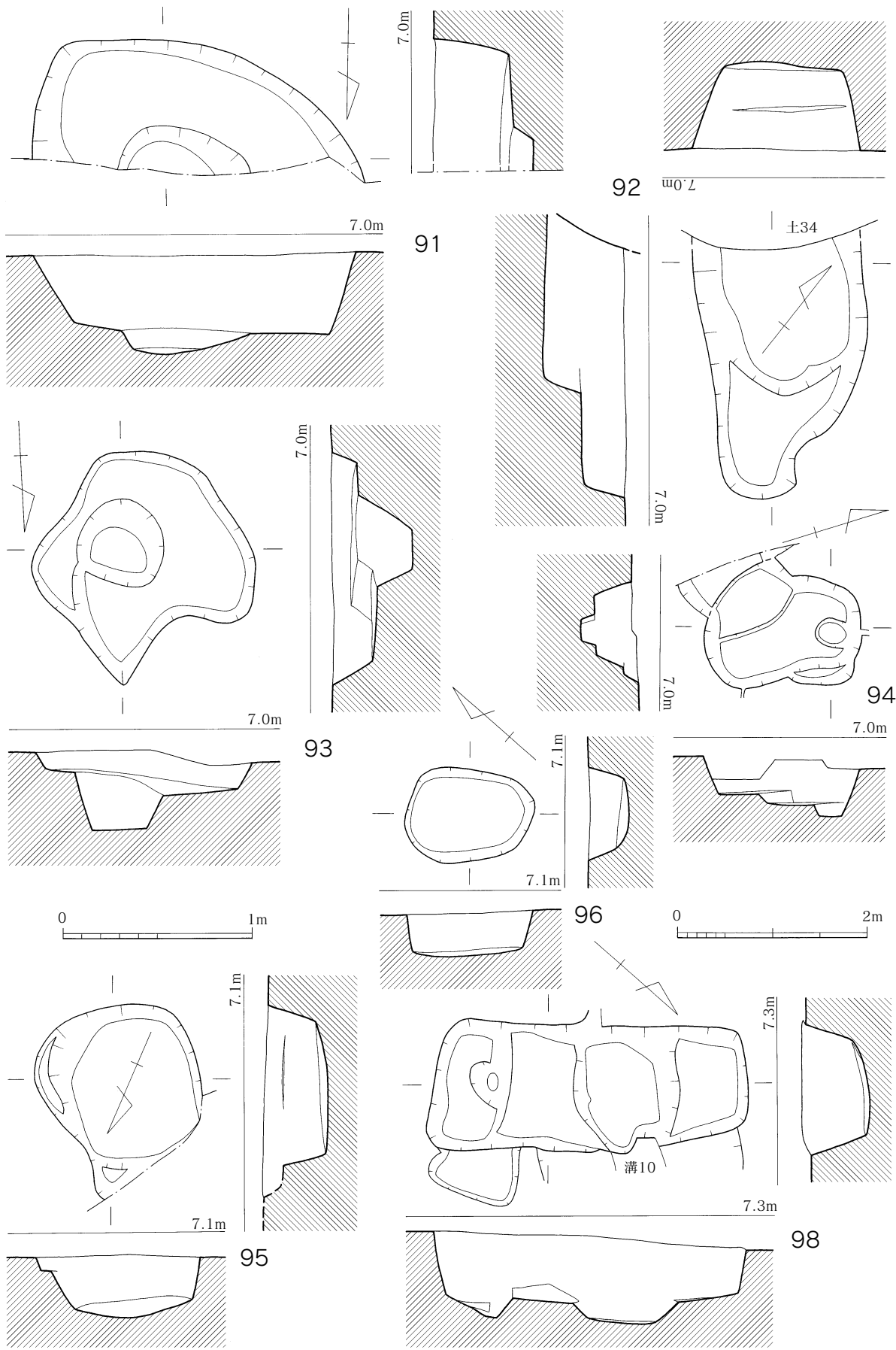
15は壺である。頸部が短く、1条の沈線を巡らす。口径18.0cmである。16は壺の胴部である。内外面ミガキである。肩部に2条の沈線を巡らす。胴部最大径26.4cmである。17～19は甕である。17の口径は24.0cmである。18の口径は23.8cmである。19の口径は8.0cmである。

92号土坑 (図版56、第108図)

第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。34号土坑に切られる。長軸1.5m + α 、短軸0.9mである。深さは0.4mで、北側が一段深くなる。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第110図)

1は甕の口縁部。内外面の調整はナデ。2・3は甕の底部。2の底径は6.3cm、3の底径は7.0cmである。



第108図 7区91~96・98号土坑実測図 (94・98は1/60、他は1/30)

93号土坑 (図版56、第108図)

第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。長軸1.2m、短軸1.2mの不整形を呈する。深さは0.4mで、中心部分が深くなる。図化に耐え得る遺物は出土していない。

94号土坑 (図版57、第108図)

第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。西側は調査区外へ延びる。長軸1.7m、短軸1.2mの楕円形を呈する。深さは0.6mで、北側が階段状に深くなる。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第110図)

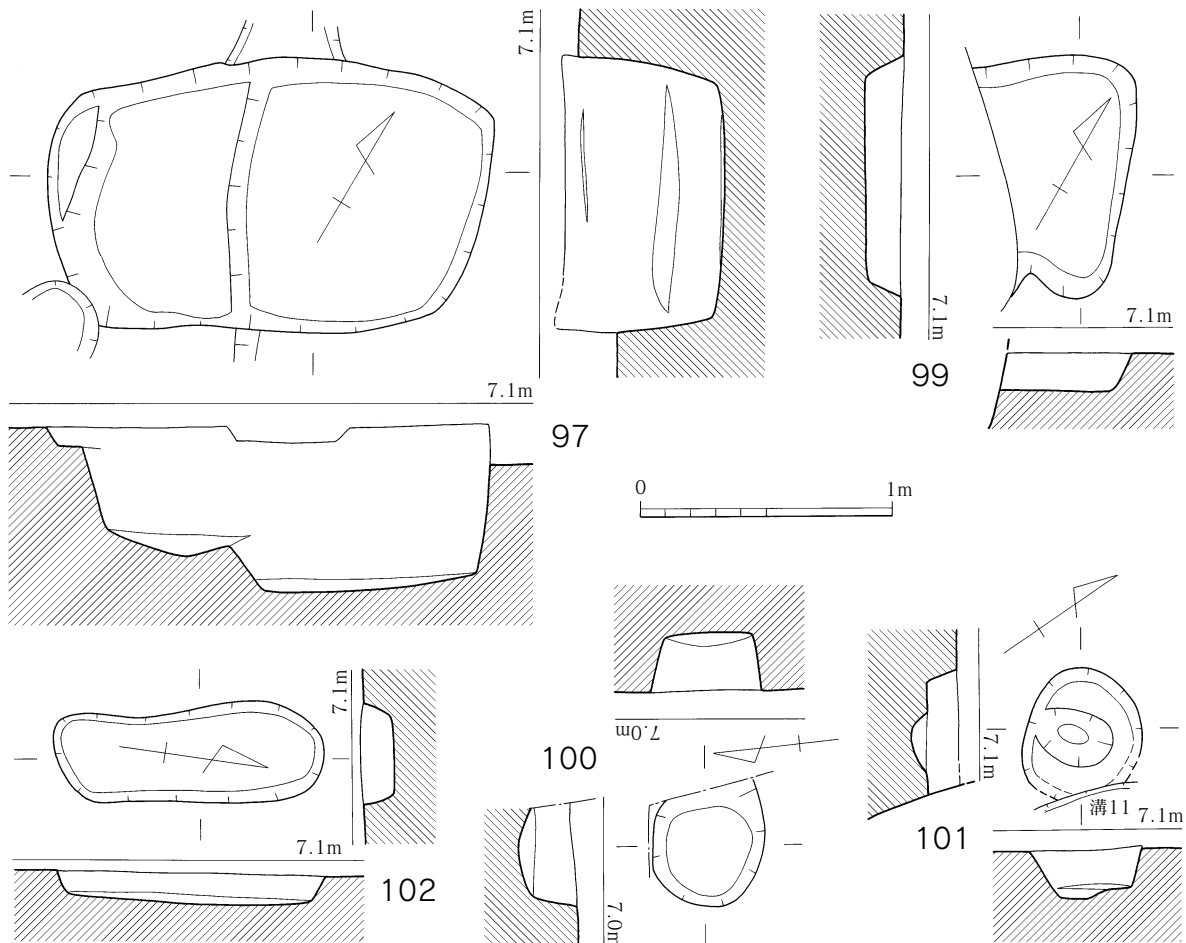
4は弥生中期後葉の甕である。内外面の調整はハケメである。

95号土坑 (図版57、第108図)

第二次調査区の西端部で検出した。西側は調査区外へ延びる。長軸0.9m、短軸0.8mの円形を呈する。深さは0.3mで一部にテラスが付く。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第110図)

5は2条の刻目突帯を貼り付けるものである。口縁内面には圧痕が残る。



第109図 7区97・99~102号土坑実測図 (1/30)

96号土坑 (図版57、第108図)

第二次調査区の北端部で検出した。長軸0.7m、短軸0.5mの楕円形を呈する。深さは0.2mで、床面はレンズ状である。遺物は出土していない。

97号土坑 (図版58、第109図)

第二次調査区の西寄りで検出した。9号溝を切り、102号土坑に切られる。平面プランは長軸1.8m、短軸1.1mの楕円形を呈する。深さ0.6mで、東側が階段状に深くなる。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第110図)

6は弥生土器の甕である。2条の刻目突帯を貼り付ける。7は甕の胴部片である。全体の形状は不明であるが、刻目突帯が鉤状に貼り付けられる。

98号土坑 (図版58、第108図)

第二次調査区の東寄りで検出した。99号土坑を切り、10号溝に切られる。平面プランは長軸3.3m、短軸1.3mである。壁の深さは0.8mで部分的に深くなる。遺物は埋土から弥生土器が出土している。

出土土器 (第110図)

8は甕の底部である。粗いつくりで、手捏ねに近い印象を受ける。底径5.0cmである。

99号土坑 (第109図)

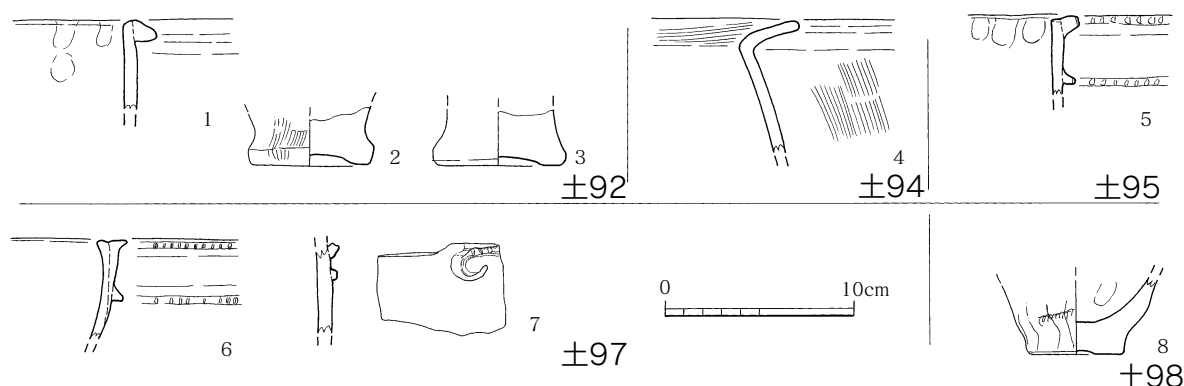
第二次調査区の東寄りで検出した。98号土坑に切られる。長軸0.95m、短軸0.5m+ α である。深さは0.15mで床面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

100号土坑 (第109図)

第二次調査区の北東端部で検出した。北東側は調査区外へ延びる。長軸0.45m+ α 、短軸0.45mである。深さは0.2mで床面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

101号土坑 (第109図)

第二次調査区の西寄りで検出した。11号溝に切られる。長軸0.5m+ α 、短軸0.45mである。深さは0.2mで中心が深くなっている。遺物は出土していない。



第110図 7区92・94・95・97・98号土坑出土土器実測図 (1/4)

102号土坑 (第109図)

第二次調査区の西寄りで検出した。97号土坑を切る。長軸1.1m、短軸0.35mの長楕円形を呈する。深さは0.1mで床面はほぼ平坦である。遺物は出土してない。

(3) 溝

1号溝 (第65図)

第一遺構面、調査区の南寄りで検出した。16号住居跡を切る。両端部は調査区外へ延びる。幅0.5m、深さ0.15mの逆台形を呈する。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第111図)

1は甕で直線的に開く、胴部の張りは大きい。内外面の調整はハケメである。口径16.2cmである。

2号溝 (第65図)

第二遺構面、調査区の南寄りで検出した。47・48号土坑を切る。両端は自然に消失する。幅0.25m、深さ0.1mの逆台形を呈する。図化に耐え得る遺物は出土していない。

3号溝 (図版58、第65図)

第二遺構面、調査区の中央付近で検出した。46・47・51・52・55・65号土坑に切られる。両端は調査区外へ延びる。平面プランは幅1.3m、深さ0.4mの逆台形を呈する。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第111図)

2は壺である。頸部は内傾し、口縁のみが強く開く。内外面の調整はミガキである。口径15.0cmである。3・4は甕である。内面には圧痕が残る。3の口径は23.6cmである。

4号溝 (第65図)

第二遺構面、調査区の北寄りで検出した。68・69号土坑を切り、19号住居跡、70号土坑に切られる。両端は調査区外へ延びる。幅0.8m、深さ0.5mの逆台形を呈する。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (図版84、第111図)

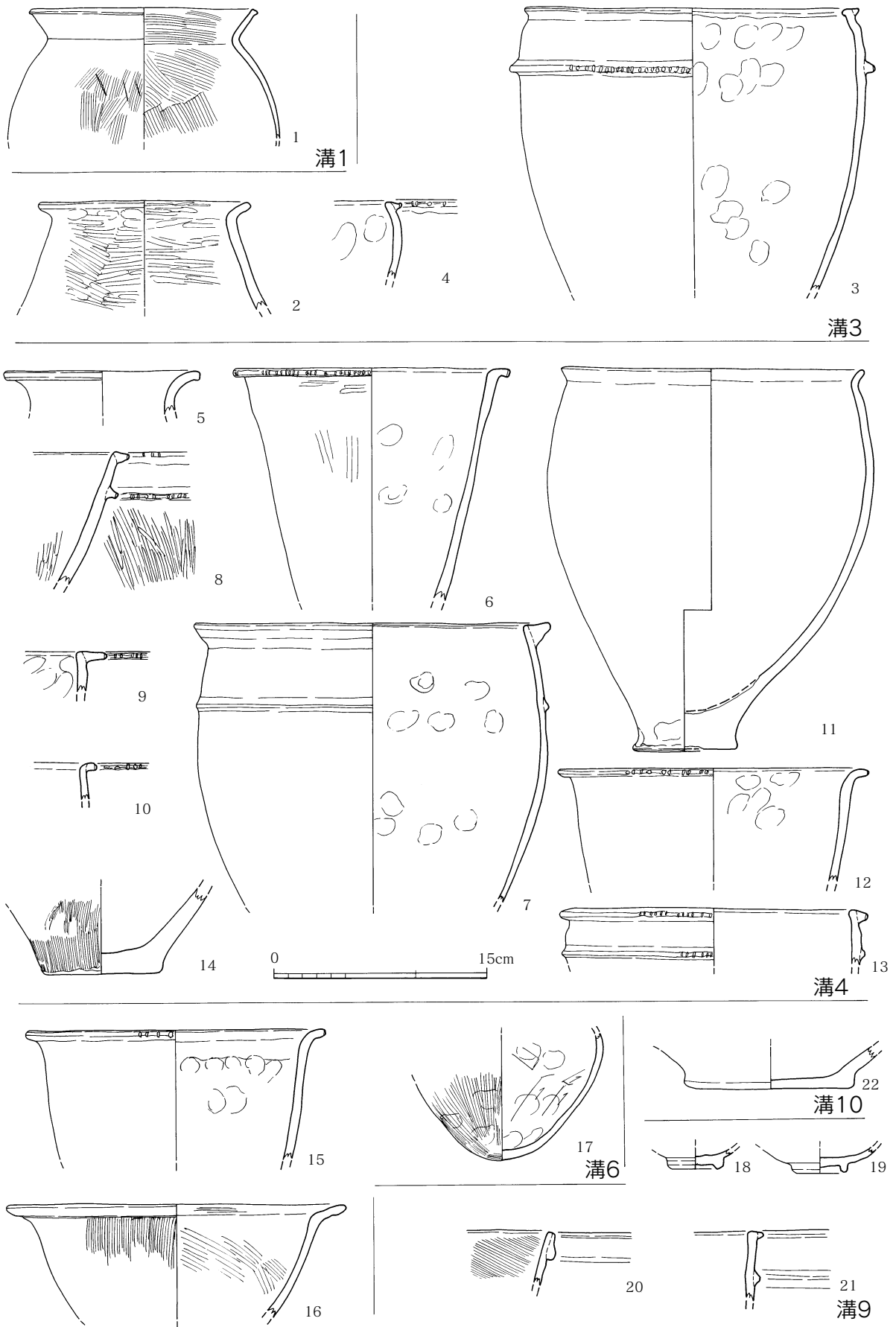
5は壺である。大きく外反する口縁で端部を丸く仕上げる。口径14.0cmである。6～14は甕である。6は直線的にすぼまる胴部で口縁を強く外反させる。口径19.6cmである。7の口径は25.4cmである。8の内外面の調整は縦方向のミガキである。11は口縁のみを外反させるもので、口径21.5cm、胴部最大径23.0cm、底径7.5cm、器高27.1cmである。12の口径は22.0cm。13は口径22.0cm。14の底径は8.6cm。

5号溝 (第65図)

第二遺構面、調査区の北寄りで検出した。75号土坑に切られる。東側は調査区外へ延びる。幅0.7m、深さ0.1mである。遺物は出土していない。

6号溝 (第65図)

第二遺構面、調査区の北端部で検出した。20・21・22号住居跡、80・84号土坑を切り、79号土坑に切られる。両端部は調査区外へ延びる。幅1.1m、深さ0.4mの逆台形を呈する。弥生土器が出土している。



第111图 7区1·3·4·6·9·10号沟出土土器实测图 (1/4)

出土土器 (第111図)

15は弥生土器の甕である。内面に圧痕が強く残る。口径21.2cm。16は弥生中期後葉の鉢である。内外面はハケメである。口径23.6cm。17は壺の胴部であろうか。内面に板状工具の痕跡が強く残る。

7号溝 (第65図)

第二遺構面、調査区の北端部で検出した。8号溝を切り、91号土坑に切られる。両端は調査区外へ延びる。幅1.5m、深さ0.8mである。出土遺物はない。

8号溝 (第65図)

第二遺構面、調査区の北端部で検出した。85・87号土坑、7号溝に切られる。幅2.0m、深さ0.6mの逆台形を呈する。遺物は弥生土器がまとまって出土している。

出土土器 (図版84・85、第112・113図)

1・2は壺である。1は頸部と肩部の差がほとんどなく、重心が低い。内外面の調整はミガキ。口径14.0cm、胴部最大径23.0cm、底径8.3cm、器高21.9cm。2は頸部に1条の沈線、肩部に突帯を貼り付ける。口縁部には蓋を緊縛していたのであろうか2ヶ所穿孔を施す。口径14.2cm。3～19は甕である。3の口径は23.6cm、底径7.0cm、器高30.0cm。4は焼成後、底部に両側から穿孔を施すものである。内外面の調整は板状工具によるナデ。口径19.9cm、底径7.0cm、器高24.8cm。5の外面にはススが付着し、二次被熱による赤変が見られる。口径27.0cm、底径7.0cm、器高30.7cmである。6の口径は20.3cmである。7の口径は26.4cmである。8の外面胴部中位には二次被熱による赤変が見られる。口径30.0cmである。9の口径は21.2cmである。10の口径は24.1cmである。11の口径は21.6cmである。12の口径は27.5cmである。13の口径は20.4cmである。14は焼成後に底部に穿孔を施すもので底径8.6cmである。15は口縁部に1条、胴部に2条の刻目突帯を貼り付ける。下位の1条は下方向に鉤状に巻く。反対側の端部は欠失して不明である。口径38.8cmである。16の底径は9.3cmである。17の底径は7.8cm。18の底径は5.9cm。19は小型の甕で、内外面の調整はナデである。口径17.3cm、底径7.2cm、器高15.0cm。

9号溝 (第65図)

第二次調査区の中央やや南寄りで見出した。23号住居跡、97号土坑、10号溝を切る。北側は自然に消滅し、南側は調査区外へ延びる。南側で幅1.5m、深さ0.2mである。遺物は近世の土器が出土している。

出土土器 (第111図)

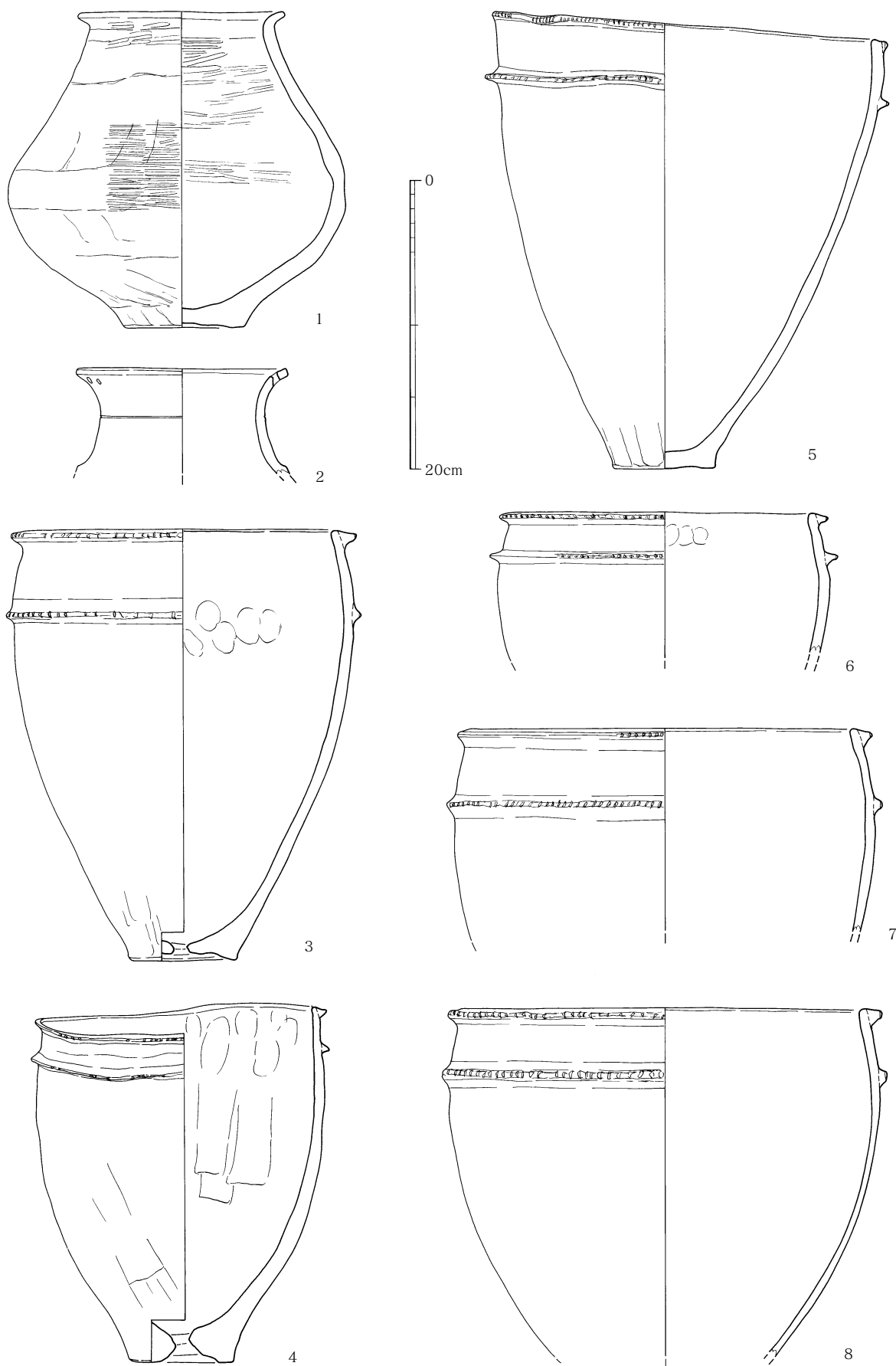
18・19は陶器の碗である。18は削り出しの高台に薄く釉がかけられる。19は畳付の部分の釉は掻き取られている。20は土鍋である。内面はハケメ調整である。外面には突帯が貼り付けられる。21は混入の弥生土器である。2条の突帯が貼り付けられる。

10号溝 (第65図)

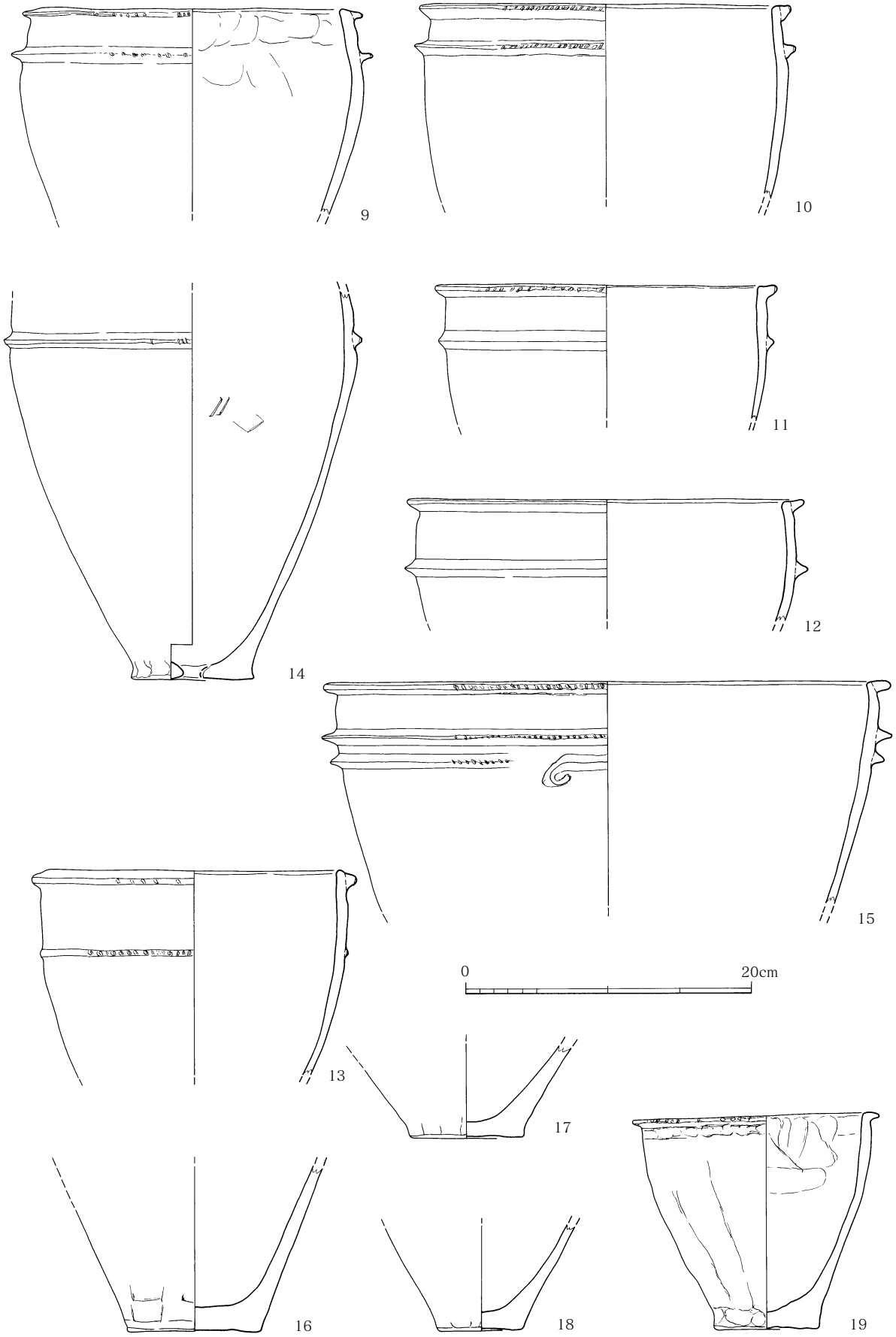
第二次調査区の東寄りで見出した。98号土坑を切り、23号住居跡、9号溝に切られる。両端は調査区外へ延びる。幅2.0m、深さ0.7mである。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器 (第111図)

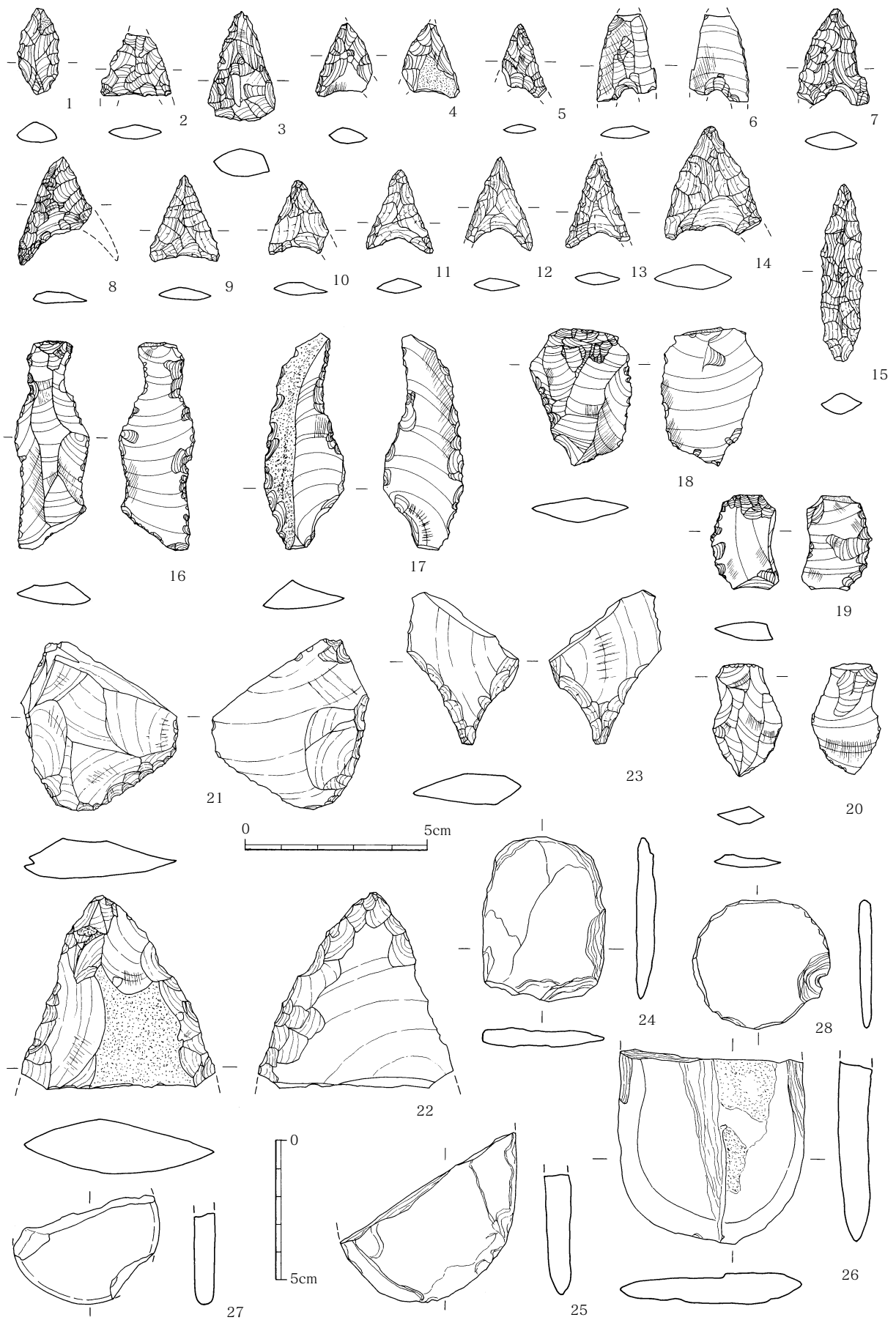
22は弥生前期の壺の底部である。内外面はナデ調整である。底径11.6cmである。



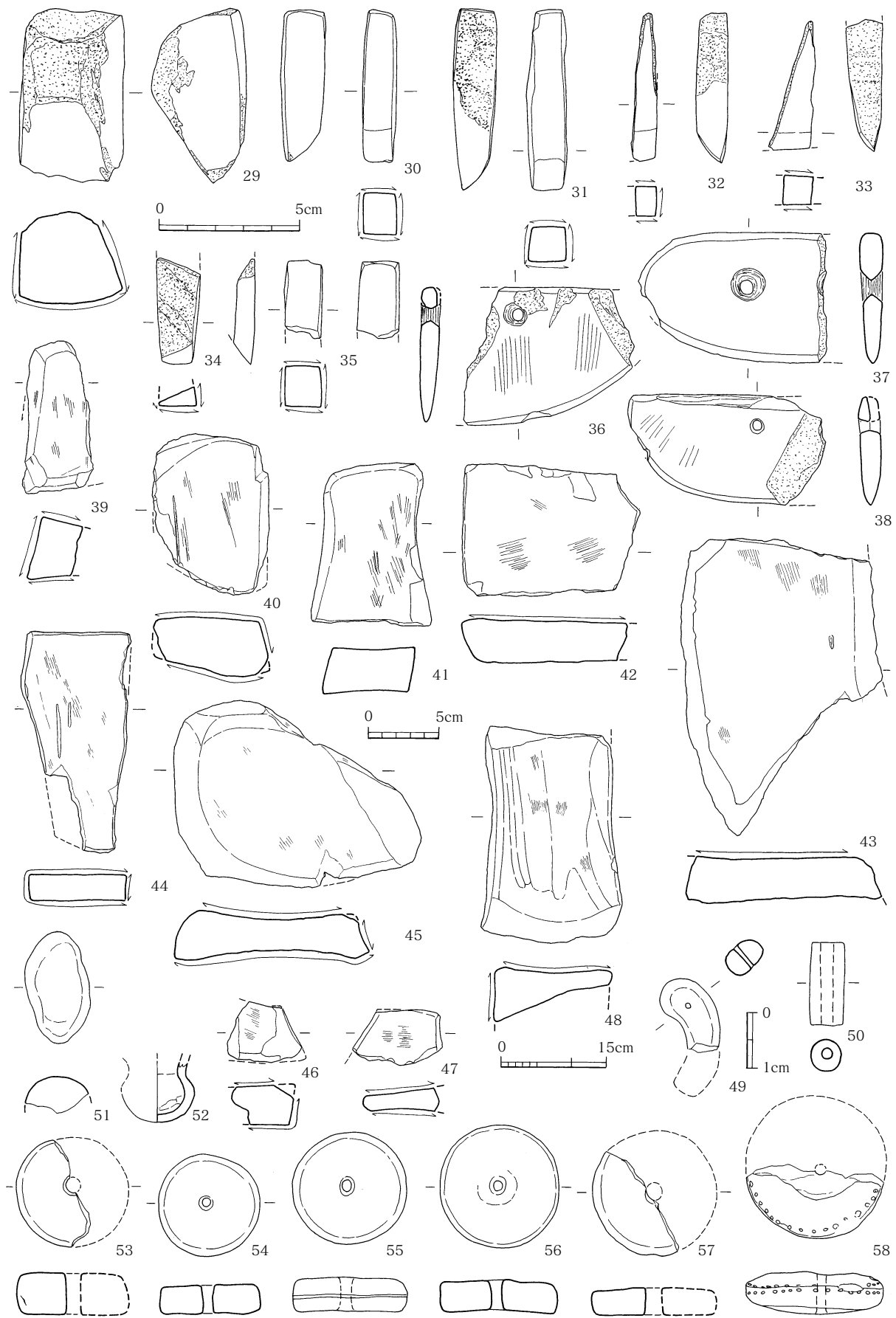
第112图 7区8号沟出土土器实测图① (1/4)



第113图 7区8号沟出土土器实测图② (1/4)



第114図 5~7区出土石器実測図① (1~23は2/3、他は1/2)



第115図 5~7区出土石器②・土製品実測図 (39~47は1/4、48は1/8、49・50は1/1、他は1/2)

挿図番号	種類	区	出土場所	長さ (cm)	幅・経 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備考
第114図1	石鏃	5区	波板状遺構	2.3	1.15	0.50	1.1	黒曜石	腰岳系
第114図2	石鏃	5区	6号溝	1.65+ α	1.9	0.40	1.0	黒曜石	腰岳系
第114図3	石鏃	5区	10号土坑	3.0	1.85	0.80	3.2	黒曜石	腰岳系
第114図4	石鏃	5区	7号住居	2.0	1.6	0.45	1.1	黒曜石	腰岳系
第114図5	石鏃	6区	4号住居	2.05+ α	1.2	0.25	0.4	黒曜石	腰岳系
第114図6	石鏃	5区	10号土坑	2.35+ α	1.6	0.38	1.2	黒曜石	腰岳系
第114図7	石鏃	5区	6号溝	2.65	1.95	0.25	1.5	黒曜石	腰岳系
第114図8	石鏃	7区	遺構面	2.95	1.95	0.35	1.1	黒曜石	腰岳系
第114図9	石鏃	5区	42号土坑	2.35	1.9	0.35	0.9	安山岩	
第114図10	石鏃	5区	6号住居	2.0	1.6	0.35	0.8	安山岩	
第114図11	石鏃	5区	10号土坑	2.25	1.8	0.35	0.9	安山岩	
第114図12	石鏃	5区	6号溝	2.5	1.8+ α	0.35	1.0	安山岩	
第114図13	石鏃	5区	6号溝	2.5	1.8	0.35	1.0	安山岩	
第114図14	石鏃	7区	5号土坑	3.05+ α	2.6	0.65	3.9	安山岩	
第114図15	石鏃	5区	遺構面	4.8	1.1	0.60	2.7	安山岩	
第114図16	スクレイパー	7区	8号溝	5.6	2.0	0.60	5.9	黒曜石	腰岳系
第114図17	スクレイパー	5区	14号土坑	5.9	2.15	0.80	7.0	黒曜石	腰岳系
第114図18	スクレイパー	5区	遺構面	3.75	2.7	0.75	4.8	黒曜石	腰岳系
第114図19	スクレイパー	7区	8号溝	2.6	1.85	0.50	2.8	黒曜石	腰岳系
第114図20	スクレイパー	5区	17号土坑	3.0	1.8	0.50	2.5	黒曜石	腰岳系
第114図21	スクレイパー	7区	16号土坑	4.6	4.25	1.10	21.6	安山岩	
第114図22	スクレイパー	7区	17号住居	5.25	5.25	1.45	37.7	安山岩	
第114図23	石錐	5区	31号土坑	4.1+ α	3.0	0.85	7.6	安山岩	
第114図24	石鋏	5区	7号住居	7.0+ α	4.3	0.70	29.1	片岩	
第114図25	石鋏	5区	10号土坑	6.1+ α	6.2+ α	0.90	38.3	片岩	
第114図26	打製石斧	5区	遺構面	8.0+ α	6.7	1.2	90.4	珪質堆積岩	局部磨製
第114図27	円盤状石製品	6区	4号住居	5.2+ α	3.9+ α	0.70	22.9	片岩	
第114図28	円盤状石製品	7区	1号住居	4.6	5.0	0.50	15.5	粘板岩	
第115図29	石斧	5区	4号住居No.2	6.2+ α	3.7	3.40	100	粘板岩	
第115図30	柱状片刃石斧	6区	2号住居	5.4	1.2	1.50	18	粘板岩	
第115図31	柱状片刃石斧	5区	遺構面	6.5	1.4	1.50	24	粘板岩	
第115図32	柱状片刃石斧	5区	25号土坑	5.3	0.8+ α	1.10	7	粘板岩	
第115図33	柱状片刃石斧	6区	26号土坑	4.7+ α	1.5+ α	1.30	8.5	粘板岩	
第115図34	柱状片刃石斧	5区	6号住居P-6	3.8+ α	1.5	0.75+ α	4	粘板岩	
第115図35	柱状片刃石斧	7区	8号住居	2.8+ α	1.3	1.50	11	粘板岩	
第115図36	石庖丁	7区	8号住居	4.85	6.1+ α	0.70	26	凝灰岩	
第115図37	石庖丁	7区	14号住居	4.7	6.7+ α	0.80	38	頁岩	
第115図38	石庖丁	7区	3号住居	3.9	7.0+ α	0.70	28	凝灰岩	
第115図39	砥石	5区	2号土坑	10.95	5.05	4.45	304	細粒砂岩	
第115図40	砥石	7区	1号住居	11.5	8.35	4.30	470	頁岩	
第115図41	砥石	7区	5号溝	11.6	8.6	3.45	564	頁岩	
第115図42	砥石	7区	4号住居	9.5	12.7	3.15	495	花崗岩	
第115図43	砥石	7区	13号土坑	21.4	14.4	3.40	1194	細粒砂岩	
第115図44	砥石	7区	62号土坑	15.8	7.9	1.90	306	粘板岩	
第115図45	砥石	5区	4号住居	13.35	17.7	3.60	811	頁岩	
第115図46	砥石	7区	96号土坑	4.3	5.3	2.85	67.5	細粒砂岩	
第115図47	砥石	5区	2号住居	4	6.35	1.70	50.2	凝灰岩	
第115図48	砥石	5区	1号住居No.2	31	20.1	7.90	5750	花崗岩	
第115図49	勾玉	7区	1号溝	1.2		0.5	0.6	蛇紋岩か	
第115図50	管玉	7区	10号住居	1.5		0.6	0.9	碧玉	
第115図51	投弾	7区	1号住居	4.0+ α	2.2+ α	1.3+ α	8		
第115図52	手捏土器	5区	P-8	2.6	2.2		7		
第115図53	紡錘車	7区	61号土坑	3.8		1.50	14		
第115図54	紡錘車	6区	25号土坑	3.6		1.10	16.5		
第115図55	紡錘車	5区	2号住居	4.1		1.25	24		
第115図56	紡錘車	6区	16号土坑	4.2		1.20	25		
第115図57	紡錘車	6区	遺構面	4.4		1.00	9.2		
第115図58	紡錘車	5区	44号土坑	5		1.45	15		

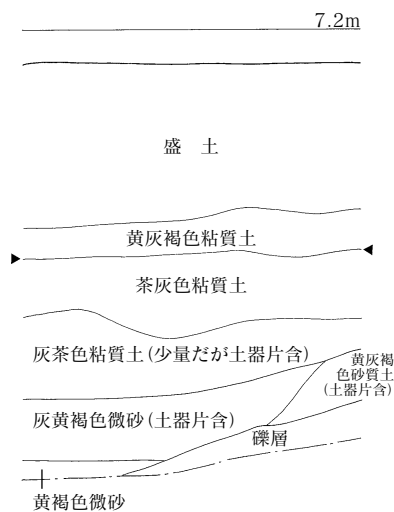
第2表 5~7区出土石器・土製品一覧表

6 8区の調査の内容

本調査区はみやま市瀬高町大字坂本に所在し、標高6.4～7.4mである。

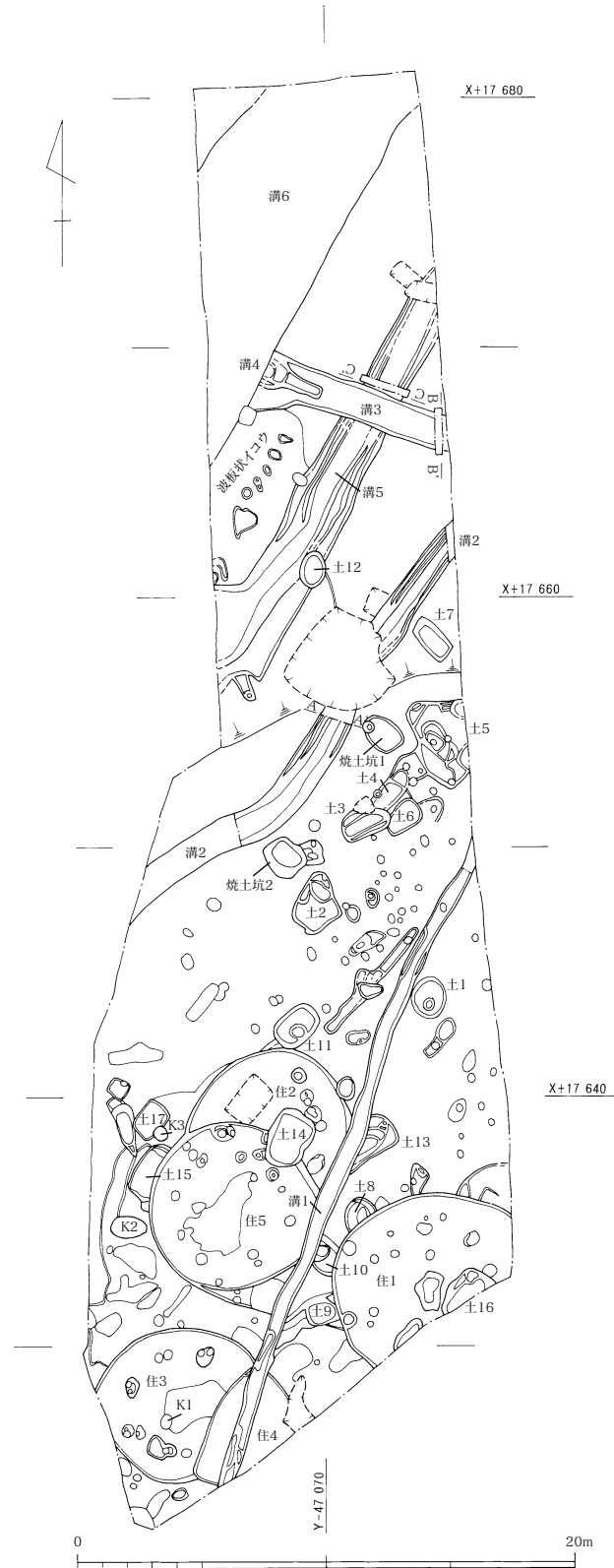
調査区付近の基盤は礫層と黄褐色微砂で、その上に堆積している黄灰褐色砂質土上面で遺構を検出した。遺構検出面の標高は6m前後である。遺構検出面は調査区中央付近から北へ向かって緩やかに傾斜し、茶灰色粘質土上面に変わる。調査区中央付近に設定したトレンチで観察した土層を模式的に示したものが第116図である。調査区中央付近から北は谷状地形で、土器片を含む堆積層が複数確認できる。

検出した遺構は竪穴住居跡5軒、土坑17基、焼土坑2基、溝5条、ピットである。竪穴住居跡は調査区南部に集中し、集落遺構本体はさらに南にあると思われる。北へ向かうほど遺構密度は低くなり、竪穴住居跡より新しい時期の溝遺構が増える。



▶ ◀ 遺構検出面

第116図 8区土層模式図 (1/40)



第117図 8区遺構配置図 (1/300)

(1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡 (第118図、図版60)

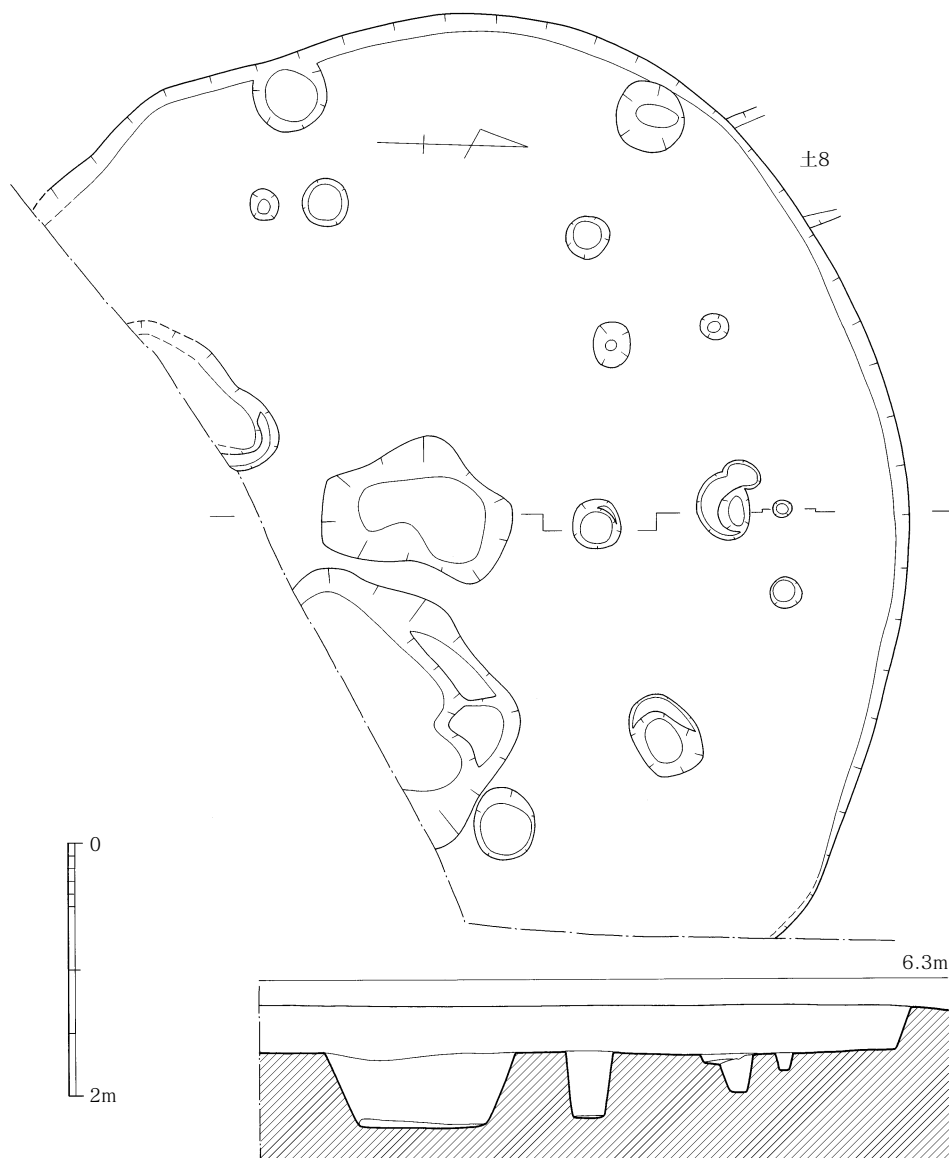
調査区南端に位置する。8~10号土坑よりも新しい。住居跡の1/4ほどが調査区外になるが、径はほぼ8mに復元でき、深さは0.3mを測る。埋土は灰茶色粘質土である。

検出した柱穴から復元すると、柱は7本になる。床は特に踏み固められてはいない。中央土坑は不整形形で、長軸1.54m、短軸1.0m、深さ0.6mである。住居跡の周辺を精査したが、垂木の痕跡等住居跡に関する施設は見当たらない。

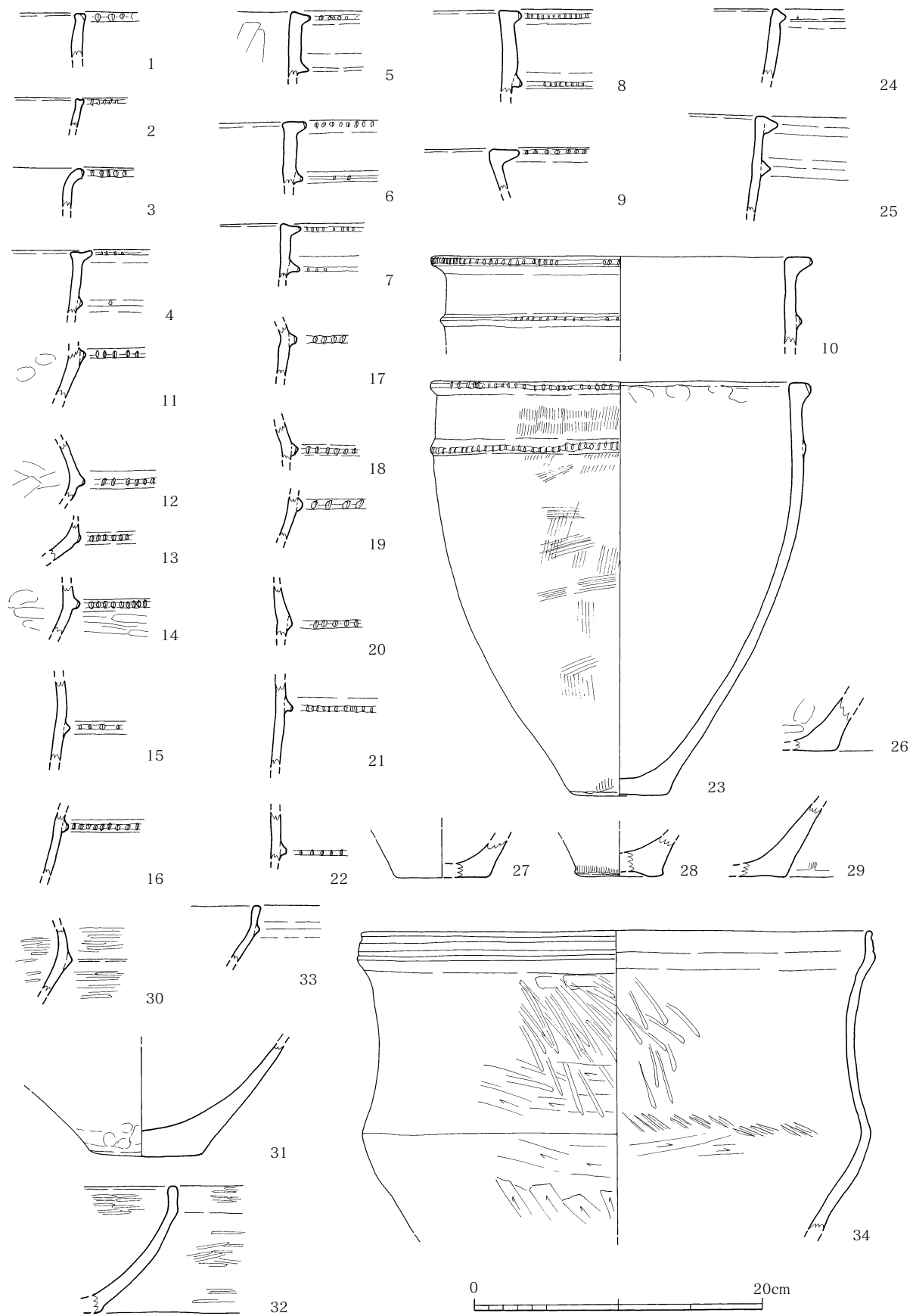
出土遺物の大部分が埋土中から出土したが、第119図25・34はP-2から、27はP-5からの出土である。ほかに打製石鏃、石錐、磨製石斧が出土した。

出土土器 (第119図、図版89)

1~29は甕。1~3は口唇部に刻み目を施す。1・2は口縁端部を平らに作り、3は外反する。いずれも内外面ともナデ調整。4~10は口縁部に粘土帯を巡らし、刻み目を施す。口縁部下にも同じく粘土帯を巡らし、刻み目を施している。11~22は胴部片で、いずれも粘土帯を貼り付け刻み目を施す。いずれもナデ調整で、一部指頭痕が残る。



第118図 8区1号竪穴住居跡実測図 (1/60)

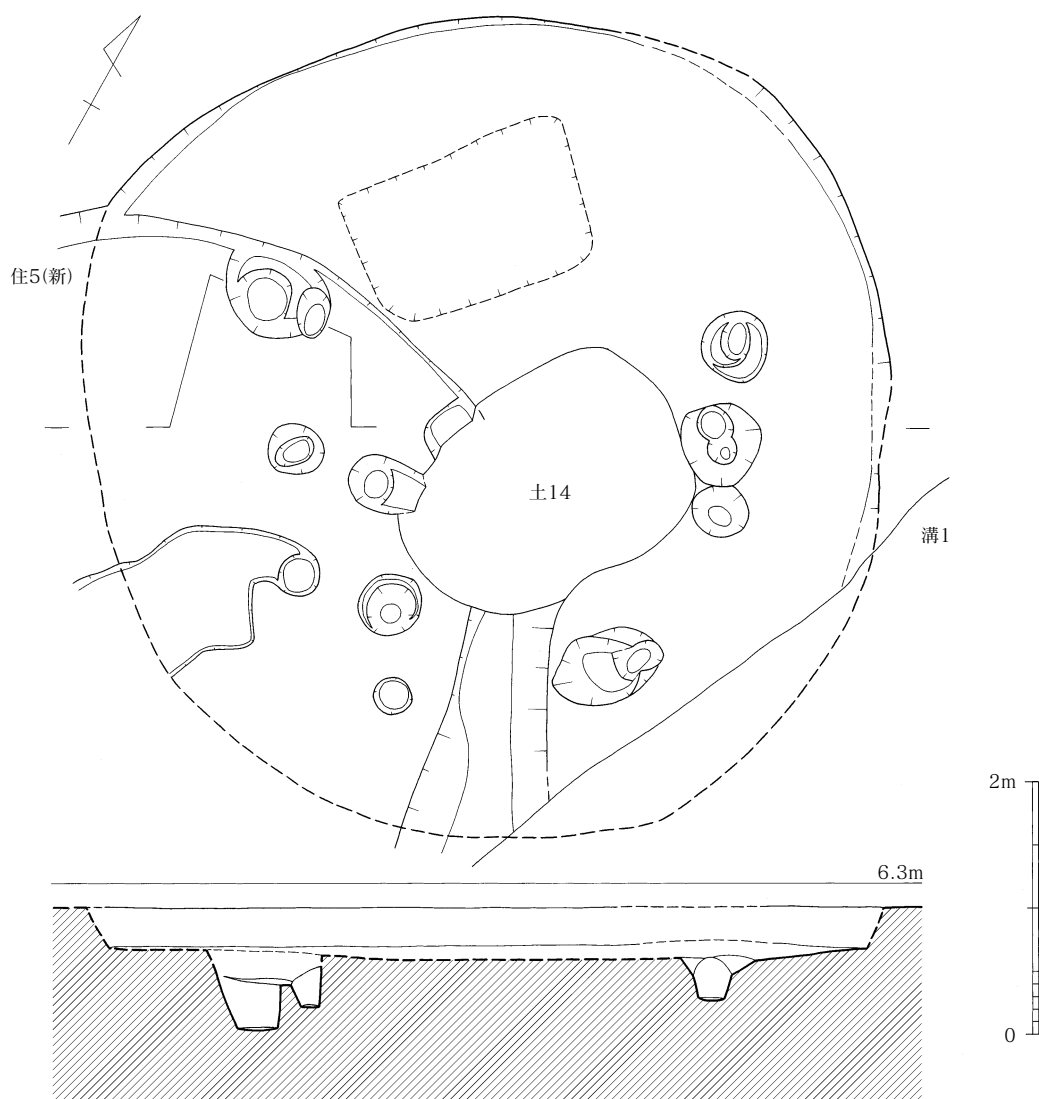


第119图 8区1号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)

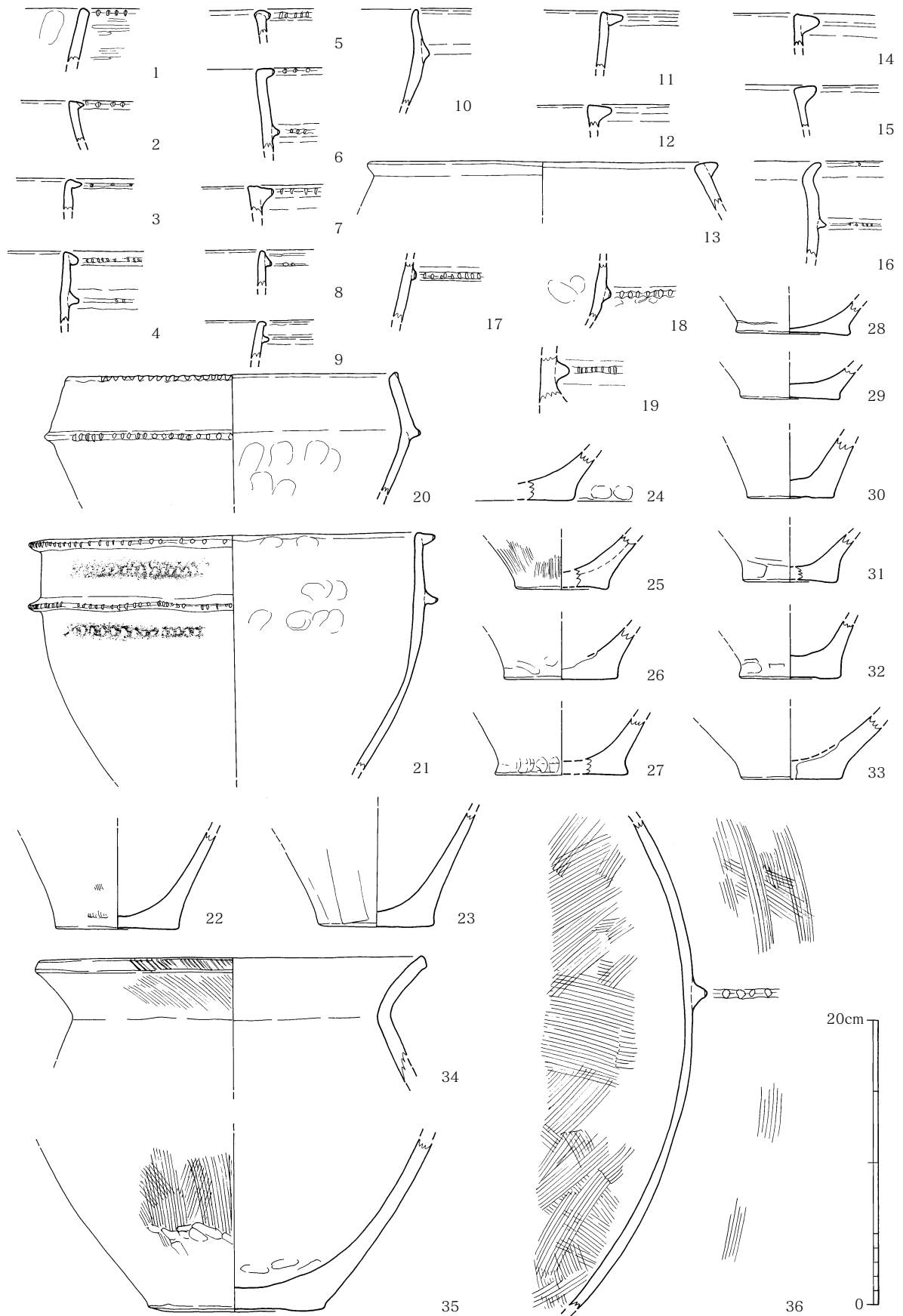
23は最も残りのよい甕で、口縁端部を肥厚させ口唇部に刻み目を施す。口縁部下にもごく低い粘土帯を巡らし刻み目を施している。体部外面はハケ目調整、内面はナデ調整で、口縁部内面に指頭痕が残る。復元口径26.8cm、復元高29.1cm、底径7.2cm。24・25は、口縁部に粘土帯を巡らすか、刻み目を施さないものである。26～29は底部片である。28は上げ底気味につくるが、他は平底である。

30・31は壺。30は体部片で、断面三角形状の粘土帯を巡らす。内外面ともミガキ調整。31は底部片で内外面ともナデ調整である。

32～34は鉢である。32は口縁端部を平らに仕上げ、口縁部下で屈曲する。内外面ともミガキ調整。33も同様の形状だが、屈曲部に粘土帯を巡らす。摩滅著しく調整不明。34は直立する口縁部に凹線状の装飾を施し、体部は中ほどで屈曲させる。体部下半は工具によるナデ上げ、上半はミガキ調整である。復元口径35.6cm。



第120図 8区2号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第121图 8区2号竖穴住居迹出土土器实测图① (1/4)

2号竪穴住居跡 (第120図、図版60)

調査区南半に位置する。5号住居跡、11号土坑、1号溝よりも古く、14号土坑よりも新しい。5号住居跡と埋土が大変よく似ており、床面近くまで掘削してようやく先後関係を知ることができた。側壁は北側の1/2弱が残るにとどまるが、径は6.6mほどに復元でき、深さは0.33m前後を測る。埋土は褐色粘質土である。

検出した柱穴から柱は5本に復元できる。5本柱の住居跡は本住居跡のみで、他3軒の円形住居はみな7本柱である。柱穴の形態から、柱を据え直したか、すぐ脇に補助柱を立てた可能性が考えられる。床は特に踏み固められてはいない。中央土坑は14号土坑の埋土と識別できず検出できなかった。

弥生土器のほかに打製石鏃、磨製石斧が出土した。

出土土器 (第121・122図、図版89)

1～34は甕。1・20は口唇部に刻み目を施す。1の外表面はミガキ調整、内面はナデ調整である。20は口縁部が内湾し、体部は屈曲する。屈曲部に粘土帯を巡らし、刻み目を施している。内外面ともナデ調整。復元口径23.0cm。2～7・21は口縁部に粘土帯を巡らし、刻み目を施す。8は口縁端部からわずかに下がったところに粘土帯を巡らし、刻み目を施している。21は比較的残りがよく、口径28.4cmに復元できる。内外面ともナデ調整。9～16は口縁部に刻み目を施さない。8・9は口縁部が直立し、口縁部下に粘土帯を巡らす。16の口縁部は外反し、口縁部下に刻み目をもつ粘土帯を巡らす。調整が確認できるものはいずれもナデ調整。17～19は刻み目をもつ粘土帯を巡らす体部片である。22～33は底部片で、外面にハケ目あるいは工具痕が残るものがある。34・35は混入品と思われる。34は口縁端部を角張って仕上げ、刻み目を施す。35は丸底気味で、内面と外面下半はナデ調整である。

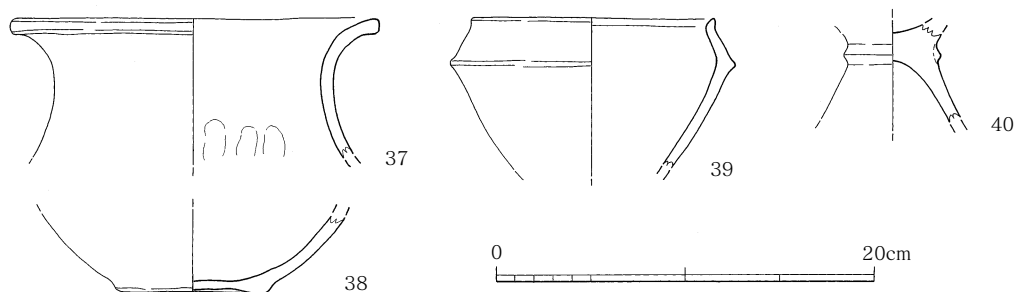
36～38は壺。36は体部中ほどに刻み目をもつ粘土帯を巡らし、内外面ともハケ目調整である。37は口縁端部をやや角張って仕上げている。外面は器面の荒れがひどく調整不明。内面はナデ調整で、指頭痕が残る。38は摩滅著しく調整不明である。

39は鉢であろう。口縁端部をつまみ上げるように仕上げ、口縁部下で屈曲する。屈曲部に刻み目はない。摩滅著しく調整不明。

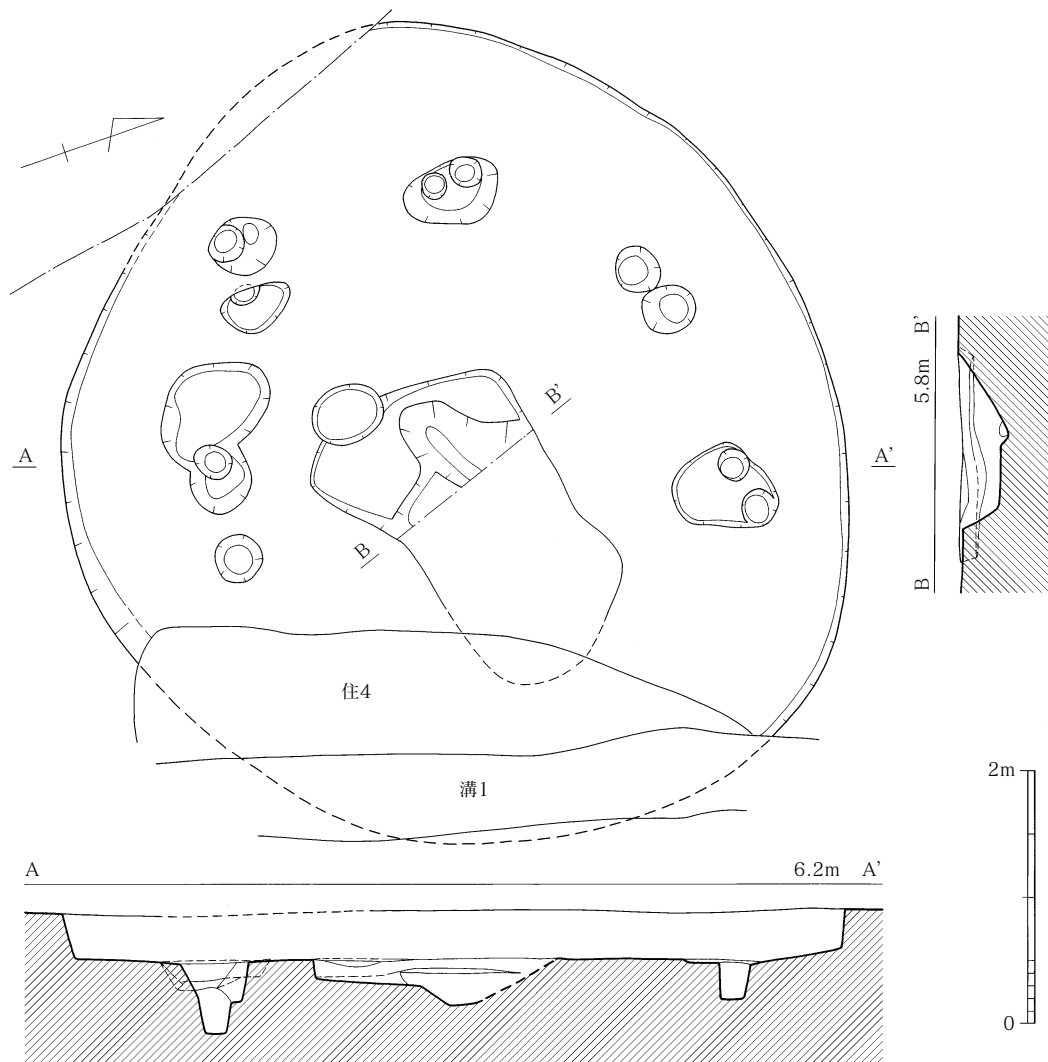
40は高杯である。杯部と脚部の接合部で、粘土帯を巡らす。摩滅著しく調整不明。

3号竪穴住居跡 (第123図、図版60)

調査区南端に位置する。4号住居跡、1号甕棺墓よりも古く、9・10号土坑よりも新しい。一部調査区外に広がり東側側壁が残存しないが、径は6.2～6.4mに復元できる。最も残りのよいところで深さ0.5mを測る。



第122図 8区2号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/4)



第123図 8区3号竪穴住居跡実測図 (1/60)

検出した柱穴から復元すると柱は7本になる。ほぼ同規模のピットが隣り合うため、柱を据え直したか、補助柱を据えた可能性がある。床は特に踏み固められてはいない。中央土坑は不整形で、埋土は暗褐色粘質土である。

土器のほかに打製石鏃、石製紡錘車が出土している。

出土土器 (第126図)

1～17は甕である。そのうち、1～6は口唇部に、7～10は口縁部に巡らした粘土帯に刻み目を施し、11・12は刻み目を施さない。6は口縁部が外反し、口縁部下に沈線を巡らす。13～15は体部片で、13・14は刻み目をもつ。13の刻み目は不規則で粗い。15は「M」字状突帯を持ち、刻み目はない。16・17は底部片で平底である。4にわずかにハケ目調整が残るが、ほかはナデ調整である。

18・19は壺片で、どちらも摩滅著しく調整不明。20はミニチュア土器である。

4号竪穴住居跡 (第124図、図版60)

調査区南端に位置する。1号溝よりも古く、3号住居跡よりも新しい。住居跡の1/2ほどが調査区外になるが、西側側壁の長さからおよそ5m四方の規模と思われる。大変残りが悪く、最も残りの良い部分でも深さは0.1mしかない。

床面に炭化物の広がりを確認し、精査したが柱穴等の屋内施設は検出できなかった。埋土は褐色粘質土である。

出土土器

(第126図)

21～25は甕である。21・22は口縁部に刻み目をもつ粘土帯を巡らす。23は口縁部が外反し、刻み目はない。24・25は平底の底部片である。24の外面にハケ目の痕跡がわずかに残る。復元底径9.4cm。

26は鉢で、口縁端部がわずかに肥厚する。口縁部はヨコナデ調整、体部は内外面ともハケ目調整である。復元口径27.0cm。

5号竪穴住居跡 (第125図、図版60)

調査区南半に位置する。1号溝よりも古く、2号住居跡、14号土坑よりも新しい。先述したとおり2号住居跡との先後関係の把握が難しく、一部2号住居跡の遺物が混入している。径は6.6m、深さは0.45mを測る。

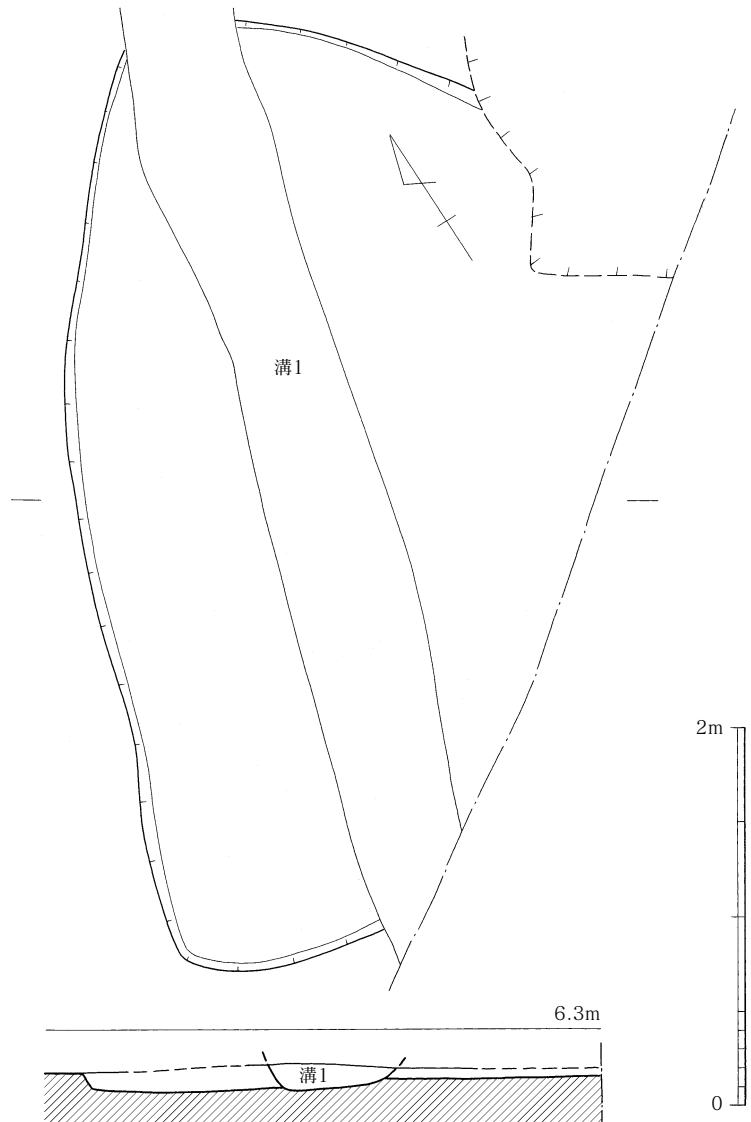
7本すべての支柱穴を検出できた。床面は特に踏み固められてはいない。中央土坑は不整形で、深さは0.6mである。

土器のほかに打製石鏃、石錐、凹石、擦石、台石が出土している。

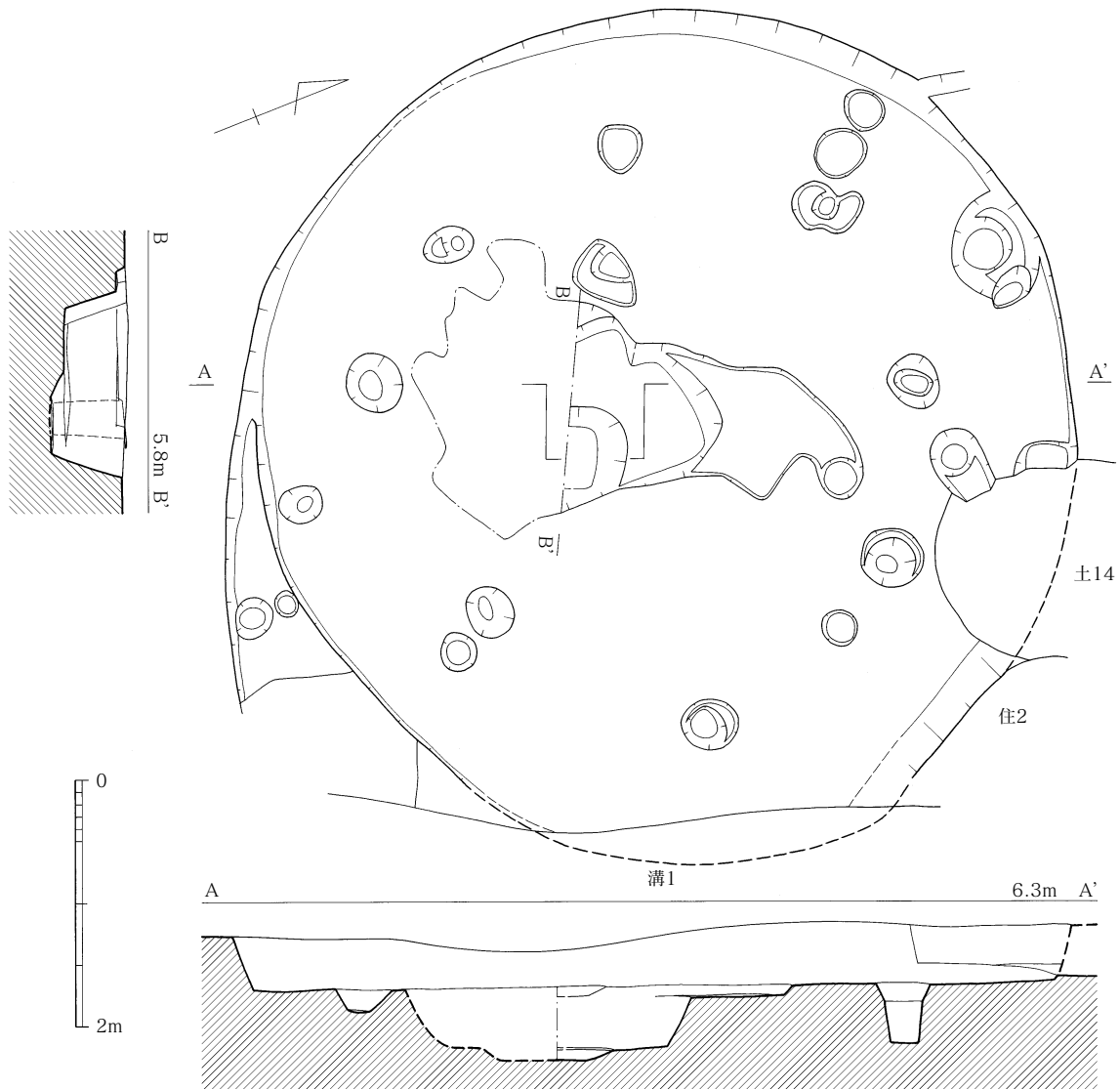
出土土器 (第126図、図版89)

27～46は甕である。27～32は口縁部に刻み目をもつ粘土帯を巡らす。33～35は刻み目をもたない。36・37は口縁部が外反する。35は外面にハケ目が残るが、ほかはナデ調整である。38・39の口縁部は直立し、体部が屈曲する。屈曲部には粘土帯を巡らし刻み目を施す。この形態の土器は、本調査区では5号竪穴住居跡からのみの出土である。40～42は突帯を持つ体部片。43～46は底部で、いずれも平底である。

47は壺の肩部小片で、ごく低い断面三角形の粘土帯を巡らす。



第124図 8区4号竪穴住居跡実測図 (1/40)



第125図 8区5号竪穴住居跡実測図 (1/60)

(2) 甕棺墓

1号甕棺 (第127図、図版61)

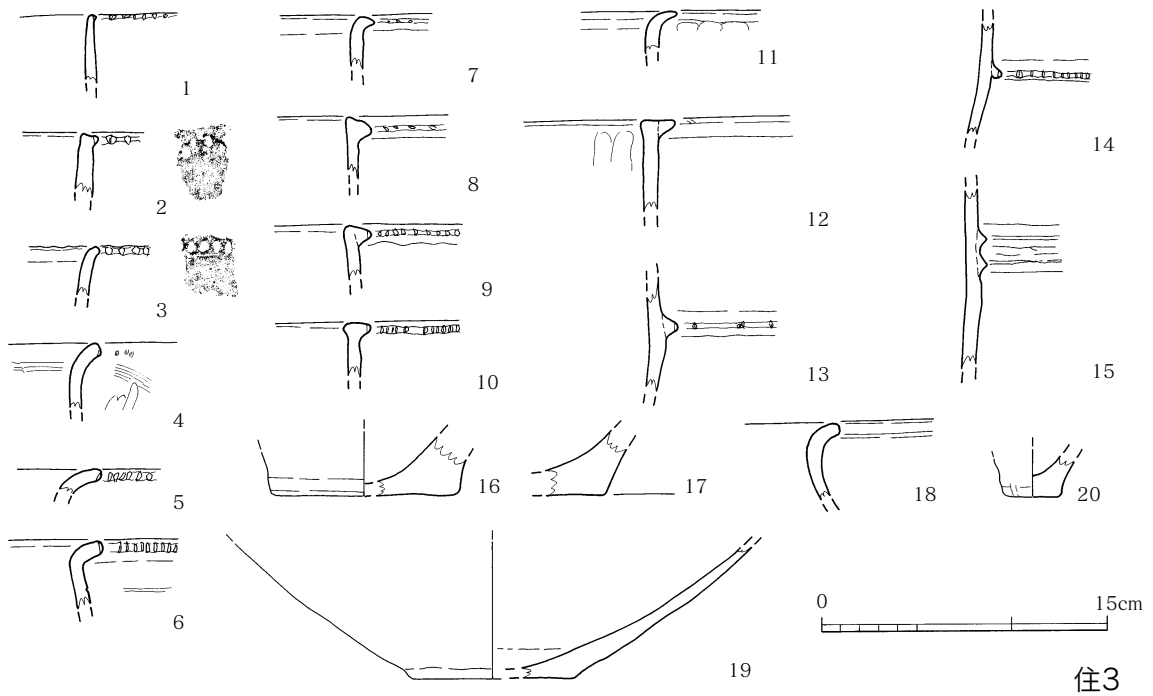
調査区南半に位置し、3号竪穴住居跡よりも新しい。後世の削平により完存しないが、埋置状況から上甕が存在したと思われる。主軸はN-12°-W。埋置角度は60°である。

出土土器 (第128図、図版89)

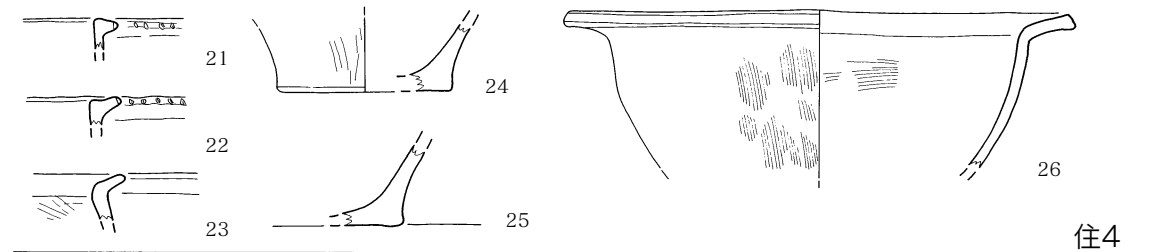
後世の削平のため口縁部を欠く。底部は丸底ぎみ。体部半ばより下方に断面台形状の突帯を巡らし、密に刻み目を施す。体部外面は比較的長い単位で、密にハケ目調整する。内面下半は板状工具によるナデ上げ、上半はハケ目調整である。肩部付近は指頭痕が目立つ。弥生時代後期である。

2号甕棺 (第127図、図版61)

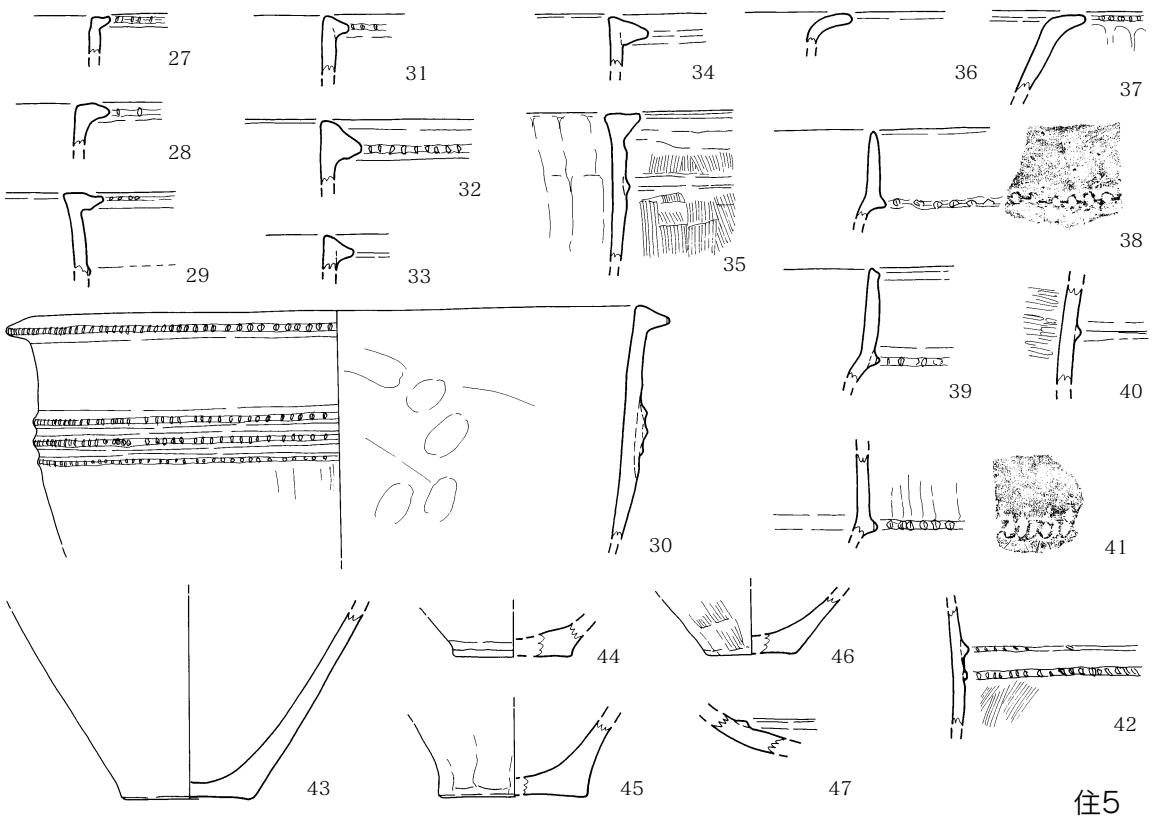
調査区南半西壁付近に位置する。後世の削平により甕の上半部が失われている。上甕はなく、小児棺であろうか。主軸は座標の東西軸に合致し、埋置角度は35°である。



住3



住4



住5

第126图 8区3~5号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/4)

出土土器 (第128図、図版89)

体部半ばより下よりに断面台形状の突帯を巡らす。底部はわずかに丸みを帯びている。体部外面のハケ目調整はいくらか雑で、上半は指頭痕が目立つ。

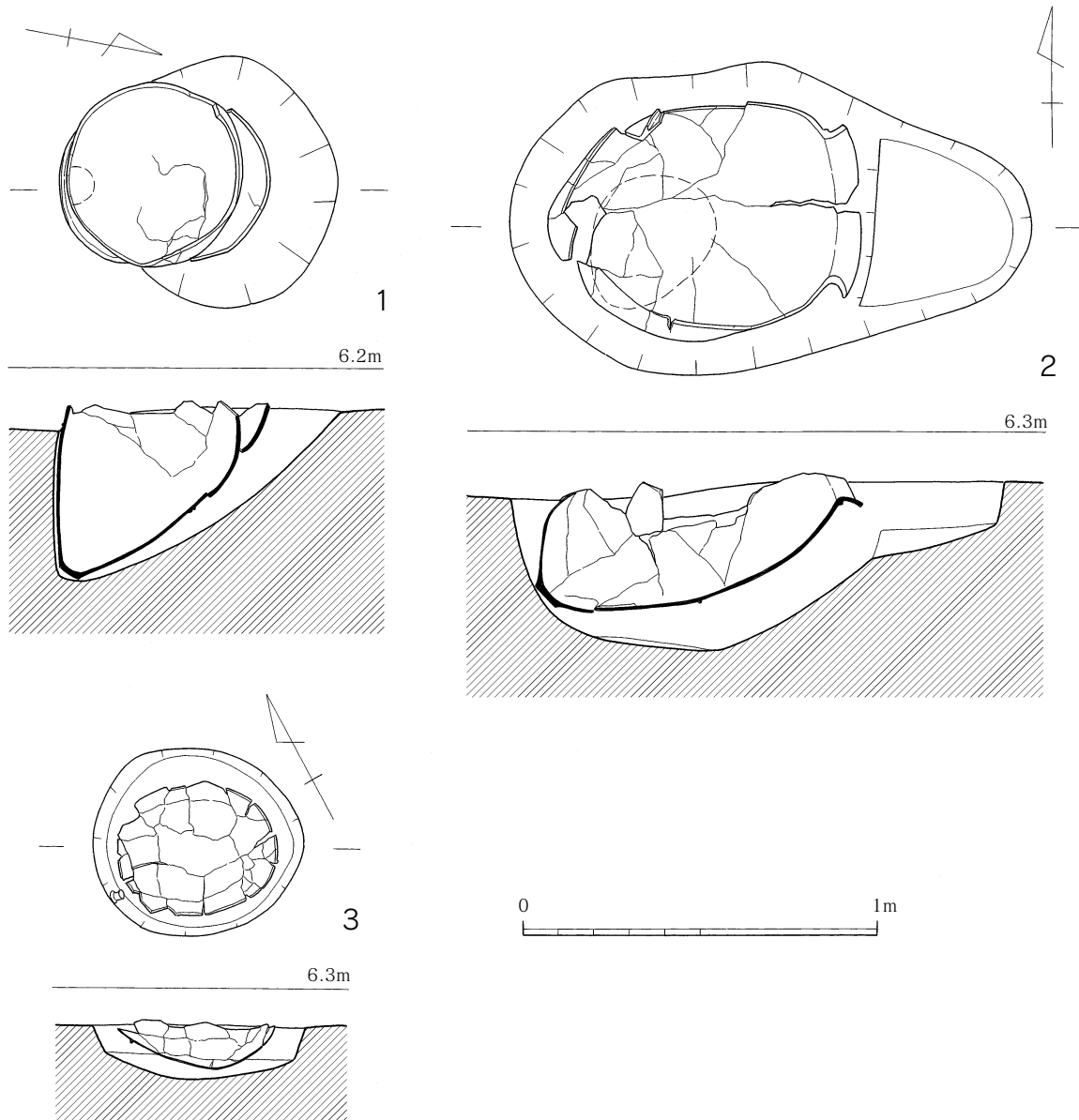
3号甕棺 (第127図、図版62)

調査区南半に位置する。後世の削平により甕の大半が失われている。小児棺であろう。主軸はN-30°-Wで、埋置角度はほぼ水平である。

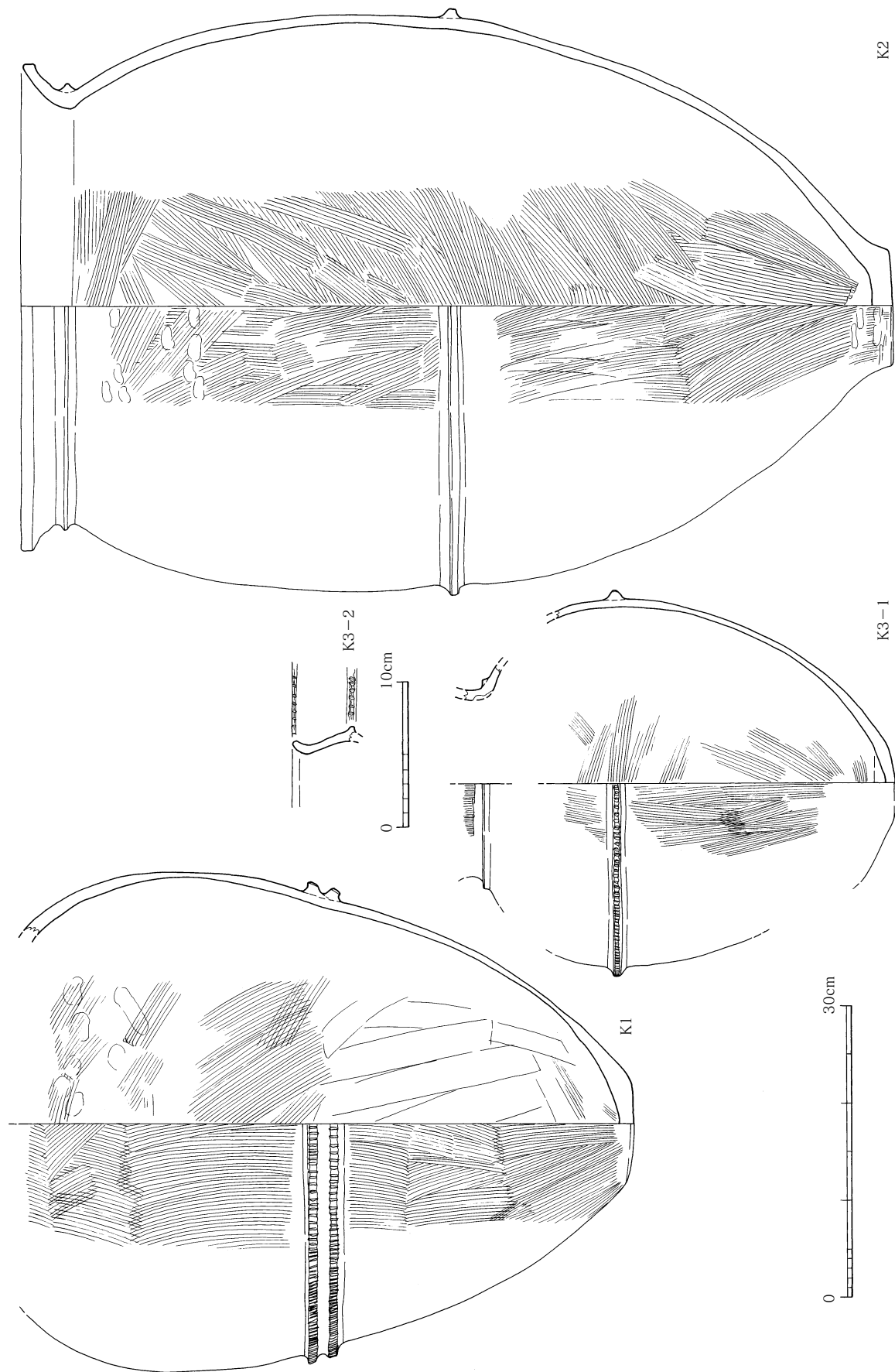
出土土器 (第128図、図版89)

1は口縁部と肩部を欠くが、壺であろう。体部中ほどに刻み目を施す突帯を巡らす。底部は完全に丸底。摩滅や器面の荒れでハケ目の残りはよくない。

2は甕棺の脇から出土した。後世削平された折に混入したものであろう。口唇部と屈曲部に刻み目を施す。内外面ともナデ調整である。



第127図 8区1~3号甕棺実測図 (1/40)



第128图 8区1~3号甕棺实测图 (1/6, 4は1/4)

(3) 土坑

1号土坑 (第129図、図版62)

調査区南半に位置するほぼ円形の土坑。長径1.66m、短径1.46m、深さ0.38mを測る。埋土は茶灰色粘質土を中心とし、全体に炭化物と土器片が含まれている。

出土土器 (第131図、図版90)

1～3は甕である。1は口唇部と屈曲部に刻み目を施し、内外ともナデ調整。2は口唇部と屈曲部の粘土帯に刻み目を施す。内外面ともナデ調整。3は口縁部と体部に刻み目をもつ粘土帯を巡らす。磨滅著しく調整不明。4・5は甕の底部と思われるが、壺の可能性もある。6は壺の肩部で、外面にミガキ痕が僅かに残る。

2号土坑 (第129図、図版62)

調査区南半に位置する不整形の土坑。長軸2.5m、短軸1.9m、深さ0.26mを測る。土層観察用ベルトにみられる杭は最近打設されたものである。

弥生土器が出土したが、小片のため図示できない。

3号土坑 (第129図、図版63)

調査区中央付近に位置する楕円形の土坑。4・6号土坑より新しい。長軸2.1m、短軸1.2m、深さ0.46mを測る。埋土は灰色粘質土、灰茶色粘質土。

出土土器 (第131図、図版)

7は壺の底部と思われる。磨滅著しく調整不明。

4号土坑 (第129図、図版63)

調査区中央付近に位置する溝状の土坑。3号土坑よりも古い。長軸は残存部で1.9m、短軸0.84m、深さ0.52mを測る。埋土は灰茶色粘質土。

弥生土器が出土したが、小片のため図示できない。

5号土坑 (第129図、図版63)

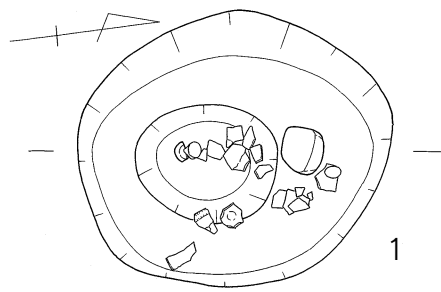
調査区中央付近東端に位置する不整形の土坑。調査区外に広がるので全形は不明。掘削した範囲では、長軸3.5m、短軸2.1mを測り、最深部の深さは0.6mである。埋土は暗褐色粘質土である。

比較的残りのよい弥生土器が出土しているが、いずれも土坑中ほどから上層より出土している。弥生土器のほかに土製紡錘車、凹石、砥石が出土している。

出土土器 (第132・133図、図版90)

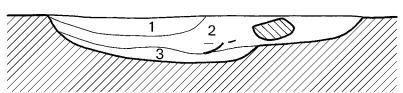
1～17は甕である。1は小さく外反する口唇部に刻み目を施す。2～5は口縁部と体部に刻み目をもつ粘土帯を巡らす。6～7は体部にも粘土帯を巡らす。刻み目はない。2・3・5・7は口縁端部を上方に反り気味につくる。4はほぼ完形で、口径30cm、器高31.3cm、底径6.8cmである。17は緩く外反する口縁部に刻み目はない。12～16は底部片で、14・15は平底、ほかは上げ底である。

18～21は壺。19の外面にミガキ痕が残るほかは、磨滅して調整不明。20は復元口径14.3cm、復元器高32.9cm、底径8.6cmである。21は大型の壺の肩部付近の破片で、体部外面に粗いミガキを施している。



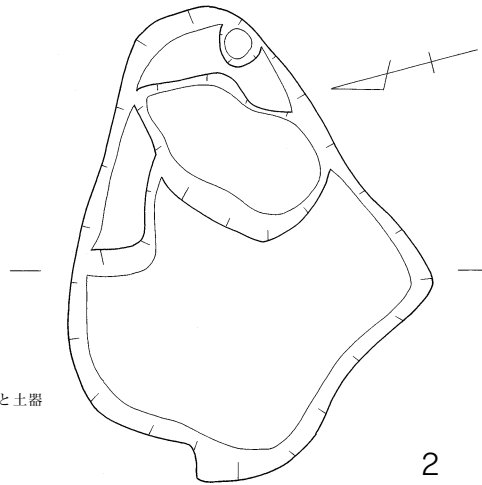
1

6.3m



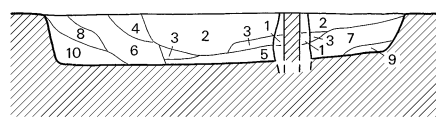
6.3m

1. 灰茶色粘質土
2. 茶灰色粘質土
3. 黄茶色粘質土
いずれも炭化物と土器を含む

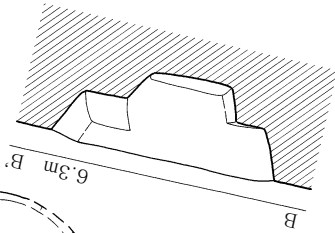


2

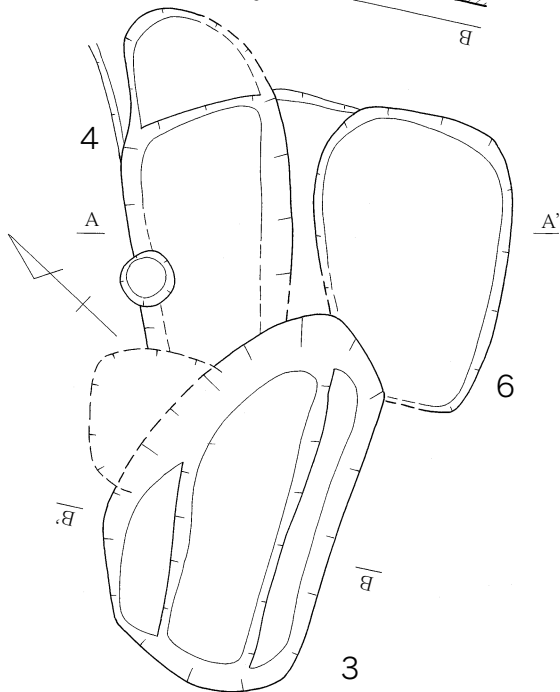
6.3m



1. 青灰色粘質土、青灰色砂質土
(杭は打ちこまれている。杭の影響で周囲の土層の色が変化)
2. 灰色粘質土
3. ②+⑤
4. ②+⑥
5. 灰色微砂
6. 茶灰色粘質土
7. ②+⑤ (③よりも⑤多い)
8. 灰黄色粘質土
9. 灰色微砂
10. 黄灰褐色粘質土



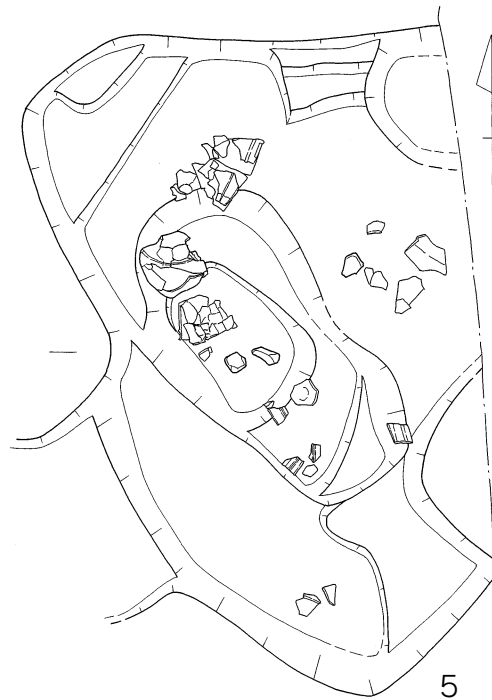
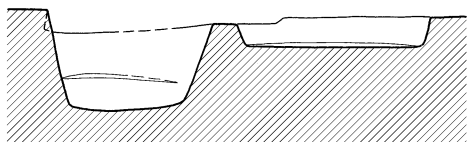
6.3m B



6

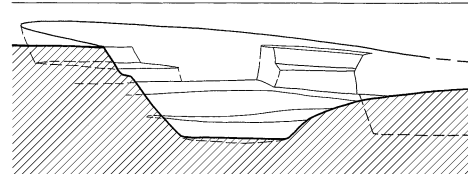
3

A 6.3m A'



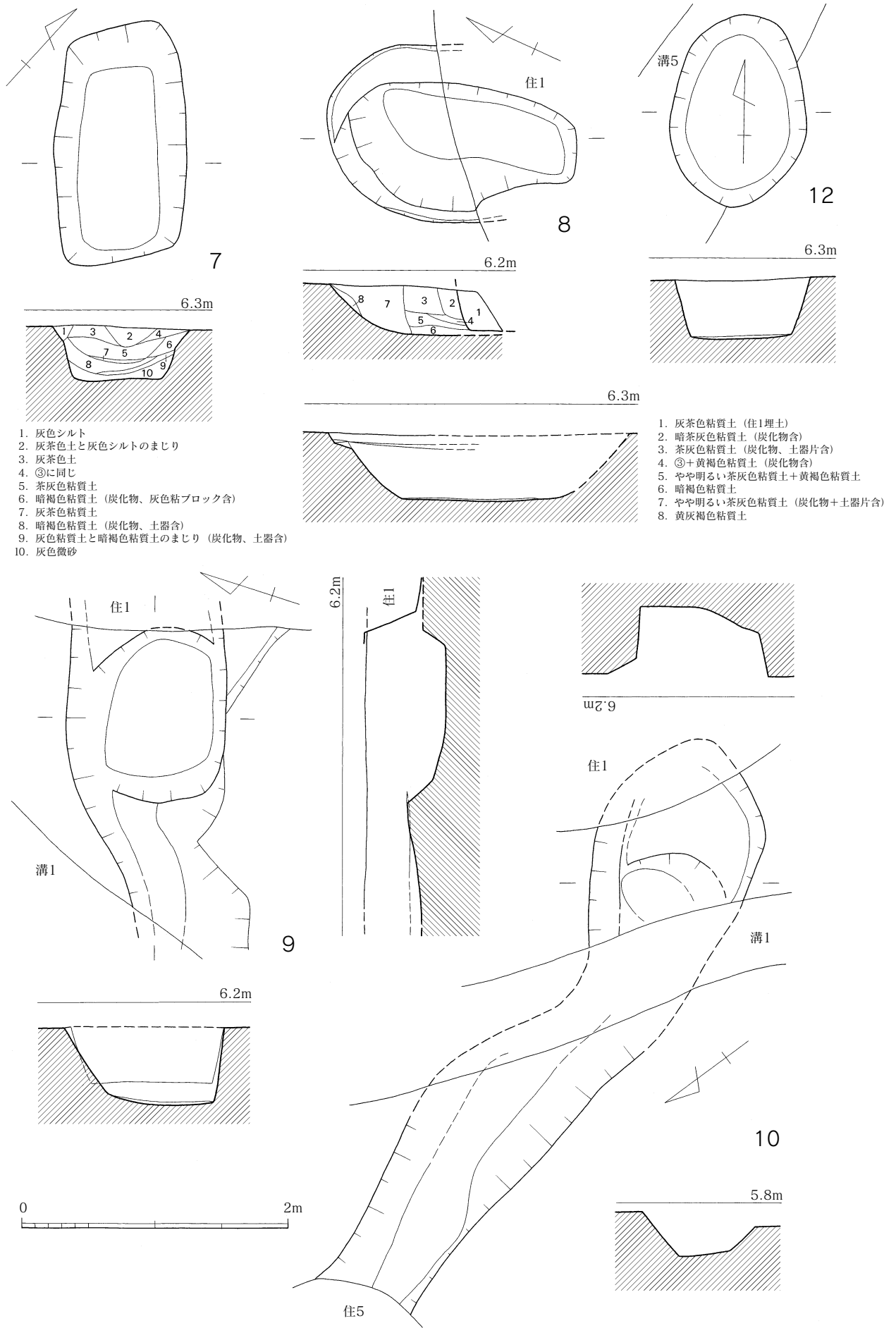
5

6.3m



0 2m

第129図 8区1~6号土坑実測図 (1/40)



1. 灰色シルト
2. 灰茶色土と灰色シルトのまじり
3. 灰茶色土
4. ③に同じ
5. 茶灰色粘質土
6. 暗褐色粘質土 (炭化物、灰色粘ブロック含)
7. 灰茶色粘質土
8. 暗褐色粘質土 (炭化物、土器含)
9. 灰色粘質土と暗褐色粘質土のまじり (炭化物、土器含)
10. 灰色微砂

1. 灰茶色粘質土 (住1埋土)
2. 暗茶灰色粘質土 (炭化物含)
3. 茶灰色粘質土 (炭化物、土器片含)
4. ③+黄褐色粘質土 (炭化物含)
5. やや明るい茶灰色粘質土+黄褐色粘質土
6. 暗褐色粘質土
7. やや明るい茶灰色粘質土 (炭化物+土器片含)
8. 黄灰褐色粘質土

第130図 8区7~10・12号土坑実測図 (1/40)

6号土坑 (第129図、図版63)

調査区中央付近に位置するほぼ方形の土坑。長軸1.56m、短軸1.02mを測り、深さは0.14mと浅い。弥生土器が出土したが、小片のため図示できない。

7号土坑 (第130図、図版64)

調査区中央付近に位置する方形の土坑。長軸1.74m、短軸1.0m、深さ0.4mを測る。

出土土器 (第131図)

8は甕の口縁部片である。内面に工具痕が残る。9は甕の底部片。上げ底で、摩滅著しく調整不明。

8号土坑 (第130図、図版64)

調査区南端に位置する不整形の土坑。1号住居跡よりも古い。残存部分の短軸は1.32m、深さは0.5mを測る。長軸は0.95mほどしか残存しないが、2.2mほどに復元できる。

弥生土器が出土したが小片のため図示できない。

9号土坑 (第130図、図版64)

調査区南端に位置する溝状の土坑。1・3号住居跡よりも古い。短軸1.2m、深さ0.6mを測る。埋土は暗褐色粘質土。弥生土器のほかに打製石鏃、土製紡錘車が出土している。

出土土器 (第131図、図版90)

10～15は甕である。10は口縁端部からわずかに下がったところに刻み目をもつ粘土帯を巡らす。11・12は刻み目を持たない。13は体部片、14・15は底部片である。16は壺の肩部片である。

10号土坑 (第130図)

調査区南端に位置する溝状の土坑。1・3号住居跡よりも古い。埋土は暗褐色粘質土で、底面直上で焼土塊を検出。弥生土器のほかに打製石鏃が出土している。

出土土器 (第131図)

17～21は甕である。17・18は口縁部に刻み目をもつ粘土帯を巡らす。いずれも外面は摩滅して調整不明、内面はナデ調整である。

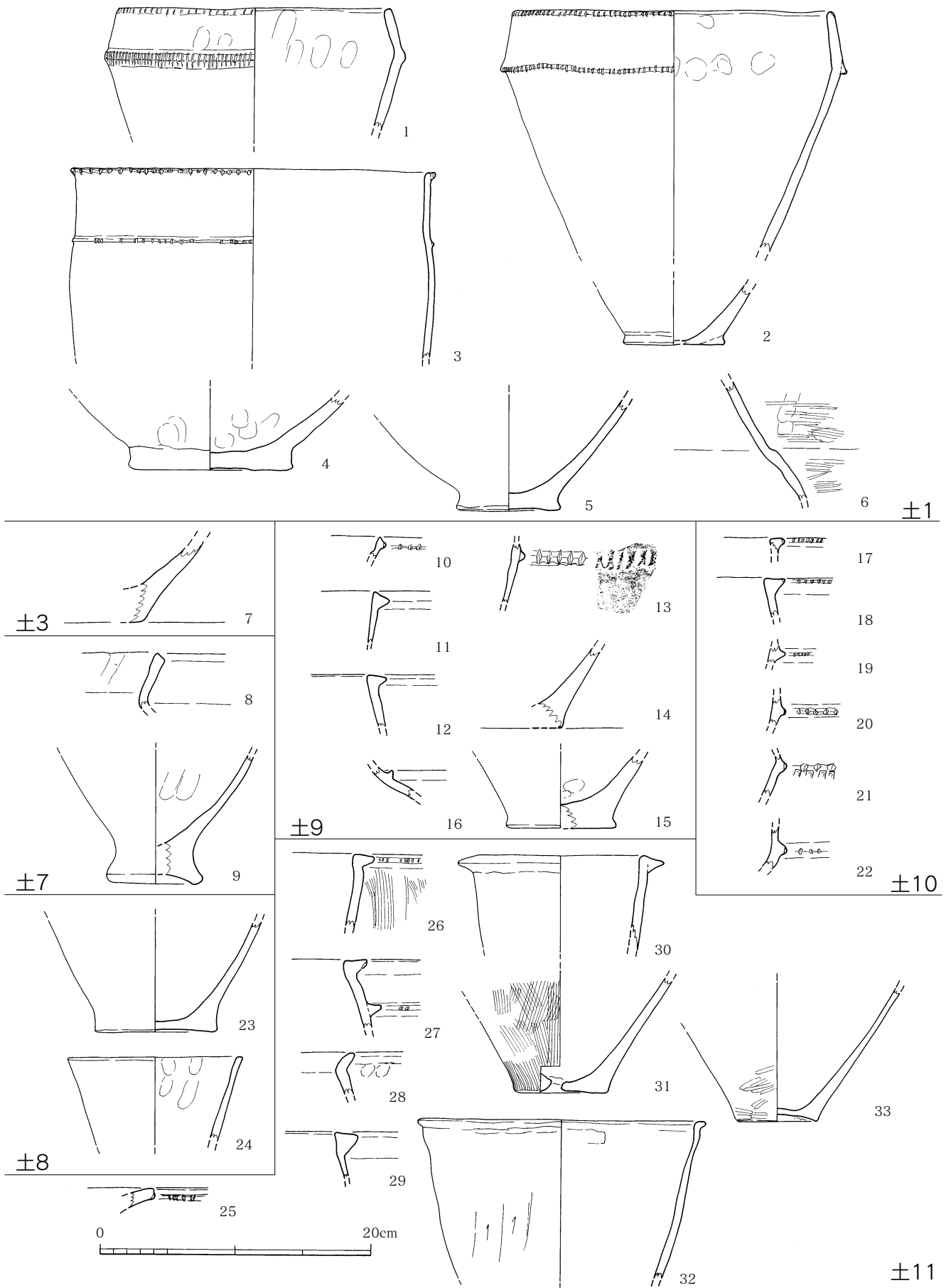
11号土坑 (第134図、図版65)

調査区南半に位置するほぼ方形の土坑。2号住居跡より新しい。長軸1.96m、短軸1.35mを測る。深さは最深部で0.96mあり、本遺跡で検出した土坑中、最も深い。

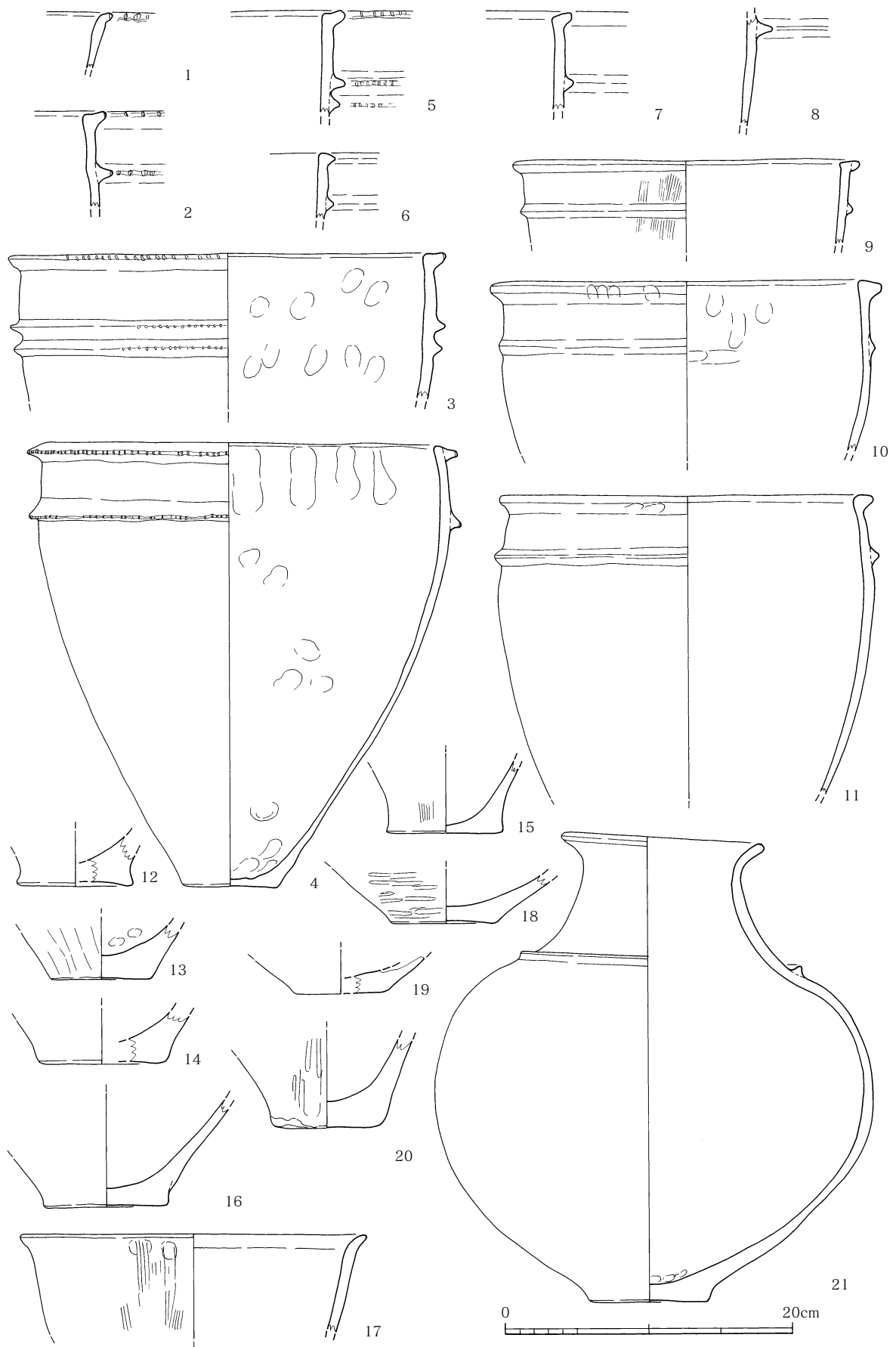
灰色味の強い埋土で、全体に炭化物と土器片が含まれるが焼土は認められない。側面、床面とも焼けておらず、灰等を廃棄したものと思われる。

出土土器 (第131図、図版91)

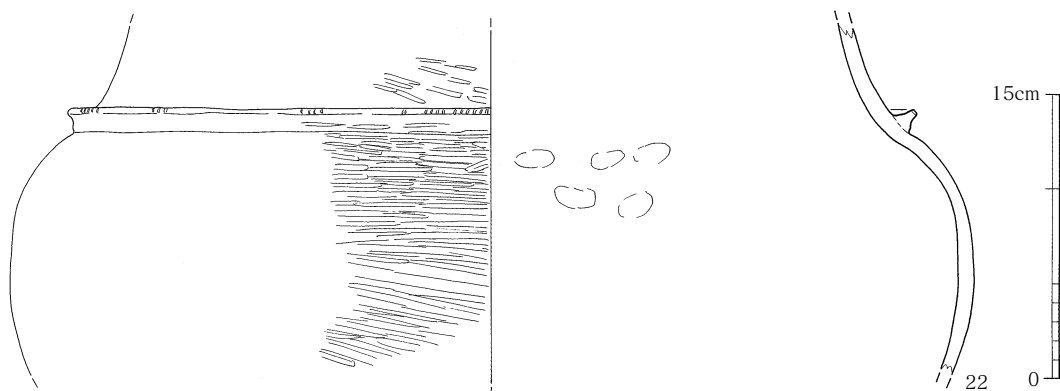
22～31は甕である。22～24はよく似た口縁部を有している。22・23は刻み目をもつが、24は口縁部下の粘土帯のみ刻み目をもつ。25は外反する口縁部に刻み目を施す。26は外反するが刻み目はない。27は断面三角形の口縁部である。28は小型の甕で、口縁部に刻み目のない粘土帯を巡らす。31は口縁端部が短く外反し、体部外面は工具によるナデあげ調整である。



第131图 8区1·3·7·9~11号土坑出土土器实测图 (1/4)



第132图 8区5号土坑出土土器实测图① (1/4)



第133図 8区5号土坑出土土器実測図② (1/4)

12号土坑 (第130図、図版65)

調査区北半に位置する楕円形の土坑。5号溝よりも新しい。長径1.44m、短径1.04mを測る。深さは0.46mだが、若干掘り過ぎている。埋土は灰白色粘質土。

土器が出土したが、小片のため図示できない。

13号土坑 (第134図、図版60)

調査区南半に位置する不整形の土坑。1号溝よりも古い。全形は知り得ないが、楕円形に近い形になると思われる。深さは最深部で0.48mを測る。

出土土器 (第135図)

1～4は甕である。1は平らに仕上げた口唇部にごく浅い刻み目を施す。2は体部片で、屈曲部に刻み目を施している。3・4はどちらも平底。5は壺の底部片と思われる。6は小形の壺であろう。内外面ともナデ調整で、指頭痕が残る。

14号土坑 (第134図、図版60)

調査区南半部に位置するほぼ方形の土坑。2・5号住居跡より古い。2号住居跡床面でプランを検出した。長軸2.38m、短軸1.68m、深さ0.54mを測る。最下層の埋土と地山の区別がつきにくく、掘り過ぎてしまっている。本来は床面中央が窪んだ、11号土坑のような床面の形状であったと思われる。埋土は茶褐色粘質土を中心とし、土器片、炭化物、焼土粒を含む。側面、床面とも火を受けた痕跡はなく、灰等を廃棄したものと思われる。

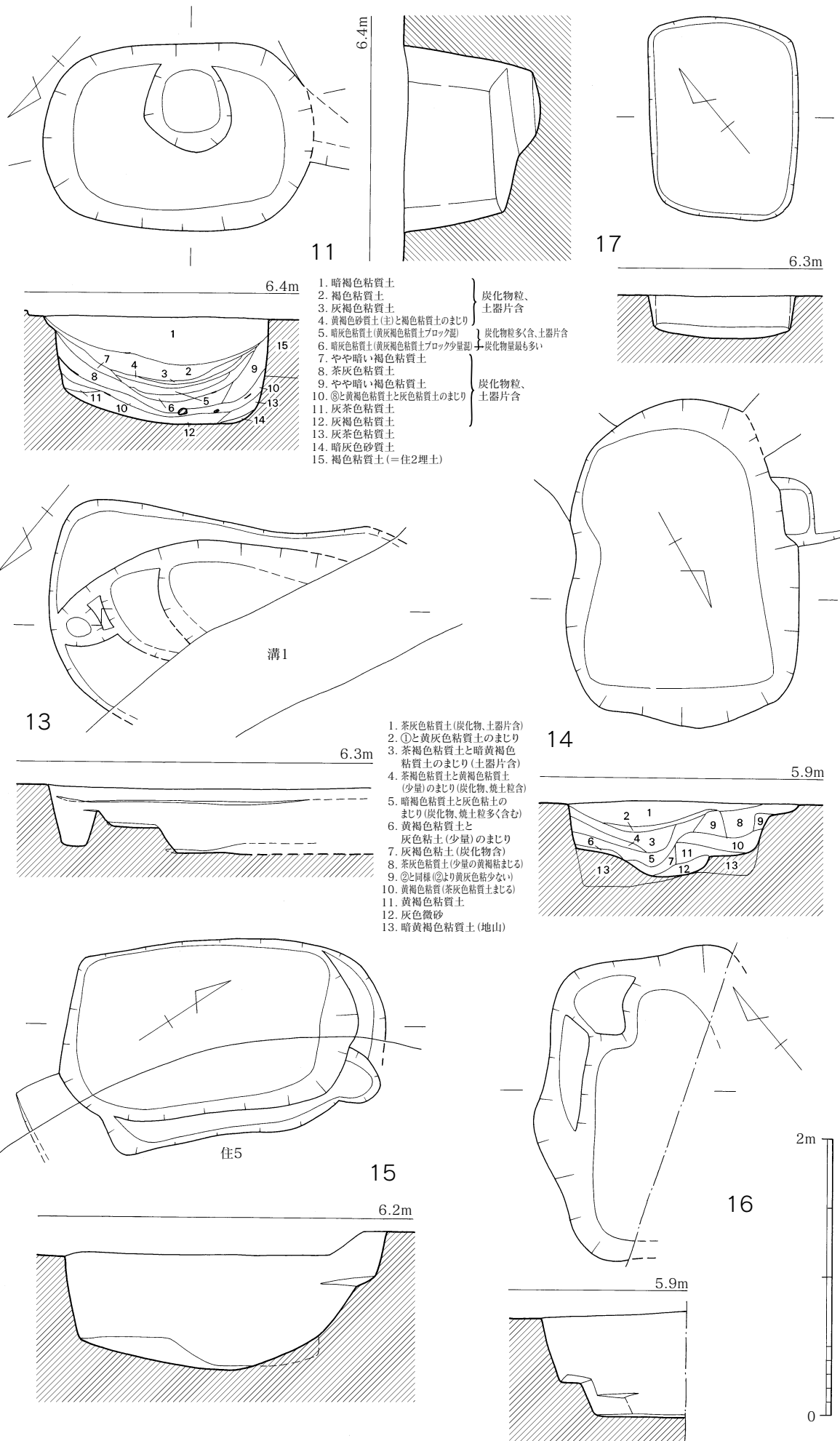
弥生土器のほかに打製石鏃、石錐が出土している。

出土土器 (第135図)

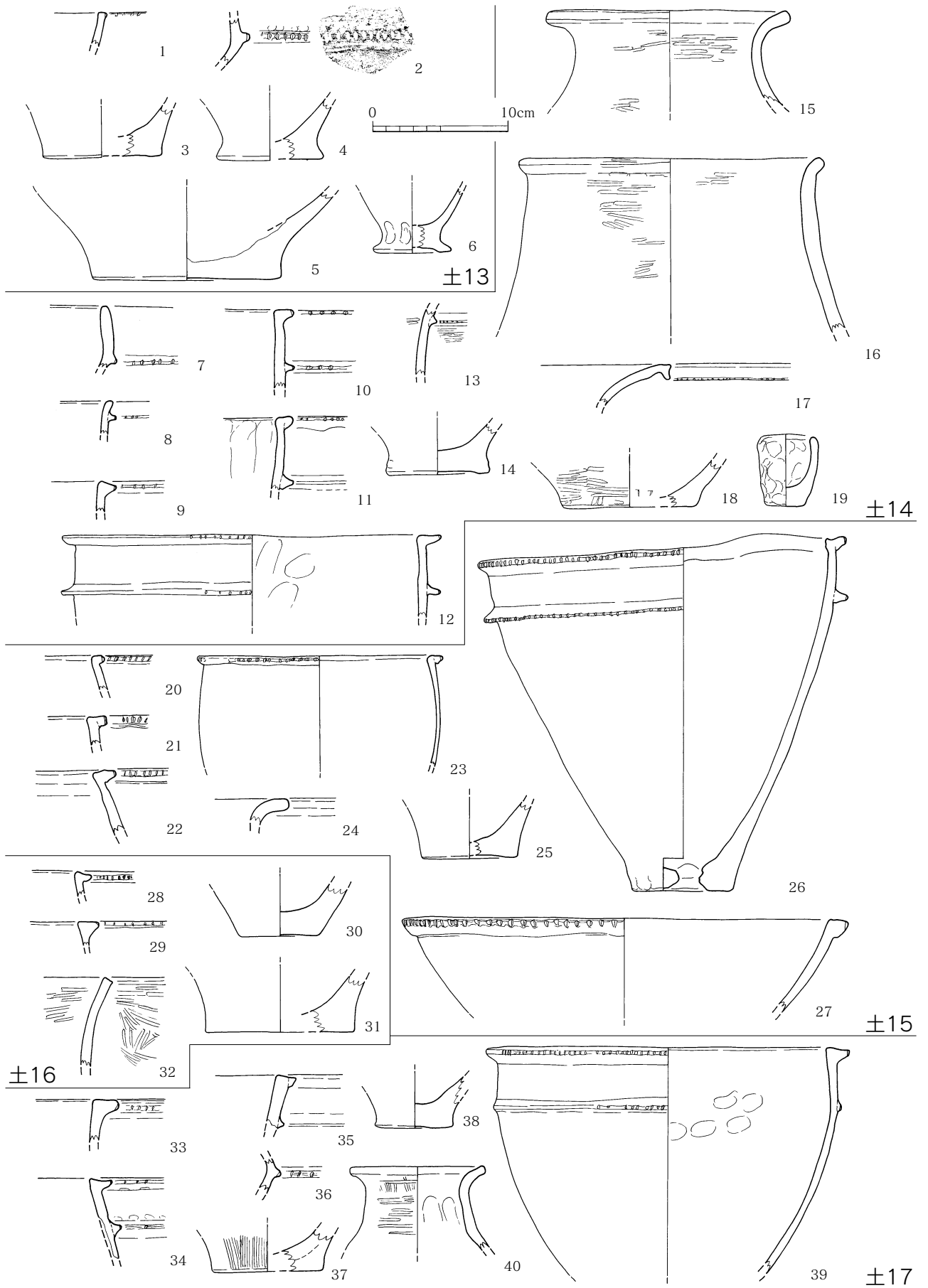
7～14は甕。7は直立する口縁部をもち、屈曲部に刻み目を施す。8は口縁部から少し下がった部分に粘土帯を巡らし刻み目を施している。9～12はいずれも口縁部に粘土帯を巡らし刻み目を施している。11は口縁部の粘土帯のみ刻み目を施し、体部の粘土帯には刻み目はない。14は底部片で上げ底気味につくる。

15～18は壺。15は肥厚する口縁端部が外反する。摩滅しているがミガキが認められ、赤色顔料がわずかに残る。16は口縁部の外反が緩い。摩滅しているがミガキが認められ、外面全体に丹塗りが施されている。17は大きく外反する口縁部である。口縁端部を下方に引き出すように仕上げ、浅い刻み目を施している。18は底部片で、外面ミガキ調整である。

19はミニチュア土器で、復元口径4.2cm、器高5.4cm、底径3.1cmである。



第134図 8区11・13~17号土坑実測図 (1/40)



第135图 8区13~17号土坑出土土器实测图 (1/4)

15号土坑（第134図、図版65）

調査区南半に位置する方形の土坑。5号住居跡よりも古い。長軸2.32m、深さ0.84mを測る。残存部分から短軸は1.4mほどに復元できる。埋土は暗褐色粘質土である。

出土土器（第135図、図版91）

20～26は甕。20～23は刻み目を持つ粘土帯を口縁部に巡らす。いずれも内外面ともナデ調整。24は大きく外反する口縁部で刻み目はない。25はわずかに上げ底に仕上げる底部片。26は口縁部と体部に刻み目をもつ粘土帯を巡らし、底部に焼成後の穿孔がある。口径27.3cm、器高26.8cm、底径7.5cm。27は口縁部に肥厚した粘土帯を巡らし刻み目を施す。ナデ調整。

16号土坑（第134図、図版60）

調査区南端に位置する不整形の土坑。1号住居跡より古い。14・15号土坑のような隅が丸い方形を呈するものと思われる。長軸2.2m、深さ0.74mを測る。検出当初は1号竪穴住居跡の屋内施設と考えていたが、同住居跡には中央土坑が存在すること、11・14・15号土坑と形状が似ていることから、独立した土坑と考えた。調査区南壁の土層観察の結果、本土坑が1号住居跡よりも新しくなることはない。

出土土器（第135図）

28～31は甕である。28・29は口縁部に刻み目をもつ粘土帯を巡らす。30・31は底部で平底。32は深鉢であろう。内外面とも不定方向にミガキを施す。

17号土坑（第134図、図版66）

調査区南半に位置する方形の土坑。3号甕棺よりも古い。長軸1.44m、短軸1.06m、深さ0.3mを測る。

出土土器（第135図、図版91）

33～39は甕。33・34・39は口縁部に刻み目をもつ粘土帯を巡らすが、35は刻み目をもたない。36・39はかなり胴部が丸みを持ち、器高はあまり高くないと思われる。37の外面にハケメが残るほかはナデ調整である。

40は小型の壺。口縁端部は丸く仕上げ、体部はあまり張らないと思われる。頸部外面はハケ目のちミガキ調整。復元口径10cmである。

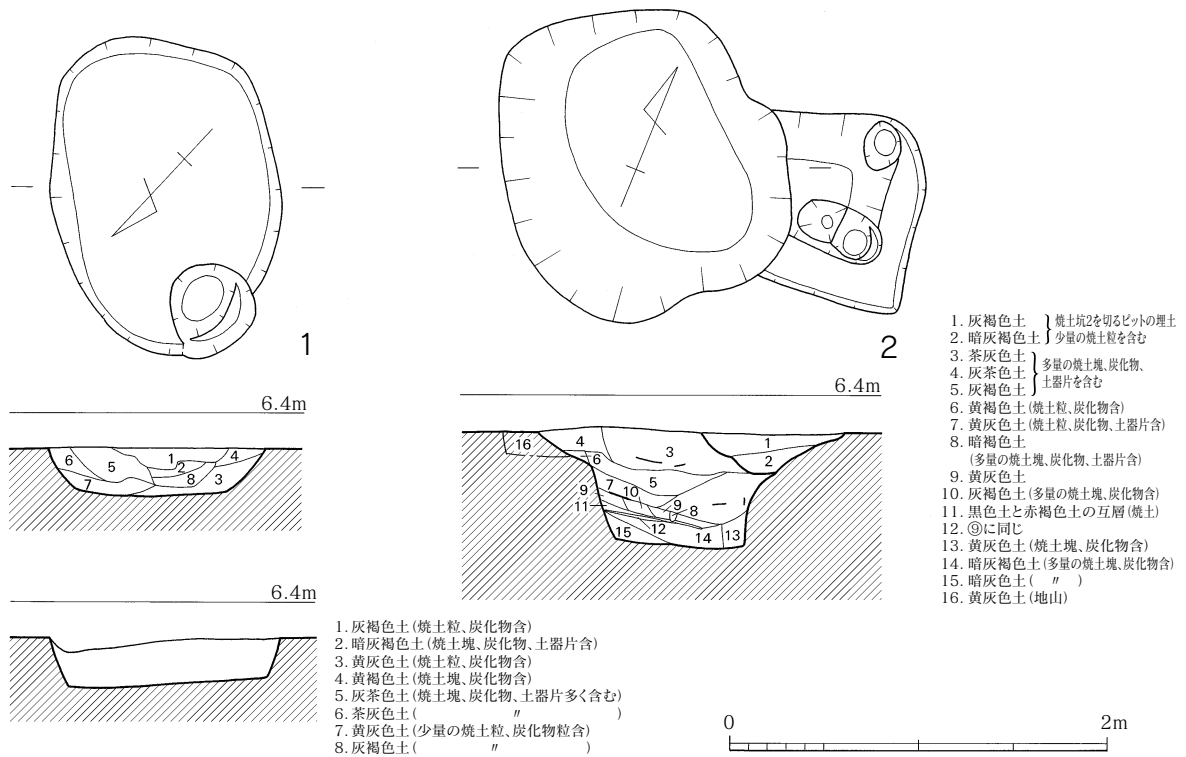
（4）焼土坑

1号焼土坑（第136図、図版66）

調査区中央付近に位置する楕円形の土坑。長径1.7m、短径1.2m、深さ0.26mを測る。埋土には焼土粒と炭化物が多く含まれ、上層ほど焼土と土器片の量が多い。土坑の側面、床面は焼けておらず、焼土、灰等を廃棄したものと思われる。出土した土器量に対して、図示できるものが少ない。

出土土器（第137図、図版91）

1は小形の壺の底部であろう。内外面ともナデ調整。2は頸部に断面三角形状の突帯をもつ壺である。摩滅著しく調整不明。3の壺は頸部と肩部の境付近に3条の沈線を巡らす。全体に摩滅しているが、内面にハケ目がわずかに残る。口径26.4cmに復元できる。



第136図 8区1・2号焼土坑実測図 (1/40)

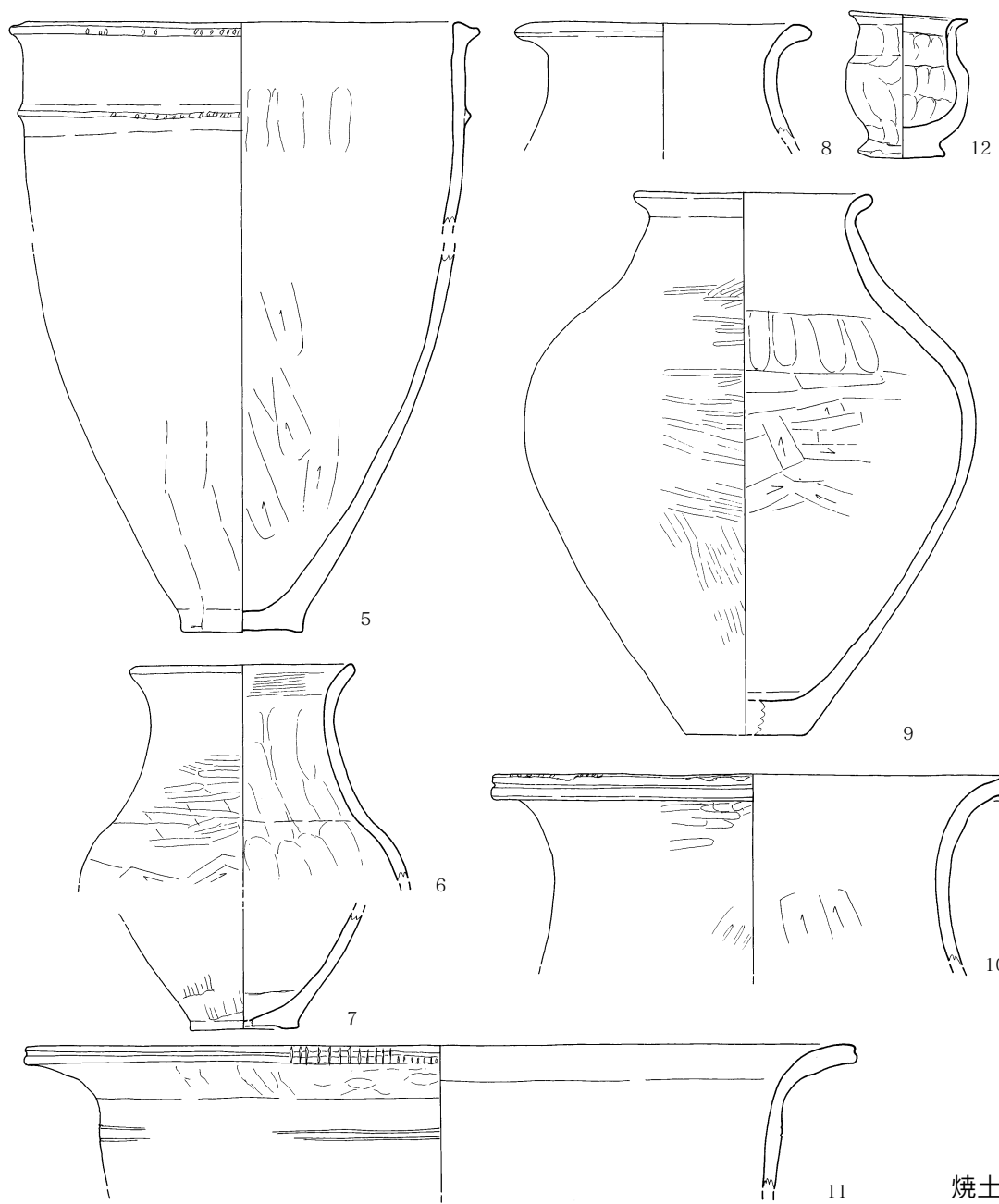
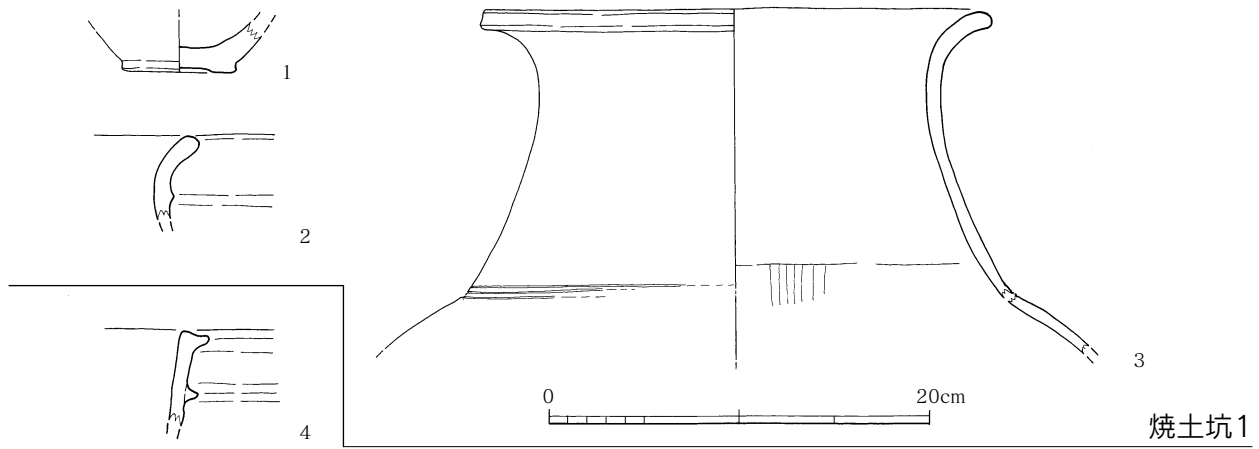
2号焼土坑 (第136図、図版66)

調査区中央付近に位置する不整形の土坑。長軸1.6m、短軸1.5m、深さ0.6mを測る。焼土、炭化物は埋土全体に含まれているが、土器片は上層に集中する。土坑の側面、床面は焼けておらず、焼土、灰等を廃棄したものと思われる。土器のほかに、砥石が出土している。

出土土器 (第137・138図、図版91・92)

4・5は甕である。口縁部の形状はよく似ているが、4は刻み目がない。5の内外面には工具痕が残る。復元口径27cm、底径6.6cm。

6~12は壺である。6は口縁部から体部にかけて緩やかに変化する。口縁部内面はハケ目調整、ほかにはナデ調整で指頭痕が残る。外面は工具によるナデ調整の後ミガキを施す。7はわずかに上げ底につくる底部で、外面に工具痕が残る。6と胎土、焼成が似ており、同一固体の可能性はある。8は口縁端部がやや肥厚する。内外面ともナデ調整。9は頸部と体部の境が不明瞭である。体部外面はミガキ調整、内面は工具によるナデ調整。比較的残りがよく、復元口径13.5cm、復元器高31.2cm、復元底径6.8cm。10は口縁端部に沈線を巡らし、口唇部に刻み目を施す。全体に摩滅しているが、一部ミガキが残る。11は大きく外半する口縁の端部に沈線と刻み目を施し、口縁部下に2条の沈線を巡らす。13はごく小形の壺で、全体にナデ痕が残る粗雑な作りである。口径6.7cm、器高8.5cm、底径4.9cm。12は大型の壺で、棺として焼かれた可能性がある。口縁端部の刻み目は切れ切れで連続しないようである。体部の突帯に施される刻み目は一部しか残存しておらず、状況は不明。底部は上げ底である。体部外面と内面の上半はミガキを施す。内面下半はナデ調整。



第137图 8区1·2号烧土坑出土土器实测图 (1/4)



第138図 8区2号焼土坑出土土器実測図 (1/4)

(5) 溝

1号溝 (第117図)

調査区南半に位置する北東－南西方向の溝。2～5号竪穴住居跡、9・10・13号土坑よりも新しい。幅0.8m、深さ0.3mを測る。埋土は淡灰色粘質土。

出土土器 (第140図、図版92)

1は弥生土器の甕、あるいは鉢の口縁部片。口唇部と屈曲部に刻み目を施す。2は甕の体部片で、屈曲部に粘土帯を巡らし刻み目を施す。3は刻み目がない。内外面ともナデ調整。

4は土師器高杯の脚部で、杯部との接合面には工具痕が残る。外面は摩滅して不明瞭だが、ミガキを施したようである。内面はケズリのちハケ目調整。

2号溝 (第139図)

調査区中央付近に位置する北東－南西方向の溝。ちょうど地形の変換点に位置し、この溝から北へ緩やかに地形が傾斜する。幅1.6m、深さ0.5mを測る。

出土土器 (第140図)

5は壺の底部片であろう。内外面ともナデ調整である。

3号溝 (第139図)

調査区北半に位置する北西-南東方向の溝。5号溝よりも新しく、6号溝よりも古い。谷状地形の堆積土に切り込んでいる。幅1.7m、深さ0.44mを測る。

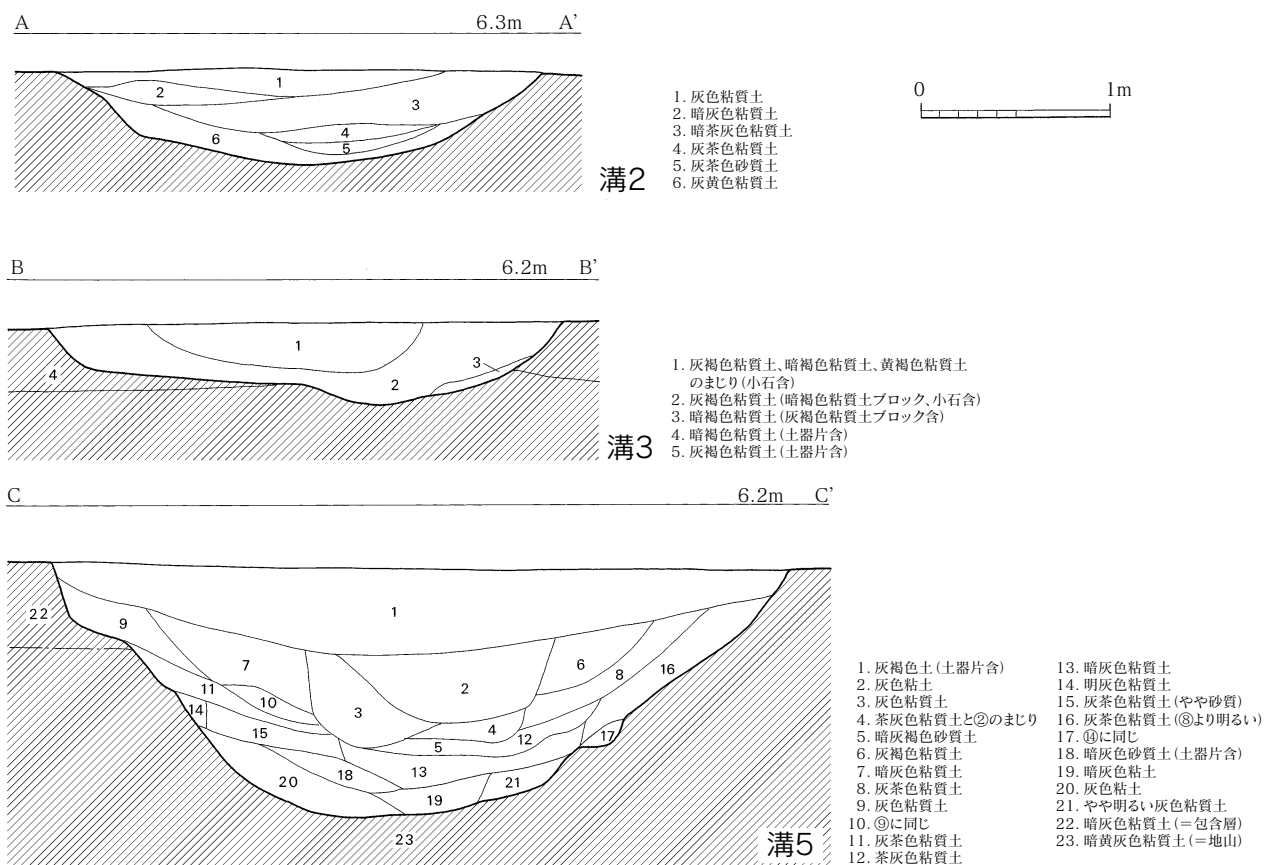
出土土器 (第140図)

6~10は甕である。6は口縁端部をわずかに摘み上げるように仕上げ、くびれ部に断面三角形の突帯を巡らす。8は大型の甕の頸部片で、6と同様の形状である。くびれ部に工具痕が認められる。9の口縁部は大きく外半する。体部内面にハケ目調整がわずかに残る。10は口縁端部に浅い刻み目を施し、内面はハケ目調整。口径32.4cmに復元できる。

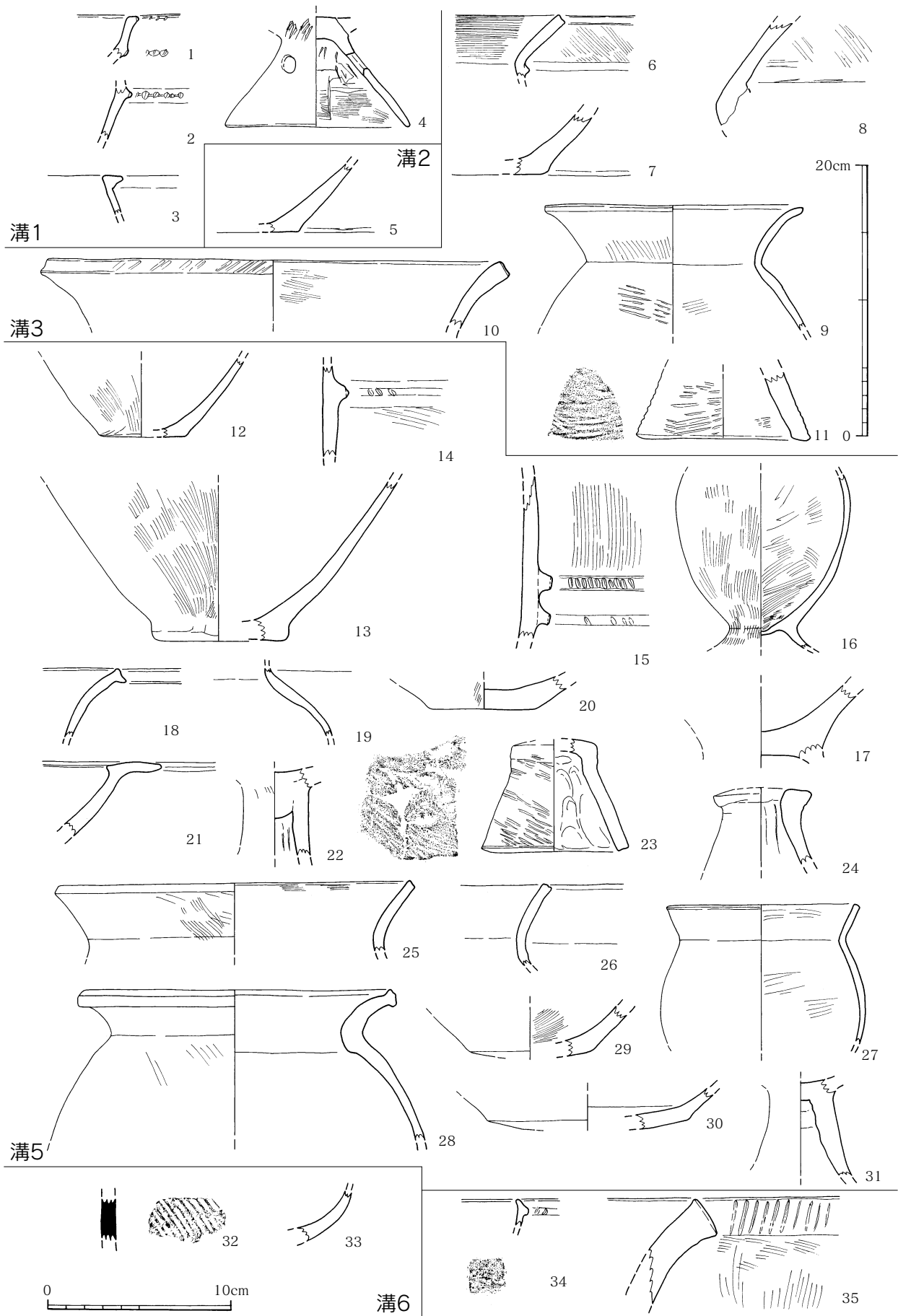
11は支脚片。外面は直線タタキ、内面はナデ調整である。

4号溝 (第117図)

調査区北半に位置する北西-南東方向の溝。3号溝よりも新しく、6号溝よりも古い。検出時に3号溝との区別がついていなかったため、遺物が3号溝出土遺物に混入している。土器のほかに擦石と台石が出土している。



第139図 8区2・3・5号溝土層実測図 (1/40)



第140図 8区1~3・5・6号溝、波板状遺構出土土器実測図 (1/4、25~33は1/3)

5号溝 (第139図)

調査区北半に位置する北東—南西方向の溝。12号土坑、3号溝よりも古い。幅3.9m、深さ1.3mを測る。埋土は灰色粘質土を中心とする。

出土土器 (第140図)

12～17は弥生土器の甕。12・13は底部片で、外面はハケ目調整、内面はナデ調整。14・15は比較的大型の甕の体部片であろう。刻み目をもつ断面台形の突帯を巡らす。16・17は台付甕。16の体部内外面、台部外面はハケ目調整、内面はナデ調整である。18～20は弥生土器の壺。18は口縁端部を下方に引き出すように仕上げる。19は肩部片。20は外面にわずかにハケ目が残りに、内面はナデ調整である。21・22は弥生土器の高杯。21は摩滅著しく調整不明。22は脚部外面にわずかにハケ目が残りに、内面にはシボリ痕が残る。23・24は支脚。23は外面直線タタキ、内面はナデ調整。24は上面に焼成前穿孔。内外面ともナデ調整。

25～31は土師器。25は全体に摩滅して、内面の調整は不明瞭。26は体部内面にケズリ痕がわずかに認められる。27は小形丸底壺。口縁部内面は粗いハケ目、体部内面はヘラケズリである。復元口径10.6cm。28は口縁部が大きく外半する。全体に摩滅して調整不明。29・30は杯部が屈曲する高杯の杯部。29の内面をハケ目調整するほかはナデ調整。31の脚部内面はナデ調整だが、外面は摩滅して調整不明。

6号溝 (第117図)

調査区北端に位置する北東—南西方向の溝。本来もっと上面で検出された遺構で、本遺跡中最も新しい遺構である。調査の都合上、他の遺構が検出される面まで下げたものである。この状態で幅6.4mを測り、埋土は暗青灰色粘質土である。

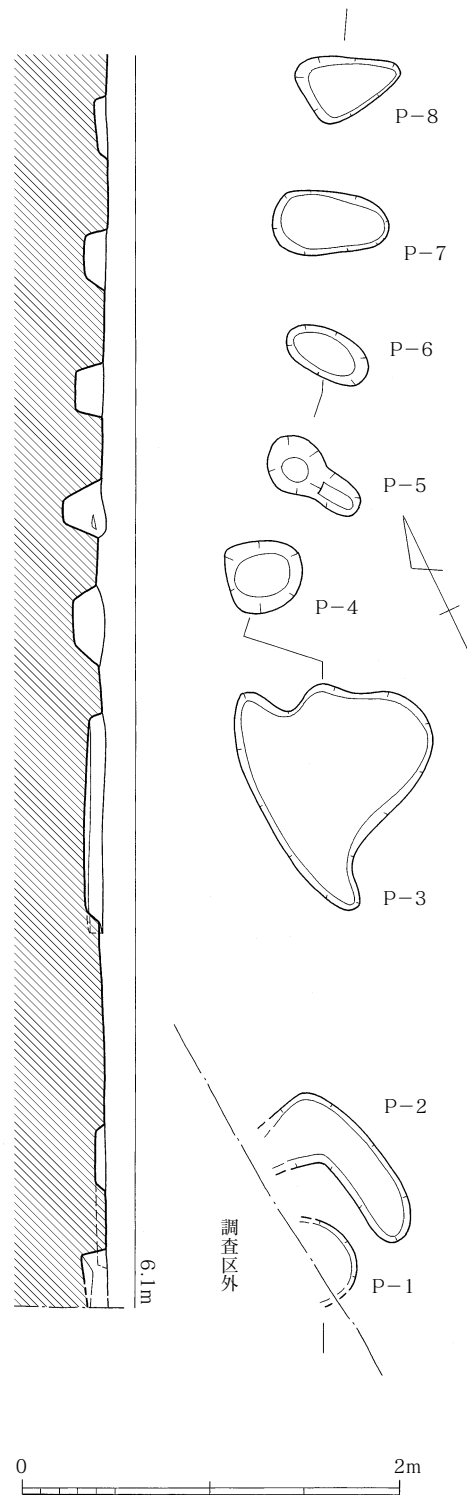
出土土器 (第140図、図版)

32は須恵器甕の小片。外面は直線タタキ、内面は当て具痕が残る。33は陶器の杯小片。

(6) 波板状遺構

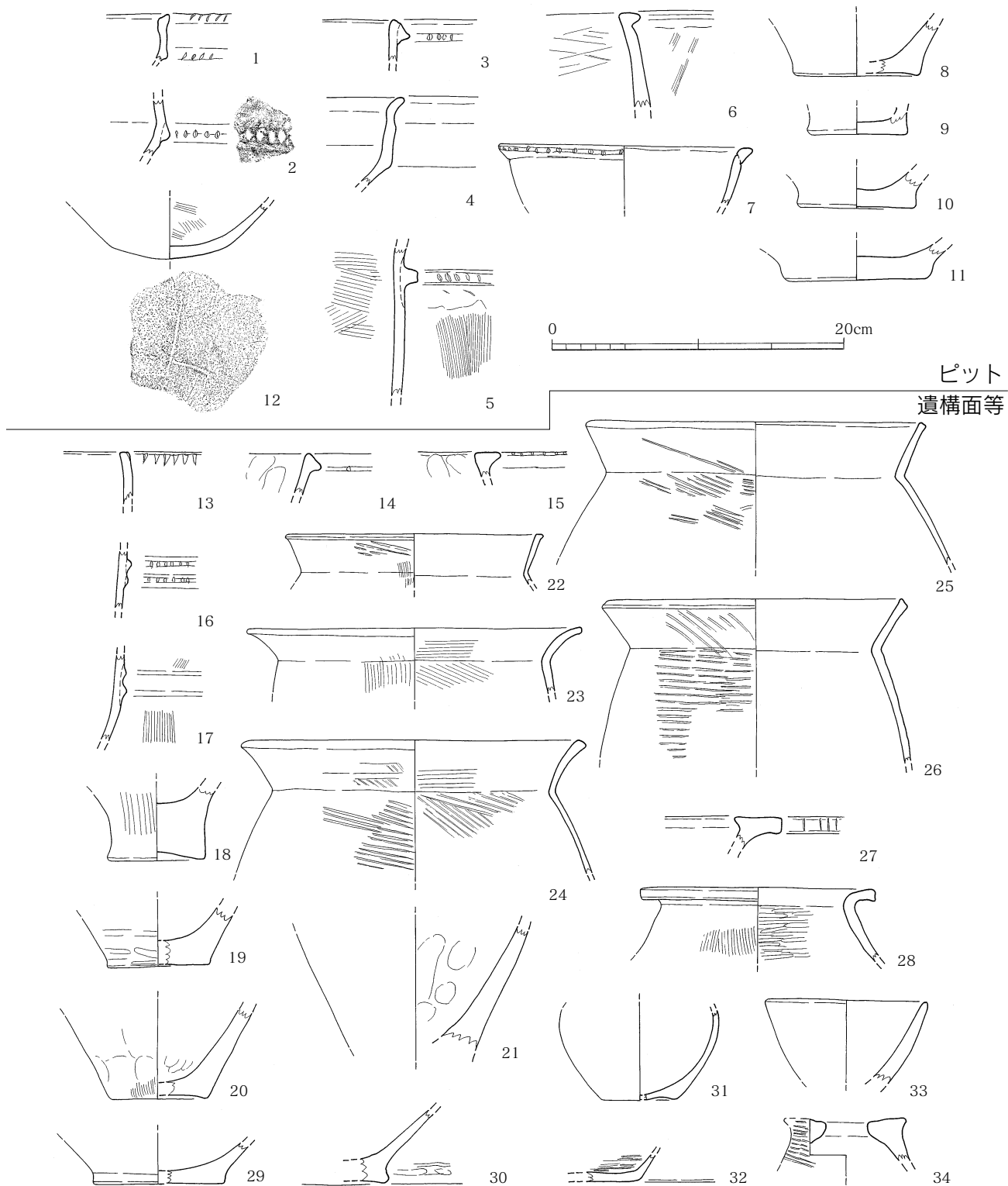
1号波板状遺構 (第141図、図版67)

調査区北部の西壁付近、5号溝の西側に位置する。5号溝との切り合いは確認できていない。検出部分は延長6.4mを測る。P-4からP-8はほぼ等規模、等間隔で連続するが、P-2、P-3は平面形が不定



第141図 8区1号波板状遺構実測図 (1/40)

形でその間隔が広い。P-1から南は調査区外に延びるため状況を知りえないが、柵状の遺構で、P-2、P-3の間が通路になっていた可能性も考えられる。埋土は灰白色土で、小石は認められなかった。小片の土器が出土したが、図示している土器は、遺構検出面を形成している茶灰色粘質土中に含まれている土器の混入である。



第142図 ピット・遺構面等出土土器実測図 (1/4)

出土土器 (第140図)

34は甕の口縁部小片。刻み目の有無は不明。35は大型甕の口縁部片で、端部に浅い刻み目を施す。外面は粗いハケ目調整。P-7から出土。

(7) 遺構面等出土土器

ピット出土土器 (第142図)

1~10は甕である。1は口縁端部をやや外方につまみ出し、口唇部と屈曲部に浅い刻み目を施す。P-27出土。2は屈曲部に粘土帯を巡らし刻み目を施す。P-18出土。どちらも内外面ともナデ調整。3は口縁端部に粘土帯を巡らし刻み目を施す。P-31出土。4は口縁端部が外反し、屈曲部をもつ。鉢の可能性もある。P-19出土。5は体部に刻み目をもち断面台形の突帯を巡らす。P-29出土。6は刻み目をもたない。内面は工具によるナデ調整、外面はハケ目調整。P-6出土。7は口縁端部に刻み目を持つ粘土帯を巡らす、小形の甕であろう。P-31出土。8はわずかに上げ底、9・10は平底である。8・10がP-23出土、9がP-2出土。

11は壺の底部であろう。器面の荒れがひどく調整不明。P-19出土。12は丸底の壺底部片。内面ハケ目調整、外面にヘラ状工具で記号を記す。P-1出土。

遺構面等出土土器 (第142図、図版92)

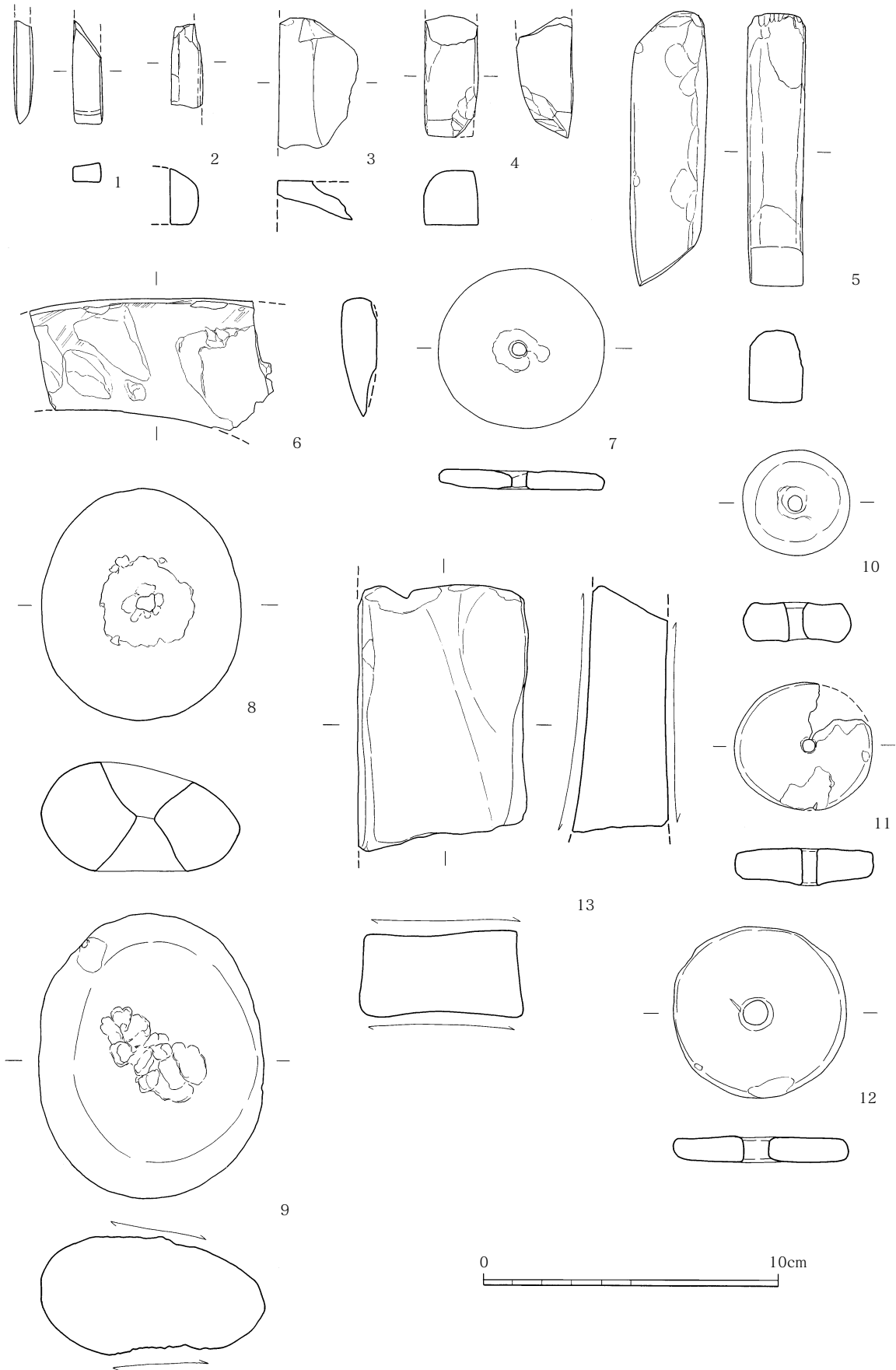
13~26は甕である。13は口唇部に刻み目を施す。14・15は口縁部に粘土帯を巡らし、刻み目を施す。いずれも内面はナデ調整。16・17は体部に低い「M」字状突帯を巡らす。18~20は上げ底の底部片。21は甕の底部付近であろう。内面に指頭痕が残る。22~26は逆「く」字状に外反する口縁部をもつ。23は内外面ともハケ目調整だが、他はいずれも体部外面は直線タタキである。

27~32は壺である。7は口縁端部に刻み目を施す。内外面ともヨコナデ調整。28は頸部から緩やかに体部に接続すると思われる。外面ハケ目、内面ミガキ調整。29・30は底部。30は甕の可能性もある。31は小形の短頸壺である。摩滅して調整不明。32は丸底気味の壺底部。内面にミガキ痕が残る。

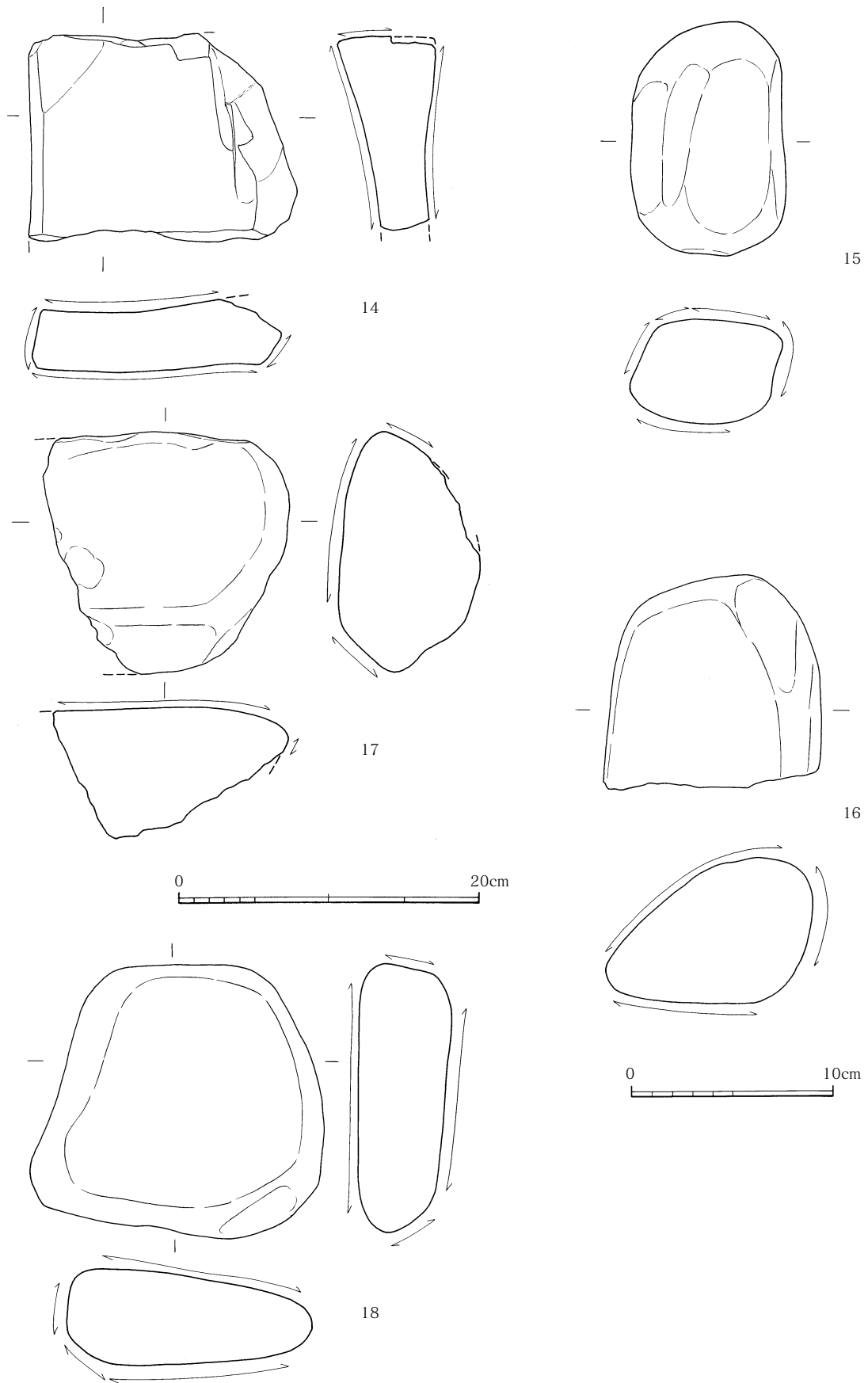
33は鉢である。口縁端部は丸く仕上げる。34は支脚。上面に穿孔がある。

挿図番号	種類	区	出土場所	長さ (cm)	幅・経 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備考
第143図1	磨製石斧	8区	住1	3.5	1.0	0.5	4.0	粘板岩	
第143図2	磨製石斧	8区	住2	2.6+ α	1.8	0.9	9.0	粘板岩	
第143図3	磨製石斧	8区	住1埋土	4.2+ α	2.5+ α	0.6+ α	13.0	粘板岩	
第143図4	磨製石斧	8区	住2	4.1+ α	1.75	1.7	24.0	粘板岩	
第143図5	磨製石斧	8区	住1	9.2	2.5	1.8	93.0	粘板岩	完形
第143図6	石鎌	8区	包含層	8.2+ α	4.3	1.2	52.0		
第143図7	石製紡錘車	8区	住3		5.5	0.6	34.0	滑石	完形
第143図8	凹石	8区	土5	8.2	6.6	3.6	198.0		完形
第143図9	凹石	8区	住5	10.0	7.5	4.1	42.0	玄武岩	完形
第143図10	土製紡錘車	8区	土5		3.7	1.1	19.0	土製	完形
第143図11	土製紡錘車	8区	住2付近包含層		4.4	1.1	23.0	土製	
第143図12	土製紡錘車	8区	土9		5.9	0.8	34.0	土製	完形
第143図13	砥石	8区	土5	9.3+ α	5.8	2.7	262.0	砂岩	
第143図14	砥石	8区	焼土坑2	14.2+ α	18.0	5.8	1912.0	砂岩	
第144図15	擦石	8区	溝4	11.8	7.2	5.4	747.0	玄武岩	
第144図16	擦石	8区	住5	11.0+ α	11.0	7.4	1210.0	玄武岩	
第144図17	台石	8区	住5	16.3	17.3+ α	9.8	2004.0	玄武岩	
第144図18	台石	8区	溝4	18.7	19.8	6.7	3018.0	玄武岩	完形

第3表 8区出土石器・土製品一覧表



第143図 出土石製品・土製品実測図 (1/2)



第144図 出土石製品実測図 (1/3、15・16は1/2)

7 まとめ

小川柳ノ内遺跡の遺構の変遷について

今回調査を行った小川柳ノ内遺跡では、竪穴住居跡58棟、甕棺墓61基、石棺墓1基、石蓋土坑墓1基、土坑203基、溝45条、波板状遺構5条、畑状遺構1を検出した。これらは大きく弥生時代前期後半～中期初頭、弥生時代中期前半、弥生時代終末～古墳時代初頭、古墳時代後期～奈良時代の時期に分けられ、本遺跡が断続的に続いてきた状況が窺える。これらの遺構の時期による変遷を追いながら、本遺跡を検討することとする。

縄文時代晩期

この時期の明確な遺構は検出されていないが、遺構面から縄文時代の所産と考えられる精巧な打製石器が出土しているほか、6区6号竪穴住居跡、16号土坑からは浅鉢が出土しており、周辺に縄文晩期の遺構が存在する可能性が高い。また、5区6号土坑からは浅鉢が完形に近い状態で出土しており、重複した縄文晩期の遺構を認識できず、弥生時代の土坑と同時に掘った可能性を考えている。ただし、この時期の遺構密度が高いとは考えにくく、西側約500mに位置する権現塚北・南遺跡の縁辺部に当たるものであろう。

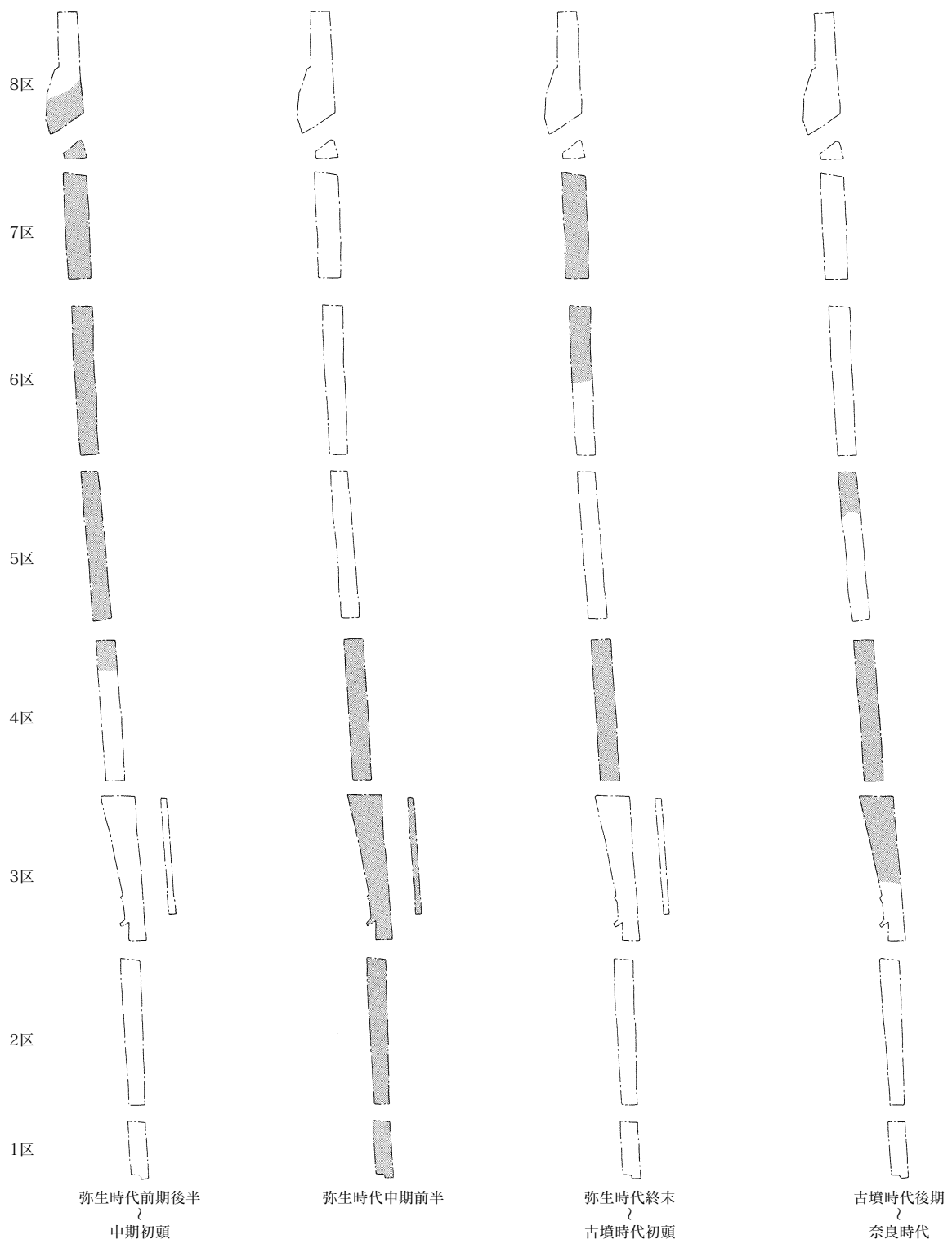
弥生時代前期後半～中期初頭

この時期には円形住居を中心とする集落が5～8区に展開する。円形住居跡は合計16棟検出されており、直径6～8mで中央に土坑を持つものが多い。5区6号竪穴住居跡のように中央に楕円形の土坑を持ち、両側に浅いピット、土坑の周辺には複数の柱穴を巡らす、中間研志のいう「発展松菊里型住居」も検出されている（注1）。検出されたのはこの1棟のみであるが、幅約10mという調査区のため、全体を調査できなかった円形住居跡も多数あり、さらに周辺に所在している可能性も高い。土坑は不整形なものも多いものの、5区44・45号土坑、7区34・61号土坑が典型的な例であるが、隅丸方形で残りがよければ深さ1m以上のものがあり、貯蔵穴としての機能を果たしていたと推定している。

8区の北側は地形的に落ちており、遺構も続かないことから、当時においても集落の北端であったと考えられる。現在では圃場整備によりまったく分からなくなっているが、圃場整備以前の図面からは8区から南西に所在する現在の下坂田の集落まで地形的に高くなっているのが読み取れ、この方向に遺跡が展開していると思われる。この向きは貯蔵穴の軸の方向にも一致しており、貯蔵穴の掘削が地形に影響を受けていると思われる。6区第2遺構面、8区には竪穴住居跡と土坑が混在しているが、7区には土坑のみが検出され、竪穴住居跡が検出されていない。土坑（貯蔵穴）群を取り囲むように集落が形成されている可能性もある。6区南端には弥生時代前期後半頃にはほぼ埋没する「おち」があり、5区の住居群は6～8区とは別の集落になる可能性もある。地形的には高くなっているが、5区の南にはこの時期の遺構は展開せず、この時期の遺構の南限となる。

弥生時代中期前半

3・4区を中心に墓地が展開する。この区間は遺跡内でも最も高い場所で、このことから墓地として選地されたと考えられる。4区北端部、4区南端部と3区北端部、3区中央部の3群に分かれるがいずれも時期的にはほぼ同じである。明確には並ばないが、北東－南西方向の流れは、前期の集落と同じく、地形に影響を受けたものであろう。8区においても3基の甕棺墓を検出しているが、弥生時代後期前半に位置づけられるものであり、前述の墓群とは様相が異なる。



第145図 小川柳ノ内遺跡時期別変遷図

弥生時代終末～古墳時代初頭

4区、7区及び6区の北端部において集落が展開する。いずれも竪穴住居跡が密集して切り合っており、周辺にはさらに多くの住居跡が広がることが予想される。4区においては1号竪穴住居跡が1号甕棺墓を、6号竪穴住居跡が4・14号甕棺墓を、20号竪穴住居跡が、10号甕棺墓を壊してから、つくられており、この時点で集落を形成するに当たり、既に墓地であったことは問題にされない状況であったことが分かる。6区の北寄りで見出された畑状遺構は遺物が出土していないため、時期が不明であるが、検出面が、この面であること、周辺の住居跡と軸を同じにすることから、この時期のものと考えられ、集落の縁辺に小規模な畑が営まれていたことを物語る。

古墳時代後期～奈良時代

遺跡内で最も高い4区を中心に小規模な集落が形成される。3区の中央部分、5区の北寄りに波板状遺構が見出されており、それより下がる部分には集落は広がらないものと考えられる。水田としての可耕地が広がったために高所に形成された可能性もある。

中近世

7区で見出した9号溝のみである。他の遺構は全く見出されていない。3・6区において圃場整備以前の現代溝が見出されているが、これらが近世までさかのぼる可能性がある。いずれにしろ、ほぼ全面が水田として利用されていたと考えられる。

以上、遺構の変遷をまとめてみたが、大規模な平野の一部に幅約10mのトレンチを開けた調査であり、不明な点も多く残る。今後、周辺の調査が行われることにより、遺跡の広がりが見えてくるであろう。

(注1) 中間研志 「松菊里型住居 — 我国稲作農耕受容期における竪穴住居の研究 —」

『東アジアの考古と歴史 中 岡崎敬先生退官記念論集』1987

图 版



5区遠景 (南から)



5区調査区北部分
(空中写真)



5区1号竪穴住居跡（東から）



5区1号竪穴住居跡磨石出土状況（北から）



5区2号竪穴住居跡（北西から）



5区3号竪穴住居跡（南東から）



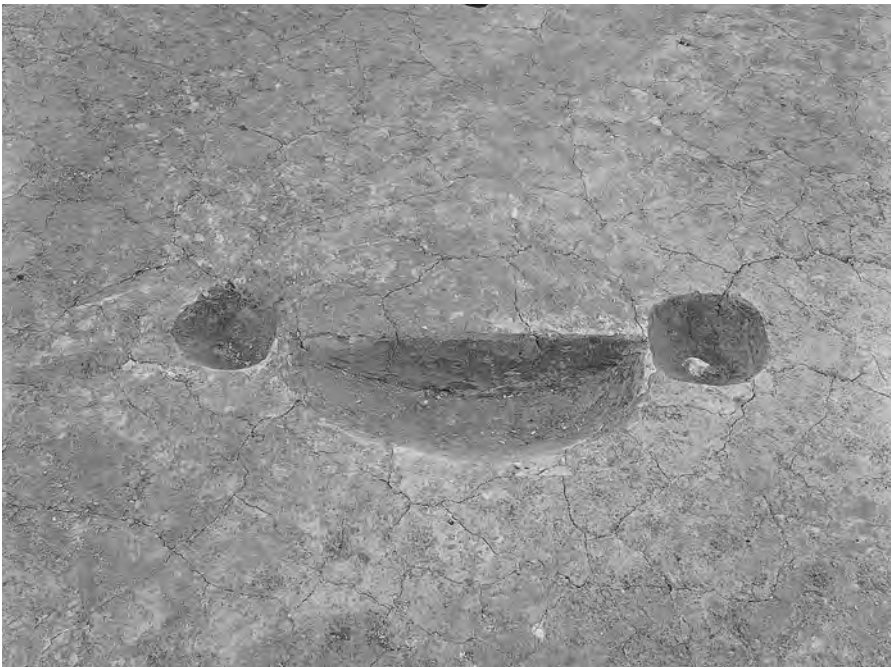
5区4号竪穴住居跡（東から）



5区5号竪穴住居跡（東から）



5区6号竪穴住居跡（西から）



5区6号竪穴住居跡中央土坑（南東から）



5区6号竪穴住居跡ピット土器出土状況（南東から）



5区7号竪穴住居跡（南西から）



5区1号土坑（南から）



5区2号土坑（西から）



5区3号土坑（南東から）



5区4号土坑（東から）



5区6号土坑（北西から）



5区6号土坑細部（北西から）



5区7号土坑（南東から）



5区8号土坑（西から）



5区9号土坑（西から）



5区10号土坑（北西から）



5区11号土坑（北から）

5区12号土坑（南から）



5区13号土坑（西から）



5区14号土坑（北から）





5区15~17号土坑 (南から)



5区18~20号土坑 (南から)



5区21号土坑 (南から)

5区22号土坑（南東から）

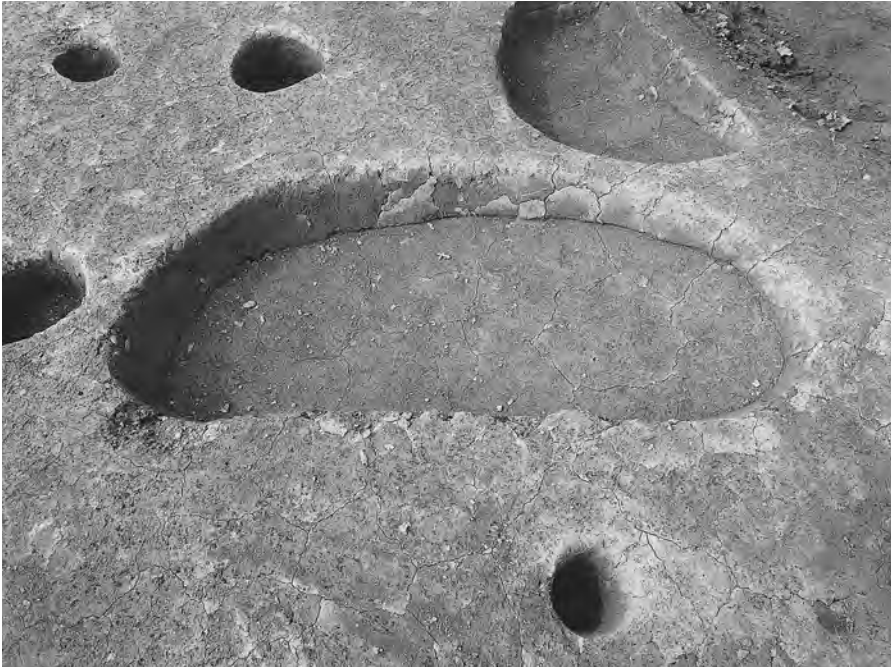


5区23・24号土坑（西から）



5区25・26号土坑（東から）





5区27号土坑 (南から)



5区28~30号土坑 (西から)



5区35号土坑 (北西から)



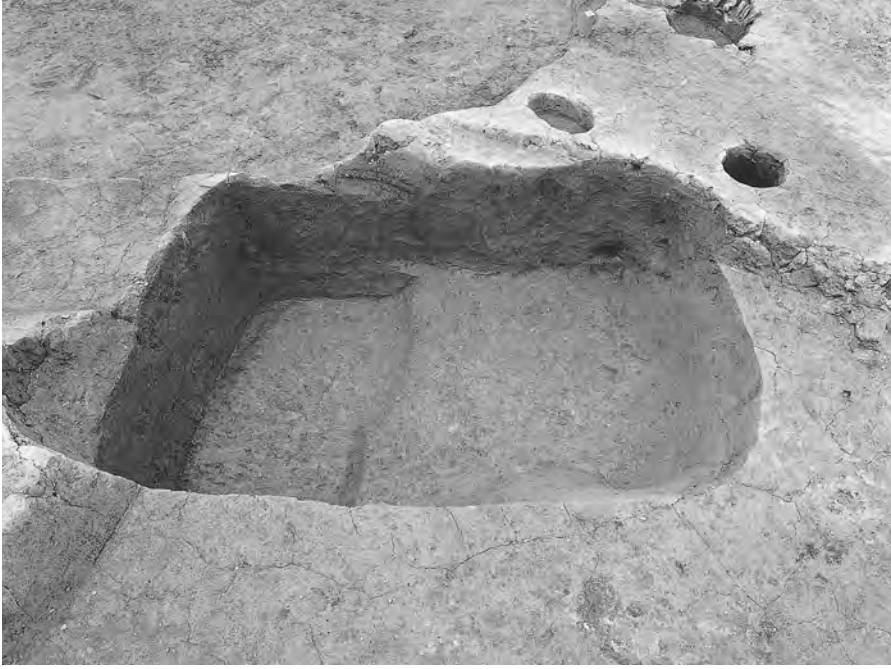
5区40号土坑（東から）



5区42号土坑（東から）



5区44号土坑（南西から）



5区45号土坑（北東から）



5区2号溝土器出土状況（南から）



5区1号波板状遺構検出状況（南から）



5区1号波板状遺構（南から）



5区1号波板状遺構（東から）



5区1号波板状遺構細部
（北から）



6区第一遺構面全景
(空中写真)



6区第二遺構面全景
(空中写真)



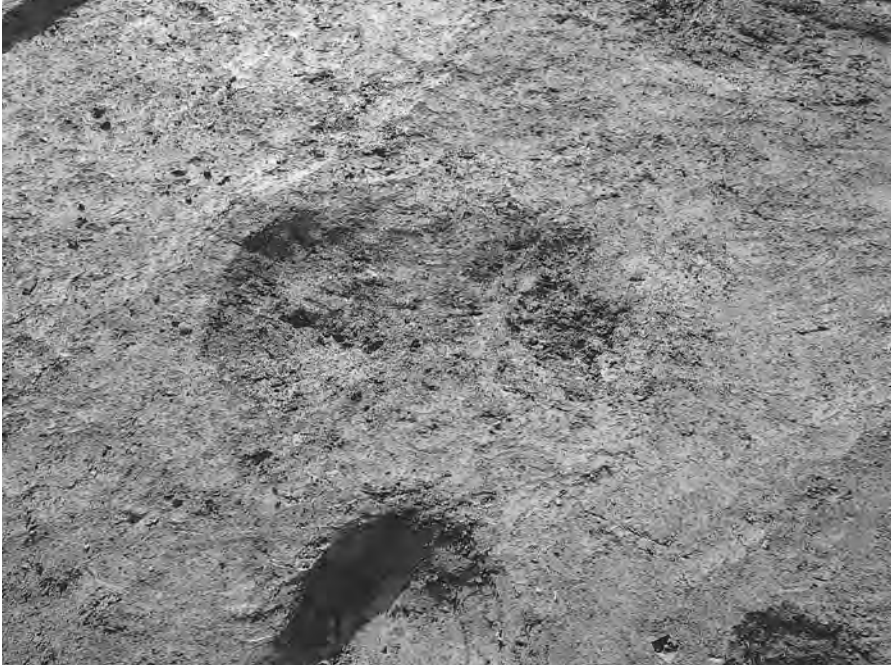
6区1号竪穴住居跡（北西から）



6区2号竪穴住居跡（南西から）



6区3号竪穴住居跡（北東から）



6区3号竪穴住居跡炉跡検出状況
(北から)



6区4号竪穴住居跡 (北から)



6区5号竪穴住居跡 (東から)

6区6・7号竪穴住居跡
(東から)



6区8号竪穴住居跡 (西から)



6区9号竪穴住居跡 (東から)





6区10号竪穴住居跡（北東から）



6区1号土坑（南西から）



6区3号土坑（西から）



6区5号土坑 (南から)



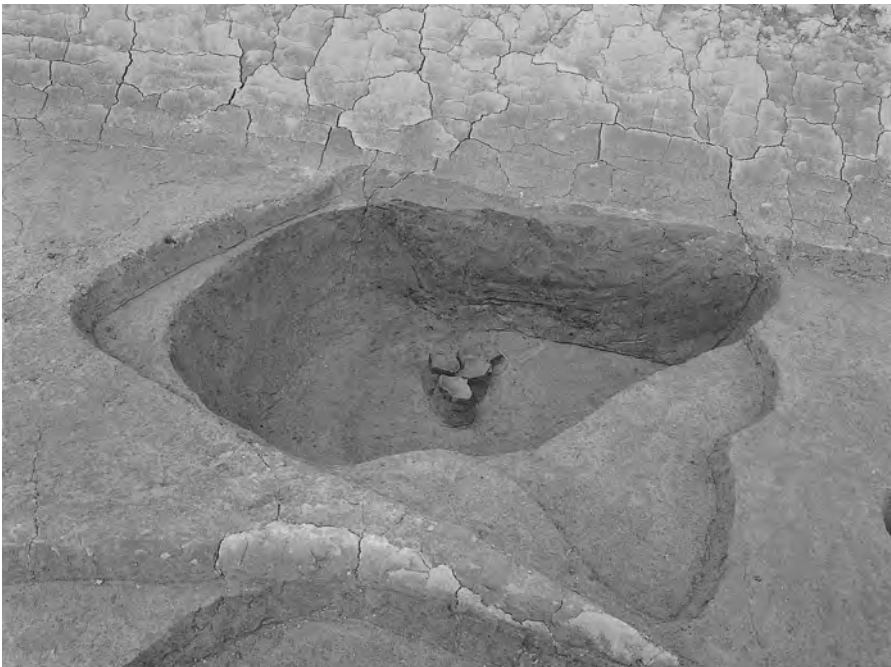
6区6号土坑 (東から)



6区8号土坑 (西から)



6区11号土坑（南から）



6区16号土坑（南から）



6区18号土坑（北西から）

6区22号土坑（北から）



6区25号土坑（東から）



6区32号土坑（西から）





6区33号土坑（東から）



6区40号土坑（東から）



6区畑状遺構（北東から）



6区調査区北端部（南西から）



6区調査区南端部おち
（北東から）



6区調査区南端部おち
土器出土状況（東から）



7区第一遺構面全景（空中写真）



7区調査区北端部（空中写真）



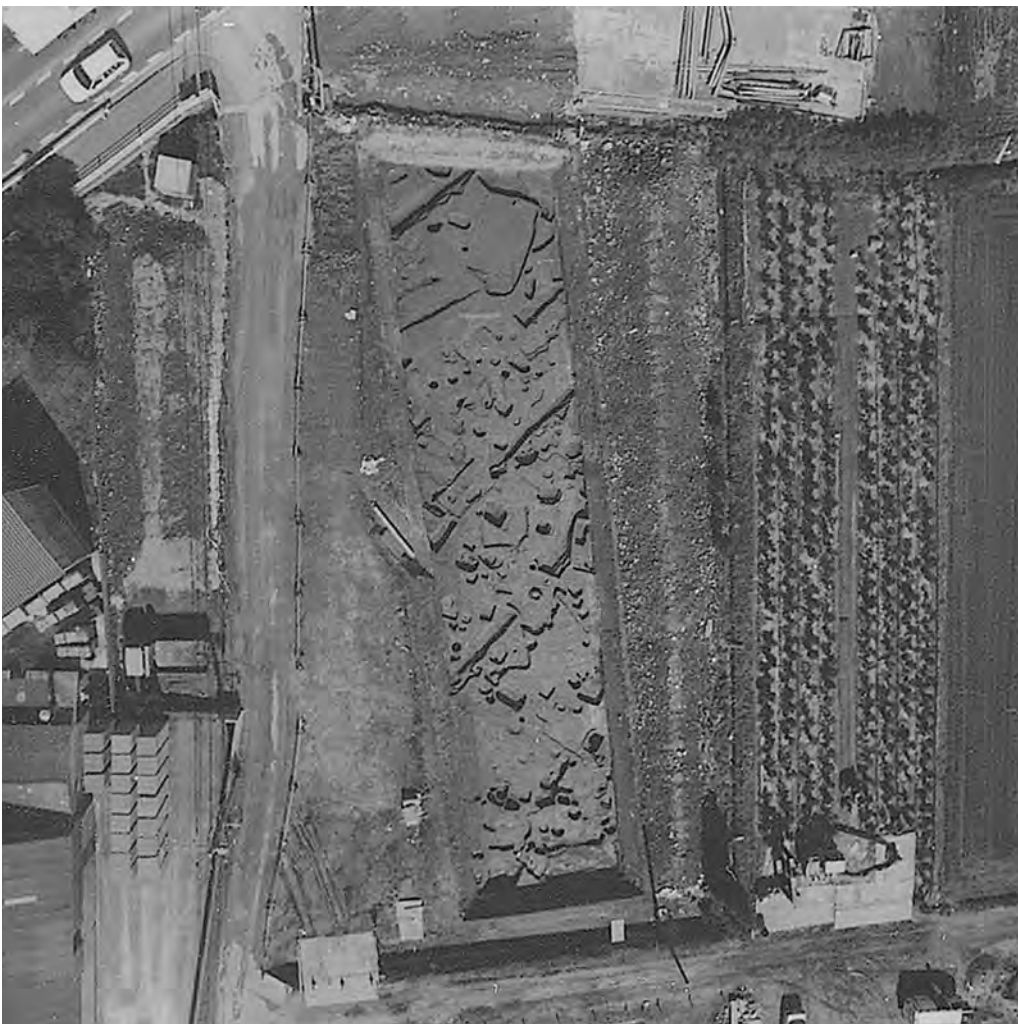
7区第一遺構面全景
(南から)



7区調査区遠景
(北から)



7区2次調査全景（空中写真）



7区第二遺構面全景（空中写真）



7区調査区北端部（南東から）



7区1号竪穴住居跡（南西から）



7区1号竪穴住居跡
土器出土状況（北から）



7区2号竪穴住居跡（南西から）



7区3号竪穴住居跡（南東から）



7区3号竪穴住居跡炉跡
検出状況①（南西から）

7区3号竪穴住居跡炉跡
検出状況②（南東から）



7区4号竪穴住居跡（南東から）



7区4号竪穴住居跡炉跡
検出状況（南西から）





7区5号竪穴住居跡（北西から）

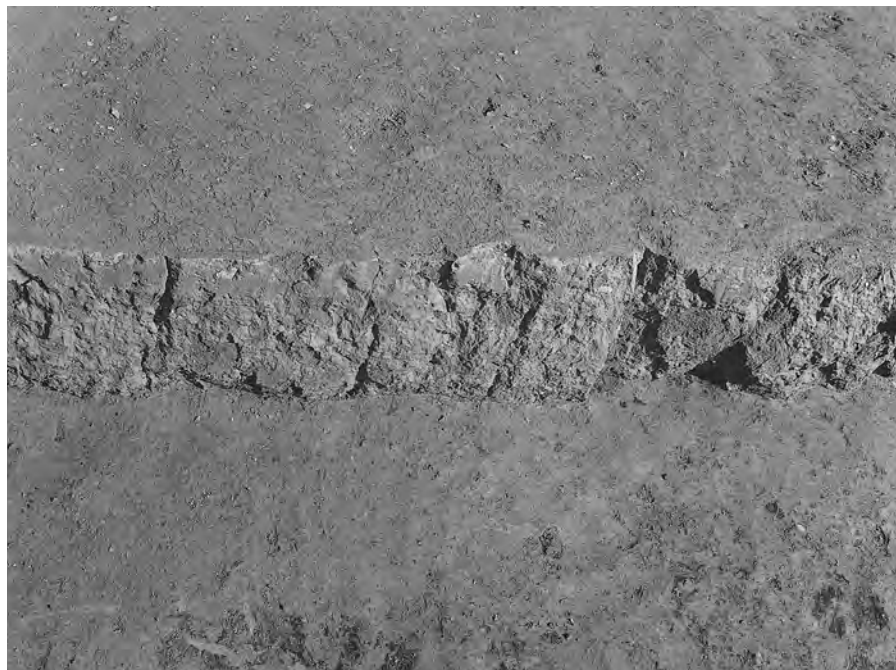


7区7号竪穴住居跡（南東から）



7区8号竪穴住居跡（南西から）

7区8号竪穴住居跡
壁検出状況①（南西から）



7区8号竪穴住居跡
壁検出状況②（南西から）



7区9号竪穴住居跡（北東から）





7区10号竪穴住居跡（南西から）



7区10号竪穴住居跡炉跡検出状況
（南東から）



7区13号竪穴住居跡
（南東から）



7区14号竪穴住居跡
(南東から)



7区15号竪穴住居跡
(北東から)



7区16号竪穴住居跡
(南東から)



7区17号竪穴住居跡（南西から）



7区17号竪穴住居跡炉跡検出状況（北から）



7区5号土坑（南から）



7区6号土坑（北から）



7区7号土坑（北から）



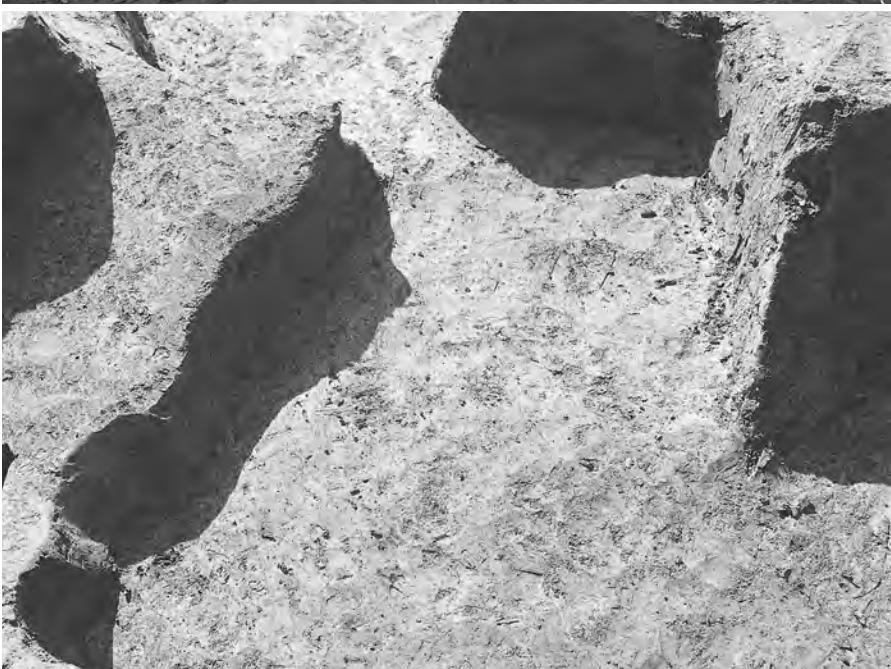
7区8号土坑（東から）



7区9号土坑（北から）



7区10号土坑（南から）



7区11号土坑（北から）



7区12号土坑（西から）



7区13号土坑（南から）



7区14号土坑（北西から）



7区15号土坑（北から）



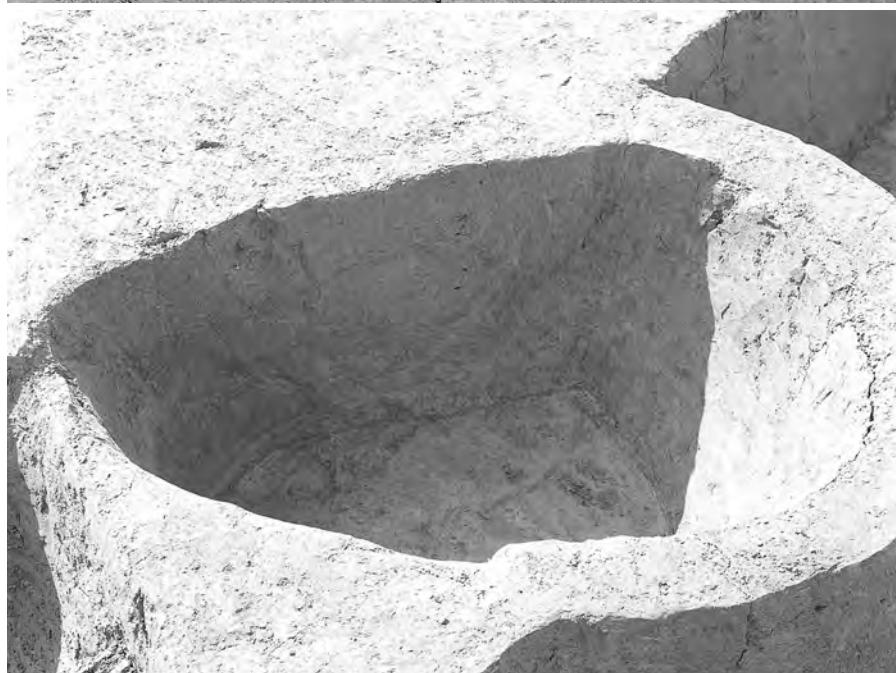
7区16号土坑（北から）



7区17号土坑（北から）



7区18号土坑（南東から）



7区19号土坑（北東から）



7区20号土坑（北西から）



7区21号土坑（西から）



7区22~25号土坑（北から）



7区24号土坑（北東から）



7区26号土坑（北から）



7区27号土坑（北西から）



7区28号土坑（南西から）



7区28号土坑（北東から）



7区29号土坑（北西から）



7区30号土坑（西から）



7区31・32号土坑（南西から）



7区33号土坑（北西から）



7区34号土坑（南西から）



7区35号土坑（南西から）



7区36号土坑（南東から）



7区37号土坑（南東から）

7区38号土坑（南東から）



7区39号土坑（東から）



7区40号土坑（北西から）





7区41号土坑（北から）



7区42~45号土坑（北東から）



7区46号土坑（南東から）



7区47号土坑（南東から）



7区48号土坑（南東から）



7区49・50号土坑（北東から）



7区52号土坑（東から）



7区53号土坑（南西から）



7区54号土坑（南東から）



7区55号土坑（南東から）



7区56号土坑（南西から）



7区59号土坑（北東から）



7区61号土坑（北西から）



7区62号土坑（北東から）



7区63号土坑（北西から）



7区72号土坑（北東から）



7区75号土坑（北東から）



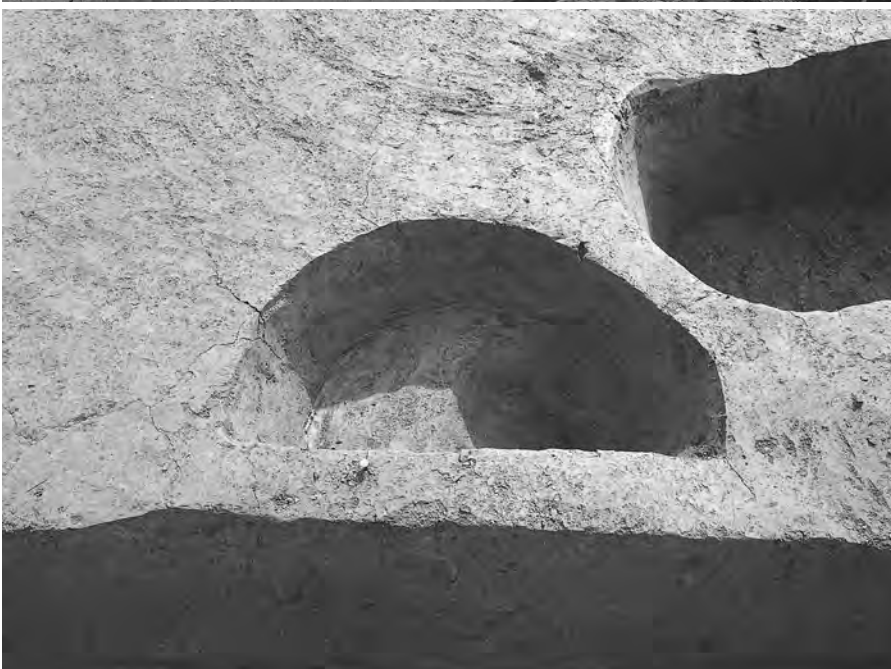
7区79号土坑（北から）



7区84号土坑（南東から）



7区85号土坑（南東から）



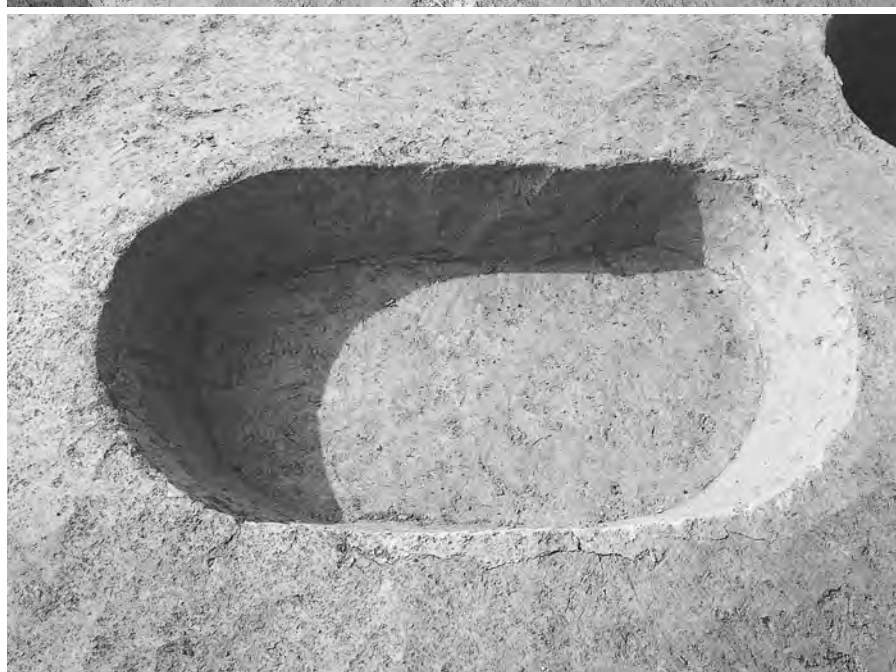
7区86号土坑（北西から）



7区87号土坑（南東から）



7区88号土坑（北東から）



7区89号土坑（北東から）



7区90号土坑（北西から）



7区92号土坑（南西から）



7区93号土坑（西から）



7区94号土坑（東から）



7区95号土坑（南から）



7区96号土坑（南から）



7区97号土坑（南西から）



7区98号土坑（南東から）



7区3号溝（北東から）



8区全景 (空中写真 合成)



8区1号竪穴住居跡、16号土坑（北から）



8区2・5号竪穴住居跡、13・14号土坑
(空中写真)



8区3・4号竪穴住居跡（空中写真）



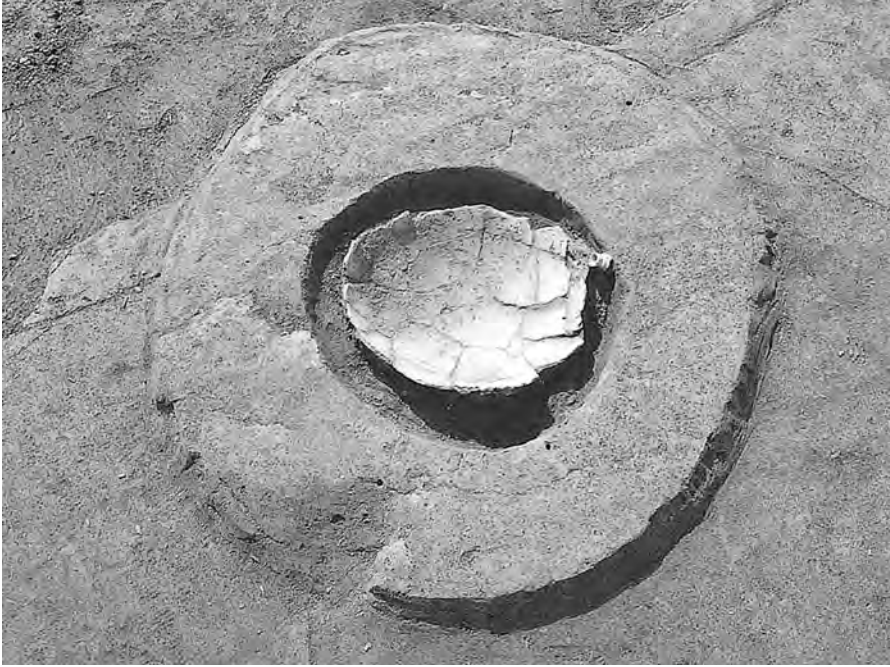
8区1号甕棺墓 (西から)



8区2号甕棺墓 (北から)



8区2号甕棺墓完掘状況
(北から)



8区3号甕棺墓（北から）



8区1号土坑（北から）



8区2号土坑（北から）



8区3・4・6号土坑 (南東から)



8区5号土坑土器出土状況
(東から)



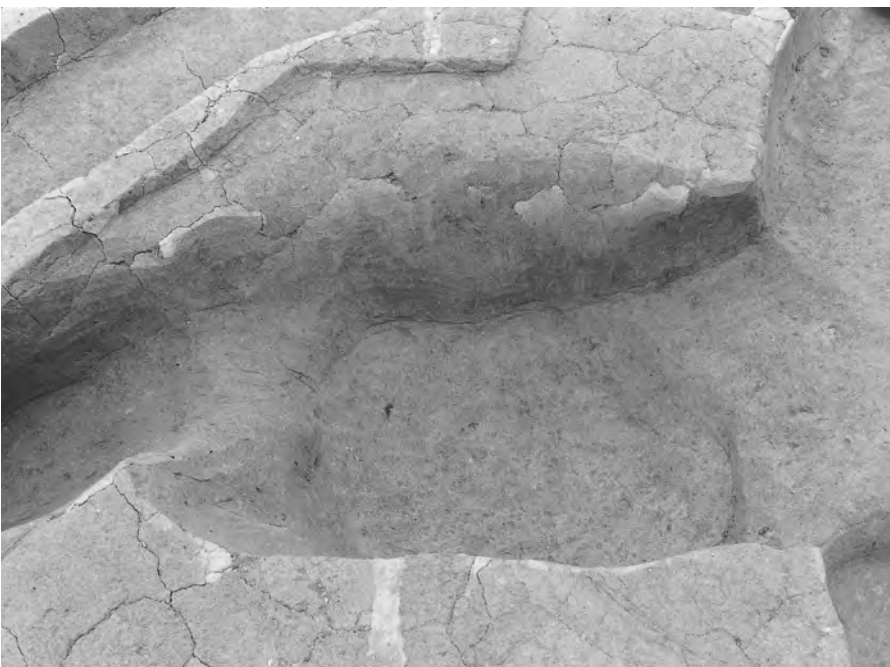
8区5号土坑完掘状況 (東から)



8区7号土坑 (南東から)



8区8号土坑 (南から)



8区9号土坑 (東から)



8区11号土坑（北西から）



8区12号土坑（東から）



8区15号土坑（東から）



8区17号土坑（北東から）



8区1号焼土坑（西から）



8区1号焼土坑土層（北から）



8区2号焼土坑（南から）



8区1号波板状遺構（北東から）



第9图-4



第11图-9



第11图-4



第11图-11



第11图-5



第12图-7



第11图-6



第12图-8



第11图-7



第12图-10



第14图-8



第16图-4



第14图-13



第16图-5



第14图-21



第16图-6



第16图-1



第17图-11



第16图-2



第17图-12



第25图-10

第18图-20

第25图-11

第18图-21

第25图-14

第25图-6

第25图-17

第25图-8

第25图-9

第26图-2





第33图-12



第34图-11



第33图-13



第34图-12



第33图-14



第34图-12



第33图-15



第34图-21



第34图-6



第34图-8



第38图-11



第41图-7



第41图-11



第41图-8



第42图-1



第41图-10



第42图-2



6区3号竖穴住居跡、8・11号土坑出土土器



第53图-8



第56图-14



第53图-11



第56图-15



第56图-6



第57图-4



第56图-7



第56图-7



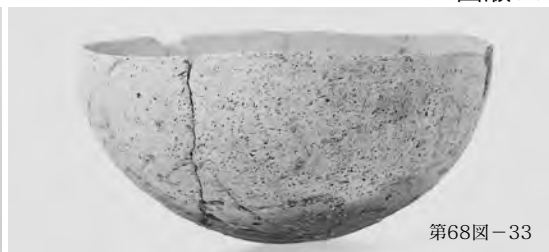
第59图-1



6区32・33号土坑、南端部おち、7区1号竪穴住居跡出土土器



第68图-22



第68图-33



第68图-23



第68图-36



第68图-25



第68图-38



第68图-26



第69图-15



第68图-28



第69图-18



第68图-29



第69图-25



第69图-26



第71图-7



第74图-27



第71图-8



第74图-28



第73图-3



第76图-1



第73图-7



第76图-5



第74图-18



第76图-6



第76图-7



第76图-11



第79图-1



第79图-5



第79图-7



第79图-8



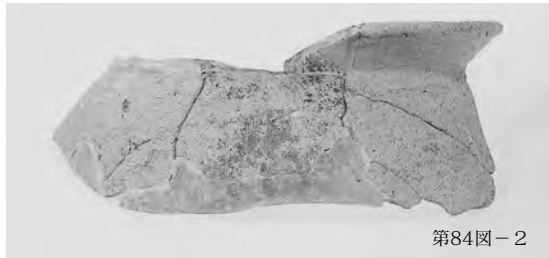
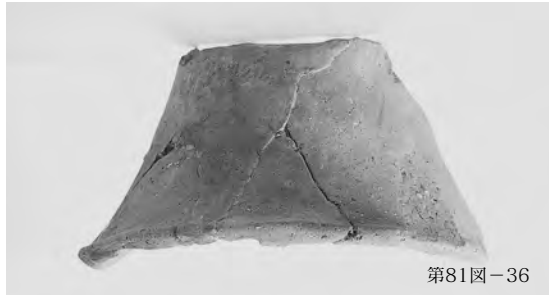
第80图-13



第80图-15



第80图-20



7区17号竖穴住居迹、2·5号土坑出土土器



第89图-10



第89图-13



第90图-1



第89图-16



第90图-6



第89图-17



第90图-8



第89图-23



第93图-1



第93图-2



第93图-3



第93图-11



第93图-5



第93图-13



第93图-7



第94图-12



第93图-8



第94图-17



第93图-10



第97图-1



第99图-1



第99图-11



第99图-5



第99图-16



第99图-6



第102图-2



第99图-8



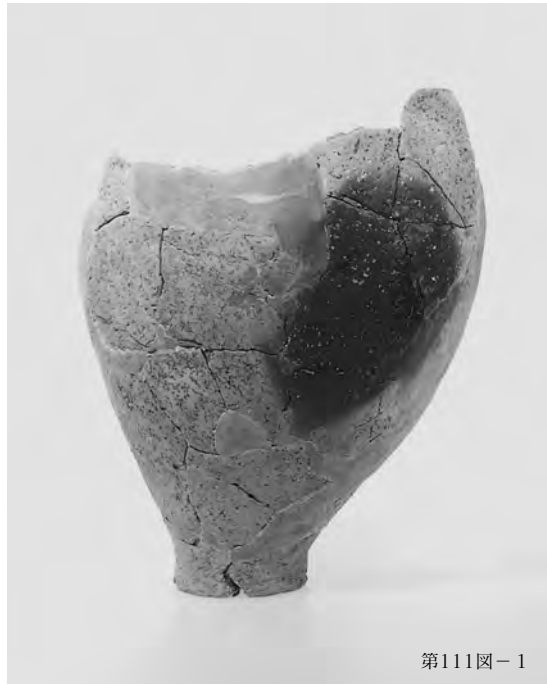
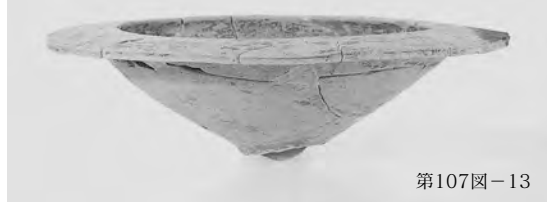
第102图-14



第99图-10



第103图-1





第112图-2



第112图-8



第112图-3



第113图-14



第112图-4



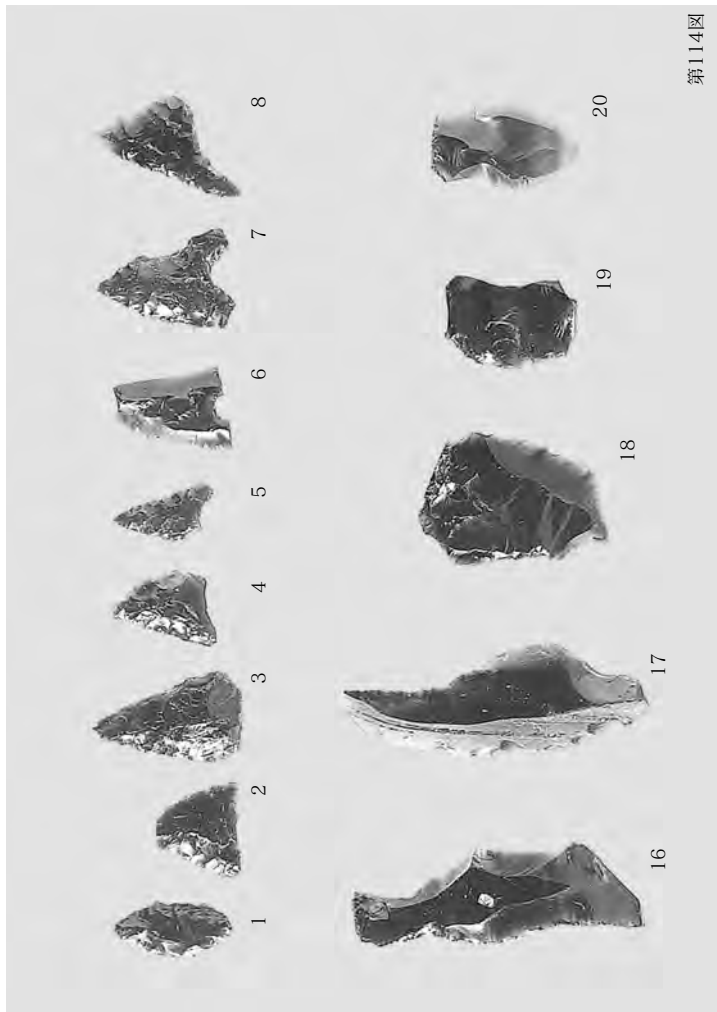
第113图-16



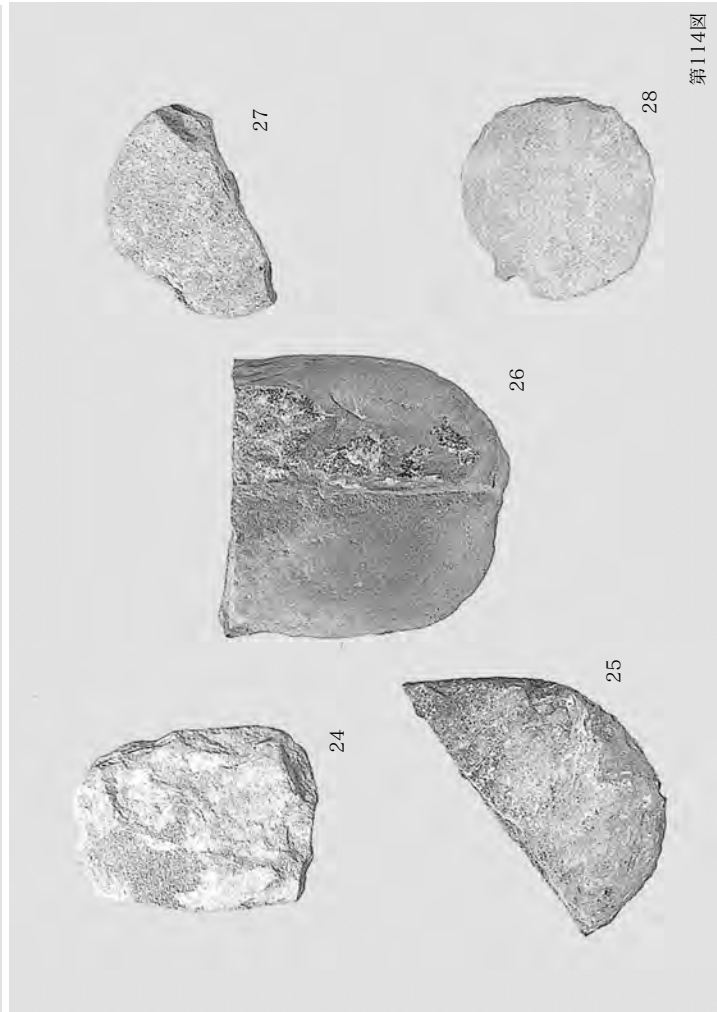
第112图-5



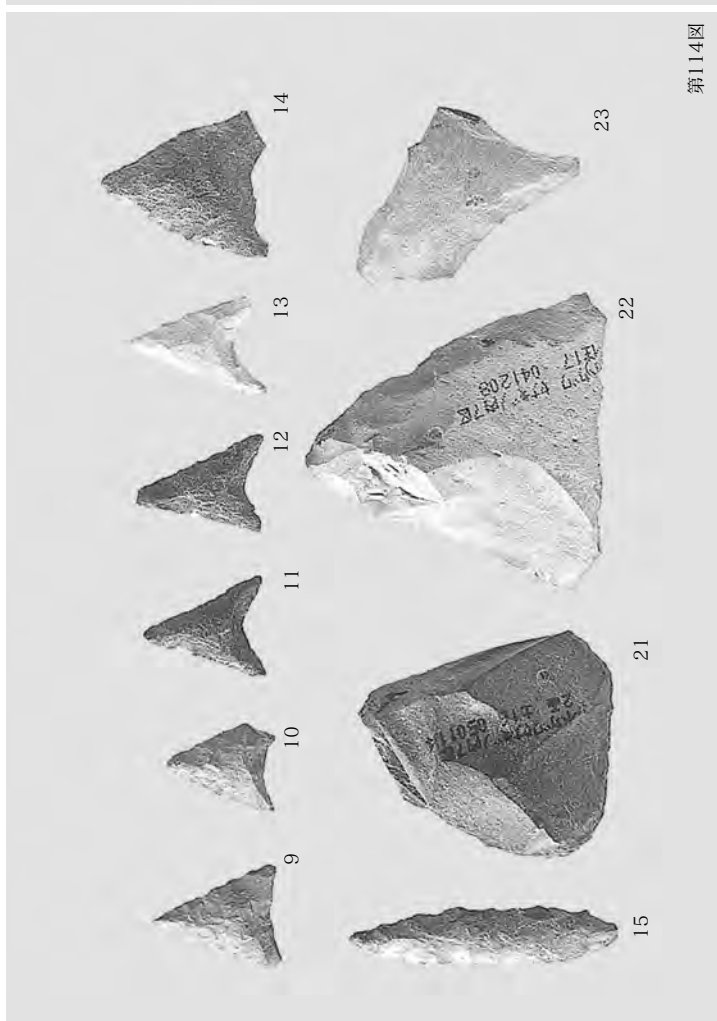
第113图-19



第114图



第114图

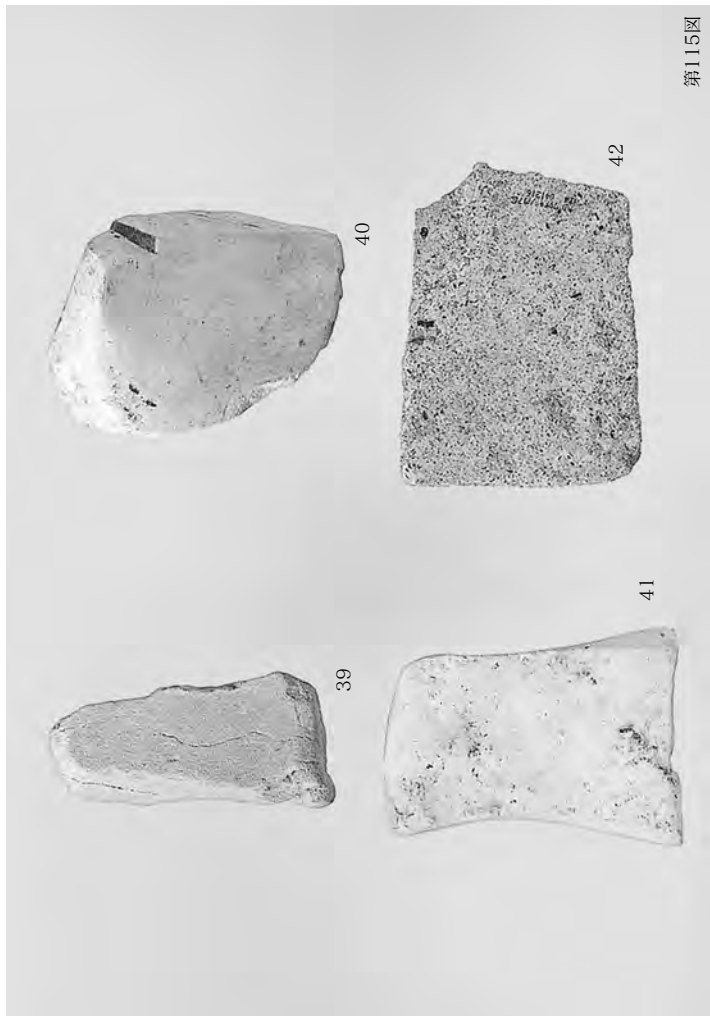
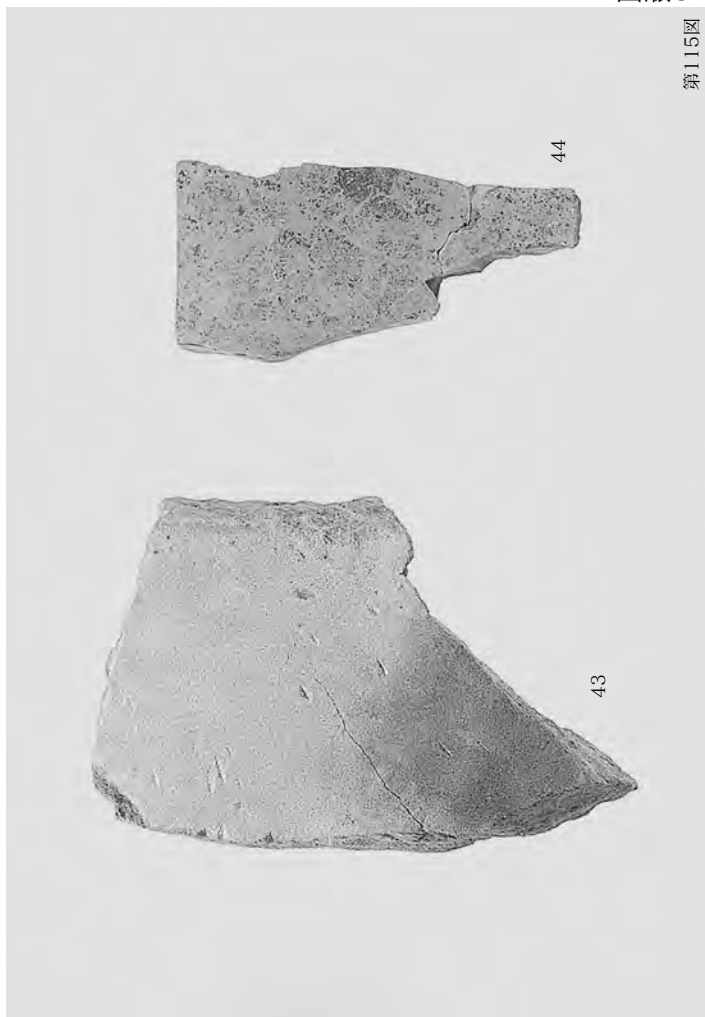


第114图



第115图

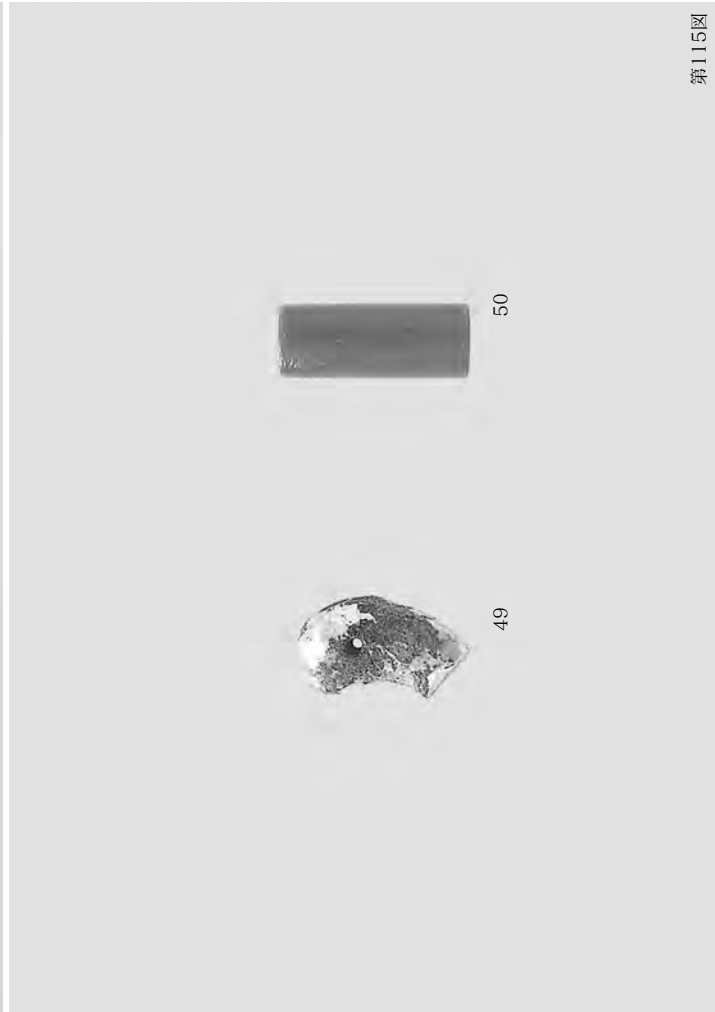
5~7区出土石器实测图①



5~7区出土石器实测图②



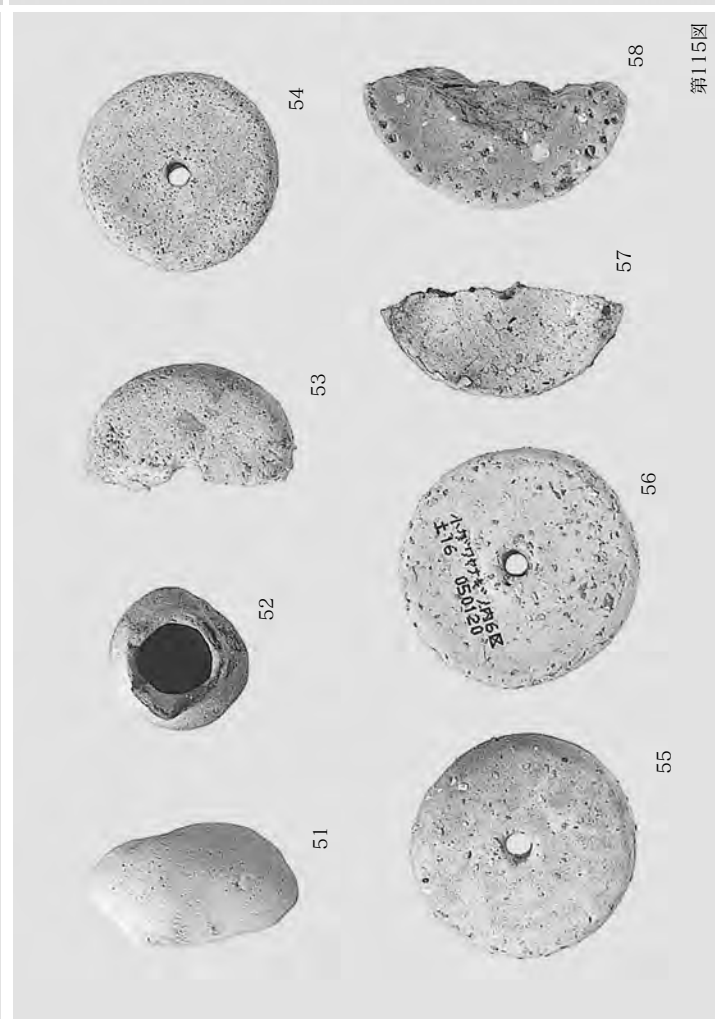
第115图



第115图



第115图



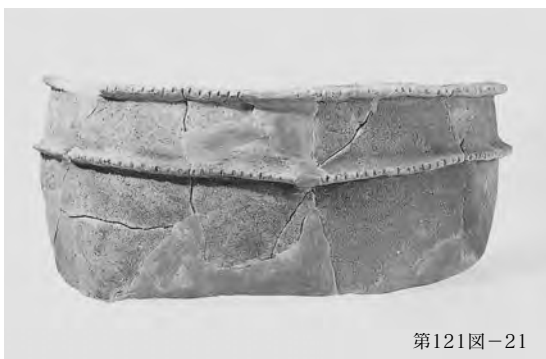
第115图



第119图-23



K1



第121图-21



K2



第121图-23



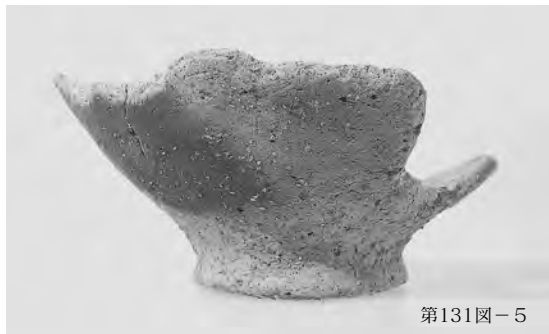
第121图-35



K3

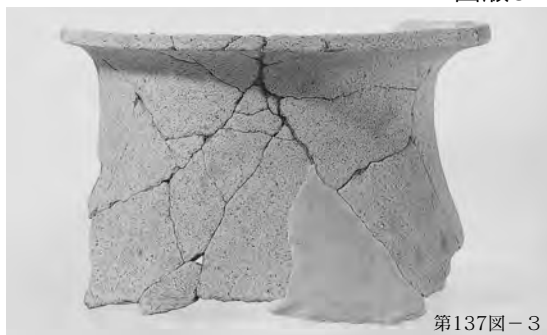


第126图-43





第131图-31



第137图-3



第131图-33



第135图-19



第137图-5



第135图-23



第137图-6



第135图-26



第137图-7



第135图-39



第137图-10



第137图-9



第140图-4



第137图-11



第140图-5



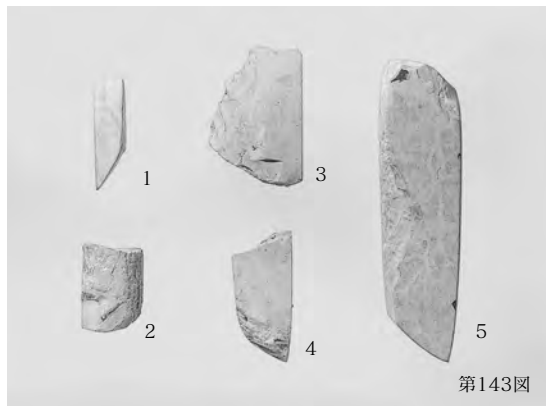
第137图-12



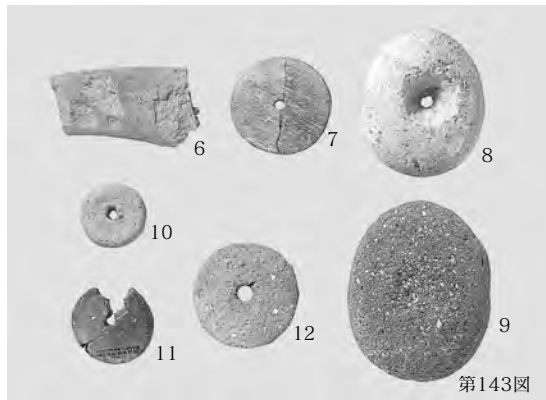
第142图-26



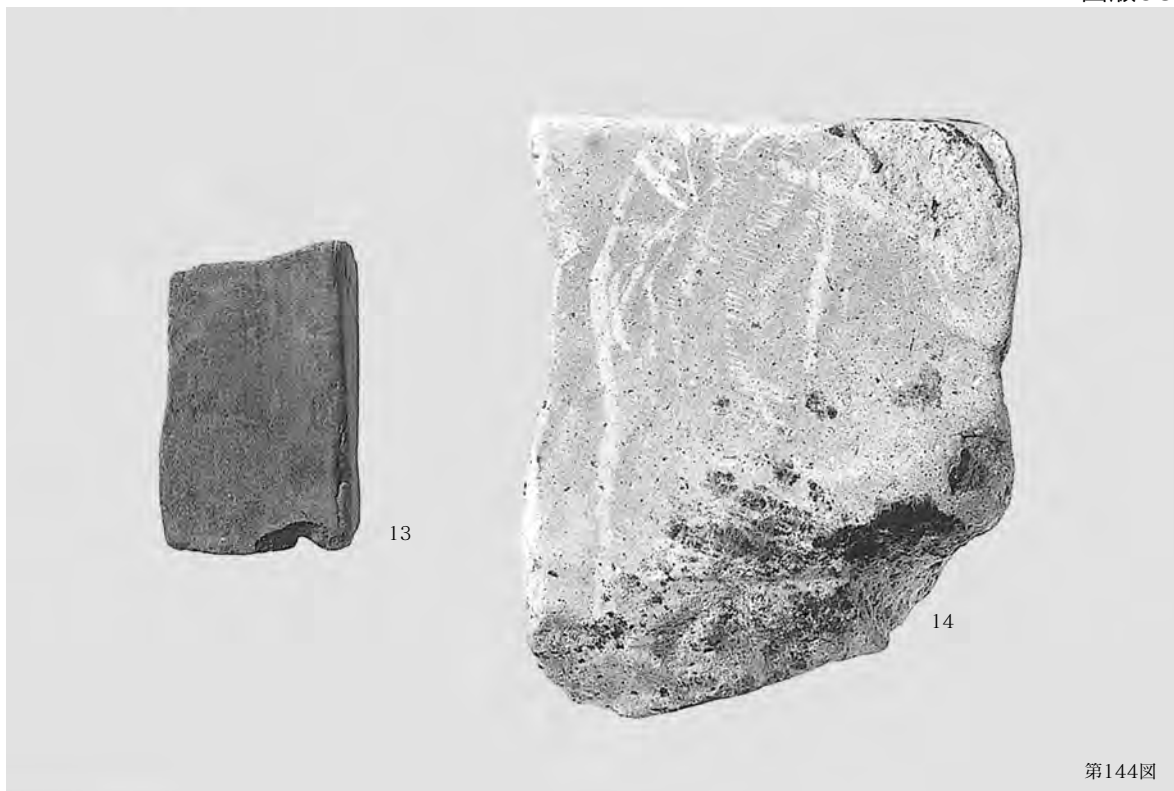
第138图-13



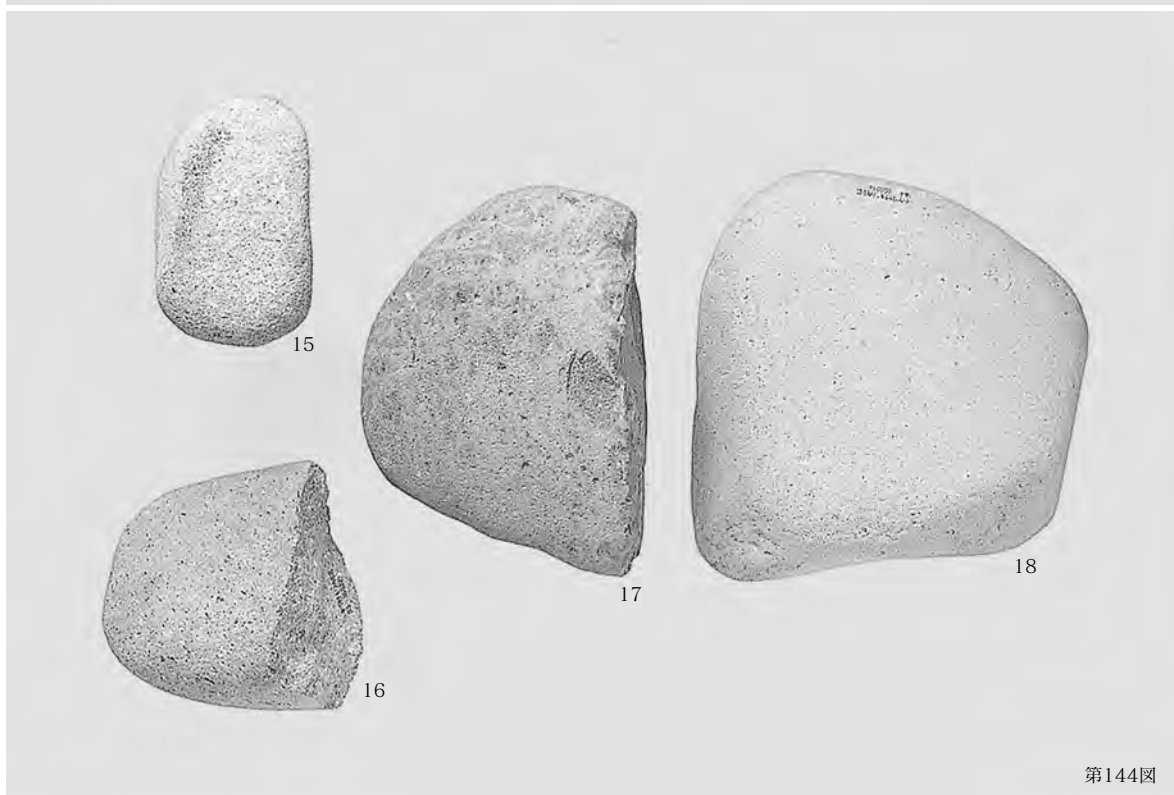
第143图



第143图



第144图



第144图

8区出土石製品

報 告 書 抄 録

ふりがな	おがわやなぎのうちいせき							
書 名	小川柳ノ内遺跡II							
副書名	福岡県みやま市所在遺跡の調査							
巻 次								
シリーズ名	九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第8集							
編著者名	進村 真之 今井 涼子							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8575 福岡県福岡市博多区東公園7-7							
発行年月日	平成20(2008)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。 ' "	東経 。 ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おがわやなぎのうち 小川柳ノ内遺跡 5~8区	ふくおかけん し 福岡県みやま市 せたかまちおがわ 瀬高町小川	40229		33° 09' 32"	130° 29' 38"	20040602 }	約2,400㎡	九州新幹線 鹿児島ルート 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
小川柳ノ内遺跡 5~8区	集落 ・ 墓地	弥生時代 古墳時代 奈良時代	竪穴住居跡 甕 棺 墓 土坑 溝 波板状遺構		縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 石器			
要 約	当遺跡は矢部川の形成した沖積平野の標高7m前後の微高地に存在する。今年度報告する調査区内では弥生時代前期末～中期初頭の円形竪穴住居跡がほぼ全域で検出されている。また、これに伴う時期の貯蔵穴と思われる土坑も多数検出されている。この後、南側の調査区においては中期前半を中心とする甕棺墓群が展開するが、本調査区内には及ばない。次に集落が営まれるのは弥生時代終末～古墳時代初頭の時期であり、地盤の安定した6・7区に展開する。しかし、この集落も長くは存続せず、断絶する。その後、わずかであるが古墳時代後期～奈良時代の集落を検出しているが、遺構数も非常に少なく、詳細は不明である。							

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2114107
登録年度 19	登録番号 1

九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第8集

小川柳ノ内遺跡 II

平成20年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7-7

印刷 マツオ印刷株式会社
嘉麻市上山田407